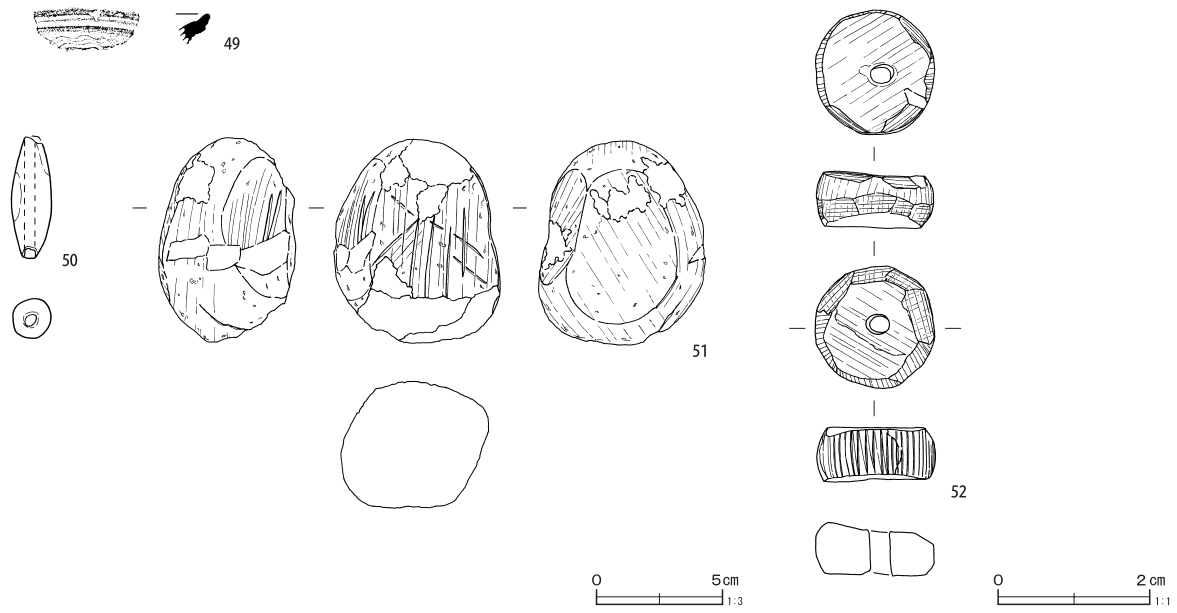


第140图 第59号住居跡出土遺物（2）



第141図 第59号住居跡出土遺物（3）

第48表 第59号住居跡出土遺物観察表（第139～141図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(9.9)	4.8	—	CEHI	30	普通	にぶい褐	内外面黑色処理 外面黒斑	
2	土師器	坏	12.4	4.7	—	AEGHI	60	普通	橙	No.2	62-2
3	土師器	坏	(13.2)	4.6	—	CEHI	20	普通	橙	内面褐灰	
4	土師器	坏	12.2	4.2	—	ACHI	95	不良	橙	No.1	62-3
5	土師器	坏	(10.2)	4.1	—	CEHI	15	普通	明赤褐	内外面黑色処理	
6	土師器	坏	(12.4)	4.2	—	CEHI	5	良好	褐	内外面黑色処理 P5	
7	土師器	坏	12.6	3.6	—	ACEHI	10	普通	褐	内外面黑色処理	
8	土師器	坏	(13.1)	4.1	—	AHIK	10	不良	橙		
9	土師器	坏	(12.1)	2.9	—	HI	25	不良	橙		
10	土師器	坏	(12.1)	4.2	—	CHI	25	普通	橙		
11	土師器	坏	(12.4)	3.5	—	ACHI	20	普通	にぶい黄橙		
12	土師器	坏	(13.0)	3.1	—	CEHI	20	良好	にぶい褐	内外面黑色処理	
13	土師器	坏	(11.2)	3.1	—	ACEHI	20	良好	橙		
14	土師器	坏	(13.0)	3.5	—	CDHI	15	良好	橙	内面黑色処理 P1	
15	土師器	坏	12.9	4.4	—	ACEHI	90	普通	橙	外面黒斑	62-4
16	土師器	坏	(13.4)	4.6	—	CEHI	30	良好	橙		
17	土師器	坏	(14.0)	4.5	—	ABCEHI	25	良好	橙		
18	土師器	坏	(13.2)	4.0	—	CEHI	40	良好	灰黄褐	内外面黑色処理	62-5
19	土師器	坏	(14.1)	3.9	—	ACHI	15	普通	橙		
20	土師器	坏	(14.0)	4.4	—	ACEHI	30	普通	橙		
21	土師器	坏	(15.0)	4.4	—	ACEHI	25	普通	にぶい褐		
22	土師器	坏	(14.4)	3.8	—	ACEHI	15	良好	灰褐	内外面黑色処理	
23	土師器	坏	(13.7)	4.0	—	CEHI	15	普通	橙		
24	須恵器	坏身	—	2.8	—	BHI	30	不良	灰白		
25	土師器	皿	(16.0)	2.6	—	ACHI	15	良好	にぶい赤褐	外面黒斑	
26	土師器	高坏	(14.4)	3.4	—	CEHI	20	普通	にぶい赤褐	内外面赤彩	
27	須恵器	短頸壺	—	4.5	—	BCIL	40	不良	褐灰	SJ47・57・58 I 9 G-76	
28	土師器	坏	(10.9)	4.7	—	CI	25	普通	橙	内外面黑色処理	
29	土師器	鉢	22.1	11.1	10.2	BCHIL	75	普通	橙	内外面黒斑 P1	62-6

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
30	土師器	鉢	(20.8)	6.9	—	E H I	20	普通	橙		
31	土師器	小型甕	(14.0)	8.1	—	A B C E H I	15	普通	明褐		
32	土師器	甕	17.9	17.0	—	B C E H I L	60	普通	橙		62-7
33	土師器	小型甕	(14.2)	8.2	—	A B C E H I	20	普通	橙		
34	土師器	甕	19.5	21.8	—	B E G H L	70	良好	橙		62-8
35	土師器	甕	(20.4)	7.1	—	B C E G H I	15	普通	橙	P1	
36	土師器	甕	(18.2)	6.9	—	B C E H I	25	普通	橙		
37	土師器	甕	(20.8)	6.5	—	B C E H I L	20	普通	橙		
38	土師器	甕	(18.9)	14.8	—	B E H I L	25	普通	橙		
39	土師器	甕	20.3	26.7	—	B C H I L	50	普通	にぶい橙	P1	63-1
40	土師器	甕	(19.8)	19.1	—	A B C E H I L	15	良好	橙		
41	土師器	甕	(11.8)	12.6	—	A B C E G H I	20	普通	橙		
42	土師器	甕	(18.9)	36.6	4.9	B C E H I L	80	普通	にぶい橙	底部木葉痕	63-2
43	土師器	甕	—	28.4	5.6	A B C E H I L	30	普通	暗褐	底部木葉痕 外面黒斑 P4	
44	土師器	甕	—	3.2	(5.6)	B E G H	30	普通	橙		
45	土師器	甕	—	4.5	5.0	B C E H I	60	普通	橙	外面黒斑	
46	土師器	甕	—	4.4	(5.6)	B C E H I	35	普通	にぶい橙		
47	土師器	甕	—	7.9	(4.6)	A B E H I	20	普通	にぶい褐		
48	土師器	台付甕	—	8.9	—	C E H I L	40	良好	にぶい橙		
49	須恵器	甕	—	1.2	—	I K	5	良好	灰		
50	土製品	土錘	長さ4.7cm 最大径1.5cm 孔径0.4~0.5cm 重さ9.00g			A C E I J L	95	普通	橙		
51	石製品	砥石	長さ8.0cm 幅6.6cm 厚さ5.3cm 重さ186.59g			安山岩					91-5
52	石製品	白玉	長さ1.6cm 幅1.6cm 厚さ0.8cm 重さ2.91g			滑石				No.1	88-4

第60号住居跡 (第142図)

第60号住居跡は調査区中央部のI・J-9グリッドに位置する。南西側に第107号住居跡、北東側に第61号住居跡が接し、住居跡南東部は調査区域外に延びる。

平面形は方形と推定される。残存規模は長軸長3.61m、短軸長3.15m、深さ0.17mである。主軸方位はN-38°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は3層に分層される。第3層には焼土ブロックが多量に含まれており、床面直上を広く覆うことから焼失住居の可能性も考えられる。

ピットは6本検出された。P1~P4は規則的な配置から支柱穴と思われる。ただし、深さが10~23cmといずれも浅い。P5・P6は住居跡の中央付近に位置しており、炉跡の可能性も考えられたが、明確な被熱面等は残っていなかった。

壁溝は全周せず、部分的に巡っていた。規模は

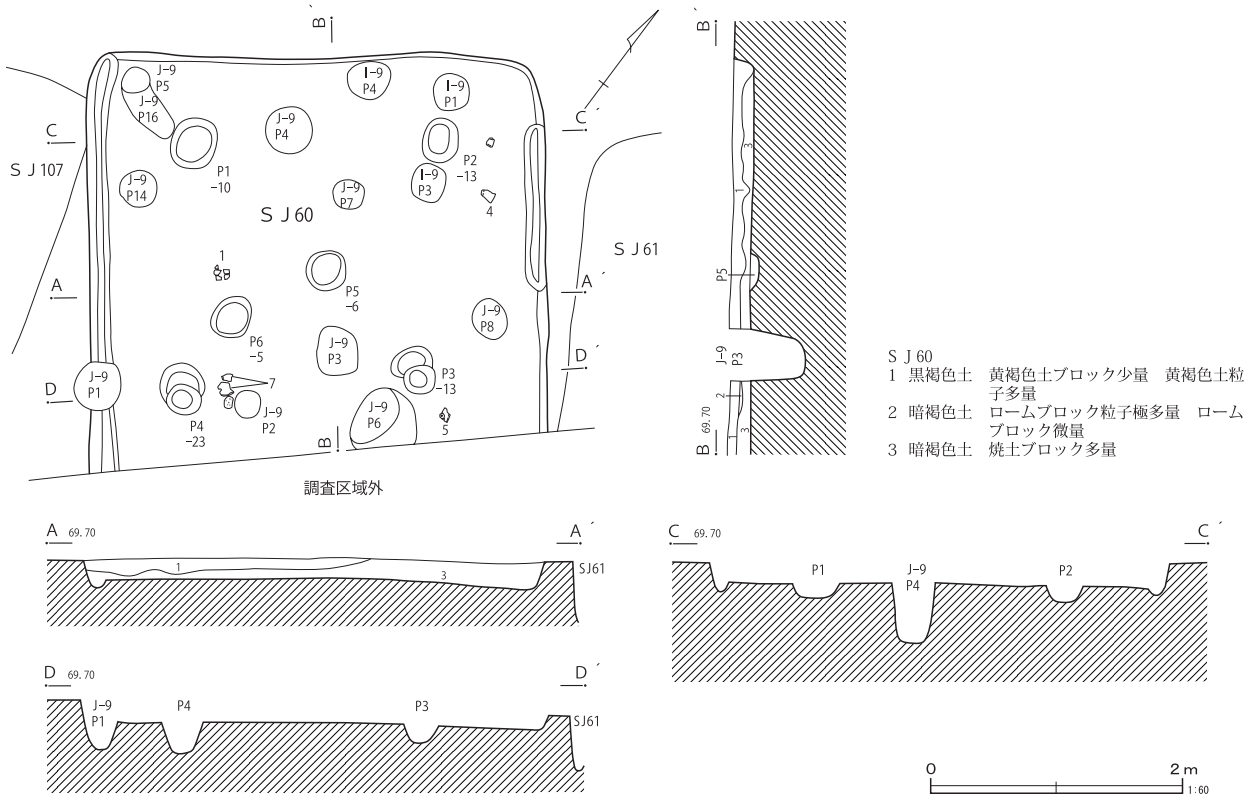
幅14~23cm、深さ6cmほどである。

カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。

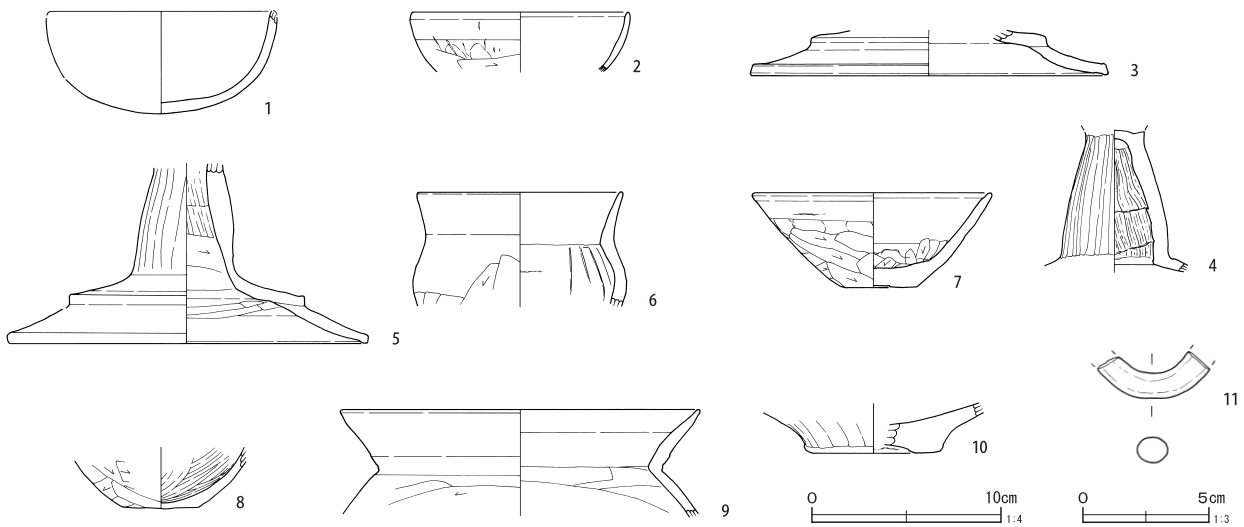
出土遺物は土師器杯・高杯・埴・鉢・小型壺・甕等のほか、環状土製品がある(第143図)。いずれも床面から10cm前後浮いた状態で出土しており、焼土ブロックとともに廃棄されたものと考えられる。

1・2は丸底の半球形杯である。3・5の高杯は和泉式後半に出現する有段脚高杯である。6は広口の埴、7は小型の鉢、8は小型壺の底部、9は素口縁の甕、10は甕もしくは壺の底部である。11は円環状の土製品と想定されるが、用途・性格等は不明である。

住居跡の時期は、半球形杯と有段脚高杯が伴出することから、和泉期後半の5世紀中葉に位置づけられる。後張遺跡等の周辺遺跡では既にカマドが導入されていることから、本住居跡も北西壁側にカマドが存在する可能性が考えられる。



第142図 第60号住居跡



第143図 第60号住居跡出土遺物

第49表 第60号住居跡出土遺物観察表 (第143図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(11.8)	5.3	—	AH I	40	普通	明赤褐	No. 1	
2	土師器	坏	(11.4)	3.1	—	CEHI	20	普通	褐灰		
3	土師器	高坏	—	2.3	(18.9)	CEHI	5	普通	橙		
4	土師器	高坏	—	7.4	—	ACEHI	90	普通	橙	No. 6	
5	土師器	高坏	—	9.4	(19.0)	ACEGHI	70	普通	明赤褐	No. 5	
6	土師器	埴	(10.8)	5.9	—	CEHI	20	普通	明赤褐		

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
7	土師器	鉢	12.5	4.9	4.0	CEHI	70	良好	明赤褐	内外面黒斑 No.2・3	63-3
8	土師器	小型壺	—	3.2	(4.0)	CEHI	25	普通	橙		
9	土師器	甕	(19.0)	5.5	—	CEHI	15	普通	橙		
10	土師器	甕	—	2.5	(7.0)	CEHI	25	普通	明赤褐		
11	土製品	環状品	残存長4.4cm 径1.2×1.0cm		CEHI	—	普通	赤褐			

第61号住居跡 (第144図)

第61号住居跡は調査区中央部のI・J-9グリッドに位置する。床面精査時、床面下に第68号住居跡が重複していることが確認された。住居跡の南東側は大半が調査区域外に延びている。

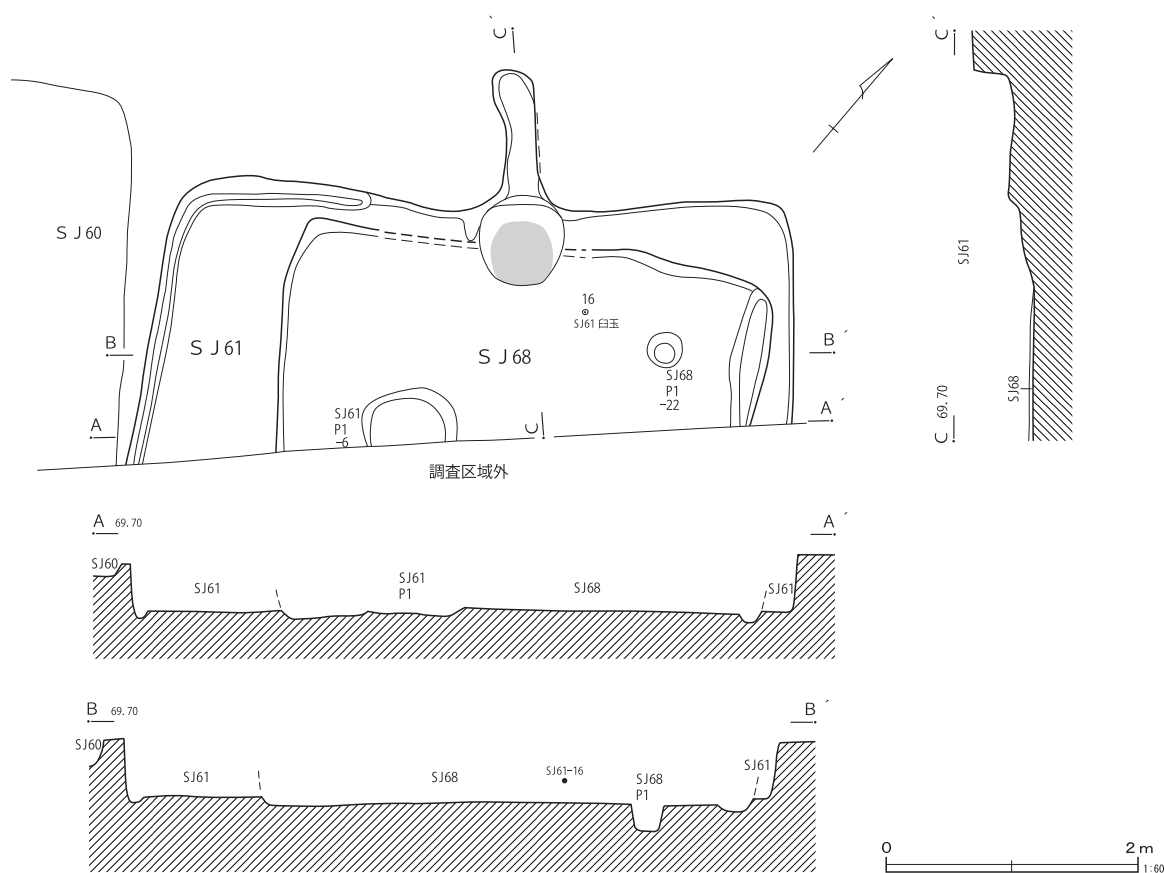
平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長5.14m、短軸長2.22m、深さ0.45mである。主軸方位はN-37°-Wを指す。

カマドは北西壁に設けられていた。燃焼部は壁内に収まり、燃焼部奥壁に僅かな段差を有して、

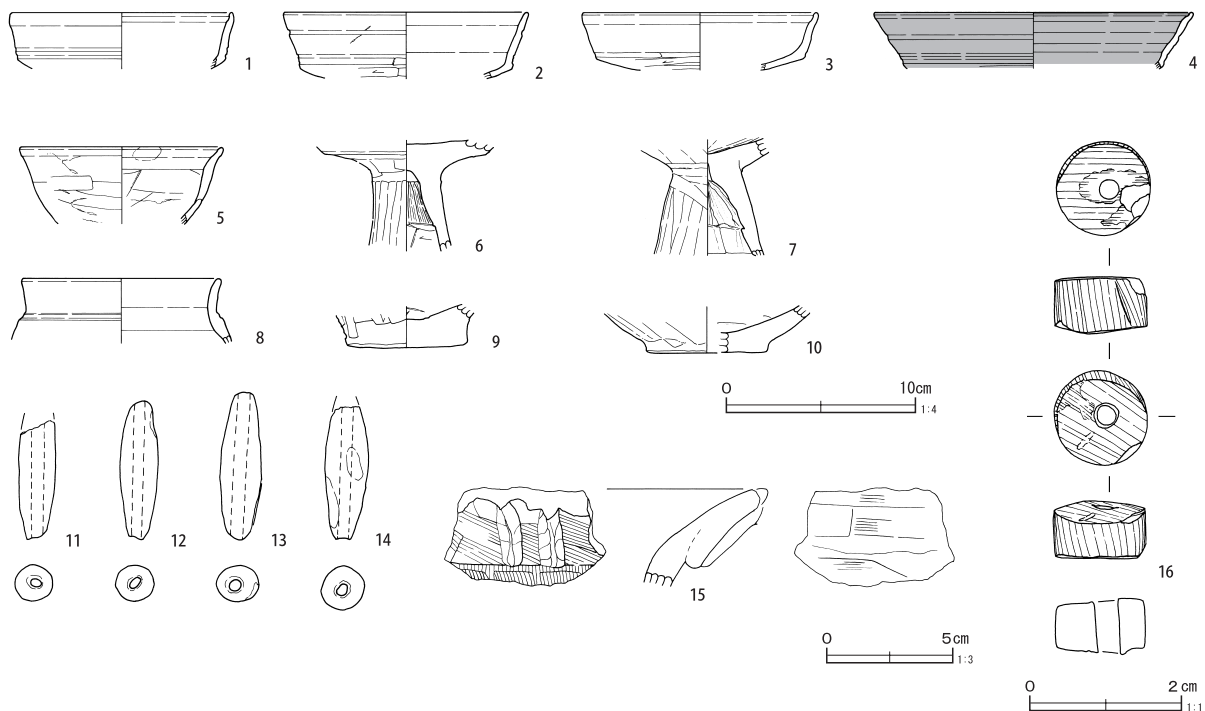
煙道部に移行する。火床面は被熱により広い範囲が赤変していた。袖部は残りが悪い。煙道部は水平に長く伸び、奥壁が直立する。全長1.70m、カマド袖幅0.80m、深さ0.50m、燃焼部長0.70m、燃焼部底面幅0.55m、煙道部長1.00mである。

床面は概ね平坦である。ピットは床面中央部に1本検出された。P1は長径0.73m、短径0.42m、深さ0.06mで、柱穴ではない。

壁溝はカマド左脇から南西壁にかけて巡り、幅11~23cm、深さ5cmほどである。



第144図 第61・68号住居跡



第145図 第61号住居跡出土遺物

第50表 第61号住居跡出土遺物観察表 (第145図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(11.5)	2.9	—	EHI	20	普通	橙		
2	土師器	坏	(12.9)	3.5	—	CEHI	5	普通	橙		
3	土師器	坏	(12.2)	3.0	—	ACHI	10	普通	橙		
4	土師器	坏	(16.8)	2.9	—	CEHI	10	良好	にぶい赤褐	内外面黒色処理 カマド	
5	土師器	碗	(10.6)	4.0	—	CEHI	15	良好	明赤褐	内面黒斑	
6	土師器	高坏	—	5.8	—	CEHI	45	普通	明赤褐		
7	土師器	高坏	—	6.0	—	ACEHI	80	普通	橙		
8	土師器	小型甕	(10.5)	3.4	—	ACHI	20	不良	橙		
9	土師器	甕	—	2.2	6.3	BCEGHI	80	普通	明赤褐		
10	土師器	甕	—	2.4	(6.4)	ACEHI	30	普通	明赤褐		
11	土製品	土錘	長さ4.7cm 最大径1.4cm 孔径0.3~0.5cm 重さ8.10g			EHI	80	普通	明赤褐		93-2
12	土製品	土錘	長さ5.4cm 最大径1.5cm 孔径0.3~0.5cm 重さ10.40g			CHI	100	普通	明赤褐		93-2
13	土製品	土錘	長さ5.8cm 最大径1.6cm 孔径0.4cm 重さ11.38g			CHI	100	普通	明赤褐		93-2
14	土製品	土錘	長さ5.2cm 最大径1.8cm 孔径0.4~0.6cm 重さ11.97g			CEHI	90	普通	明赤褐		93-2
15	土師器	壺	—	3.8	—	ACEGIK	5	普通	灰褐	内面明赤褐	
16	石製品	白玉	長さ1.2cm 幅1.3cm 厚さ0.8cm 重さ1.87g			滑石				P1 No.1	88-5

出土遺物は土師器坏・碗・高坏・小型甕・甕、土錘、白玉等がある(第145図)。供膳器は1~3の口径12cm台の有段口縁坏を主体とする。4は黒色処理された大振りの有段口縁坏でカマドから出

土した。8の小型甕は須恵器短頸壺を模倣した器形であろう。6・7の高坏、15の壺は周囲の住居跡からの流れ込みで、15は口縁部に棒状浮文を貼付した五領期の有段口縁壺である。11~14は管状

の土錘である。16は滑石製白玉で、カマド前面の床直から出土した。断面円筒形である。

住居跡の時期は小型化した体部の扁平な有段口縁坏が主体を占めることから7世紀前葉に位置づけておきたい。なお、床面下から検出された第68号住居跡との関係は、主軸を概ね揃えていることから拡張の可能性も考えられる。

第62号住居跡 (第146図)

第62号住居跡は調査区中央部のI-9グリッドに位置する。住居跡北東壁側で第82号住居跡と重複し、それを切っている。住居跡北西側は調査区域外に大半が延びる。

平面形は方形と推定される。残存規模は長軸長4.95m、短軸長3.05m、深さ0.34mである。主軸方位はN-36°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は4層に分層され、褐色土が主体で自然堆積を示す。住居跡南隅部と南東壁東寄りの床面に白色粘土の分布が見られた。

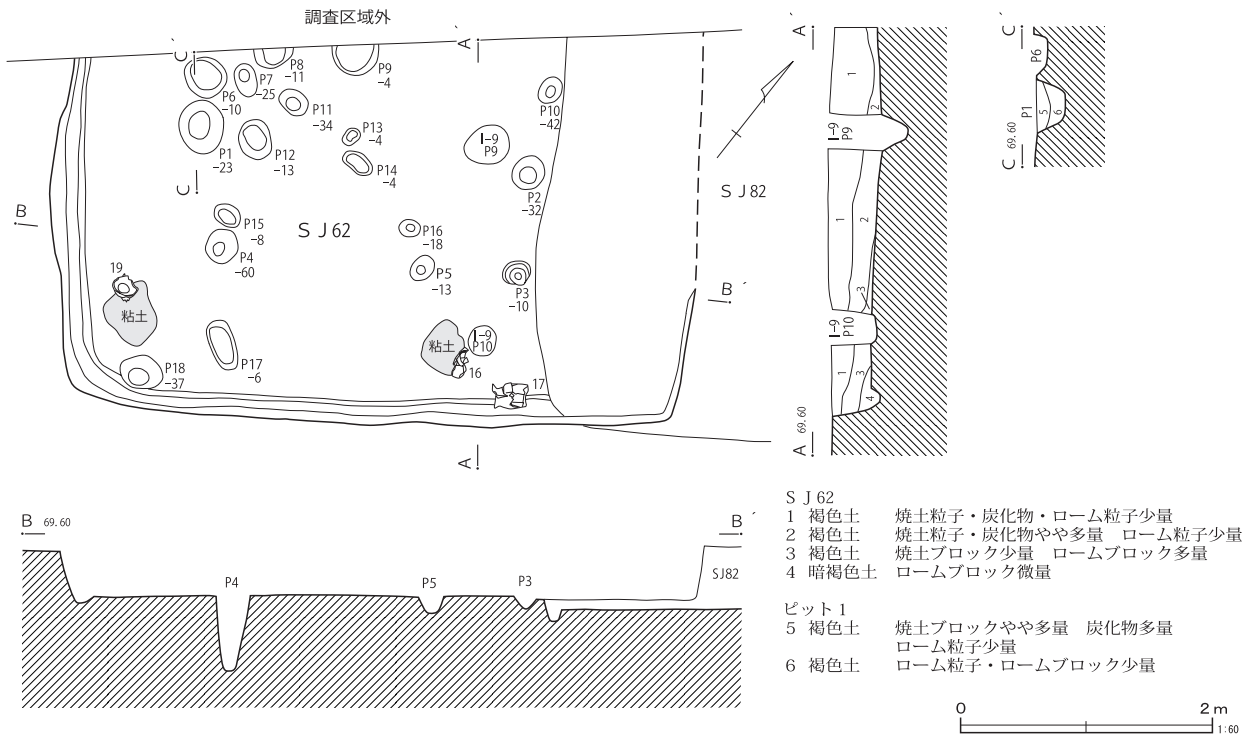
ピットは18本検出された。規模や深度、配置などに規則性を窺うことができず、明確に住居跡に

伴うものを識別することは難しい。このうちP1は長径0.43m、短径0.34m、深さ0.23mを測り、埋土に焼土ブロック・炭化物を多量に混入していた。P4は深度が60cmと深く、位置的に見て支柱穴の可能性が大きい。

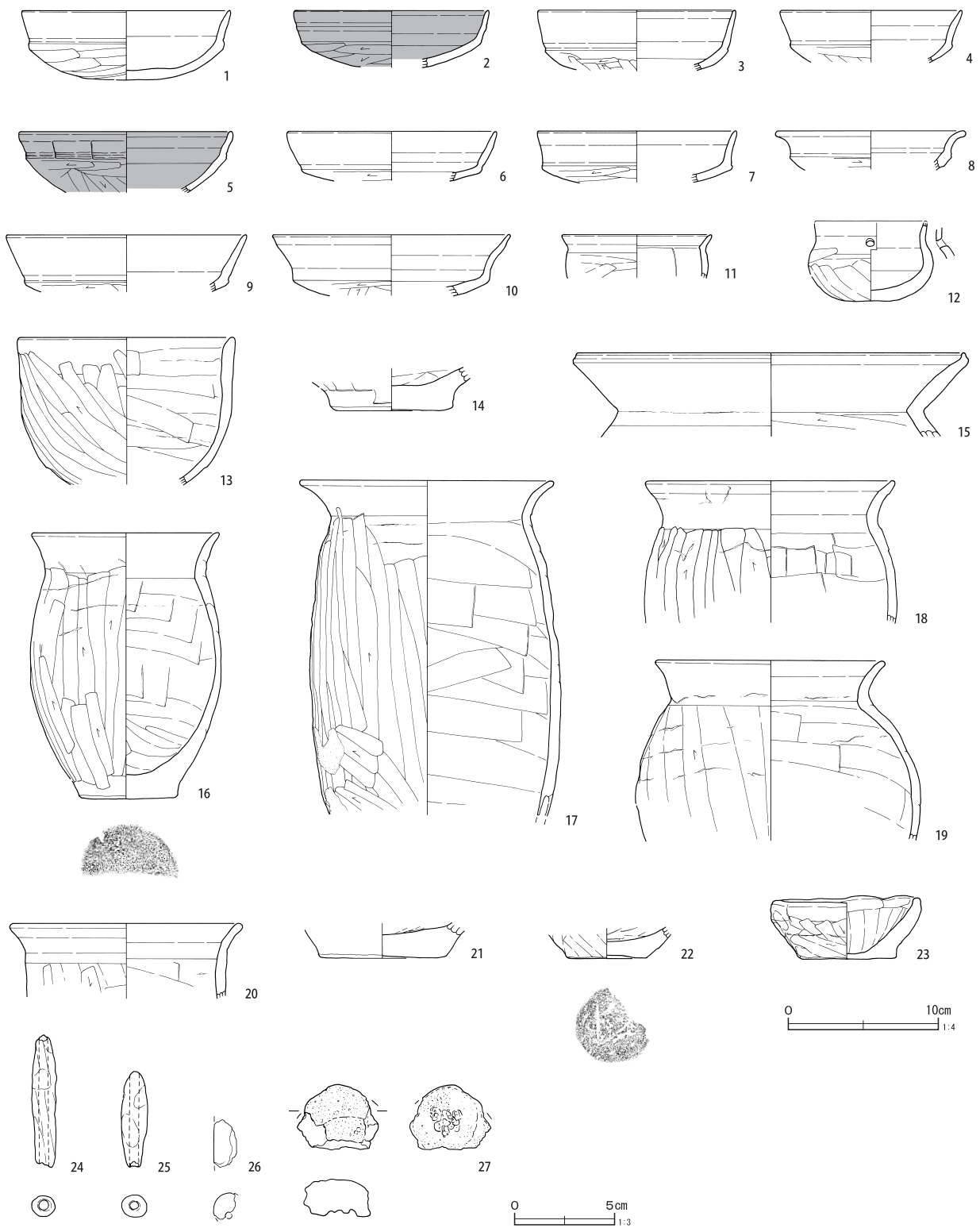
壁溝はほぼ全周し、幅13~28cm、深さ7cmである。カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。

出土遺物は土師器坏・鉢・小型甕・甕・壺・手捏ね、土錘、軽石等がある(第147図)。16の小型甕と17の甕は南東壁東寄りの床直から、同じく19の甕も南隅部付近の床直から出土した。その他はいずれも埋土からの一括である。

供膳器は口径14cm台の坏蓋模倣坏を主体に黒色処理を施した有段口縁坏が少量伴う構成である。法量や口縁部形態にバリエーションが見られる。12は口縁部に小孔を穿った小型の鉢である。13の鉢は底部を欠損しているので判然としないが、16の小型甕とセットになる小型甕の可能性もあろう。17・20は長胴形の甕、18・19は貯蔵用と推定される球形胴の胴張甕である。23は平底で碗



第146図 第62号住居跡



第147図 第62号住居跡出土遺物

状を呈する手捏ねである。24～26は管状の土錘で、26は残欠である。27は軽石（安山岩）で、砥石に転用されたものと考えられる。

住居跡の時期は、口径13～14cmの坏蓋模倣坏が主体を占めることから、6世紀中葉を中心に位置づけられる。

第51表 第62号住居跡出土遺物観察表 (第147図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(13.8)	4.5	—	A C H I	50	不良	橙	内外面黒色処理	63-4
2	土師器	坏	(12.8)	3.7	—	A C G H I	15	普通	にぶい褐		
3	土師器	坏	(13.0)	3.9	—	A C E H I	15	普通	明赤褐		
4	土師器	坏	(12.0)	3.4	—	A H I	10	不良	橙		
5	土師器	坏	(14.0)	4.0	—	C E G H I	20	普通	黒褐		
6	土師器	坏	(13.8)	3.2	—	A C H I	10	良好	にぶい橙		
7	土師器	坏	(13.1)	3.3	—	A C E H I	20	普通	橙		
8	土師器	坏	(12.4)	2.5	—	A C E H I	10	普通	橙		
9	土師器	坏	(15.9)	3.7	—	A C E H I	15	普通	にぶい橙		
10	土師器	坏	(15.8)	4.0	—	A C E H I L	10	普通	橙		
11	土師器	鉢	(10.0)	2.8	—	A E I J	10	良好	にぶい赤褐	口縁部小孔 1 個残る	63-5
12	土師器	鉢	—	5.3	—	B C H I L	75	普通	にぶい橙		
13	土師器	鉢	(14.2)	9.7	—	A B C E H I	35	普通	明赤褐	63-6	
14	土師器	壺	—	2.8	8.1	C E G H I	95	普通	橙	SJ61 底部木葉痕 外面黒斑 No. 2	64-1
15	土師器	甕	(25.8)	5.5	—	C E H I	20	普通	橙		
16	土師器	小型甕	(12.4)	17.6	6.5	B C E H I	25	普通	橙		
17	土師器	甕	16.8	22.1	—	A C E G H I	95	普通	明赤褐		
18	土師器	甕	(16.3)	9.4	—	A B C E H I	20	普通	橙		
19	土師器	甕	15.0	11.9	—	A C E G H I	70	良好	橙		
20	土師器	甕	(15.2)	5.0	—	B C E H I L	30	普通	橙		
21	土師器	甕	—	2.3	8.4	A B C E G H I	60	普通	明赤褐		
22	土師器	甕	—	1.9	5.3	A C H I	75	普通	にぶい赤褐		
23	土師器	手捏ね	9.5	4.0	6.4	C E H I L	95	普通	明赤褐		
24	土製品	土錘	長さ7.0cm 孔径0.5cm	最大径1.2cm 重さ8.73g		C H I	100	良好	明赤褐	93-3	
25	土製品	土錘	長さ5.2cm 孔径0.4cm	最大径1.3cm 重さ6.72g		C H I	100	良好	明赤褐	93-3	
26	土製品	土錘	長さ2.8cm	重さ5.81g		E H I	破片	普通	暗赤褐		
27	石製品	砥石	長さ3.3cm	幅4.1cm	厚さ2.3cm	重さ8.42g	安山岩				

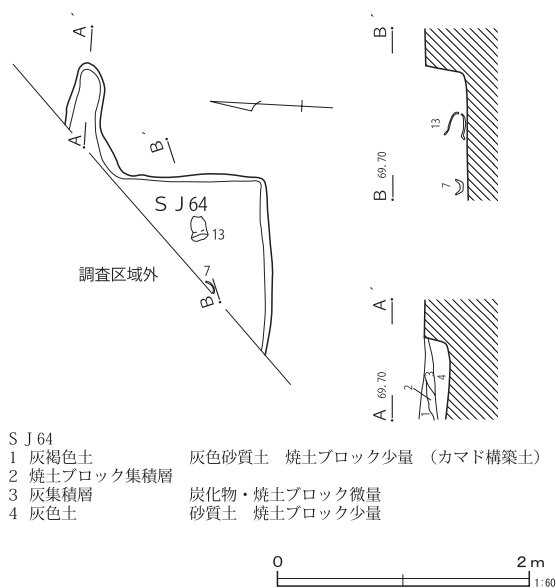
第63号住居跡 (欠番)

第64号住居跡 (第148図)

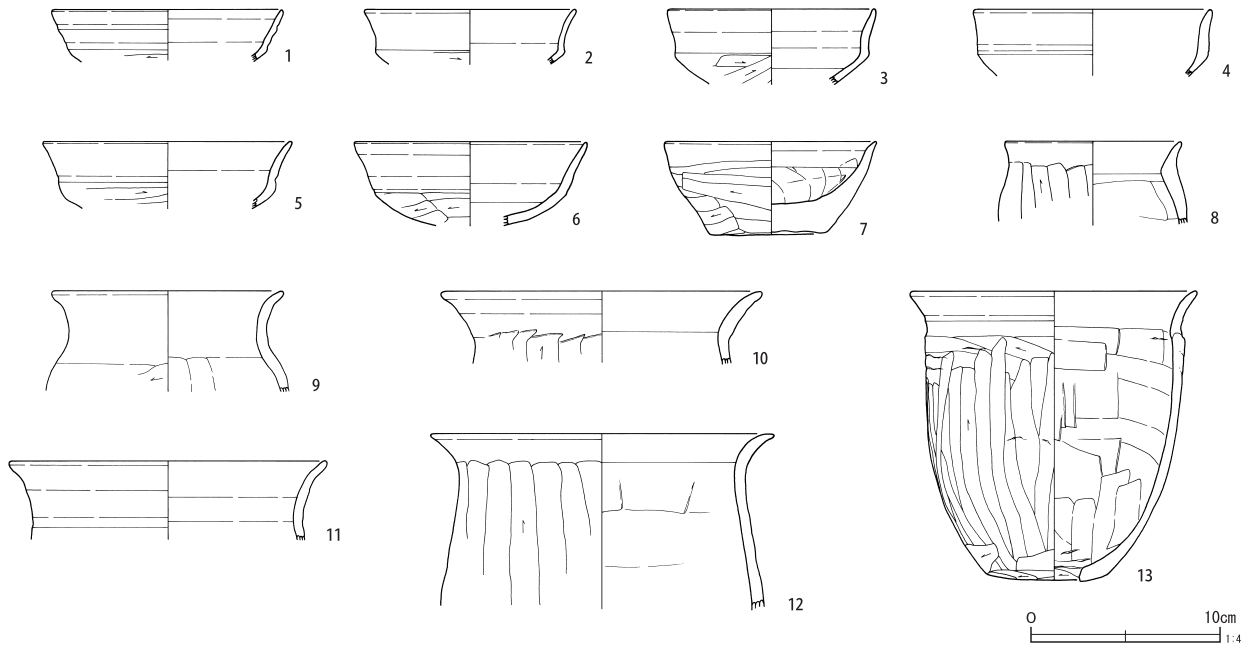
第64号住居跡は調査区中央部北寄りのH-10グリッドに位置する。南側には第95号住居跡が接している。東カマドの住居跡で、北西部分の大半が調査区域外に延びている。

平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長1.64m、短軸長1.32m、深さ0.32mである。主軸方位はN-88°-Eを指す。

カマドは東壁に設けられていた。煙道部が壁外に延びるタイプで、袖部はほとんど残っていない。全長1.00m、カマド袖幅残0.50m、深さ0.20mである。カマド埋土は第1層がカマド構築土の灰褐色土、第2層は天井部被熱面であろう。



第148図 第64号住居跡



第149図 第64号住居跡出土遺物

第52表 第64号住居跡出土遺物観察表 (第149図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.1)	2.7	—	CEI	10	普通	灰黄褐		
2	土師器	坏	(11.1)	2.8	—	ACHI	20	普通	褐灰		
3	土師器	坏	(10.8)	3.9	—	ACHI	15	普通	橙		
4	土師器	坏	(12.4)	3.4	—	CHI	10	普通	橙		
5	土師器	坏	(13.1)	3.5	—	ACEHI	10	普通	にぶい黄橙		
6	土師器	坏	(12.3)	4.4	—	CEHI	15	普通	橙		
7	土師器	坏	11.1	4.9	6.3	ACEHI	95	良好	橙	外面底部黒斑 No.2	64-4・5
8	土師器	鉢	(9.2)	4.3	—	ACEHI	20	普通	褐		
9	土師器	小型甕	(12.2)	5.2	—	ACEHIL	15	普通	明赤褐		
10	土師器	甕	(16.6)	3.7	—	ABCHI	15	普通	橙		
11	土師器	甕	(16.8)	4.1	—	ACEHI	15	普通	橙		
12	土師器	甕	(18.1)	9.2	—	ACEHIL	20	普通	橙	H10G-73	
13	土師器	甕	15.0	15.1	6.1	BCEHIL	100	普通	橙	外面黒斑 No.1	64-3

床面は概ね平坦である。貯蔵穴、壁溝、ピット等は検出されなかった。

出土遺物は少なく、土師器坏・鉢・小型甕・甕・甕等がある(第149図)。カマド右脇から7の坏と13の甕が出土した。

坏は口径11~12cm台に小型化した単純口縁の坏蓋模倣坏が主体を占め、これに無彩の有段口縁坏が少量伴う器種構成である。7の坏は平底で、底部が分厚いイレギュラーなものである。内底面には木口状工具による連続的な押えが見られる。

8は口縁部が短く外反する鉢である。長胴甕は口縁部に最大径をもつ器形に徐々に変化し始める。

9の小型甕や11の胴張甕も見られる。13の単孔式の小型甕は、床面から横倒しになった状態で出土した。口縁部は緩やかに外反し、孔部端面はヘラケズリされる。

住居跡の時期は、小型化した坏や長胴甕に新しい様相が窺えることから、7世紀前葉に位置づけられる。

第65号住居跡 (第150図)

第65号住居跡は調査区中央部南寄りのK-7、L-6・7グリッドに位置する。第58・71・75号住居跡、第5号土壇と重複し、第71号住居跡を住居跡の北東隅部が切り、住居跡の西壁部分で第58号住居跡のカマド右脇を削平していた。

平面形は方形と推定される。残存規模は長軸長3.42m、短軸長3.00m、深さ0.38mである。主軸方位はN-157°-Wを指す。

カマドは南壁の中央左寄りに設けられていた。平面方形の燃焼部に、短く壁外に張り出した煙道部のつくタイプである。燃焼部底面には火床面(第12層)が見られ、壁面も良く焼けていた。燃焼部から段差をもって煙道部へ移行する。煙道部は平面三角形に近く先端が尖る。全長1.20m、カマド袖幅1.05m、深さ0.40m、燃焼部長0.80m、燃焼

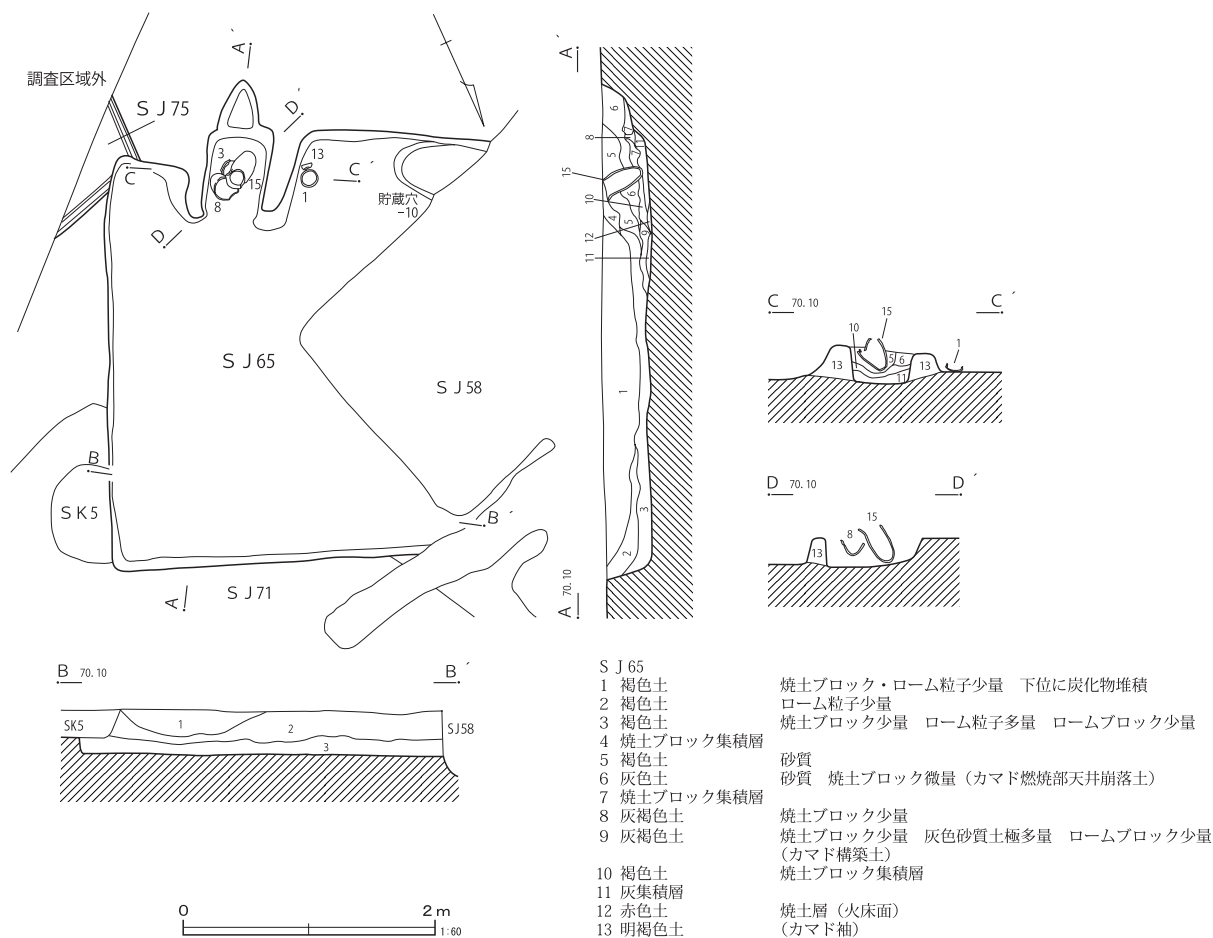
部底面幅0.40m、煙道部長0.40mである。

貯蔵穴はカマド右側の南西隅部に寄った位置に検出した。平面楕円形と推定され、残存部の規模は長径0.72m、短径0.44m、深さ0.10mである。この他に壁溝やピット等は検出されなかった。

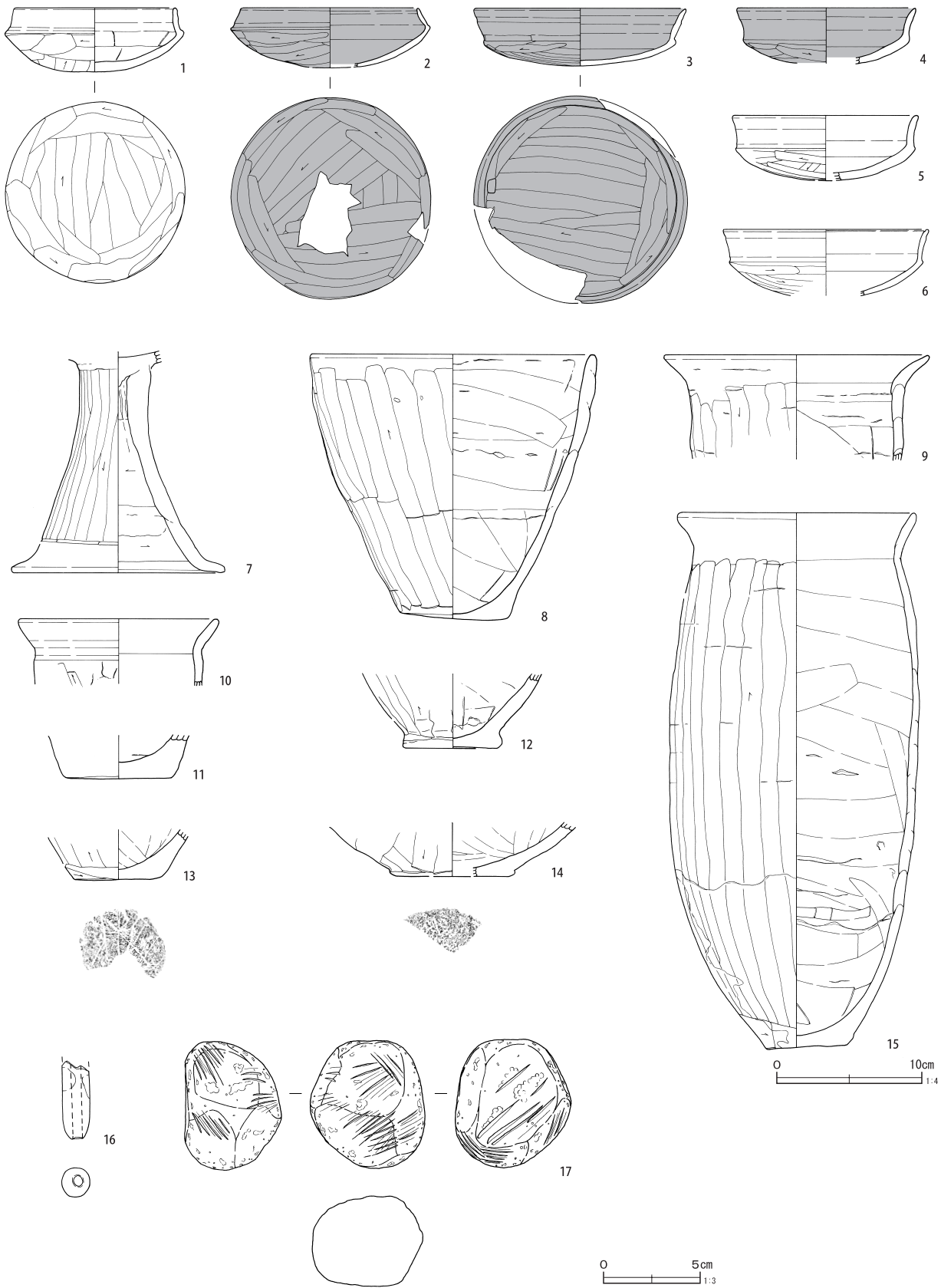
出土遺物は土師器杯・高杯・鉢・小型甕・甕、土錘、砥石等がある(第151・152図)。カマド燃焼部から15の長胴甕と8の大型鉢が並んだ状態で出土した。さらに、甕と鉢の間に3の杯が挟み込まれるように出土した。カマド右袖部外側に接するように1の杯が正位に置かれていた。これら以外はすべて埋土からの出土である。

供膳器は坏蓋模倣坏を主体とし、坏身模倣坏が定量で伴っている。黒色処理されたものが多く、無彩のものと数量的に拮抗する。

7は長脚の高杯で、ラッパ状に大きく開き、端



第150図 第65・75号住居跡

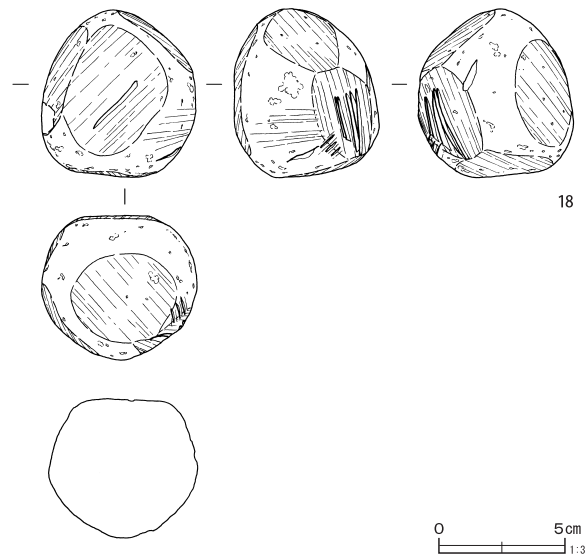


第151図 第65号住居跡出土遺物（1）

部を強くヨコナデする。8は甕胴部下半と同一形態の鉢で、外面に煤が付着する。9・15は長胴甕で、胴部の張りが弱くなっている。10は小型甕と考えられる。13・14の甕の底部には木葉痕が残る。14の甕底部が、胴部が球形を呈する胴張甕と考えられる。

土器以外では、16の管状の土錘と17・18の安山岩製の砥石が出土した。土錘は折損している。砥石は2点とも面取りが施され、刀子等の金属器による刃砥ぎ状の擦痕が無数に残る。

住居跡の時期は、遺構の重複関係や、小型化以前の大きめの黒色処理を施した有段口縁坏や同じく黒色処理を施した坏身模倣坏が主体をなすことから6世紀後葉に位置づけたい。



第152図 第65号住居跡出土遺物（2）

第53表 第65号住居跡出土遺物観察表（第151・152図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	11.1	4.3	—	CEHI	95	普通	橙	No 1	64-6
2	土師器	坏	12.2	4.0	—	CEHI	90	普通	明赤褐	内外面黒色処理	64-7
3	土師器	坏	14.4	3.9	—	CEHI	90	普通	にぶい黄橙	内外面黒色処理 No 3	65-1
4	土師器	坏	(12.2)	3.7	—	ACHI	25	普通	にぶい黄橙	内外面黒色処理	
5	土師器	坏	(12.7)	4.4	—	ACEHI	30	普通	にぶい褐		
6	土師器	坏	(14.2)	4.5	—	CEHI	15	普通	橙		
7	土師器	高坏	—	15.2	(14.6)	AHI	70	普通	橙		65-2
8	土師器	鉢	19.3	18.1	7.4	ABCEHIL	95	普通	橙	外面煤付着 No 5	65-4
9	土師器	甕	(18.2)	7.2	—	ACEHIL	25	普通	明褐		
10	土師器	小型甕	(13.5)	4.5	—	ABCEHIL	20	普通	明赤褐		
11	土師器	甕	—	2.9	7.3	ACEHIL	40	普通	にぶい橙		
12	土師器	甕	—	5.1	6.8	CEHI	50	普通	明赤褐	外面底部黒斑	
13	土師器	甕	—	3.4	6.0	ACEHIL	40	普通	橙	底部木葉痕 No 2	
14	土師器	甕	—	3.7	(8.6)	CEHI	20	良好	にぶい橙	底部木葉痕 外面黒斑	
15	土師器	甕	(16.0)	36.8	5.6	ABCEHIL	90	普通	橙	底部木葉痕 No 4	65-3
16	土製品	土錘	長さ4.1cm 最大径1.4cm 孔径0.5~0.6cm 重さ7.40g			CEHI	60	良好	にぶい赤褐		
17	石製品	砥石	長さ6.7cm 幅5.9cm 厚さ4.9cm 重さ152.53g			安山岩					91-6
18	石製品	砥石	長さ6.6cm 幅6.2cm 厚さ5.7cm 重さ183.37g			安山岩					91-7

第66号住居跡（第153図）

第66号住居跡は調査区中央部南寄りのK-7グリッドに位置する。第58・67・71・79・80号住居跡、第53号溝跡と複雑に重複する。五領期の第71・80号住居跡、鬼高期前半の第58・79号住居跡を切り、東側に位置する第67号住居跡に床面を大きく削平される。また住居跡の北西側の大半は調

査区域外に延びる。

南西壁にカマドをもつ住居跡である。平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長1.90m、短軸長1.88m、深さ0.38mである。主軸方位はN-131°-Wを指す。

カマドは南西壁に設けられていた。燃焼部が壁内に収まり、煙道部が壁外に長く延びるタイプで

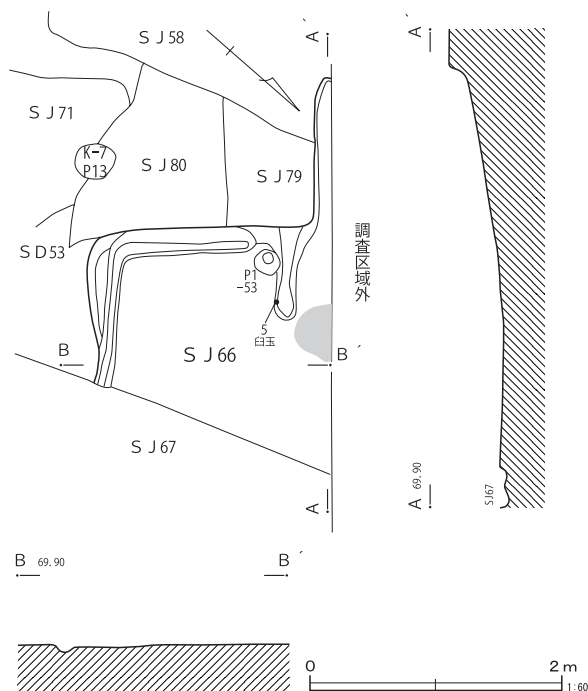
ある。燃焼部から煙道部への移行は段差がなく、緩やかに立ち上がる。燃焼部底面は被熱により火床面が良く残っていた。全長2.00m、深さ0.45m、燃焼部長0.90m、煙道部長さ1.10mである。

床面は概ね平坦である。ピットはカマド左袖脇に1本検出された。P1は長径0.20m、短径0.18m、深さ0.53mである。

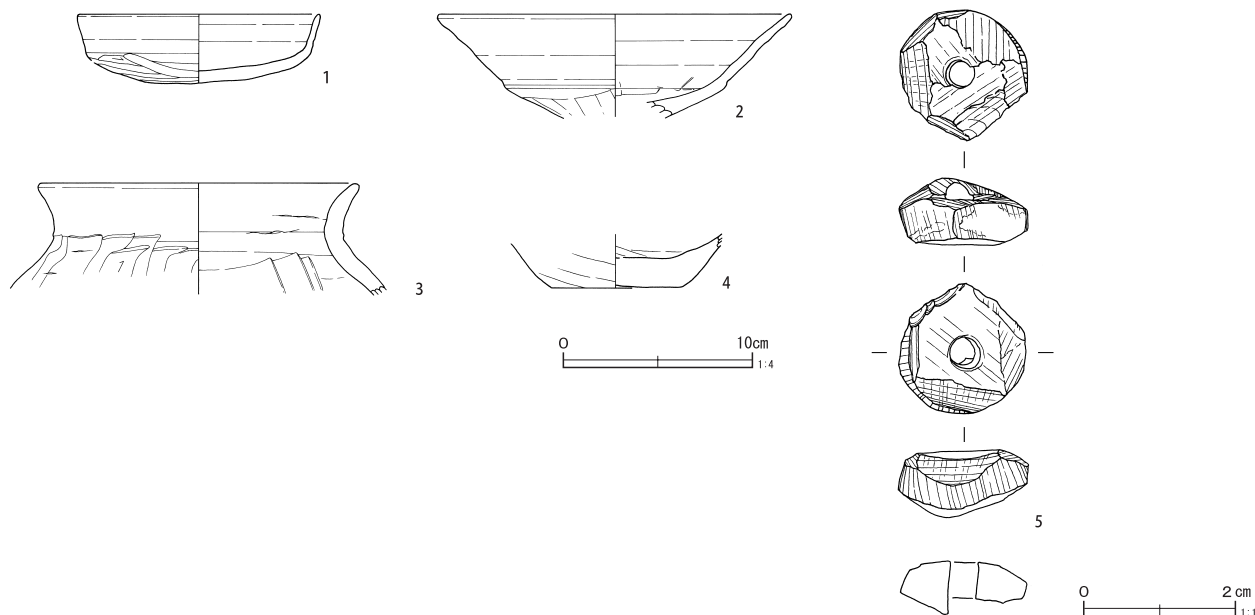
壁溝はカマド左脇から南東壁にかけて全周し、幅10～21cm、深さ13cmほどである。

出土遺物は少なく、土師器坏・高坏・甕、白玉がある(第154図)。カマド内部から2の高坏、3・4の甕が出土しているほか、5の白玉がカマド左袖部から出土した。白玉の詳しい出土状況の記録がなく、その性格については判然としない。

1の坏は体部と口縁部の境をヘラケズリによって作出した坏蓋模倣坏である。2は口縁部が大き



第153図 第66号住居跡



第154図 第66号住居跡出土遺物

第54表 第66号住居跡出土遺物観察表(第154図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.7)	3.6	—	ACEHI	70	普通	浅黄橙	カマド カマド カマド	65-5
2	土師器	高坏	(18.6)	5.4	—	ACEHI	30	普通	橙		
3	土師器	甕	(16.8)	5.8	—	CEHIL	25	普通	橙		
4	土師器	甕	—	2.8	(6.8)	CEHI	30	普通	にぶい黄橙		
5	石製品	白玉	長さ1.7cm	幅1.7cm	厚さ0.9cm	重さ2.86g	滑石			No.1	88-6

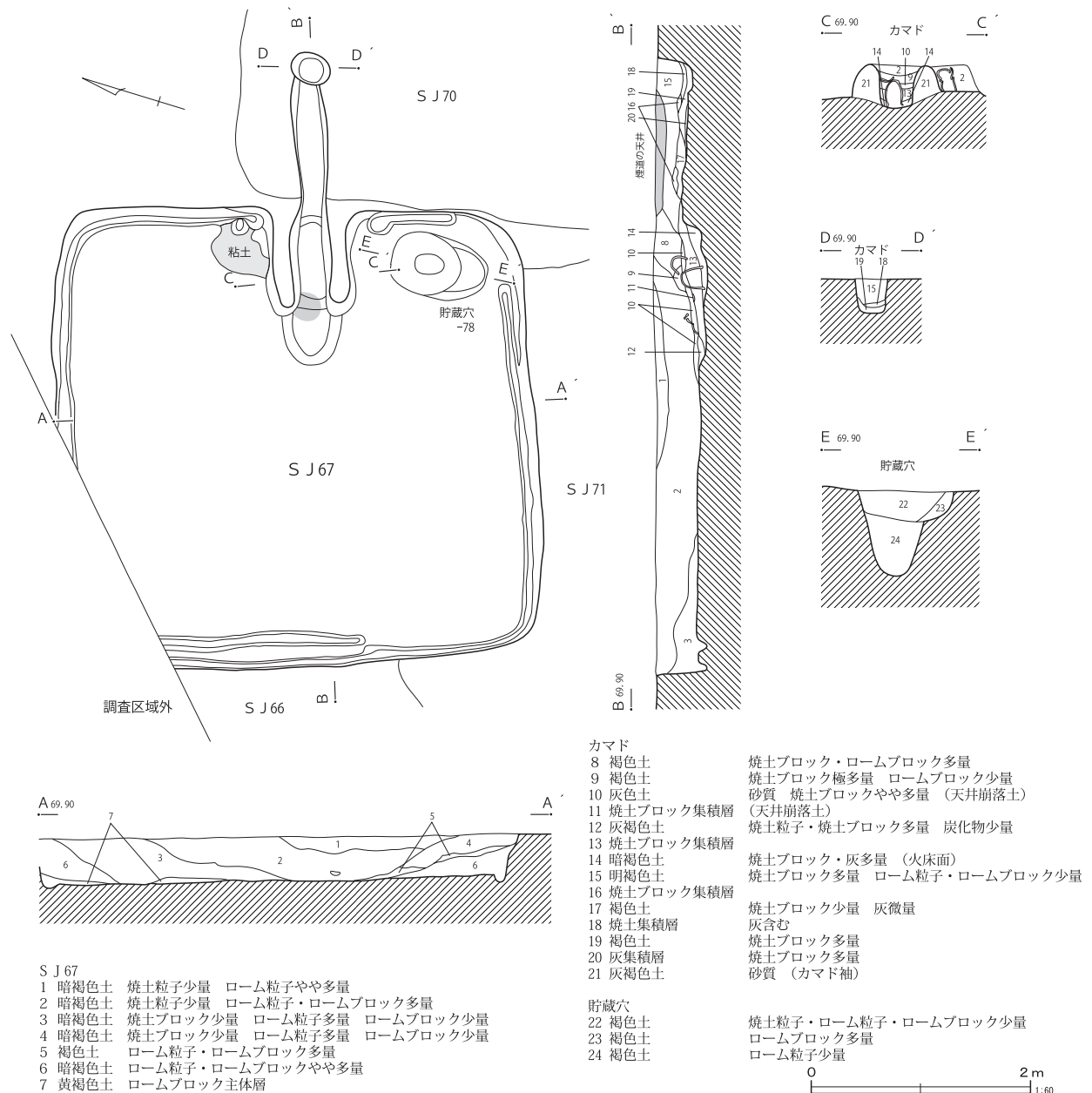
く開く、和泉型高坏である。3は胴張甕で、口縁部が大きく外反する。4は甕の底部で器肉が厚い。この他に5の滑石製白玉が1点出土している。直径1.7cmと大きなものであるが、整形・研磨はやや粗雑である。

住居跡の時期は、和泉型高坏の残存など古い様相が窺えるが、遺構の切り合い関係から6世紀後葉に位置づけておきたい。

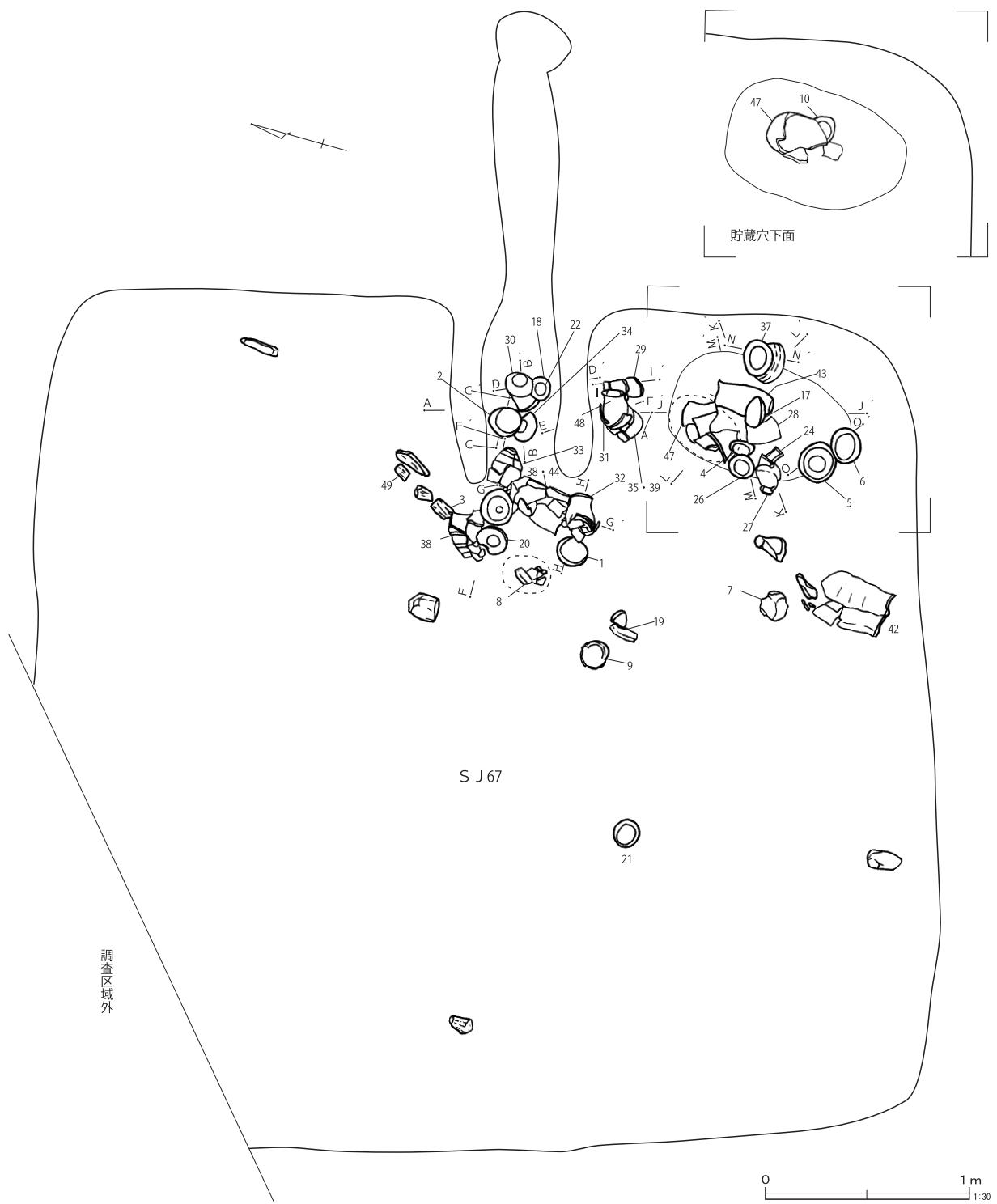
第67号住居跡 (第155~157図)

第67号住居跡は調査区中央部南寄りのK-7グリッドに位置する。第66・70・71号住居跡と重複し、最も新しい。住居跡の北西隅部が調査区域外に延びる。

平面形は形の整った方形で、残存規模は長軸長4.37m、短軸長4.26m、深さ0.40mである。主軸方位はN-72°-Eを指す。



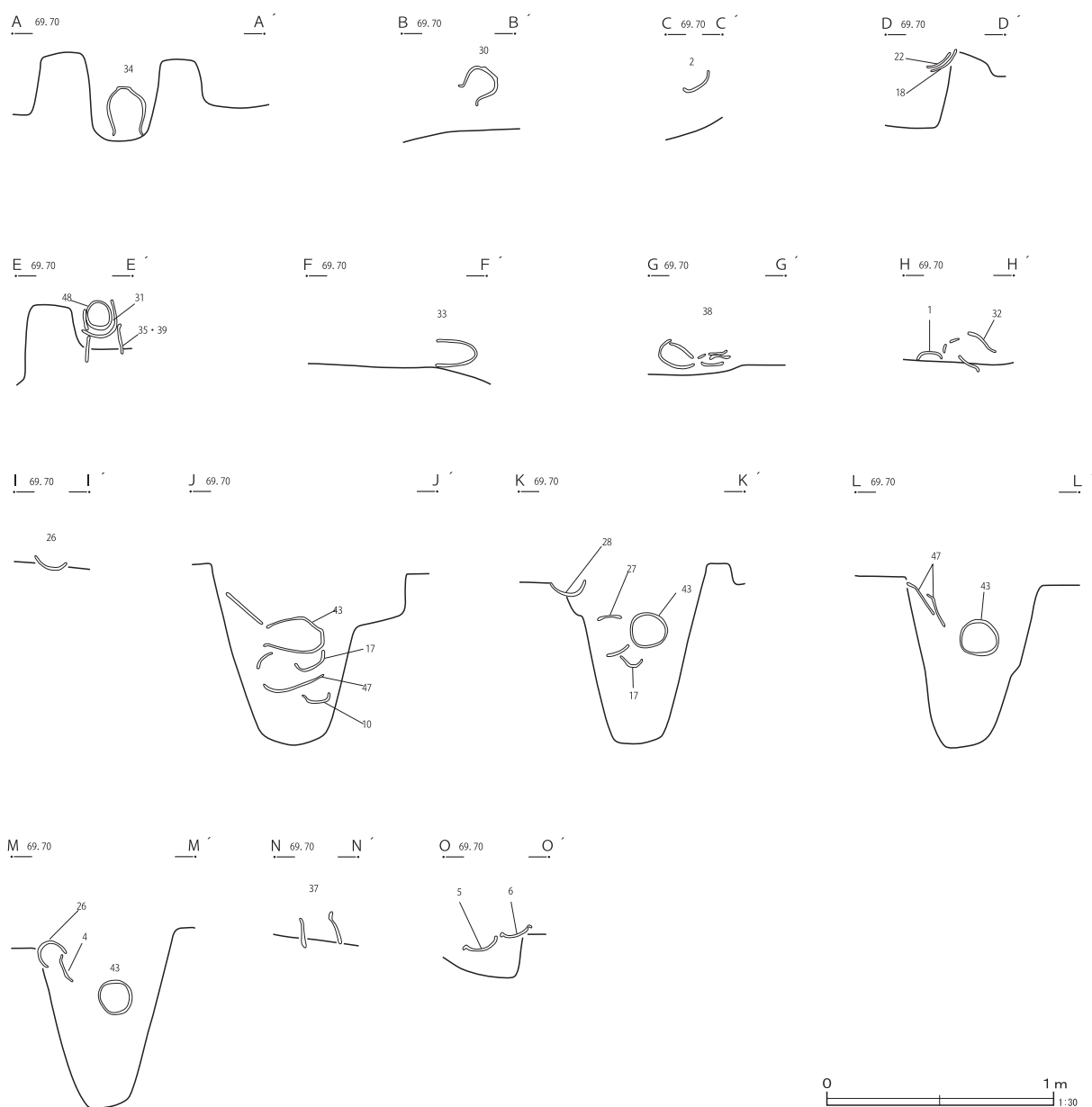
第155図 第67号住居跡



第156図 第67号住居跡遺物出土状況（1）

床面は概ね平坦である。埋土は7層に分層され、暗褐色土を主体とする。全体にロームブロックを多量に含むことから、人為的な埋め戻しも考えておきたい。

カマドは東壁のほぼ中央に設けられていた。燃焼部を浅く皿状に掘り込み、奥壁に段差を設けて、壁外に長く延びる煙道部に移行する。煙道部は地山をトンネル状に掘り抜いて構築されており、天



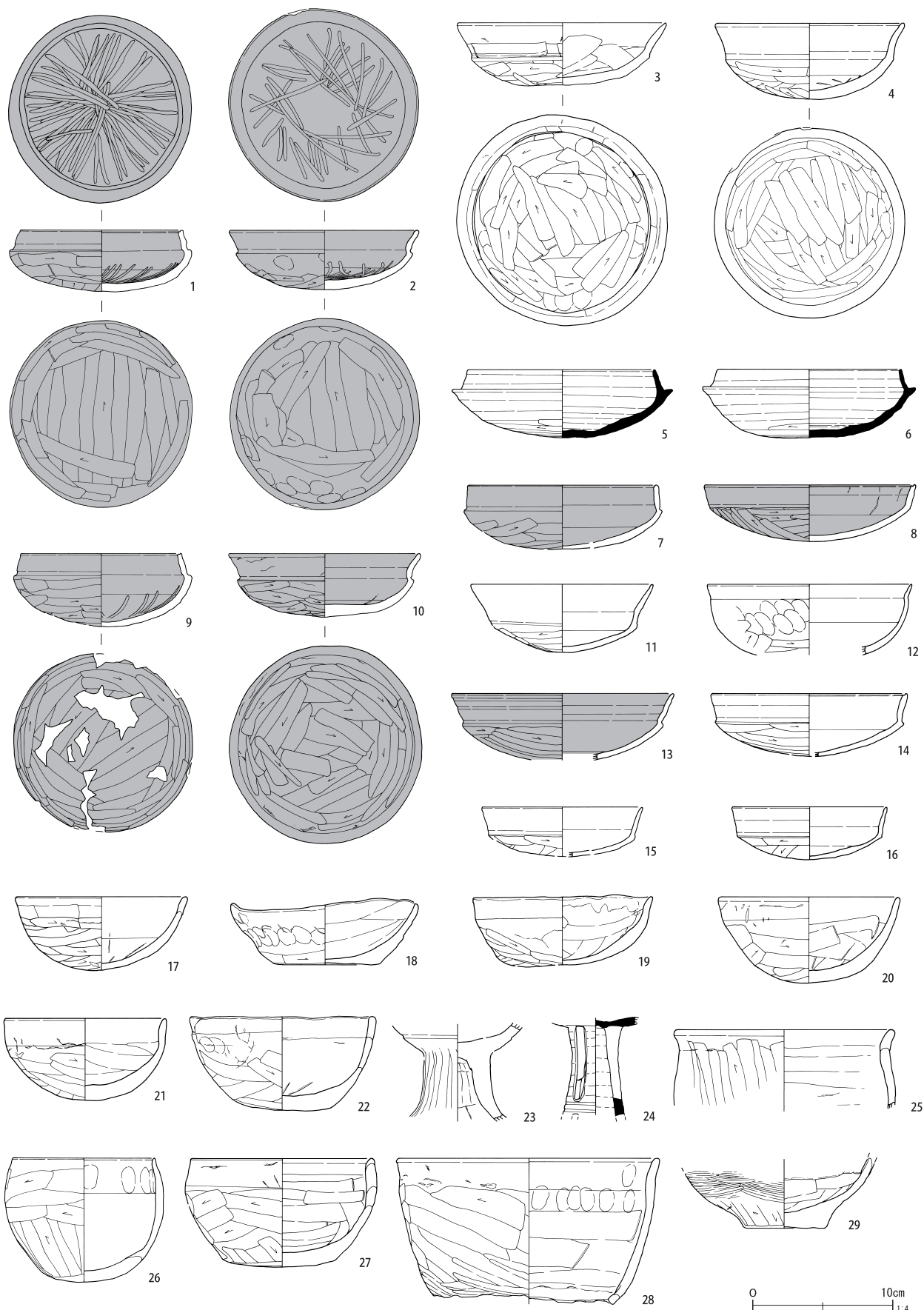
第157図 第67号住居跡遺物出土状況（2）

井部が残っていた。煙道部はほぼ水平に延び、煙道部先端の煙出し部はピット状に掘り込んでいた。全長2.85m、カマド袖幅0.80m、深さ0.50m、燃焼部長1.35m、燃焼部底面幅0.20～0.25m、煙道部長1.50mである。カマド埋土は第10・11層が天井崩落土、第14層が火床面に相当する。燃焼部底面のほぼ中央に甕（34）が伏せた状態で置かれていたことから転用支脚と考えられる。

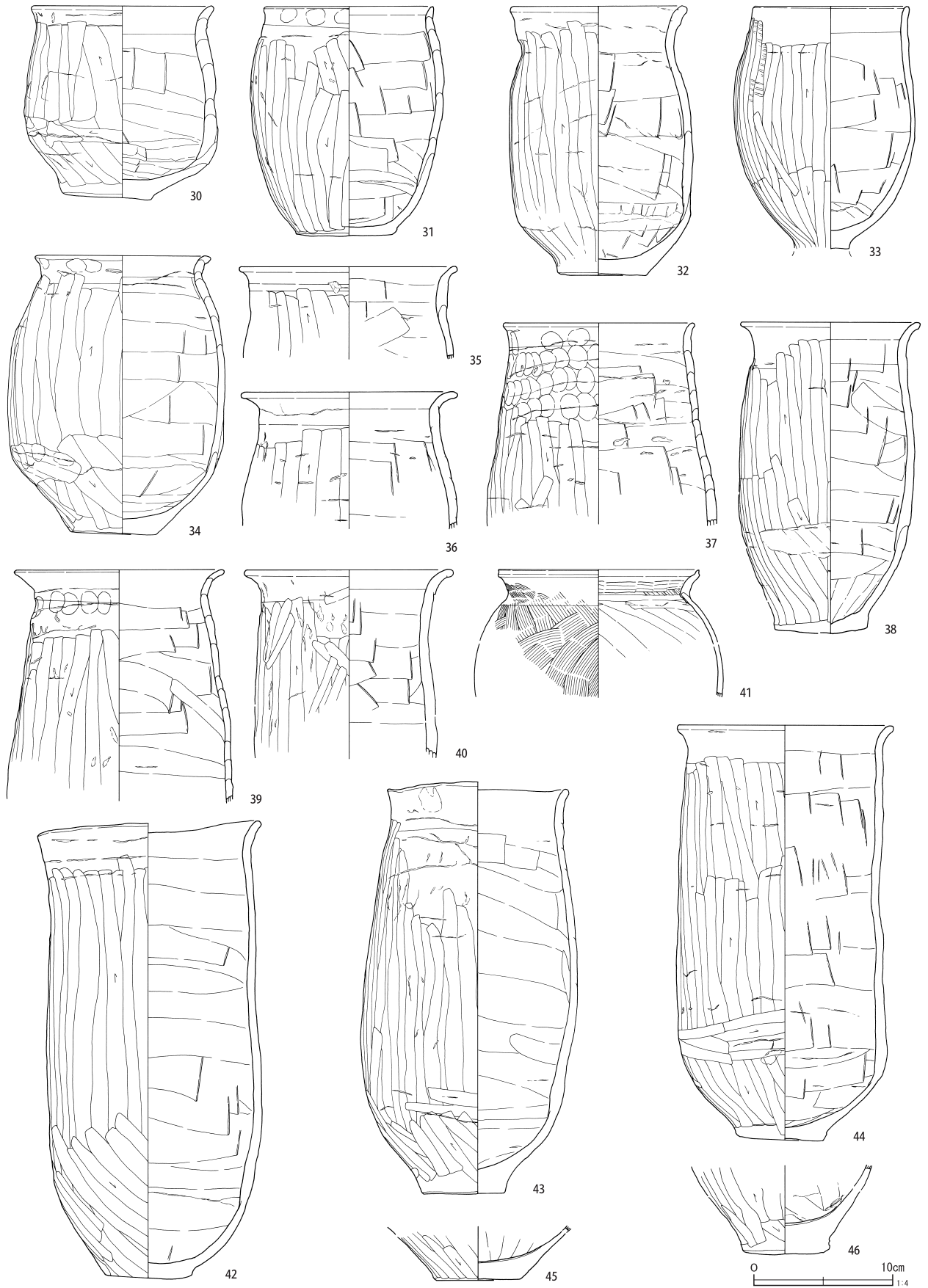
貯蔵穴はカマド右脇の南東隅部に検出された。

平面楕円形で、長径0.87m、短径0.55mである。深さ0.78mで、断面形は2段に掘り込んでいた。貯蔵穴周囲の床面は周堤帯状に僅かに盛り上がっていた。貯蔵穴埋土は褐色土を主体とし、3層に分層される。ピットは検出されなかった。壁溝はほぼ全周し、西壁部分だけ一部二重に巡っていた。規模は幅8～18cm、深さ9cmほどである。

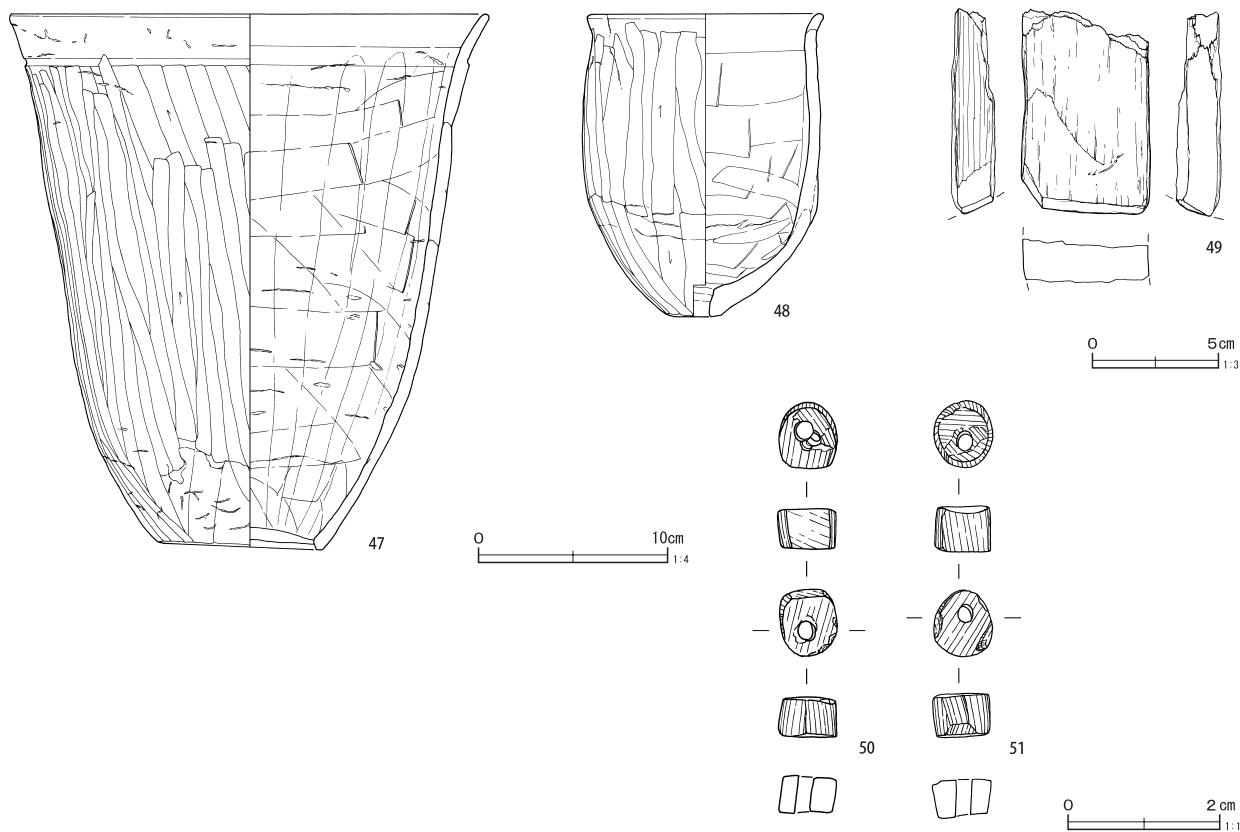
出土遺物は多く、土師器坏・埴・高坏・鉢・壺・小型甕・甕・甗、須恵器坏身・高坏、砥石、白玉



第158图 第67号住居跡出土遺物（1）



第159図 第67号住居跡出土遺物（2）



第160図 第67号住居跡出土遺物（3）

等がある(第158～160図)。カマド及び貯蔵穴周辺から良好な一括遺物が出土した。カマド燃焼部には転用支脚と考えられる34の甕が逆位に置かれていた。その上部からは30の小型甕が逆位で、2の坏、18・22の坏・埴が重なった状態で燃焼部に落ち込んでいた。また、焚口部からカマド前面に潰れた状態の32・33・44・38の甕と1・3・20等の坏・埴類がまとまって出土した。カマド右袖では、袖にもたれ掛かるように長胴甕の胴部上半部を転用器台とした39の上に、31の小型甕と48の小型甕が載せられたままの状態が出土した。貯蔵穴と東壁の間には37の甕上半部を利用した転用器台が置かれ、貯蔵穴と南壁の間には5・6の須恵

器坏身が正位で並べられていた。貯蔵穴内部からは43の甕、47の大型甕、26～28の鉢、4・10・17の坏、24の須恵器高坏脚部等が折り重なるように出土した。この他に床面直上から42の甕、7・9の坏、19・21の埴等が出土している。

坏は黒色処理を施したものが定量で出土し、口縁部形態にバラエティーがある。28の鉢、37・39の甕は転用器台である。長胴甕は寸胴形のものが目立つ。須恵器は坏身2点、高坏脚部1点があり、TK10～TK43型式併行期に位置づけられる。

住居跡の時期は、大振りの有段口縁坏や坏身模倣坏、長胴甕の特徴や伴出須恵器の様相から6世紀後葉に位置づけられる。

第55表 第67号住居跡出土遺物観察表（第158～160図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	11.4	4.3	—	CEHI	100	普通	にぶい赤褐	内面放射状暗文 内外面黒色処理 No.7	65-6・7
2	土師器	坏	13.3	4.2	—	CEHI	100	良好	にぶい赤褐	内面暗文 内外面黒色処理 No.11	66-1・2

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版	
3	土師器	坏	14.8	4.4	—	ACEHIK	100	良好	にぶい橙	外面黒斑 No14	66-3	
4	土師器	坏	13.4	5.3	—	CEHI	100	良好	橙	No38	66-4	
5	須恵器	坏身	13.3	4.8	—	EHIKL	100	良好	灰	TK43型式期併行 No.5	66-5	
6	須恵器	坏身	12.9	4.8	—	IKL	100	良好	灰	TK43型式期併行 No.6	66-6	
7	土師器	坏	(13.4)	4.5	—	EHI	50	不良	黒褐	内外面黒色処理 No24	66-7	
8	土師器	坏	(14.9)	4.0	—	CEHI	40	良好	暗赤褐	内外面黒色処理 No25	66-8	
9	土師器	坏	11.4	5.2	—	CEHIL	80	普通	黒褐	内面放射状暗文 内外面黒色処理 No.6	66-9	
10	土師器	坏	13.7	4.5	—	CEHI	100	普通	にぶい赤褐	内外面黒色処理 No45	67-1	
11	土師器	坏	(13.0)	4.8	—	AHI	50	普通	橙	外面黒斑	67-2	
12	土師器	坏	(14.6)	5.0	—	AHI	15	普通	橙			
13	土師器	坏	(15.8)	4.7	—	CHI	25	普通	明赤褐	内外面黒色処理		
14	土師器	坏	13.8	4.4	—	ACHI	80	普通	橙		67-3	
15	土師器	坏	11.4	3.5	—	HI	50	普通	橙		67-4	
16	土師器	坏	(11.0)	3.7	—	H	30	不良	橙			
17	土師器	坏	12.1	5.1	—	ACEHI	100	良好	橙	No43	67-5	
18	土師器	坏	13.1	4.5	7.6	ACEHI	95	普通	灰褐	No31 カマド	67-6	
19	土師器	境	12.8	4.8	—	ACEHI	70	普通	にぶい橙	No27	67-7	
20	土師器	境	12.6	6.0	—	ACHIJ	95	普通	橙	No15	67-8	
21	土師器	境	11.4	5.8	—	ACHI	100	普通	にぶい橙	No29	67-9	
22	土師器	境	13.2	6.6	7.1	AEHI	80	普通	橙	No12	68-1	
23	土師器	高坏	—	6.9	—	CEGHI	60	普通	橙			
24	須恵器	高坏	—	6.9	—	IK	50	良好	灰	H10G-84 長脚二段透し	68-2	
25	土師器	鉢	(15.6)	5.6	—	ACEHI	20	良好	橙			
26	土師器	鉢	10.0	8.7	—	CEHI	100	普通	橙	No39	68-3	
27	土師器	鉢	(13.1)	7.7	8.0	ACEHI	60	良好	にぶい赤褐	外面黒斑 No40	68-4	
28	土師器	鉢	18.6	10.3	12.9	AEHI	100	普通	橙	外面黒斑 甑に転用 No41		
29	土師器	壺	—	4.9	5.9	CEHI	75	普通	橙	No33		
30	土師器	小型甕	12.8	13.8	6.4	CEHI	100	普通	橙	No32	68-5	
31	土師器	小型甕	12.0	16.4	7.0	CEHIL	90	良好	にぶい橙	外面黒斑 No.2	68-6	
32	土師器	小型甕	12.2	19.2	6.4	ACEHI	95	普通	にぶい橙	No.8	68-7	
33	土師器	甕	11.0	17.3	—	AEHI	80	普通	にぶい黄橙	No10 台付甕か		
34	土師器	甕	12.6	20.0	6.2	CEHI	100	普通	橙	外面黒斑 No34	69-1	
35	土師器	甕	(15.4)	6.6	—	CEHI	10	普通	橙	No.3		
36	土師器	甕	(15.6)	9.8	—	CEHI	20	普通	橙			
37	土師器	甕	13.4	14.4	—	CEHI	90	良好	橙	外面黒斑 No.4	69-2	
38	土師器	甕	12.8	22.3	6.6	CEHI	90	良好	橙	外面黒斑 No.9・13	69-4	
39	土師器	甕	15.0	16.6	—	CEHI	90	普通	にぶい橙	No.3	69-3	
40	土師器	甕	14.7	13.5	—	CEHI	80	普通	にぶい橙		70-3	
41	土師器	甕	(14.4)	9.1	—	CEHI	25	良好	橙			
42	土師器	甕	15.6	32.6	6.2	CDEHI	90	普通	橙	外面黒斑 No35	69-5	
43	土師器	甕	12.9	29.5	5.9	ACHI	100	普通	橙	外面黒斑 No37	70-1	
44	土師器	甕	15.1	29.7	6.3	ACHI	95	普通	橙	No.9	70-2	
45	土師器	甕	—	3.8	6.1	CEHI	50	普通	にぶい黄橙	底部木葉痕 外面黒斑		
46	土師器	甕	—	6.4	6.2	ACHI	60	普通	にぶい橙	カマド		
47	土師器	甗	25.8	28.2	8.8	AHI	100	普通	橙	外面黒斑 貯蔵穴 No42・44	70-4	
48	土師器	甗	12.3	15.9	3.0	ACHI	100	良好	橙	外面黒斑 No.1	70-5	
49	石製品	砥石	長さ8.0cm 幅5.2cm 厚さ1.8cm 重さ120.93g					緑泥片岩				
50	石製品	白玉	長さ0.9cm 幅0.8cm 厚さ0.6cm 重さ0.60g					滑石				
51	石製品	白玉	長さ0.8cm 幅0.8cm 厚さ0.6cm 重さ0.68g					滑石				

第68号住居跡 (第144図)

第68号住居跡は調査区中央部の I-9 グリッドに位置する。第61号住居跡の調査時、床面下に重複していることが判明したものである。住居跡の南東側の大部分が調査区域外に延びている。

平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長3.84m、短軸長1.78m、深さ0.08mである。主軸方位はN-33°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。ピットは住居跡北東隅部付近に1本検出された。P1は長径0.28m、短径0.27m、深さ0.22mである。壁溝は東壁のみに巡らし、幅16~30cm、深さ6cmほどである。

カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。

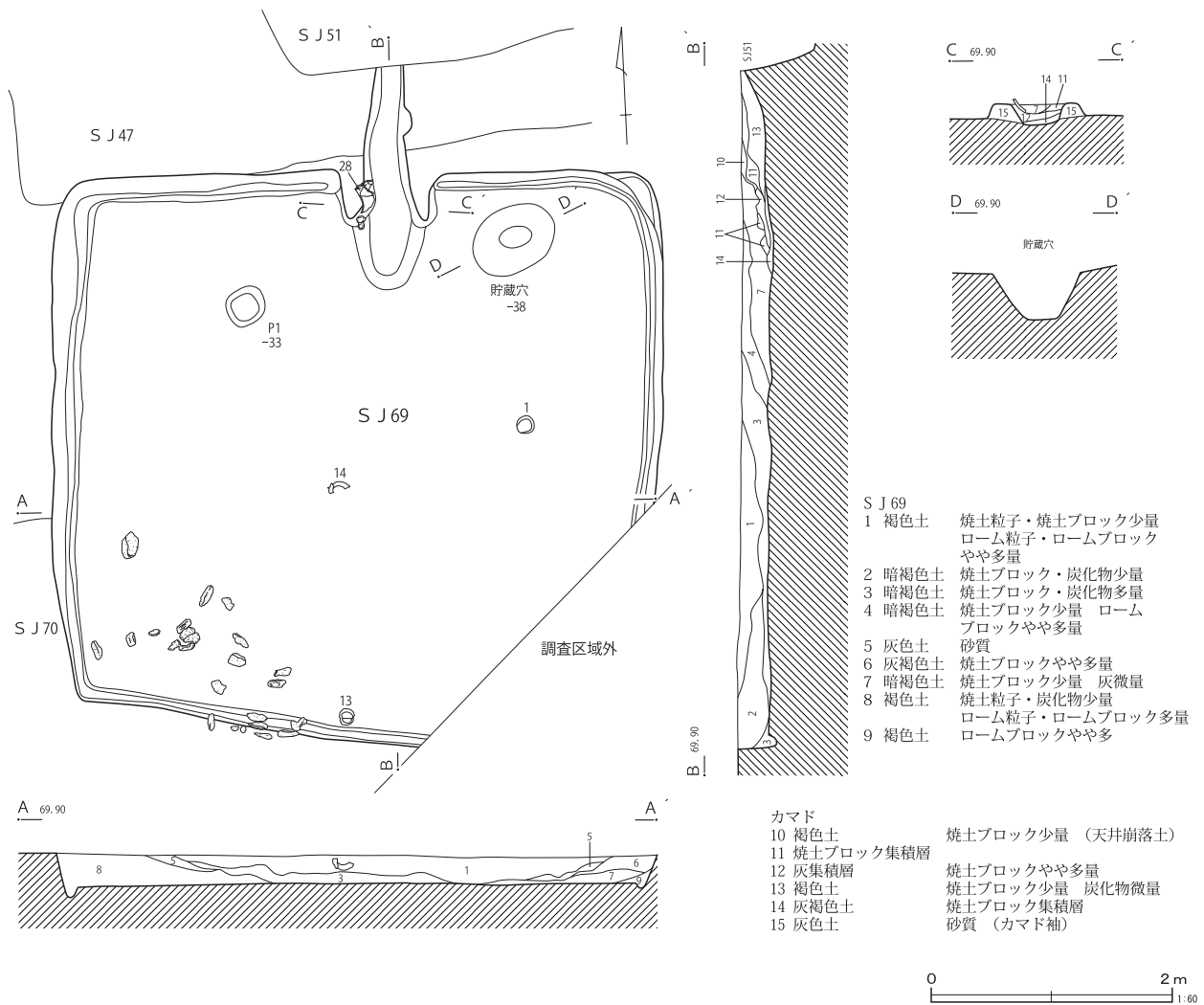
出土遺物がなく、住居跡の時期は不明である。しかし、重複する第61号住居跡と主軸を概ね揃えていることから、住居の拡張の可能性が強い。第61号住居跡に近接した時期であろう。

第69号住居跡 (第161図)

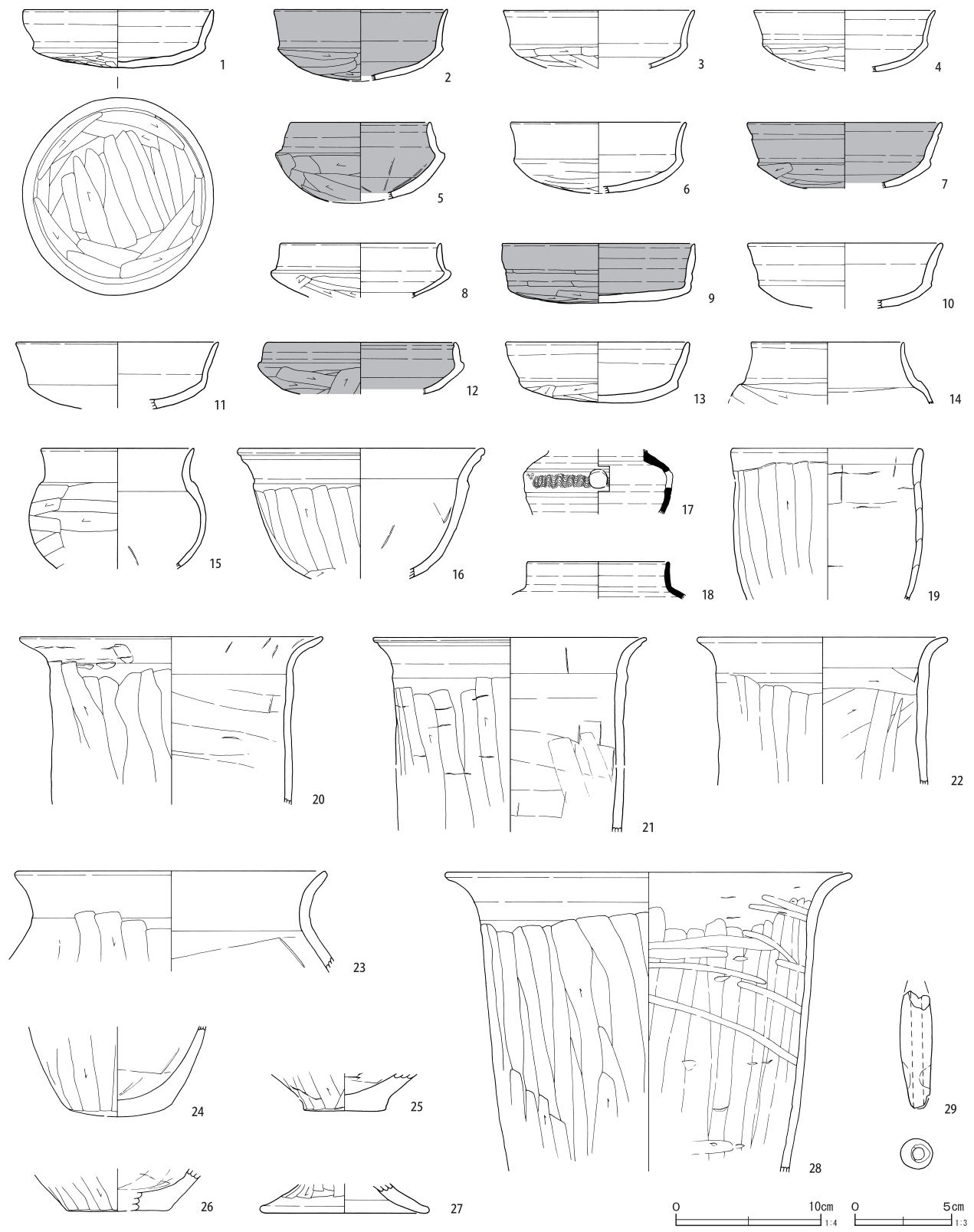
第69号住居跡は調査区の中央部の J・K-7・8 グリッドに位置する。第47・51・70号住居跡と重複し、最も新しい。住居跡の南東隅部は調査区域外に延びている。

平面形は南壁が歪んだ方形である。規模は長軸長5.00m、短軸長4.74m、深さ0.25mである。主軸方位はN-3°-Eを指す。

床面はやや凹凸がある。埋土は9層に分層され、



第161図 第69号住居跡



第162图 第69号住居跡出土遺物

第56表 第69号住居跡出土遺物観察表 (第162図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	13.1	3.9	—	ACEHI	100	良好	にぶい赤褐	外面黒斑 No.3	71-1
2	土師器	坏	(11.9)	4.8	—	ACHI	30	普通	灰黄褐	内外面黒色処理	
3	土師器	坏	(13.0)	4.0	—	ACH	20	普通	にぶい黄橙		
4	土師器	坏	12.4	4.2	—	CHI	75	普通	橙		71-2
5	土師器	坏	9.6	5.4	—	CHI	70	良好	にぶい褐	内外面黒色処理	71-3
6	土師器	坏	(12.1)	4.8	—	CHI	40	普通	橙		
7	土師器	坏	13.4	4.5	—	CHI	60	普通	にぶい橙	内外面黒色処理	71-4
8	土師器	坏	(11.0)	3.7	—	CEHI	20	普通	暗褐		
9	土師器	坏	13.1	4.0	—	CEHI	80	普通	褐灰	内外面黒色処理 外面黒斑 K8G-11	71-5
10	土師器	坏	(13.4)	4.4	—	H	40	普通	橙	カマド	71-6
11	土師器	坏	(13.9)	4.5	—	AHI	20	普通	にぶい橙		
12	土師器	坏	(12.8)	3.5	—	CEHI	20	普通	灰褐	内外面黒色処理	
13	土師器	坏	12.5	4.1	—	AEH	100	普通	にぶい黄橙	No.2	71-7
14	土師器	鉢	10.5	4.2	—	ACEH	75	普通	橙		
15	土師器	鉢	(10.5)	8.2	—	CH	25	普通	橙	外面黒斑	
16	土師器	鉢	(17.0)	8.9	—	HK	20	良好	にぶい黄橙		
17	須恵器	甗	—	4.4	—	IK	20	良好	灰白	TK47型式	
18	須恵器	短頸壺	(9.5)	2.5	—	I	5	良好	灰		
19	土師器	小型甕	13.1	10.3	—	BCEGHIL	40	普通	橙		
20	土師器	甕	(20.6)	11.4	—	ACEHI	20	良好	橙		
21	土師器	甕	(18.9)	13.3	—	ACEGHIL	25	普通	にぶい橙		
22	土師器	甕	(17.0)	10.1	—	BCEGHI	20	普通	橙		
23	土師器	甕	(21.2)	6.8	—	BCEHIL	20	普通	橙		
24	土師器	甕	—	6.1	(6.6)	BCEGH	40	普通	橙		
25	土師器	甕	—	2.5	(5.7)	ACHI	70	普通	にぶい橙	胎土緻密	
26	土師器	甕	—	2.9	(7.0)	BCEHI	30	普通	にぶい黄橙		
27	土師器	台付甕	—	2.0	(11.0)	BCEHIL	30	普通	にぶい橙	P1	
28	土師器	甗	(27.8)	20.6	—	ABCEHI	25	良好	にぶい橙	カマド No.1	
29	土製品	土錘	長さ6.0cm 最大径1.6cm 孔径0.6cm 重さ12.30g			CEHI	80	普通	にぶい橙		

暗褐色土を主体とする。自然堆積を示す。

カマドは北壁に設けられていた。燃焼部を浅く掘り込み、緩やかに立ち上がりながら煙道部に移行する。煙道部先端は、第51号住居跡の調査中に削平してしまい未検出である。全長1.85m、カマド袖幅0.80m、深さ0.25m、燃焼部長0.90m、燃焼部底面幅0.30m、煙道部長0.95mである。カマド埋土は第10・11層が天井崩落土、第14層が使用面と考えられる。カマド袖部は砂質の灰色土によって構築されていた。

貯蔵穴はカマド右脇の北東隅部に検出された。平面形は楕円形で、長径0.71m、短径0.53m、深さ0.38mである。ピットは1本検出されただけで

ある。住居跡に伴うかは不明である。

壁溝はほぼ全周しており、幅9～30cm、深さ11cmほどである。

出土遺物は土師器坏・鉢・小型甕・甕・台付甕・甗、須恵器甗・短頸壺、土錘がある (第162図)。

カマド左袖部内壁際から28の甗が出土しているほか、床面からは中央付近で14の鉢、東壁寄りでの1の坏、南壁際で13の坏が出土した。この他に南西隅部付近で編物石と考えられる長さ15cm前後の棒状礫が25点まとまって出土している。

坏は坏蓋模倣坏が主体を占め、坏身模倣坏と黒色処理を施す有段口縁坏が定量で伴っている。坏蓋模倣坏は口縁部が強く外反するものと、体部が

ほとんど平底になったものが目立つ。坏身模倣坏は5の小型品と8・12の扁平なものが伴出している。鉢は14の口縁部が内傾するもの、15の頸部に括れをもつもの、16の口縁部が大きく開くものの3者がある。甕は口縁部に最大径をもつ胴部の張りのほとんどないものを主体に、23の胴張甕が伴う。28の大型甕は内面を丁寧にヘラナデする。

須恵器は2点出土した。17の須恵器甗は胴部に櫛描波状文を巡らす。TK47型式に比定される。混入。18は短頸壺の口縁部で、短く直立する。

29は管状の土錘で、上端部を欠損する。

住居跡の時期は、坏身模倣坏に古い様相が窺えるが、体部が平底化した坏蓋模倣坏や口縁部に最大径をもつ長胴甕が主体を占めていることから6世紀末葉から7世紀初頭を中心とした年代に位置づけられる。

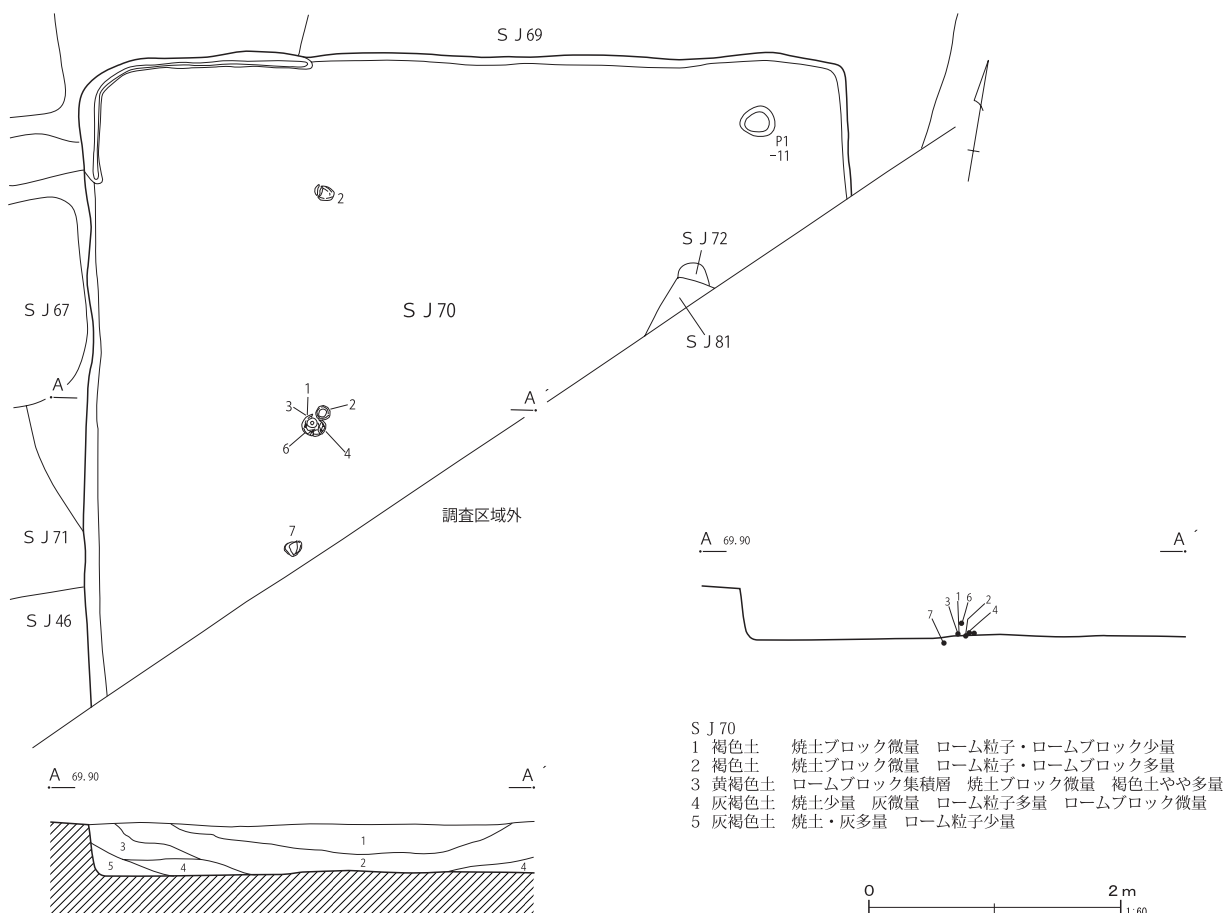
第70号住居跡 (第163図)

第70号住居跡は調査区中央部のK-7・8グリッドに位置する。第46・67・69・71・72・81号住居跡と重複し、五領期の第71号住居跡を切っているほかは、すべての住居跡に切られていた。住居跡の南側は調査区域外に延びている。

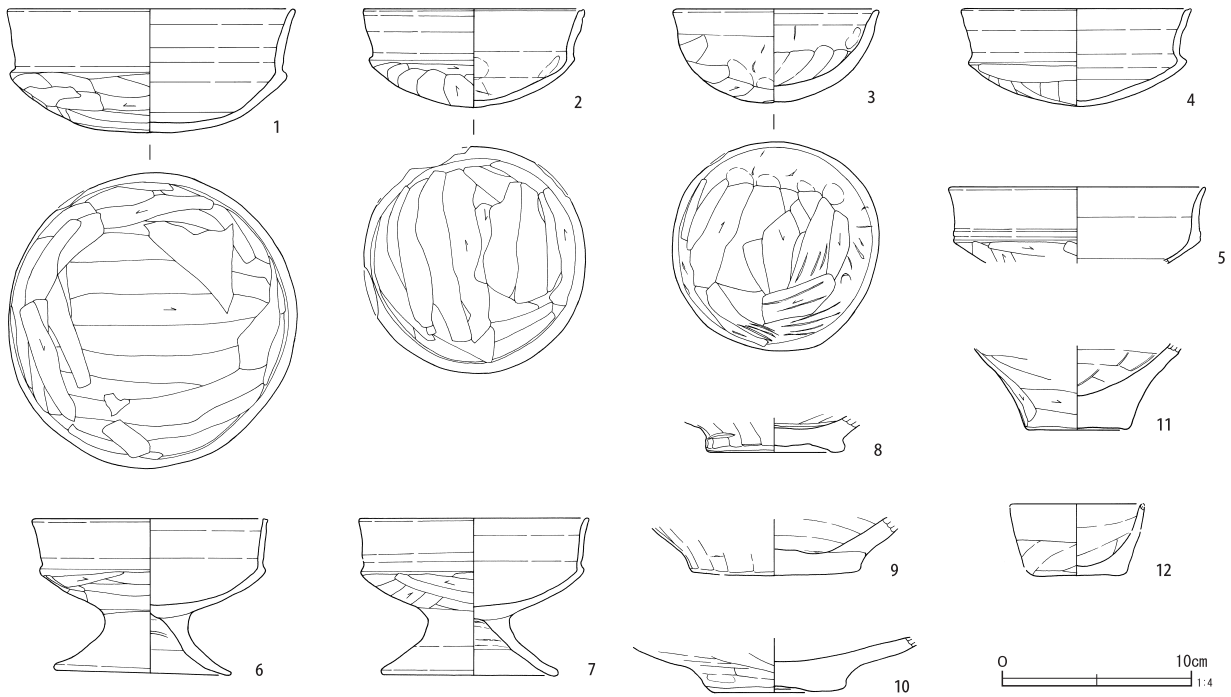
平面形は方形と推定される。残存規模は長軸長6.04m、短軸長5.02m、深さ0.41mである。主軸方位はN-11°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は5層に分層される。褐色土・灰褐色土を主体に、西壁際の第5層に焼土と灰が多量に混入していた。

ピットは北東隅部に1本のみ検出された。P1は長径0.27m、短径0.24m、深さ0.11mと浅い。壁溝は北西隅部付近のみを巡り、幅8~18cm、深さ8cmである。



第163図 第70号住居跡



第164図 第70号住居跡出土遺物

第57表 第70号住居跡出土遺物観察表 (第164図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	15.2	6.5	—	ACHI	95	普通	橙	No. 5	71-8
2	土師器	坏	11.6	5.1	—	CEHI	95	普通	赤	黒斑 No. 1	71-9
3	土師器	坏	10.8	4.8	—	ACEHI	100	良好	明赤褐	No. 5	71-10
4	土師器	坏	12.0	5.1	—	CEHI	90	普通	橙	No. 3	72-1
5	土師器	坏 (13.4)	4.0	—	—	AEHI	20	普通	にぶい赤褐		
6	土師器	高坏	12.5	8.1	9.2	ACEHI	100	普通	橙	外面黒斑 No. 4	72-2
7	土師器	高坏	(12.1)	8.2	9.3	ACEHI	70	普通	橙	脚部内面黒斑 No. 6	72-3
8	土師器	甕	—	1.9	7.2	ACEHI	80	普通	明赤褐		
9	土師器	甕	—	3.0	(8.8)	BCEHI	40	普通	にぶい黄橙		
10	土師器	甕	—	2.8	7.5	ACEHI	70	良好	にぶい赤褐		
11	土師器	甕	—	4.5	(5.4)	ACEHI	25	普通	にぶい赤褐		
12	土師器	ミニチュア	(7.0)	3.7	5.0	BCEHI	50	普通	赤褐		72-4

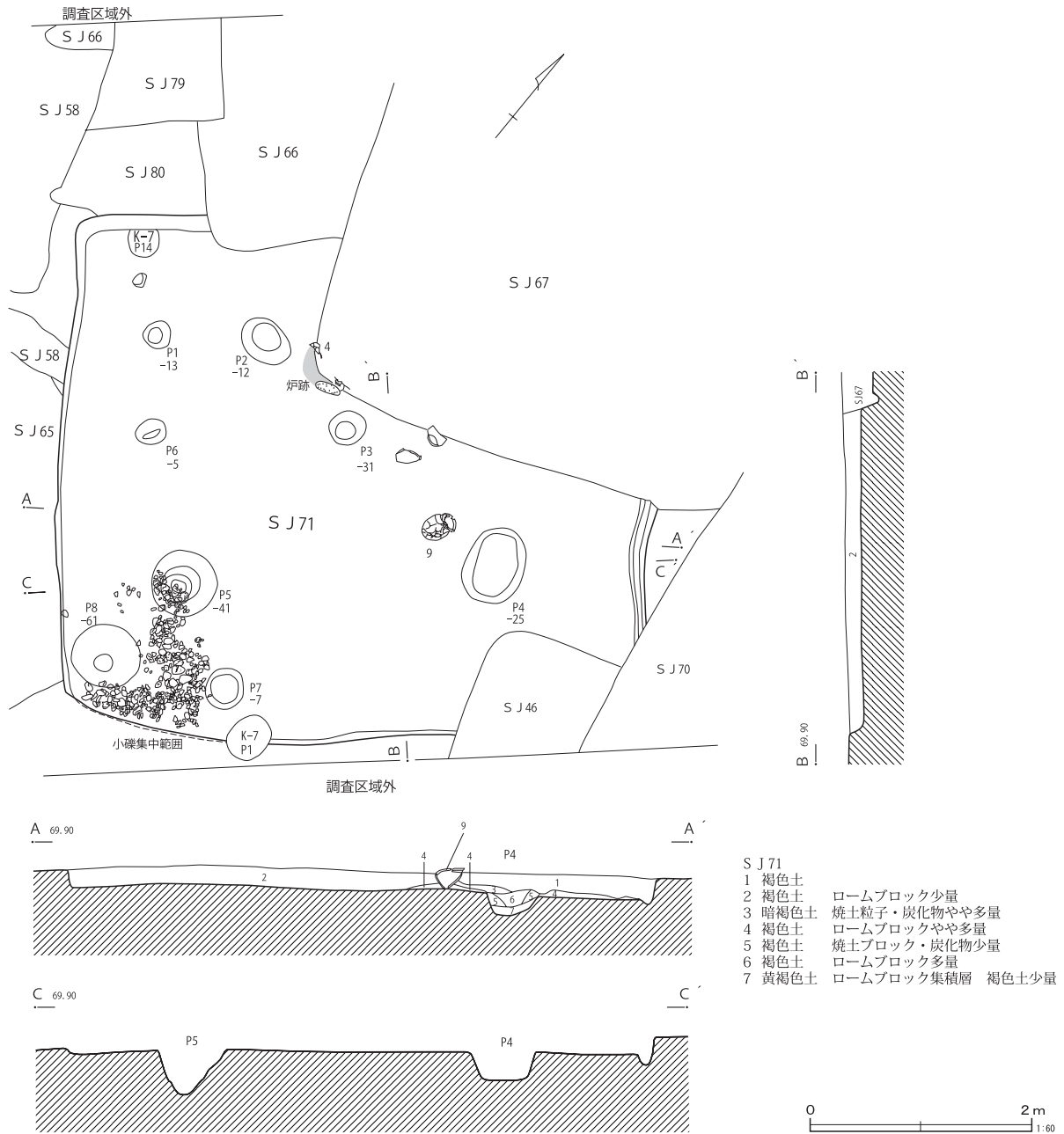
出土遺物は土師器坏・高坏・甕・ミニチュアがある(第164図)。床面中央部やや西寄りから1~4の坏、6の高坏がまとまって出土した。2・3の坏が正位に並べられ、さらに3の中に6の高坏が伏せて置かれていた。また、南へ約1mのところには7の高坏が正位に置かれていた。その他は埋土中からの出土である。

住居跡の時期は、典型的な模倣坏と鬼高型高坏の伴出から6世紀前葉に位置づけておきたい。

第71号住居跡 (第165図)

第71号住居跡は調査区中央部南寄りのK・L-7グリッドに位置する。第46・58・65~67・70・80号住居跡と重複していた。出土遺物の少ない第80号住居跡との新旧関係に問題を残すが、本住居跡は五領期の所産であることから、すべての住居跡に切られているものと判断される。

平面形は方形で、規模は長軸長5.31m、短軸長4.69m、深さ0.13mである。主軸方位はN-20°



第165図 第71号住居跡

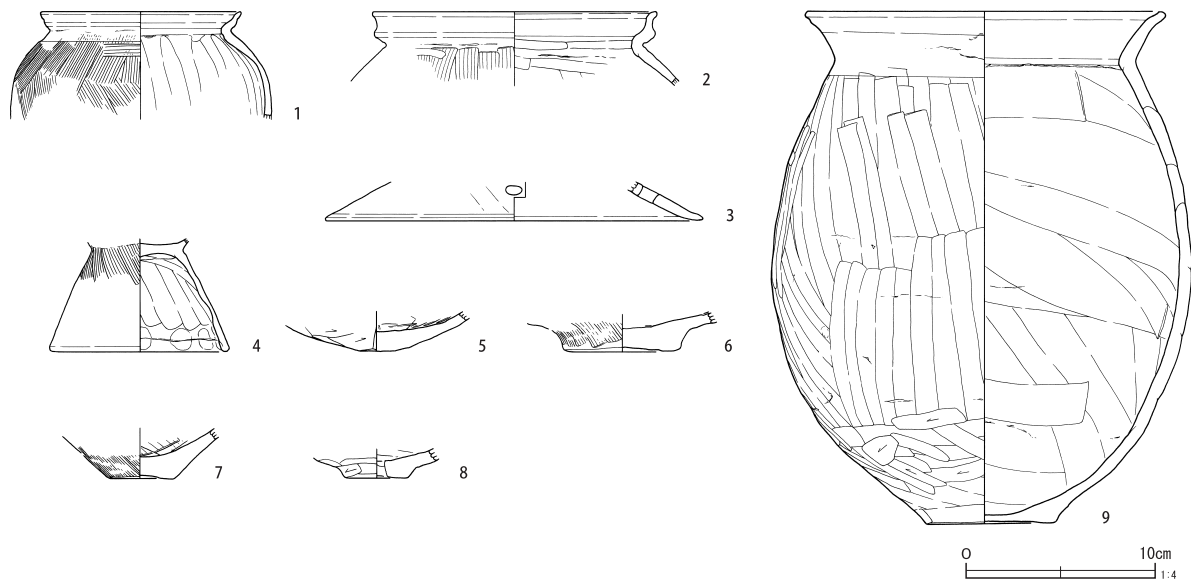
—Wを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は自然堆積を示し、褐色土を主体とする。

炉跡は中央部北寄りに検出された地床炉で、第67号住居跡の南隅部によって大きく削平されていた。平面楕円形と推定され、長径38cmを測る。被熱により火床面は良く焼けており、南東端部に棒状礫を用いた枕石が置いてあった。

ピットは8本検出された。大きさや深度のばら

つきが大きい。P1・P4・P5の3本が主柱穴で、第67号住居跡との重複により、北側の主柱穴を欠く。本来は規則的に配置された4本柱穴であろう。また、南隅部のP8周辺には小礫が敷き詰められていた。住居内における特別な空間(祭壇など)として機能していた可能性も考えられる。なお、P8は位置的に見て貯蔵穴として良いだろう。壁溝は北東壁際のみを巡り、幅9~16cm、深さ6cmほどである。



第166図 第71号住居跡出土遺物

第58表 第71号住居跡出土遺物観察表 (第166図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	台付甕	(10.4)	5.6	—	CEHI	20	普通	にぶい黄橙	S字甕 K 7 G	
2	土師器	台付甕	(15.0)	3.8	—	EGHIL	20	普通	にぶい橙	S字甕 外面煤付着	
3	土師器	高坏	—	2.0	(19.8)	CEHI	5	普通	橙		
4	土師器	台付甕	—	5.9	9.3	EGHI	90	普通	灰黄褐	S字甕 No.5	
5	土師器	甕	—	2.1	2.0	BCEGHI	80	普通	橙		
6	土師器	壺	—	1.9	6.2	BCEGHI	90	普通	橙		
7	土師器	甕	—	2.6	(3.6)	BCEHI	80	普通	橙		
8	土師器	甗	—	1.5	(3.5)	ACHI	40	良好	にぶい黄橙		
9	土師器	甕	18.7	26.9	6.8	BCEGHI	95	普通	橙	胴部外面煤付着 No.1	72-5

出土遺物は土師器甕・台付甕・高坏・壺・甗等がある(第166図)。大・小のS字甕が出土している。

なお、9の甕は古墳時代後期の所産であり、本住居跡には伴わない。おそらく調査では見逃してしまった住居跡や貯蔵穴が存在していたのか、あるいは単独で埋設されていたのであろう。

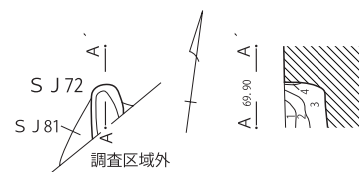
住居跡の時期は、遺構の重複関係やS字甕等の特徴から五領期後半古相と考えられる。

第72号住居跡 (第167図)

第72号住居跡は調査区中央部のK-8グリッドに位置する。第70号住居跡が埋没した後に掘り込まれた住居跡で、調査区内にはカマドの煙道部先端だけが延びている。住居跡の大半は調査区域外にあるため、全容は不明である。なお、本住居

跡の下層には、第81号住居跡の北西隅部が重複していた。

カマド煙道部先端のみを検出した。確認部分の煙道部長0.36m、幅0.25m、深さ0.31mである。



S J 72 カマド

- 1 褐色土 焼土粒子微量 ローム粒子やや多量
- 2 暗褐色土 焼土ブロック少量 ローム粒子微量
- 3 灰褐色土 焼土ブロック・ローム粒子・ロームブロック少量
- 4 赤色土 (煙道被熱部)



第167図 第72号住居跡

主軸方位はN-8°-Wを指す。

埋土は3層に分層され、煙道部先端の壁面は良く被熱していた。出土遺物がなく、時期は不明であるが、カマドの存在から古墳時代後期に位置づけておきたい。

第73号住居跡 (第168図)

第73号住居跡は調査区中央部南寄りのL-6・7グリッドに位置する。第43・55号住居跡と重複し、この中では最も古い。削平により北東壁に設けられたカマド周辺部のみを検出した。

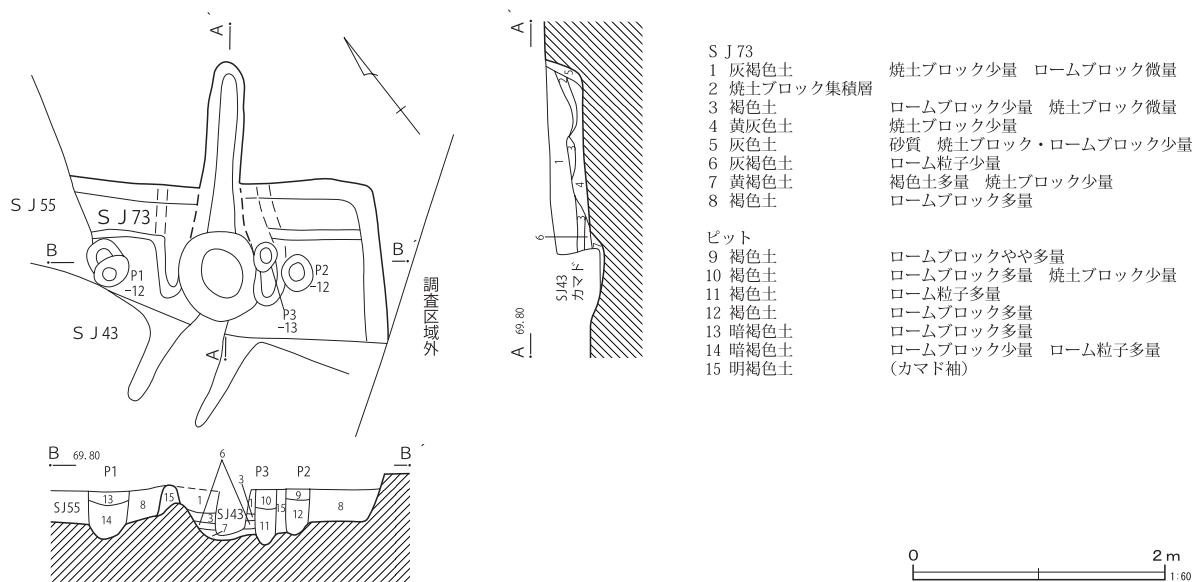
平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長2.38m、短軸長1.30m、深さ0.28mである。主軸方位はN-41°-Eを指す。

床面はカマド周辺部のみを検出した。凹凸が顕

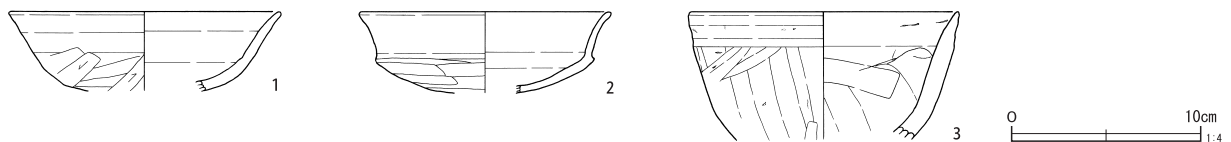
著で、カマド袖部両側の床面には柵状に一段高い部分が造り出されていた。

カマドは北東壁に設けられていた。重複する第43号住居跡のカマドとP1~P3によって燃焼部と袖部は大きく壊されていた。燃焼部は皿状に窪み、緩やかに立ち上がりながら、壁外に延びる煙道部に移行する。全長2.05m、カマド袖幅1.05m、深さ0.45m、燃焼部長0.70m、燃焼部底面幅0.30m、煙道部長1.35mである。カマド袖部は黄褐色土によって構築され僅かに基部を残す。カマド埋土は第2層が天井崩落土に相当する。

ピットはカマド周辺に3本検出された。土層観察の結果、いずれも住居跡に伴うものではない。貯蔵穴、壁溝等は検出されなかった。



第168図 第73号住居跡



第169図 第73号住居跡出土遺物

第59表 第73号住居跡出土遺物観察表 (第169図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(14.3)	4.1	—	BCHIL	20	普通	明黄褐		
2	土師器	坏	(13.2)	4.3	—	ACHI	20	不良	橙		
3	土師器	鉢	(14.1)	6.7	—	ACEHI	20	普通	にぶい赤橙		

出土遺物は土師器坏・鉢がある（第169図）。1の坏は平底気味の底部から体部に移行し、口縁部との境は不明瞭である。2は口縁部が強く外反する坏蓋模倣坏、3は小型の鉢である。

住居跡の時期は、遺構の重複関係と口縁部が外反する模倣坏から6世紀中葉に位置づけられる。

第74号住居跡（欠番）

第75号住居跡（第150図）

第75号住居跡は調査区中央部南寄りのL-7グリッドに位置する。住居跡の大半が調査区域外にあり、住居跡の北西隅部を検出しただけである。また、北西側に近接する第65号住居跡によって北西隅部が一部削平されていた。

平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長0.80m、短軸長0.45m、深さ0.08mである。主軸方位はN-75°-Eを指す。壁溝は幅11~14cm、深さ4cmほどで全周する。

出土遺物がなく、住居跡の時期は不明である。

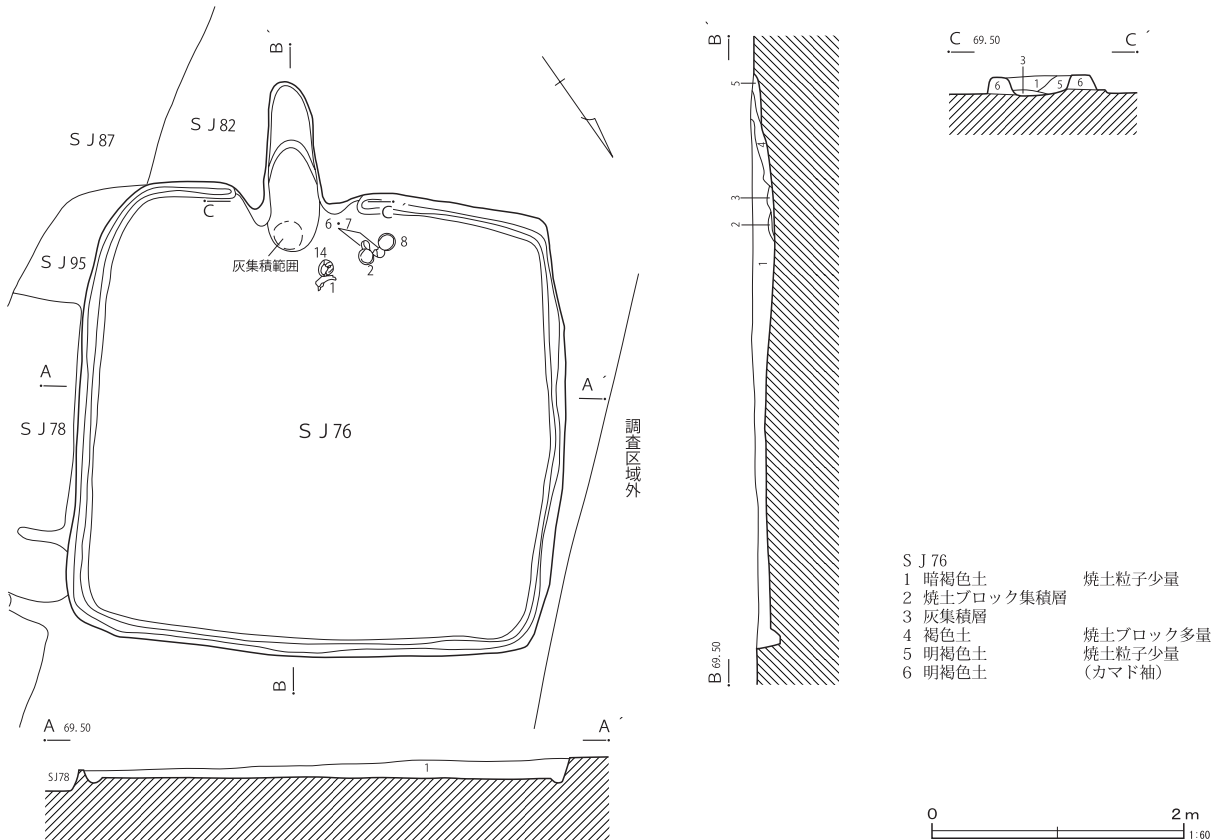
第76号住居跡（第170図）

第76号住居跡は調査区中央部北寄りのH・I-9・10グリッドに位置する。第78・82・87・95号住居跡と重複し、最も新しい。南カマドをもつ比較的小型の住居跡で、今回の調査では完掘することのできた数少ない例である。

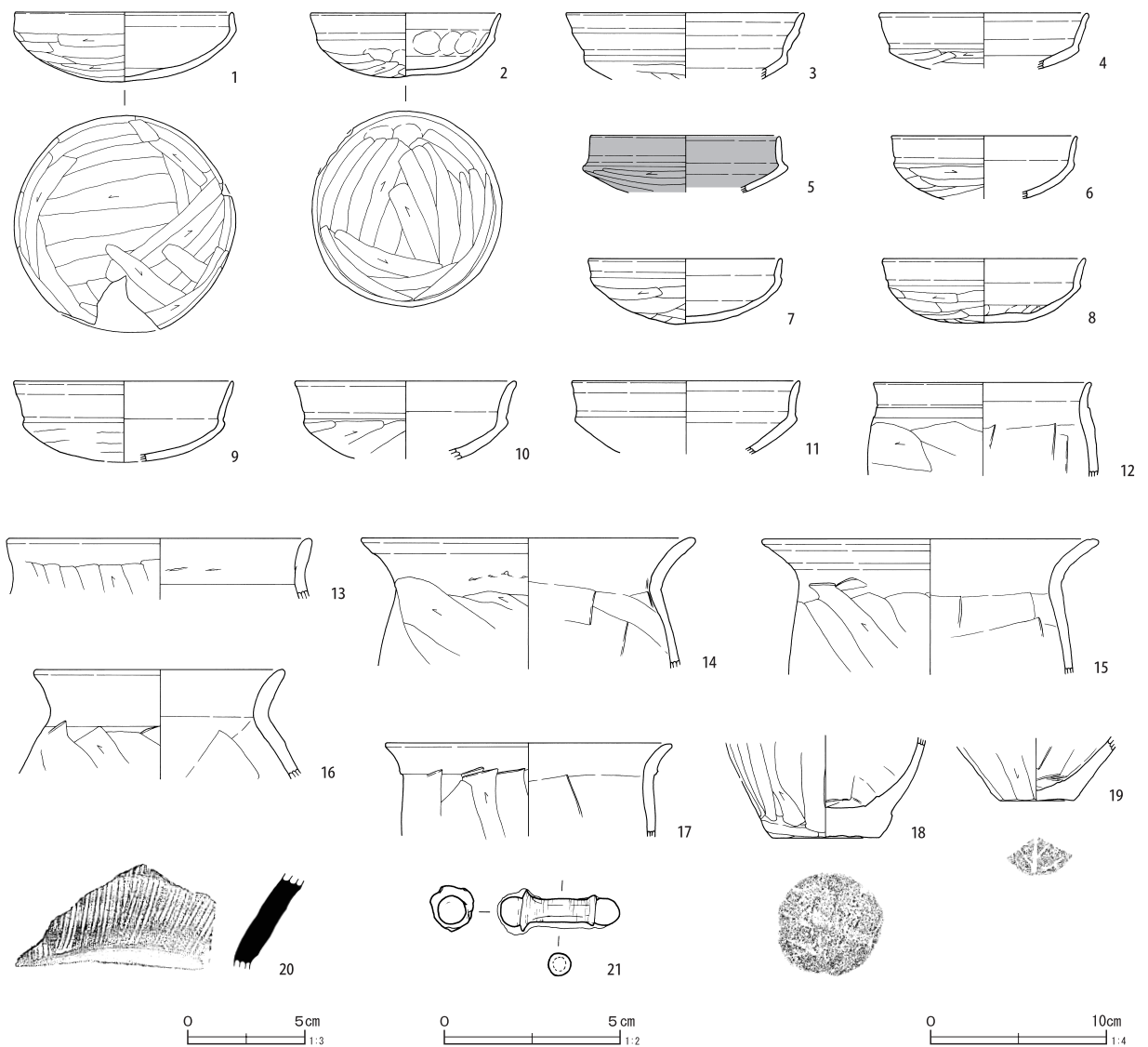
平面形は方形で、規模は長軸長3.83m、短軸長3.66m、深さ0.14mである。主軸方位はN-145°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は自然堆積を示し、暗褐色土を主体とする。

カマドは南西壁中央やや南寄りに設けられていた。燃烧部は壁を切り込で壁外に張り出し、緩やかに立ち上がりながら煙道部に続く。カマド袖部は黄褐色土によって構築され、内壁面は被熱により赤変していた。全長1.35m、カマド袖幅1.25m、深さ0.16m、燃烧部長0.90m、燃烧部底面幅0.35m、煙道部長0.45mである。燃烧部底面には火床面と



第170図 第76号住居跡



第171図 第76号住居跡出土遺物

第60表 第76号住居跡出土遺物観察表 (第171図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	12.3	3.9	—	ACEHI	90	普通	橙	外面黒斑 No.1	72-6
2	土師器	坏	10.8	3.6	—	CEHI	100	良好	橙	外面黒斑 No.3	72-7
3	土師器	坏	(13.6)	3.7	—	CEHI	15	普通	にぶい橙		
4	土師器	坏	(11.8)	3.1	—	CEHI	10	良好	明赤褐		
5	土師器	坏	(10.6)	3.0	—	ACHI	25	普通	明赤褐	内外面黒色処理	
6	土師器	坏	(10.5)	3.5	—	ACEHI	25	普通	橙	No.4	
7	土師器	坏	11.0	3.6	—	AEHIK	100	普通	橙	No.4	73-1
8	土師器	坏	11.4	3.6	—	ACEHI	100	普通	橙	No.5	73-2
9	土師器	坏	(12.5)	4.5	—	CHI	30	普通	橙		
10	土師器	坏	(12.5)	4.4	—	ACHI	20	普通	橙		
11	土師器	坏	(12.9)	4.1	—	HI	20	普通	橙		
12	土師器	小型甕	12.2	5.3	—	ABCEHI	20	普通	明赤褐		
13	土師器	甕	(17.0)	3.4	—	BCEHL	15	普通	橙		
14	土師器	甕	(19.0)	7.3	—	ACHI	30	良好	橙	No.2	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
15	土師器	甕	(19.0)	7.6	—	C E H I	20	普通	にぶい黄橙	カマド 底部木葉痕 底部木葉痕	
16	土師器	甕	(14.1)	6.1	—	A B E G H	10	良好	にぶい褐		
17	土師器	甕	(16.2)	5.3	—	B C E G H I	10	普通	橙		
18	土師器	甕	—	5.6	6.1	B C E H I	80	普通	明赤褐		
19	土師器	甕	—	3.5	(4.2)	A C E H I	25	普通	明赤褐		
20	須恵器	甕	—	3.9	—	H I	5	不良	にぶい黄橙		
21	鉄製品	弓金具	長さ3.4cm 頭径0.8cm								89-8

灰の集積層が確認された。

ピット、貯蔵穴等は検出されなかった。壁溝はほぼ全周して巡り、幅10～20cm、深さ6cmほどである。

出土遺物は土師器坏・小型甕・甕、須恵器甕、弓金具がある(第171図)。カマド右前方から1の坏、14の甕口縁部、少し離れた位置から2・6～8の坏が並んで出土した。

口径10～11cm台の小型化した坏蓋模倣坏、有段口縁坏が主体を占める。1の坏は口縁部が僅かに内屈しており、北武蔵型坏の祖形と言える。甕は口縁部に最大径をもち、胴部上半部を斜めにヘラケズリする新出タイプのものである。21は弓弮部分に留めた弓金具で、所謂「両頭金具」である。円筒形の金具の中にマッチ棒のような棒状品を挿し込み、片側を叩き、かしたものである。円筒金具の両端は花卉状に切り開く。

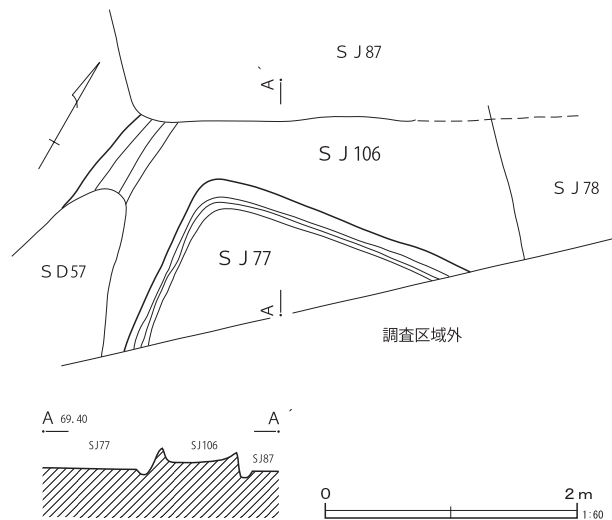
住居跡の時期は、小型化した坏蓋模倣坏と有段口縁坏が共伴する段階であることから、7世紀中葉に位置づけられる。

第77号住居跡(第172図)

第77号住居跡は調査区中央部北寄りのI-10グリッドに位置する。第106号住居跡と重複するほか、周囲には第78・87号住居跡や第57号溝跡が近接する。住居跡の北西隅部付近を検出しただけで、住居跡の大半が調査区域外に延びる。

平面形は不明であるが、方形系と推定される。残存規模は、長軸長2.10m、短軸長1.43m、深さ0.22mである。主軸方位はN-9°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。壁際に壁溝を巡らし、



第172図 第77・106号住居跡

幅20cm、深さ5cmほどである。ピット等は検出されなかった。

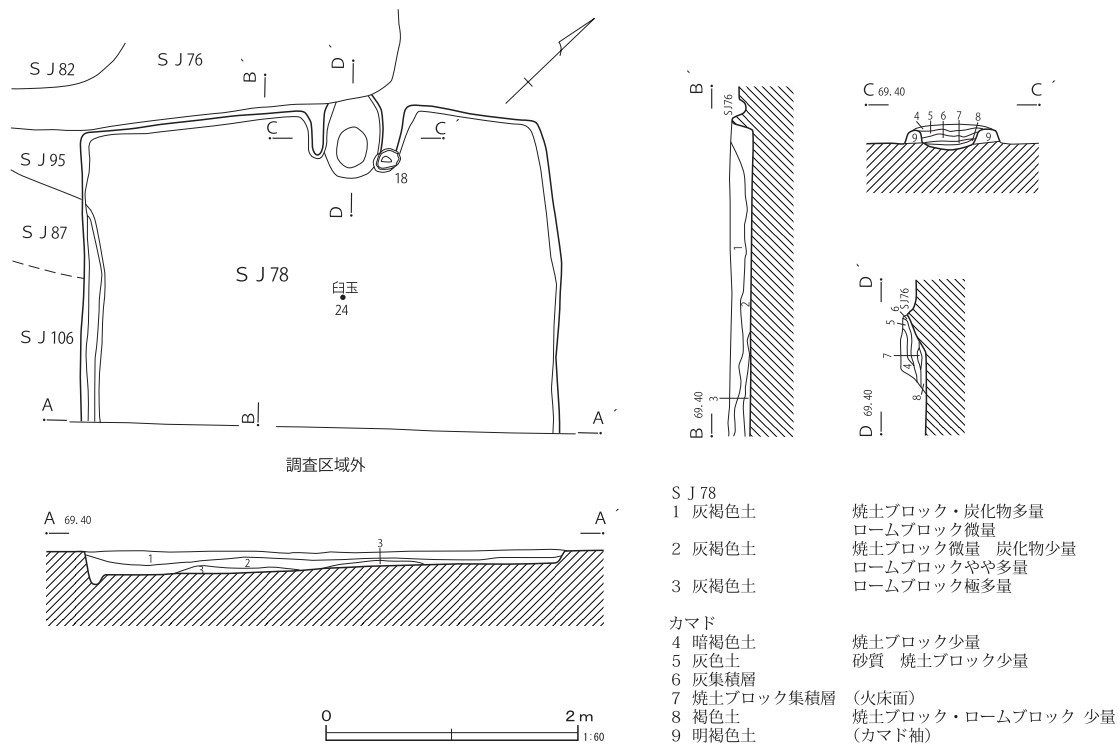
住居跡の時期については出土遺物がなく明確にし得ないが、遺構の重複関係から古墳時代後期に位置づけておきたい。

第78号住居跡(第173図)

第78号住居跡は調査区中央部北寄りのH・I-10グリッドに位置する。第76・83・87・95・106号住居跡と重複し、このうち第76号住居跡に切られるほかは、すべての住居跡を切っている。住居跡南東部は調査区域外に延びているため、全容は不明である。

平面形は方形と推定される。残存規模は長軸長3.73m、短軸長2.56m、深さ0.11mである。主軸方位はN-45°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は3層に分層で、



第173図 第78号住居跡

灰褐色土を主体とする。第1層に多量の焼土ブロック・炭化物を混入していることから人為的な埋め戻しも考えられる。

カマドは北西壁の中央やや北寄りに設けられていた。燃烧部は壁を僅かに切り込んでいる。煙道部は第76号住居跡によって削平されているため判然としないが、壁外に長く延びるタイプであろう。残存部の長さ0.65m、カマド袖幅0.80m、深さ0.20m、燃烧部長0.40m、燃烧部底面幅0.24mである。

カマド埋土は第6層が使用面、第7層が火床面に相当する。カマド袖は明褐色土によって構築され、右袖部の先端には長胴甕(18)を逆位に埋設し、焚口部の補強材としていた。

ピット、貯蔵穴等の付属施設は検出されなかった。壁溝は西壁のみに巡らしていた。規模は幅14~17cm、深さ7cmほどである。

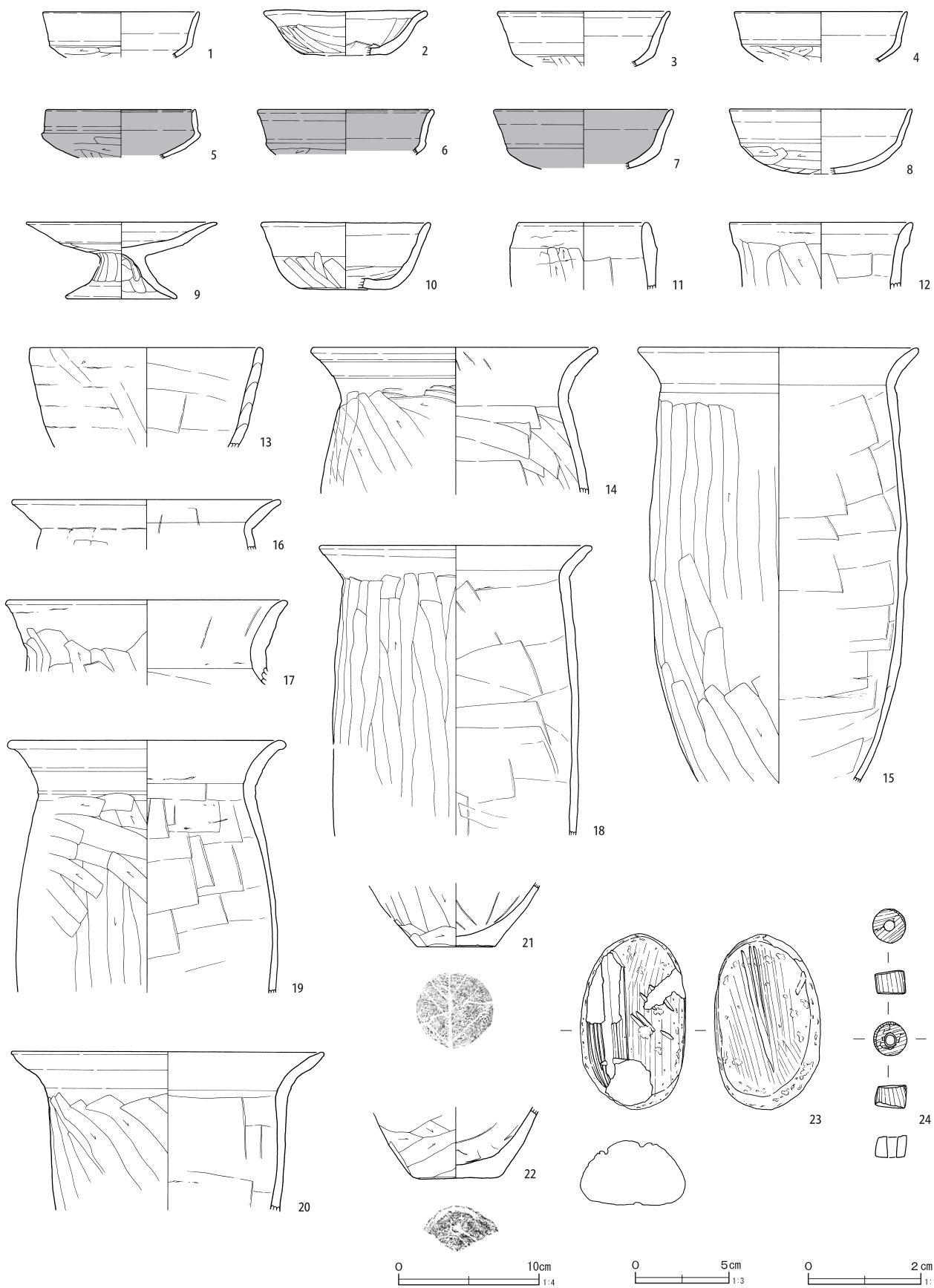
出土遺物は土師器・坏・埴・高坏・鉢・甕、砥石、白玉等がある(第174図)。カマド右袖に補強材として18の甕が使用されていたほか、住居跡中央の

床直から24の白玉が出土した。

坏・埴類は、2・10の平底のものを除くと、坏蓋模倣坏が主体を占め、僅かに5の坏身模倣坏が1点伴う。坏蓋模倣坏は口縁部が外反する口径11~12cm台のものに、黒色処理した口径12cm台の有段口縁坏が少量伴う器種組成である。9は低脚高坏で坏部は皿形に近い。11~13は鉢としたもので、口縁部形態にバラエティーが見られる。11は直立気味、12は口縁部が肥厚し、外反する、13は直線的に開く。甕は口縁部に最大径をもち、胴部の張りの小さいものが主体である。胴部外面を縦ヘラケズリするものが基本であるが、19は胴部上半に横方向のヘラケズリ、20は斜め方向のヘラケズリを施す。21・22の底部には木葉痕が残る。

23は安山岩製の砥石である。表・裏面に刃砥ぎ状の擦痕が残る。24は滑石製白玉である。円筒形を呈し、丁寧に研磨を施す。

住居跡の時期は、小型化の進行した模倣坏が主体を占めていることから6世紀末葉から7世紀初頭に位置づけられる。



第174図 第78号住居跡出土遺物

第61表 第78号住居跡出土遺物観察表 (第174図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版	
1	土師器	坏	(11.0)	3.2	—	H I	20	普通	橙			
2	土師器	坏	(11.5)	3.1	(6.2)	C E H I	25	普通	灰黄褐			
3	土師器	坏	(12.2)	3.8	—	C E H I	20	普通	橙			
4	土師器	坏	(12.2)	3.5	—	A H I	15	不良	橙			
5	土師器	坏	(10.5)	3.4	—	A C E H I	10	良好	赤褐	内外面黒色処理		
6	土師器	坏	(12.4)	3.1	—	C E H I	30	普通	にぶい黄橙	内外面黒色処理		
7	土師器	坏	(12.6)	4.1	—	A H I	15	普通	橙	内外面黒色処理		
8	土師器	坏	(13.0)	4.5	—	A E H I	30	普通	橙			
9	土師器	高坏	(13.6)	5.4	8.0	C E H I	40	普通	橙	I 10G-13	73-3	
10	土師器	壺	(11.8)	4.6	(6.6)	A C E H I	20	普通	暗赤褐			
11	土師器	鉢	(9.0)	4.8	—	B C E H I	10	普通	暗褐			
12	土師器	鉢	(13.0)	4.7	—	B C H I	25	普通	にぶい橙			
13	土師器	鉢	(16.6)	7.1	—	C E G H I L	10	普通	明褐			
14	土師器	甕	(20.8)	10.4	—	C E G H I	20	良好	橙	内外面煤付着		
15	土師器	甕	(19.8)	30.9	—	B C H I L	20	普通	橙	カマド		
16	土師器	甕	(19.0)	3.5	—	B C E H I	15	普通	橙			
17	土師器	甕	(19.6)	6.0	—	A B C E H I	40	普通	にぶい赤褐			
18	土師器	甕	19.2	20.5	—	B C H I L	80	普通	橙	カマドNo 1	73-4	
19	土師器	甕	19.3	17.9	—	C E H I	30	普通	褐灰		73-5	
20	土師器	甕	(22.2)	11.3	—	A C E G H I	45	普通	にぶい赤褐	外面黒斑 I 10G-15		
21	土師器	甕	—	4.5	5.6	A B C E H I L	80	普通	橙	底部木葉痕 カマド		
22	土師器	甕	—	4.9	(6.0)	A B C E H I	25	普通	明赤褐	底部木葉痕		
23	石製品	砥石	長さ9.3cm 幅5.7cm 厚さ3.6cm 重さ133.68g				安山岩					91-9
24	石製品	白玉	長さ0.6cm 幅0.6cm 厚さ0.4cm 重さ0.22g				滑石	No 1				88-9

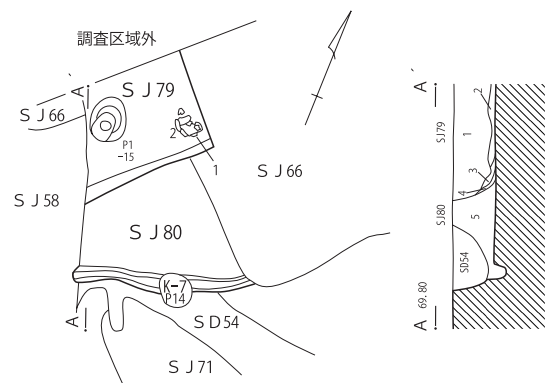
第79号住居跡 (第175図)

第79号住居跡は調査区中央部南寄りのK-7グリッドに位置する。第58・66・80号住居跡との重複が著しい。五領期と考えられる第80号住居跡と第58号住居跡を切り、第66号住居跡に切られる。住居跡の大半が調査区域外に延びており、南東壁の一部を検出したにすぎない。

平面形は不明である。残存規模は長軸長1.02m、短軸長0.90m、深さ0.33mである。主軸方位はN-44°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は4層に分層され、褐色土を主体とする。ピットは1本検出され、住居跡に伴うかは不明である。壁溝はない。

出土遺物は土師器甕がある (第176図)。南東壁際から1・2の甕が、床面から10cm以上浮いた状態で出土した。1は口縁部が緩やかに外反する。2は口縁部に最大径をもつ長胴甕である。

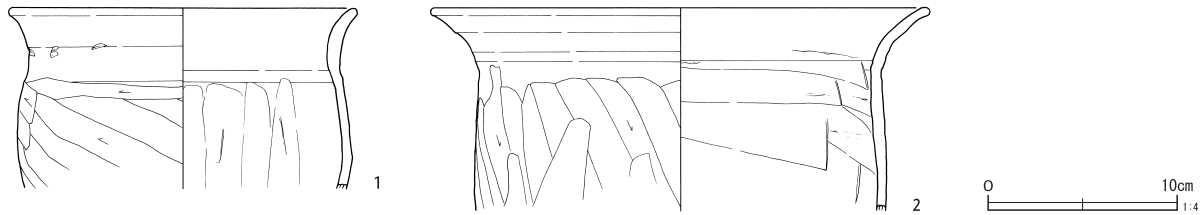


- S J 79
- 1 褐色土 焼土粒子・ローム粒子少量
- 2 褐色土 ロームブロック多量
- 3 ロームブロック集積層
- 4 褐色土 ロームブロック多量
- S J 80
- 5 褐色土 焼土ブロック少量 ロームブロック多量



第175図 第79・80号住居跡

住居跡の時期は、遺構の重複関係から6世紀中葉に位置づけられる。



第176図 第79号住居跡出土遺物

第62表 第79号住居跡出土遺物観察表 (第176図)

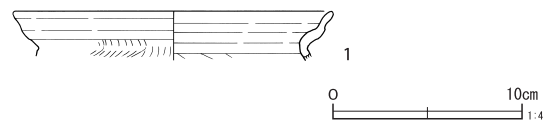
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	18.1	9.5	—	BCEHIL	70	普通	にぶい赤褐	内外面煤付着 No.1 SJ66	
2	土師器	甕	(26.0)	10.7	—	CHI	30	普通	にぶい橙	No.1	

第80号住居跡 (第175図)

第80号住居跡は調査区中央部南寄りのK-7グリッドに位置する。第58・66・71・79号住居跡、第54号溝跡と重複する。五領期の第71号住居跡との先後関係は明確でないが、他の住居跡にはすべて切られる。住居跡の大半が調査区域外に延びており、南壁の一部を検出しただけである。

平面形は不明である。残存規模は長軸長1.28m、短軸長1.02m、深さ0.31mである。主軸方位はN-21°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は褐色土の単一層



第177図 第80号住居跡出土遺物

である。貯蔵穴、ピット等は検出されなかったが、壁際に壁溝が巡る。規模は幅7~15cm、深さ11cmほどである。

出土遺物は少ない。土師器S字状口縁台付甕の口縁部片のみである (第177図)。

住居跡の時期は、遺構の重複関係から古墳時代前期の五領期の所産と考えられる。

第63表 第80号住居跡出土遺物観察表 (第177図)

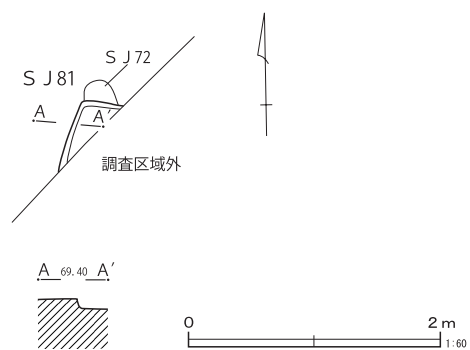
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	台付甕	(16.8)	2.6	—	ACHI	5	普通	にぶい黄橙	S字甕	

第81号住居跡 (第178図)

第81号住居跡は調査区中央部のK-8グリッドに位置する。第70・72号住居跡と重複し、五領期の第70号住居跡を切り、第72号住居に切られる。住居跡の北西隅部のみを検出し、住居跡の大半は調査区域外に存在する。

平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長0.61m、短軸長0.30m、深さ0.04mである。主軸方位はN-22°-Eを指す。

床面は概ね平坦である。検出された床面部分には、貯蔵穴、ピット、壁溝等の付属施設は検出されなかった。



第178図 第81号住居跡

出土遺物がまったくなく、住居跡の時期は不明である。しかし、遺構の重複関係から判断して古墳時代後期に位置づけられる。

第82号住居跡 (第179図)

第82号住居跡は調査区中央部のH-9、I-9・10グリッドに位置する。第62・76・87・95号住居跡との重複が著しい。北東側に位置する第76号住居跡に切られるほかは、すべての住居跡を切っている。住居跡の北西側大半が調査区域外に延びており、全容は不明である。

平面形は方形と推定される。残存規模は長軸長6.54m、短軸長3.82m、深さ0.30mである。主軸方位はN-34-Wを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は6層に分層される。概ね自然堆積を示しているが、南東壁際に焼土ブロックを多量に含む灰集積層(第6層)が確認されている。また、調査区際の埋土上層に拳大の円礫が一括廃棄されていた。

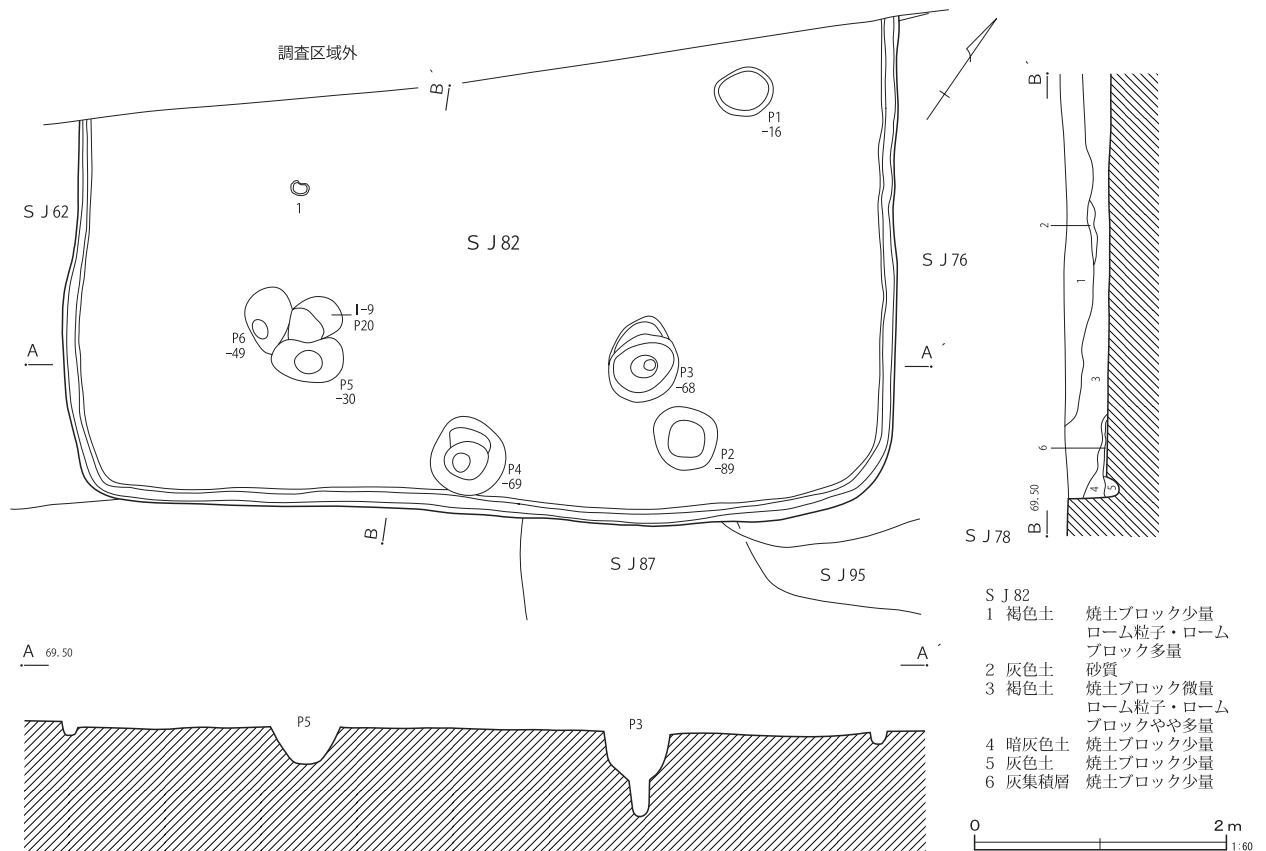
ピットは6本検出された。配置の規則性から見てP3・P5は支柱穴と考えられる。柱間距離は2.65mを測る。また、P6もP5に接しているこ

とから、建て替え時における柱穴の可能性はある。南東壁際のP2・P4の2本も出入口部に関わる可能性がある。壁溝は全周し、幅9~17cm、深さ12cmほどである。

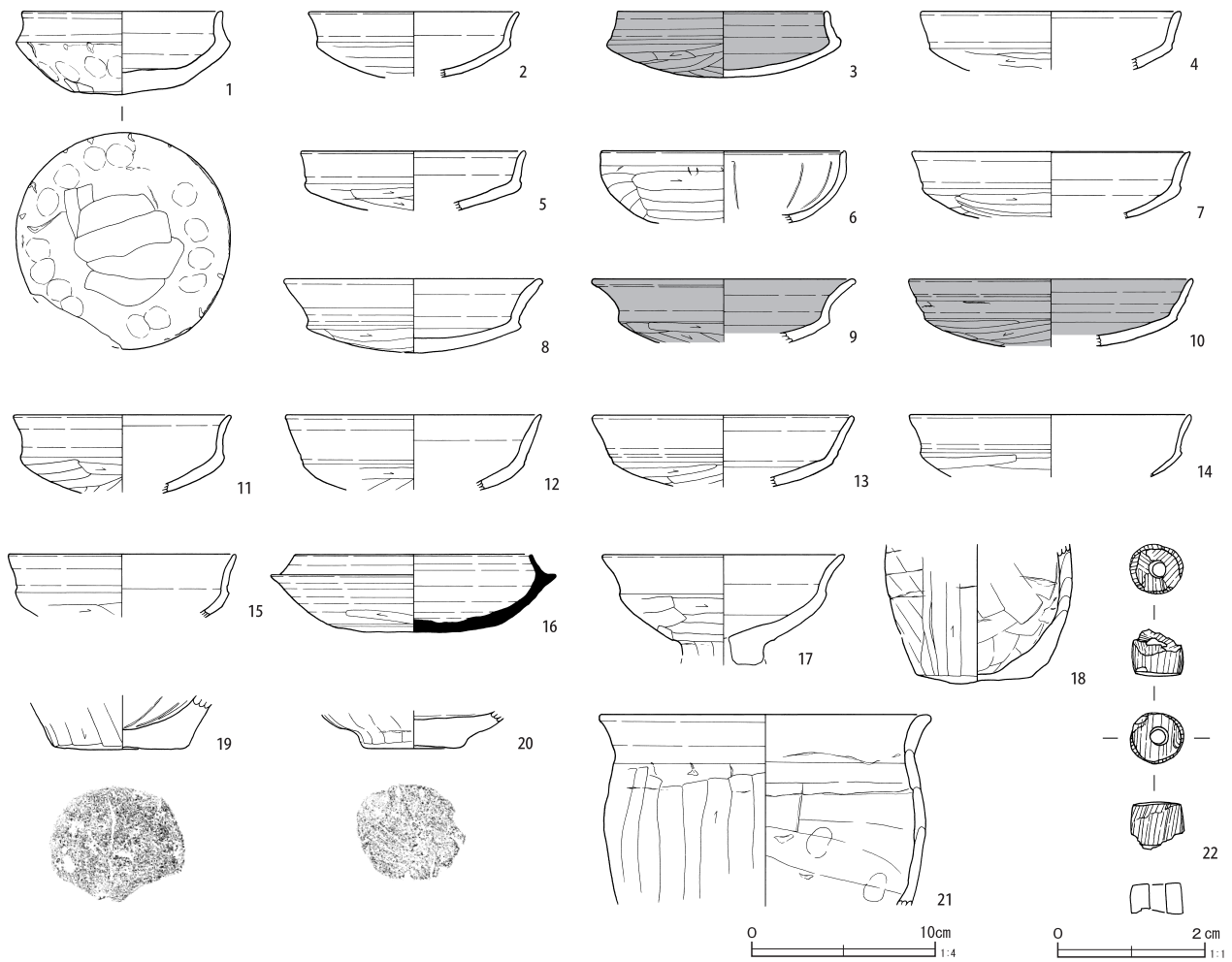
出土遺物は土師器坏・高坏・鉢・甕・壺、須恵器坏身、白玉等がある(第180図)。1の坏は中央部西寄りの床直から出土した。平底の底部で体部に指頭圧痕を明瞭に残す。この他は坏蓋模倣坏を主体に、3の坏身模倣坏と6の丸底の坏が伴う。坏蓋模倣坏は有段口縁坏と口縁部が大きく外反するものに二分される。さらに後者は口径11~12cm台と13~14cm台に細分される。16の須恵器坏身は体部が浅く、TK209型式併行期のものであろう。

22は滑石製白玉である。円筒形を呈し、整形・研磨はやや粗雑である。

住居跡の時期は、模倣坏に小型と大型のものが見られることから6世紀後葉から末葉を中心に位置づけられる。



第179図 第82号住居跡



第180図 第82号住居跡出土遺物

第64表 第82号住居跡出土遺物観察表 (第180図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(10.8)	4.5	—	ABCEHIL	90	普通	橙	外面黒斑 No.1	73-6
2	土師器	坏	(11.4)	3.5	—	ACEHI	15	普通	橙	トレンチ	
3	土師器	坏	11.3	3.5	—	ACHI	50	普通	にぶい橙	内外面黒色処理 No.2・4	73-7
4	土師器	坏	(14.2)	3.2	—	CEHI	15	普通	にぶい黄橙		
5	土師器	坏	(12.1)	3.2	—	ACEHI	15	普通	橙	外面黒斑	
6	土師器	坏	(13.2)	3.9	—	ACEHI	30	普通	橙		
7	土師器	坏	(15.0)	3.6	—	ACEHI	25	普通	明赤褐	外面黒斑	
8	土師器	坏	(13.7)	4.0	—	ABCEHI	30	普通	にぶい橙	No.3	
9	土師器	坏	(14.2)	3.4	—	BCEHIL	30	普通	にぶい褐	内外面黒色処理 No.4	
10	土師器	坏	(15.4)	3.6	—	CEHI	25	普通	にぶい黄橙	内外面黒色処理 P2	
11	土師器	坏	(11.8)	4.2	—	ACHI	20	普通	橙		
12	土師器	坏	(13.9)	4.0	—	ACEGHI	10	普通	橙	No.3	
13	土師器	坏	(14.1)	3.9	—	ACHI	20	普通	橙		
14	土師器	坏	(15.2)	3.3	—	CEHI	20	普通	橙	No.3	
15	土師器	坏	(12.3)	3.4	—	ACHI	10	普通	橙	トレンチ	
16	須恵器	坏身	(12.8)	4.1	—	CEHI	40	普通	灰	内面にぶい橙 トレンチ	73-8
17	土師器	高坏	(13.2)	6.0	—	ABCEHI	15	普通	橙		
18	土師器	鉢	—	7.6	6.3	CEHI	50	普通	橙		

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
19	土師器	甕	—	2.9	7.4	BEH I J K L	40	普通	橙	底部木葉痕 底部木葉痕 No 2	88-10
20	土師器	壺	—	2.0	CEHI	80	普通	橙			
21	土師器	甕	(17.6)	10.4	CEHI	10	普通	橙			
22	石製品	白玉	長さ0.7cm 幅0.8cm 厚さ0.6cm 重さ0.39g				滑石	No 1			

第83号住居跡 (第181図)

第83号住居跡は調査区中央部北寄りのH・I-10グリッドに位置する。第78・95・105号住居跡と重複し、住居跡の西側を第78・95号住居跡に切られ、北側の第105号住居跡を切る。住居跡の南東側は調査区域外に延びているため、全容は不明である。

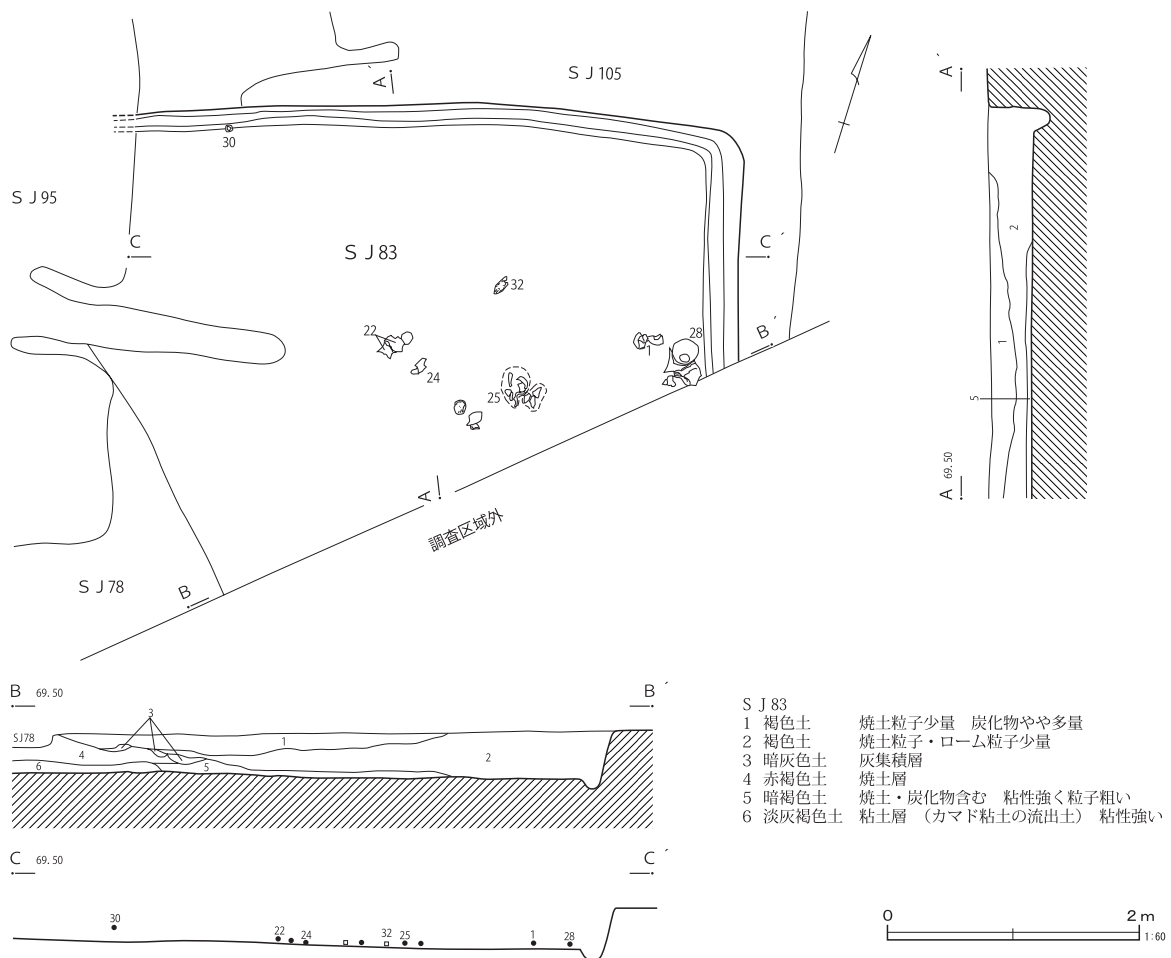
平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長4.76m、短軸長3.81m、深さ0.36mである。主

軸方位はN-16°-Wを指す。

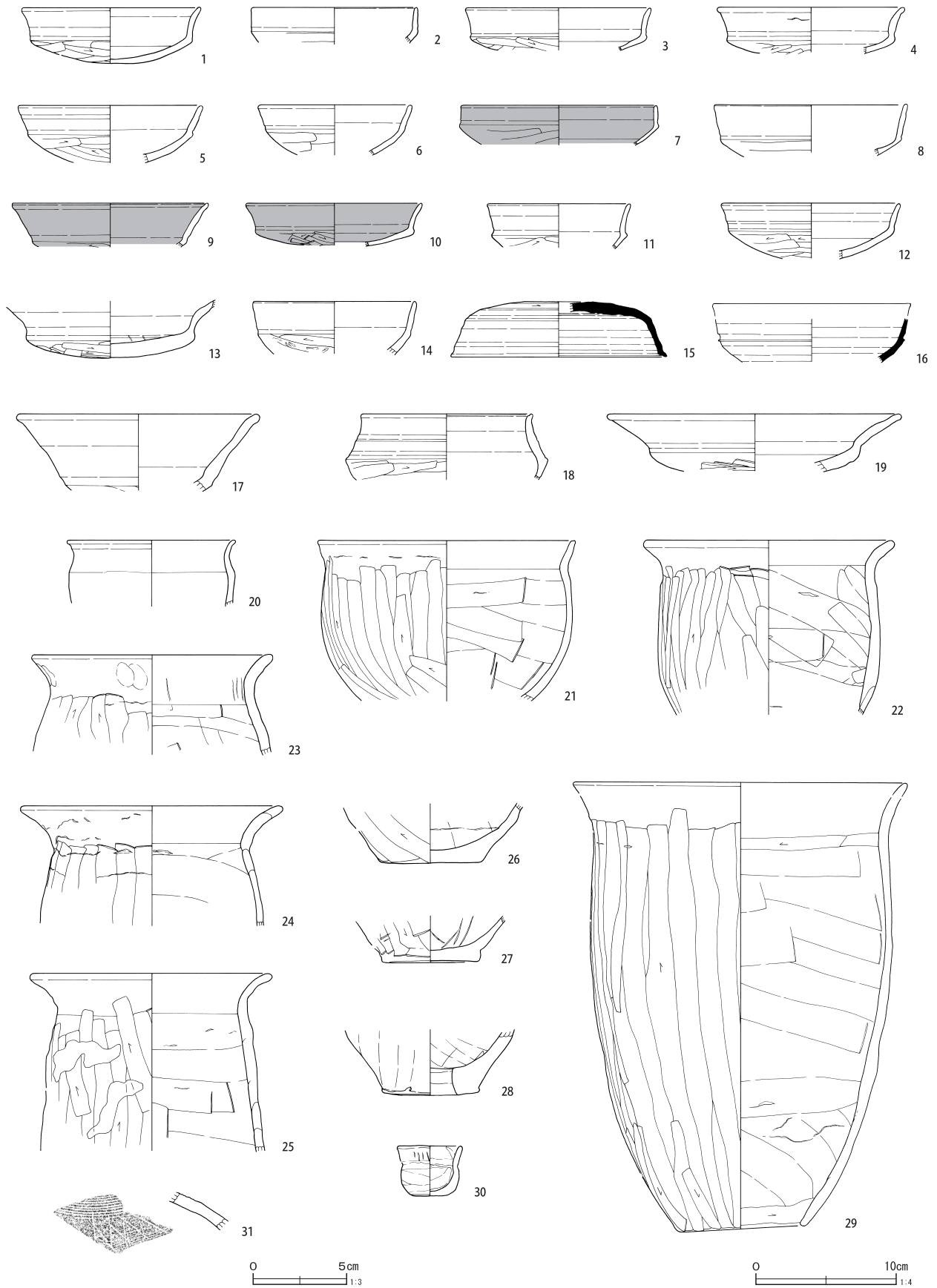
床面は概ね平坦である。埋土は6層に分層される。住居跡の南西側を中心に灰集積層や焼土層が見られ、人為的な埋め戻しの可能性がある。

貯蔵穴、ピット等の付属施設は検出されなかった。壁溝は全周し、幅14~30cm、深さ12cmほどである。

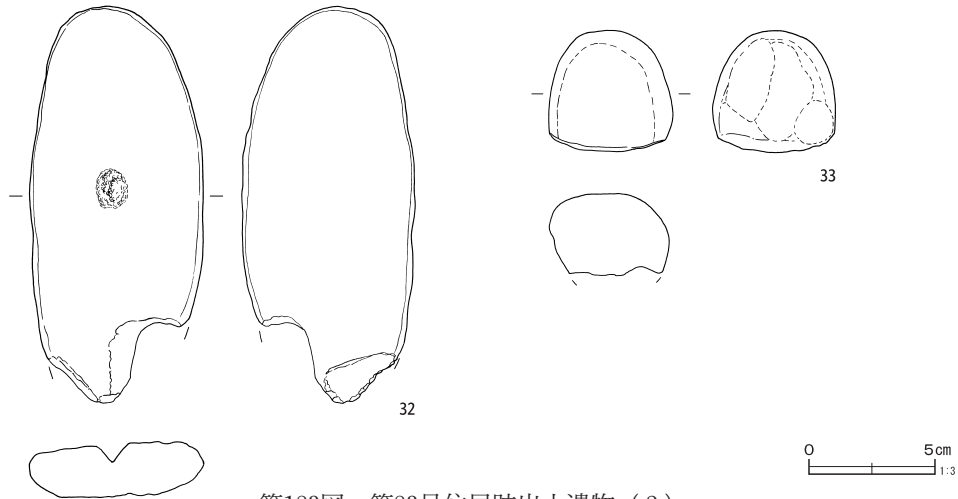
出土遺物は土師器杯・皿・高坏・鉢・小型甕・甕・甗・ミニチュア、須恵器坏蓋・無蓋高坏、凹



第181図 第83号住居跡



第182図 第83号住居跡出土遺物（1）



第183図 第83号住居跡出土遺物（2）

第65表 第83号住居跡出土遺物観察表（第182・183図）

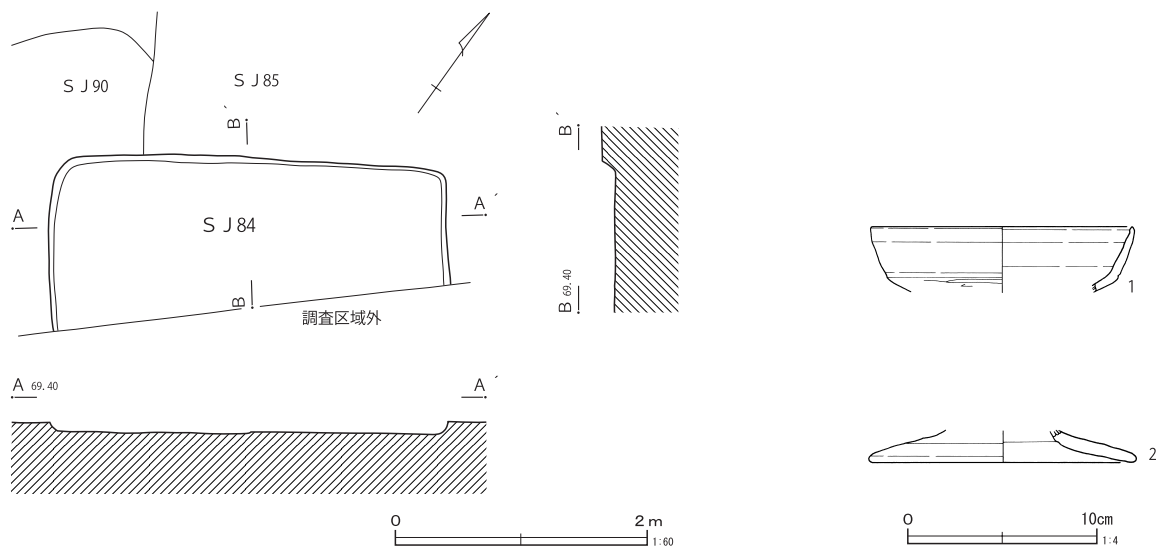
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版	
1	土師器	坏	(12.6)	3.9	—	ACEHI	50	普通	橙	内面黒色 No.10	74-1	
2	土師器	坏	(11.6)	2.5	—	AE	10	普通	橙			
3	土師器	坏	(13.2)	3.0	—	ACHI	25	良好	橙	外面黒斑		
4	土師器	坏	(13.3)	3.2	—	ACEHI	15	普通	明赤褐			
5	土師器	坏	(13.0)	4.0	—	ACHI	25	普通	橙			
6	土師器	坏	(10.8)	3.5	—	AHI	15	普通	橙			
7	土師器	坏	(13.9)	2.8	—	AEHI	15	普通	明赤褐	内外面黒色処理		
8	土師器	坏	(13.6)	3.6	—	ACEHIL	15	普通	橙			
9	土師器	坏	(13.9)	3.1	—	ACHI	15	普通	褐	内外面黒色処理		
10	土師器	坏	(12.5)	3.0	—	ACHI	15	普通	橙	内外面黒色処理		
11	土師器	坏	(10.3)	3.1	—	ACHI	10	良好	にぶい褐			
12	土師器	坏	(12.7)	3.9	—	ACHI	20	普通	橙	No.15		
13	土師器	皿	—	4.0	(12.2)	ACEHI	30	普通	にぶい橙			
14	土師器	坏	(11.4)	3.7	—	ABCEHI	10	普通	橙			
15	須恵器	坏蓋	(15.4)	3.9	—	CEIJ	30	普通	灰	SJ95カマド I 9 G-50		
16	須恵器	高坏	—	3.1	—	IK	5	良好	灰	SJ88		
17	土師器	高坏	(17.0)	5.4	—	ACHI	15	普通	明赤褐	カマド		
18	土師器	坏	(12.1)	4.7	—	ACHI	15	普通	橙			
19	土師器	坏	(20.8)	4.1	—	AHI	5	普通	明赤褐			
20	土師器	鉢	(11.8)	4.6	—	AHI	5	普通	橙			
21	土師器	鉢	(18.3)	11.4	—	ACEHI	30	良好	橙	外面黒斑 No.14・15		
22	土師器	小型甕	(17.6)	12.4	—	ABCEHIL	30	良好	にぶい赤褐	外面黒斑 No.2		
23	土師器	甕	(17.0)	7.0	—	ABEHIL	40	普通	褐			
24	土師器	甕	(18.4)	8.5	—	ABEHIL	25	普通	明赤褐	No.4		
25	土師器	甕	16.9	12.5	—	ABCEHL	60	良好	明赤褐	No.7		
26	土師器	甕	—	4.1	7.2	BCEGHI	80	普通	橙	外面黒斑		
27	土師器	甕	—	3.2	7.0	CEHI	35	普通	にぶい褐			
28	土師器	甗	—	4.6	(6.8)	ACEHI	30	普通	橙	No.11		
29	土師器	甗	23.7	31.7	9.0	ACEHI	60	普通	橙	外面黒斑 No.12~15		
30	土師器	ミニチュア	(4.3)	3.5	2.7	ACHI	80	普通	橙	外面黒斑 No.1		
31	土師器	壺	—	1.9	—	CEHI	5	普通	橙			
32	石製品	凹石	長さ15.5cm 幅6.9cm 厚さ2.4cm 重さ346.54g						緑泥片岩		No.9	92-1
33	石製品	砥石	長さ4.8cm 幅5.0cm 厚さ3.5cm 重さ43.20g						安山岩			92-2

石、砥石等がある(第182・183図)。遺物は住居跡中央部から東壁にかけて出土した。中央部から22の小型甕と24の甕、東壁寄りの床面から25の甕と32の凹石、東壁際からは1の坏、28の甑がまとまって出土した。この他に北壁際の壁溝から30のミニチュアが出土した。

坏は住居跡の著しい重複を反映してか、時期差をもつ土器群が混在したあり方を示す。基本的には口径12~13cm台の坏蓋模倣坏を主体として、13・19の皿や18の口縁部が長く内傾する有段内屈口縁坏が定量で見られる段階に位置づけられる。長胴甕と大型甑のセットに小型甕や鉢が加わり、多様な器種組成を示す。30はミニチュアである。31は五領期の東海系の壺の胴部片である。横線文の間に鋸歯文を施文する。

32は緑泥片岩製の凹石である。用途、性格等については不明。縄文時代の所産であろう。33は安山岩製の砥石である。

住居跡の時期は、遺構の重複関係や坏蓋模倣坏の様相から6世紀後葉に位置づけられる。



第184図 第84号住居跡・出土遺物

第84号住居跡 (第184図)

第84号住居跡は調査区中央部北寄りのH-11グリッドに位置する。第85・90号住居跡と重複し、いずれよりも新しい。住居跡の南東部大半が調査区域外に延びており、全容は不明である。

平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長3.12m、短軸長1.35m、深さ0.10mである。主軸方位はN-34°-Wである。床面は概ね平坦である。貯蔵穴、ピット、壁溝等はなかった。

出土遺物は極めて少なく、土師器坏・高坏だけである(第184図)。1の坏は口径13.8cmの坏蓋模倣坏で、口縁部が外反して開く。2は高坏の脚部である。住居跡の時期は遺物が少なく明確でないが、遺構の重複関係や模倣坏の特徴から6世紀後葉に位置づけられる。

第85号住居跡 (第185図)

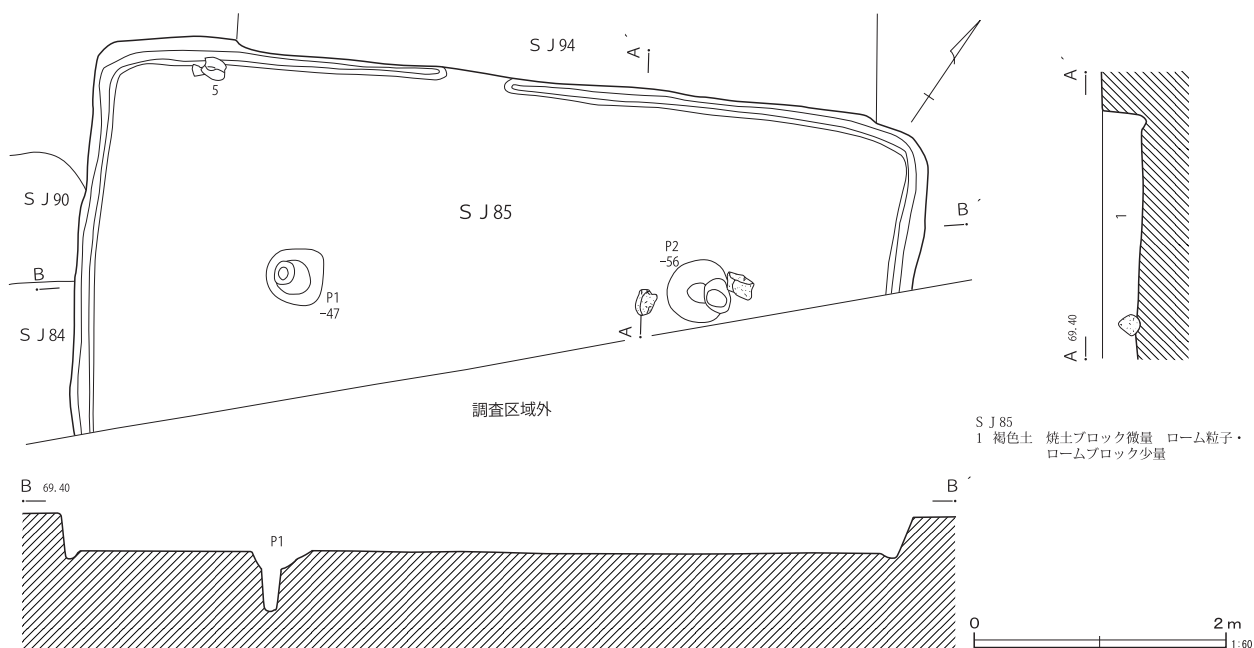
第85号住居跡は調査区中央部北寄りのH-11グリッドに位置する。第84・90・94号住居跡と重複する。五領期の第90・94号住居跡を切り、第84号住居跡に切られる。住居跡の南東部大半が調査

第66表 第84号住居跡出土遺物観察表 (第184図)

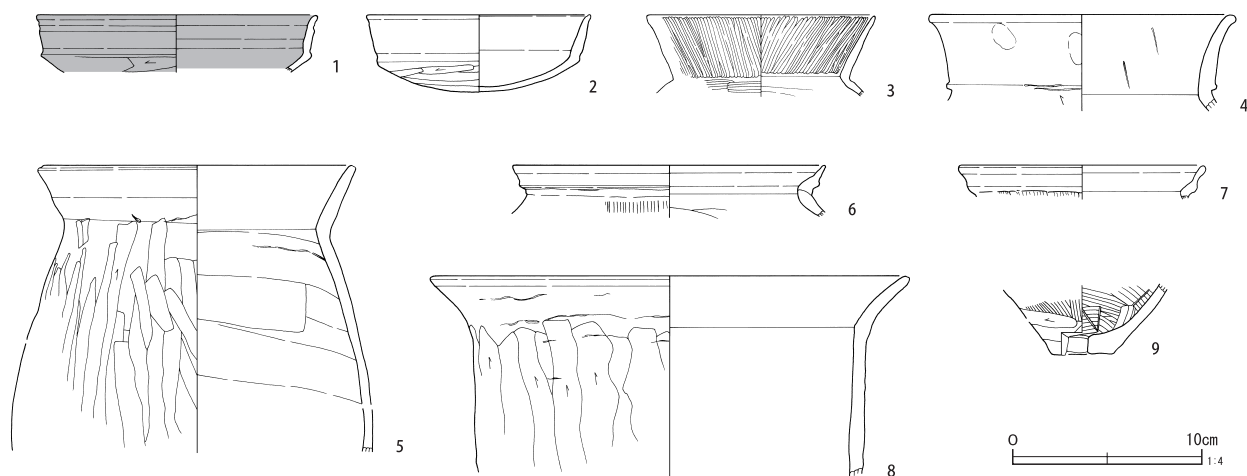
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(13.8)	3.4	—	A C E H I	5	普通	明赤褐		
2	土師器	高坏	—	1.6	(13.8)	A H I	15	普通	明赤褐		

区域外に延びているため全容は不明であるが、一辺6mを超える比較的大型の住居跡である。

平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長6.58m、短軸長3.08m、深さ0.30mである。主



第185図 第85号住居跡



第186図 第85号住居跡出土遺物

第67表 第85号住居跡出土遺物観察表 (第186図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	杯	(14.8)	2.9	—	ACEHI	15	普通	暗赤褐	内外面黒色処理	74-4
2	土師器	杯	11.8	4.0	—	CEHI	80	普通	橙		
3	土師器	埴	(12.6)	4.3	—	ACEHI	15	良好	橙		
4	土師器	甕	(16.0)	5.0	—	CEHI	5	普通	にぶい赤褐	P1	
5	土師器	甕	16.4	15.1	—	ACEHI	75	普通	橙	No. 1	
6	土師器	台付甕	(16.5)	2.7	—	ACEHI	10	普通	暗褐	S字甕	
7	土師器	台付甕	(13.0)	1.7	—	BCH	15	普通	にぶい黄橙	S字甕	
8	土師器	甕	(25.0)	10.5	—	ABCEHI	10	良好	橙		
9	土師器	甕	—	3.1	2.9	CEHI	80	普通	暗褐	外面黒斑	

軸方位はN-28°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は褐色土の単一層であり、自然堆積を示す。支柱穴となるピット2本を検出した。ピットの規模は、P1が長径0.45m、短径0.44m、深さ0.47m、P2が長径0.50m、短径0.50m、深さ0.56mである。柱間間隔は3.35mを測る。P2の両脇床面上には人頭大の円礫が置かれていた。

壁溝は北西壁の中央で途切れているが、ほぼ全周する。幅13~24cm、深さ7cmほどである。

出土遺物は土師器坏・埴・甕・台付甕・甗等がある(第186図)。5の甕が住居跡北西隅部の床面から少し浮いた状態で出土したほかは、大半が埋土中の出土である。埴・S字甕・鉢形甗等は重複する五領期の住居からの流れ込みである。本住居跡に伴う遺物としては2の模倣坏、5の長胴甕、8の大型甗が挙げられる。なお、2の有段口縁坏は小破片であり、時期的にも若干新相を示す。

住居跡の時期は、遺構の重複関係や土器の様相から6世紀前葉に位置づけられる。

第86号住居跡(欠番)

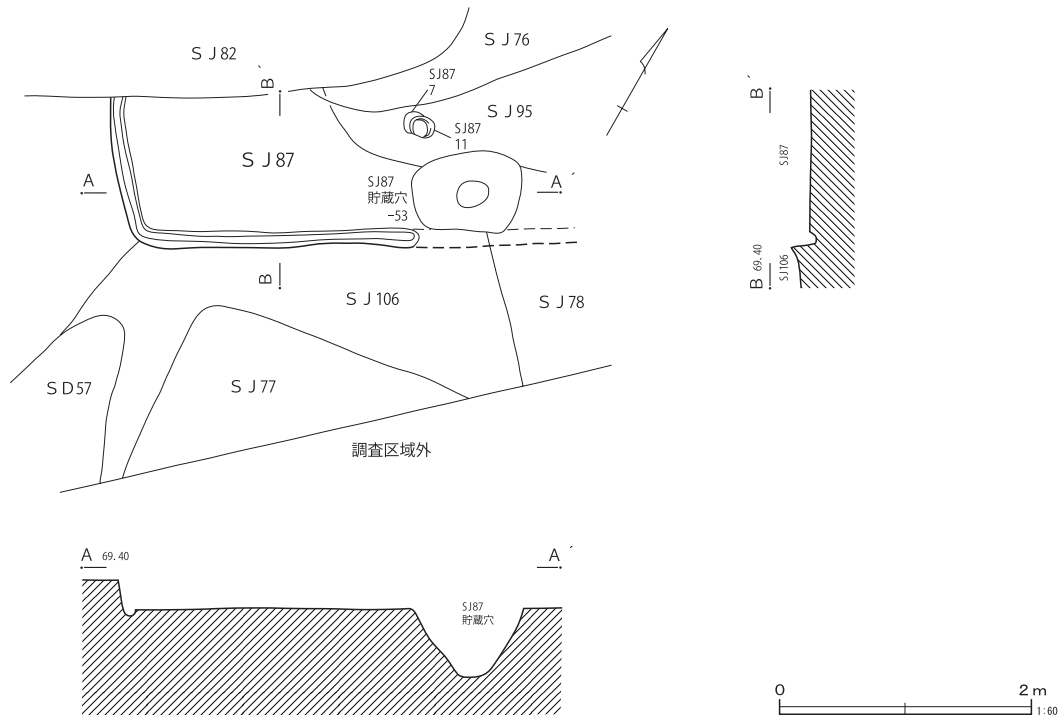
第87号住居跡(第187図)

第87号住居跡は調査区中央部北寄りのI-9・10グリッドに位置する。第76・78・82・95・106号住居跡との重複が著しい。五領期の第106号住居跡を切っているほかは、すべての住居跡に切られる。住居跡の南東壁から南西壁の一部を検出しただけで、全容は不明である。

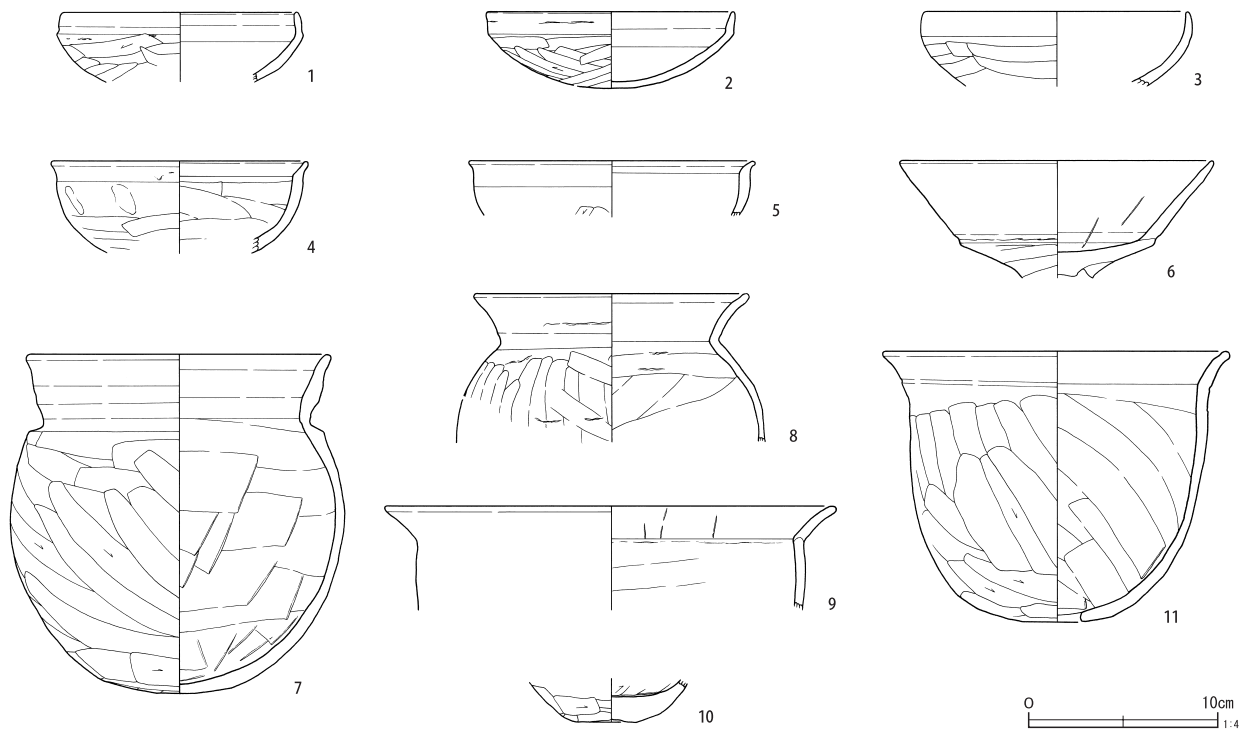
平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長2.74m、短軸長1.28m、深さ0.20mである。主軸方位はN-30°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。ピットは検出されなかったが、南東壁東寄りに貯蔵穴が検出された。平面不整楕円形で、長径0.86m、短径0.62m、深さ0.53mである。壁溝は確認された壁際をほぼ全周し、幅10~14cm、深さ5cmほどである。

出土遺物は少ないが、土師器坏・埴・高坏・小型甕・甕・甗等がある(第188図)。貯蔵穴から5の埴、8の小型甕、9の広口甕が出土した。なお、床直から7の小型甕と11の甗が重なった状態で



第187図 第87号住居跡



第188図 第87号住居跡出土遺物

第68表 第87号住居跡出土遺物観察表 (第188図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.3)	3.6	—	ACH I	20	普通	明赤褐		
2	土師器	坏	(13.0)	4.0	—	ACH I	25	普通	明赤褐		
3	土師器	坏	(13.8)	3.9	—	ACEHI	15	普通	橙		
4	土師器	埴	(13.5)	4.8	—	ACEHI	20	普通	橙		
5	土師器	埴	(14.9)	2.9	—	AH	5	普通	褐灰	内面にぶい黄橙 貯蔵穴	
6	土師器	高坏	(16.4)	6.1	—	ACH	25	普通	明赤褐		
7	土師器	小型甕	15.7	17.9	6.9	BCEGHI	100	普通	にぶい黄橙	底部外面黒斑 No.2	74-5
8	土師器	小型甕	14.4	7.8	—	ABCEGHI	60	普通	にぶい橙	貯蔵穴	
9	土師器	甕	(23.9)	5.4	—	ACEGHI	10	良好	明赤褐	貯蔵穴	
10	土師器	甕	—	2.2	3.2	CEH	70	普通	橙	内外面黒斑	
11	土師器	甕	18.0	14.1	3.2	BCEHIL	80	普通	橙	外面黒斑 No.1	74-6

出土している。しかし、遺構の重複関係を重視すれば、この2点は第95号住居跡に帰属するものと思われる。1・2の坏は須恵器坏蓋模倣坏であるが、定型化以前の形態で、所謂「源初坏」にあたる。3は半球形坏である。4・5の埴は内斜口縁坏に形態が似ている。

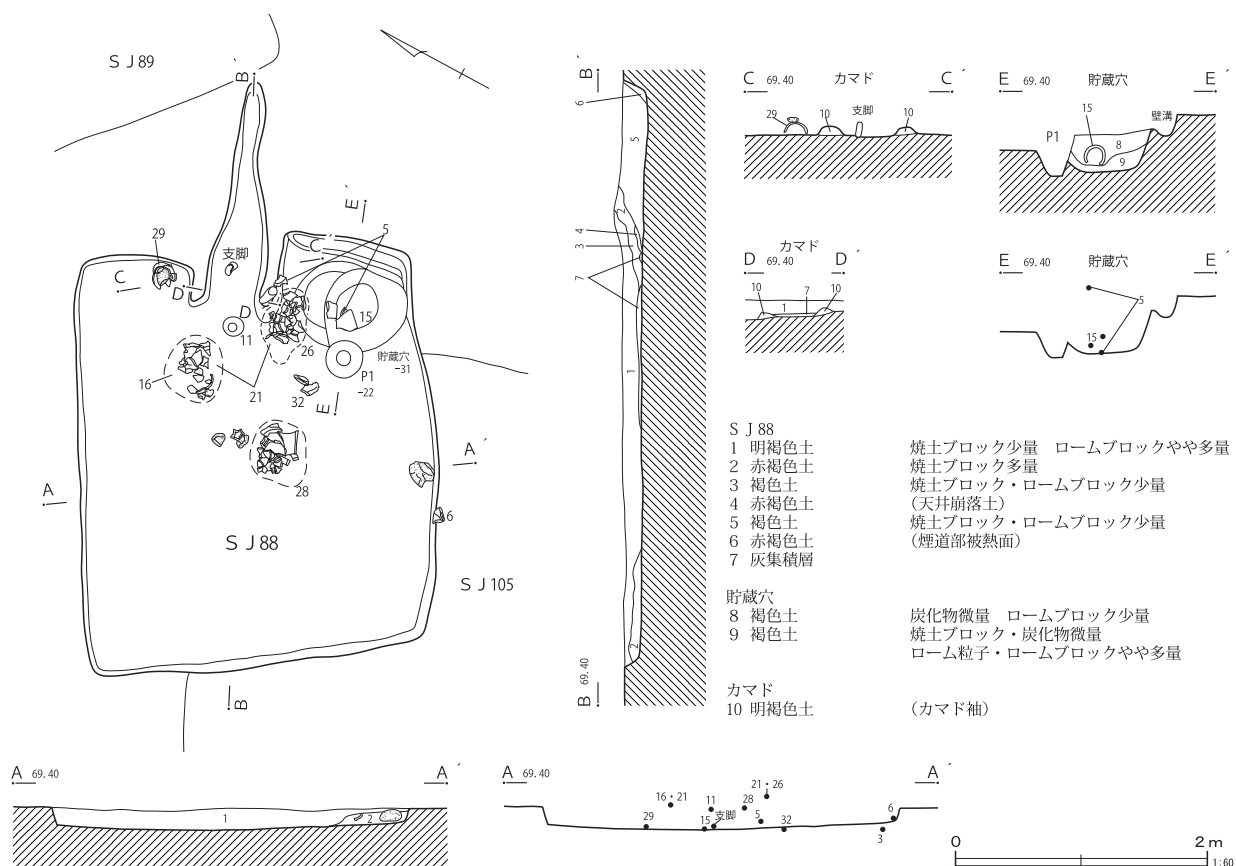
住居跡の時期は坏・埴類が模倣坏定型化以前の様相を示すことから、5世紀後葉に位置づけられる。

第88号住居跡 (第189図)

第88号住居跡は調査区中央部北寄りのH-10グリッドに位置する。住居跡の南西側で第105号住居跡と重複し、それを切っている。

カマドを北東壁にもつ比較的小型の住居跡である。平面形はやや歪んだ長方形を呈する。規模は長軸長3.30m、短軸長2.82m、深さ0.20mである。主軸方位はN-60°-Eを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は明褐色土を主体



としているが、壁際の第1次堆積土中（第2層）に焼土ブロックが多量に含まれており、人為的な埋め戻しも考えられる。

カマドは北東壁のほぼ中央に設けられていた。カマドの主軸方位はN-66°-Eを指し、住居跡の主軸より若干東に振れている。燃焼部が壁を切り込み、煙道部がほぼ水平に壁外に延びるタイプである。全長1.85m、カマド袖幅0.75m、深さ0.20m、燃焼部長0.70m、燃焼部底面幅0.38m、煙道部長1.15mである。

カマド埋土は第2・4層が天井崩落土、第6層が煙道部被熱面、第7層が使用面にあたる。燃焼部の掘り込みはほとんどなく、燃焼部底面の中央やや左寄りに棒状礫を用いた支脚が検出された。カマド袖部は明褐色土によって構築され、内壁面は良く焼けていた。

貯蔵穴はカマド右脇の北東隅部に検出された。

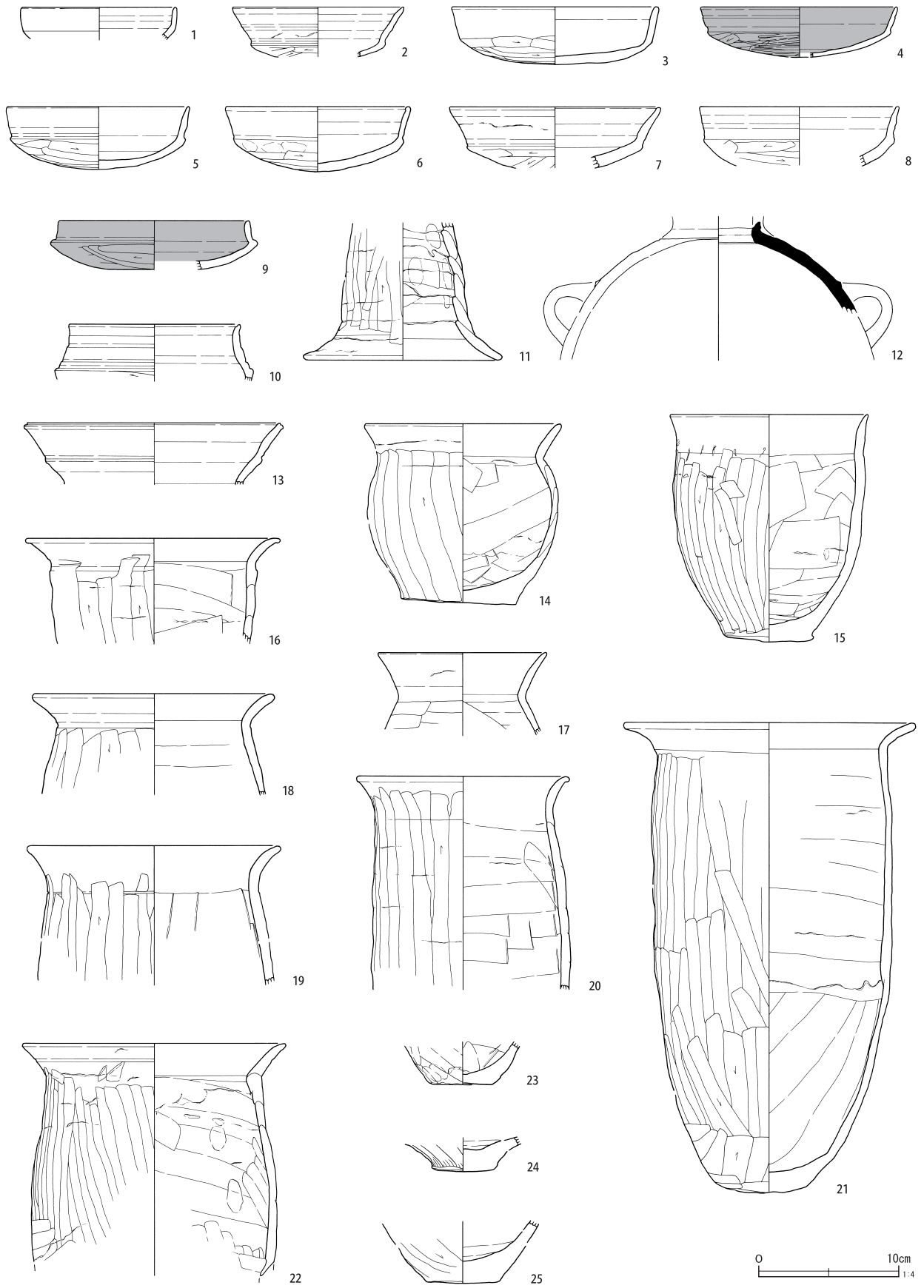
平面楕円形で、底面に階段状のテラス面を造作する。規模は長径0.87m、短径0.68m、深さ0.31mである。貯蔵穴埋土は褐色土を主体とする。

ピットは貯蔵穴に接する位置で1本検出された。住居跡に伴うかどうかは明確でない。

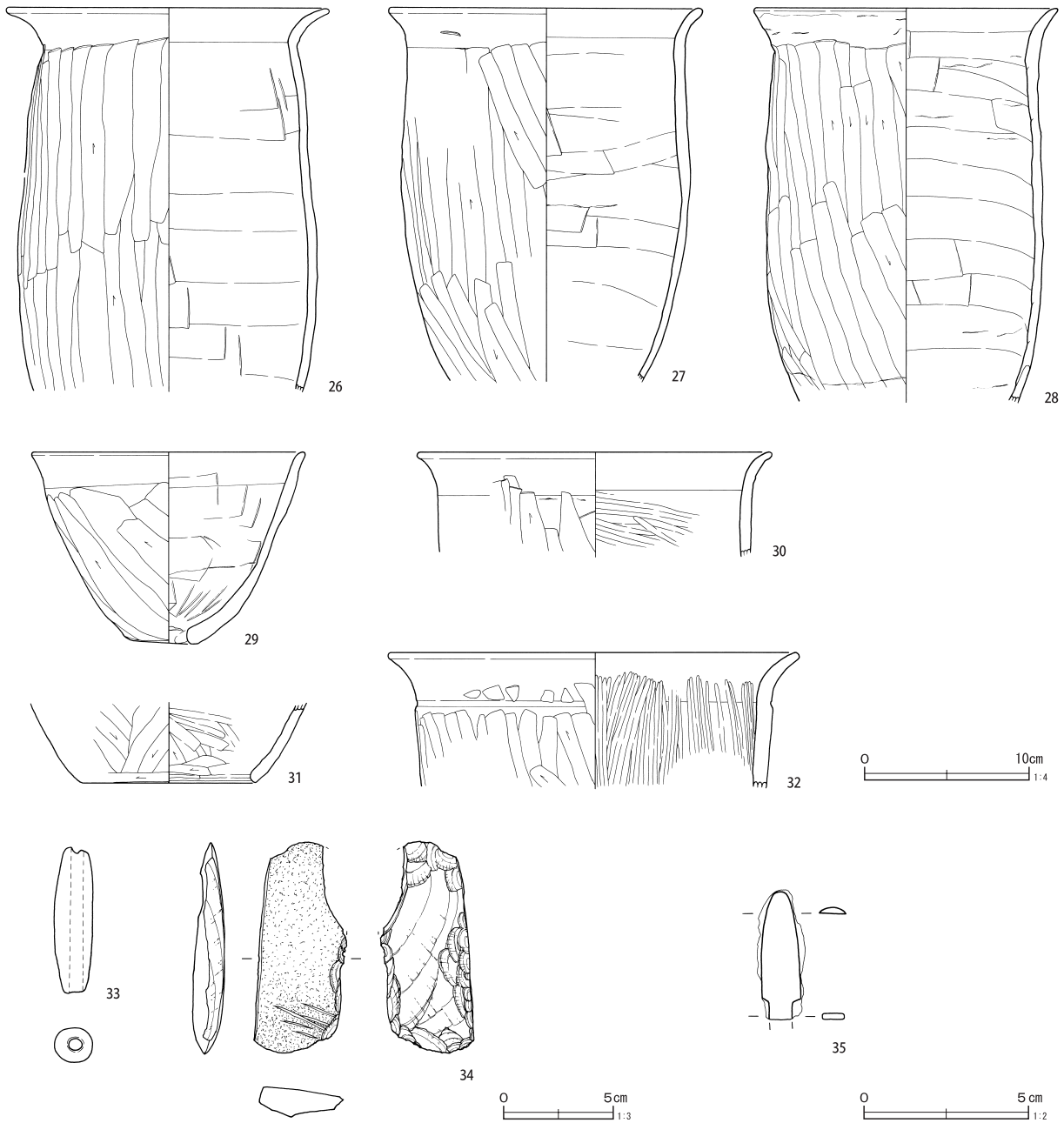
壁溝は北東壁の貯蔵穴側のみであり、幅14~19cm、深さ6cmほどである。

出土遺物は小型住居跡の割には多く、土師器 坏・高坏・壺・小型甕・甕・甗、須恵器提瓶、土錘、鉄鏟等がある（第190・191図）。

遺物は、カマド両脇から床面中央部にかけてまとまって出土した。カマド左袖脇の床直から29の小型甗が伏せられた状態で出土し、その上には円礫が乗せられていた。カマド右袖先端部には26の甗と5の坏がまとまっていた。貯蔵穴では底面付近から15の小型甗が出土した。カマド前面から床面中央部にかけては11の高坏脚部が伏せられた



第190図 第88号住居跡出土遺物（1）



第191図 第88号住居跡出土遺物（2）

第69表 第88号住居跡出土遺物観察表（第190・191図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(10.9)	2.3	—	CEGHI	10	普通	橙		
2	土師器	坏	(12.1)	3.5	—	ACGHI	15	普通	灰黄褐		
3	土師器	坏	14.6	4.1	—	CEHIL	60	普通	橙	No.11	74-7
4	土師器	坏	(13.9)	3.5	—	CEHI	30	普通	暗赤灰	内外面黑色処理	
5	土師器	坏	12.9	4.4	—	CEGHIL	80	普通	橙	No.4 貯藏穴No.3	75-1
6	土師器	坏	13.0	4.6	—	ACEHI	80	普通	浅黄橙	No.10	75-2
7	土師器	坏	(14.9)	4.3	—	ACEHI	10	普通	橙		
8	土師器	坏	(14.1)	4.1	—	CEHIL	20	普通	橙		
9	土師器	坏	(13.4)	3.5	—	CEHI	15	普通	にぶい赤褐	内外面黑色処理	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
10	土師器	坏	(12.0)	4.0	—	CEHI	20	良好	橙		
11	土師器	高坏	—	9.7	13.9	ABCEH	70	良好	橙	No. 2	
12	須恵器	提瓶	—	6.4	—	BEI	10	良好	青灰	末野産 No. 8	
13	土師器	壺	(18.2)	4.3	—	ACHI	15	普通	明赤褐		
14	土師器	小型甕	(13.9)	12.8	8.2	BCHIL	70	普通	にぶい赤褐		75-3
15	土師器	小型甕	14.0	16.1	6.4	BCEHI	90	普通	橙	底部内面煤付着 貯蔵穴No. 1	75-4
16	土師器	甕	(18.2)	7.5	—	ACEHIL	15	普通	明赤褐	No. 3	
17	土師器	甕	(12.1)	5.9	—	ACEHI	25	普通	明赤褐		
18	土師器	甕	(16.8)	7.2	—	BCEHIL	20	普通	橙		
19	土師器	甕	17.7	9.9	—	BCEHI	45	普通	明赤褐	H10G-49	
20	土師器	甕	14.7	15.2	—	BCEHIL	75	普通	赤褐		75-5
21	土師器	甕	(20.5)	33.5	5.9	CHL	50	普通	橙	外面黒斑 No. 3・5 H10G-38・46	75-6
22	土師器	甕	(18.7)	16.5	—	BCEHI	20	普通	明赤褐	H10G-47	
23	土師器	甕	—	3.1	4.5	ACEHI	50	普通	にぶい橙		
24	土師器	甕	—	2.4	4.5	ACEHI	80	普通	にぶい橙		
25	土師器	甕	—	4.4	5.2	CHI	50	普通	橙		
26	土師器	甕	19.3	23.2	—	BCEHIL	70	普通	橙	胴部下半煤付着 No. 5	76-1
27	土師器	甕	(18.6)	22.6	—	BHIL	20	普通	橙		
28	土師器	甕	18.4	23.9	—	BCEHIL	90	普通	明赤褐	No. 7	76-2
29	土師器	甗	16.4	11.5	4.1	CHIL	95	普通	にぶい橙	No. 1	76-3
30	土師器	甗	(21.2)	6.4	—	ACEHI	15	普通	明褐		
31	土師器	甗	—	4.8	(10.8)	CEHI	5	普通	にぶい黄橙	黒斑	
32	土師器	甗	(24.8)	8.2	—	CGHI	25	良好	にぶい橙	No. 6	
33	土製品	土錘	長さ6.6cm 最大径1.7cm 孔径0.5~0.6cm 重さ15.38g			CEGHI	100	普通	にぶい褐		
34	石製品	打製石斧	長さ9.6cm 幅4.3cm 厚さ1.5cm 重さ74.61g				ホルンフェルス				93-9
35	鉄製品	鉄鏃	鏃長3.8cm 鏃身長3.3cm 鏃身幅1.2cm 鏃身厚0.2cm							鑿箭式 片丸造	89-9

状態で出土しているほか、16・28の甕、32の甗等が円礫とともに床面からやや浮いた状態で出土した。この他に南東壁際から6の坏が単独で出土している。

坏は坏蓋模倣坏が主体で、坏身模倣坏が僅かに伴う器種組成である。5・6は口径13cm台の坏蓋模倣坏である。3は口縁部と体部の境に明瞭な段を作らず、ヘラケズリによって稜を作出する。破片資料であるが2・7・8の有段口縁坏、4・9の黒色処理した大振りの坏等が伴出している。10は内屈有段口縁坏で、口縁部が体部よりも長く内屈する。該期より組成に定量で加わる。11は長脚高坏の脚部で、内面に粘土紐の巻上痕が明瞭に残る。鉢形土製支脚の可能性も考えられる。

12は須恵器提瓶の頸部から体部の破片で、環状把手が剥離している。胎土の特徴から末野産と推

定される。

13は二重口縁壺の口縁部で、段が頸部寄りに下がり、やや新相を示す。14・15は小型甕で、頸部の括れの強弱や胴部の長さに差異が認められる。甕は口縁部径と胴部最大径がほぼ同じになった長胴甕が主体を占める。

甗は29の単孔式の小型甗と30~32の大型甗のセットが基本となる。大型甗は外面調整に縦方向のヘラケズリを施し、内面調整には入念なヘラミガキを施すことが多い。

この他に33の管状の土錘、35の片丸造鑿箭式鉄鏃が埋土中から出土している。なお、縄文時代の34の打製石斧が混入していた。

住居跡の時期は、土師器坏にやや時期幅が認められるため明確にし得ないが、6世紀後葉を中心とする時期に位置づけておきたい。

第89号住居跡 (第192図)

第89号住居跡は調査区中央部北寄りのG・H—10・11グリッドに位置する。住居跡の東隅部が五領期の第94号住居跡と重複し、住居跡北西側は調査区域外に延びる。

平面形は方形と推定される。残存規模は長軸長3.33m、短軸長3.01m、深さ0.22mである。主軸方位はN—45°—Eを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は褐色土の単一層で、自然堆積を示す。

カマドは北東壁ほぼ中央に設けられていた。平面形は燃焼部と煙道部の境のない砲弾形である。断面形は燃焼部奥壁に段を作って煙道部に移行し、煙道部底面はほぼ水平に延びる。全長1.10m、カマド袖幅0.75m、深さ0.20m、燃焼部長0.43m、燃焼部底面幅0.33m、煙道部長0.67mである。カマド埋土は第2層が天井部崩落土、第5層が使用面にあたる。カマド袖部は地山を掘り残し、基部を構成していた。

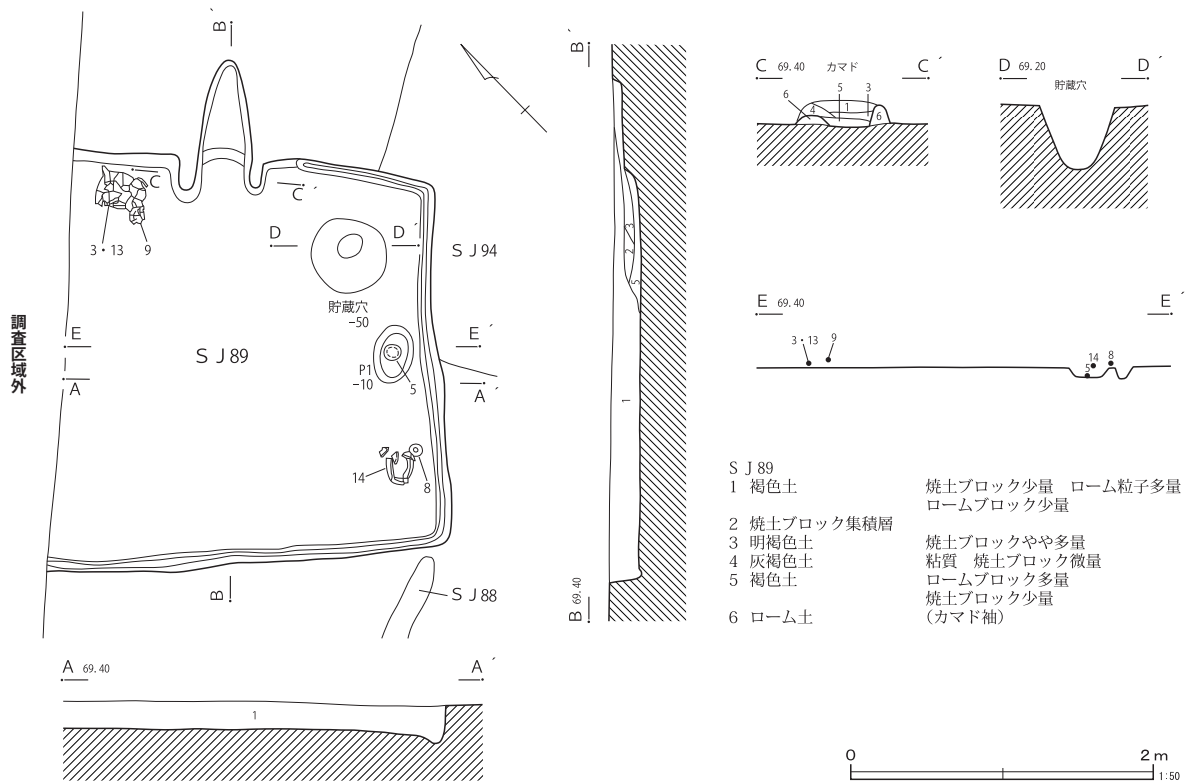
貯蔵穴はカマド右脇の東隅部に検出された。平面略円形で、長径0.59m、短径0.57m、深さ0.50mである。

ピットは南東壁際のほぼ中央に1本検出された。P1内から土師器坏が口縁を上にした状態で出土した。壁溝はカマド左脇以外を全周し、幅8～16cm、深さ8cmほどである。

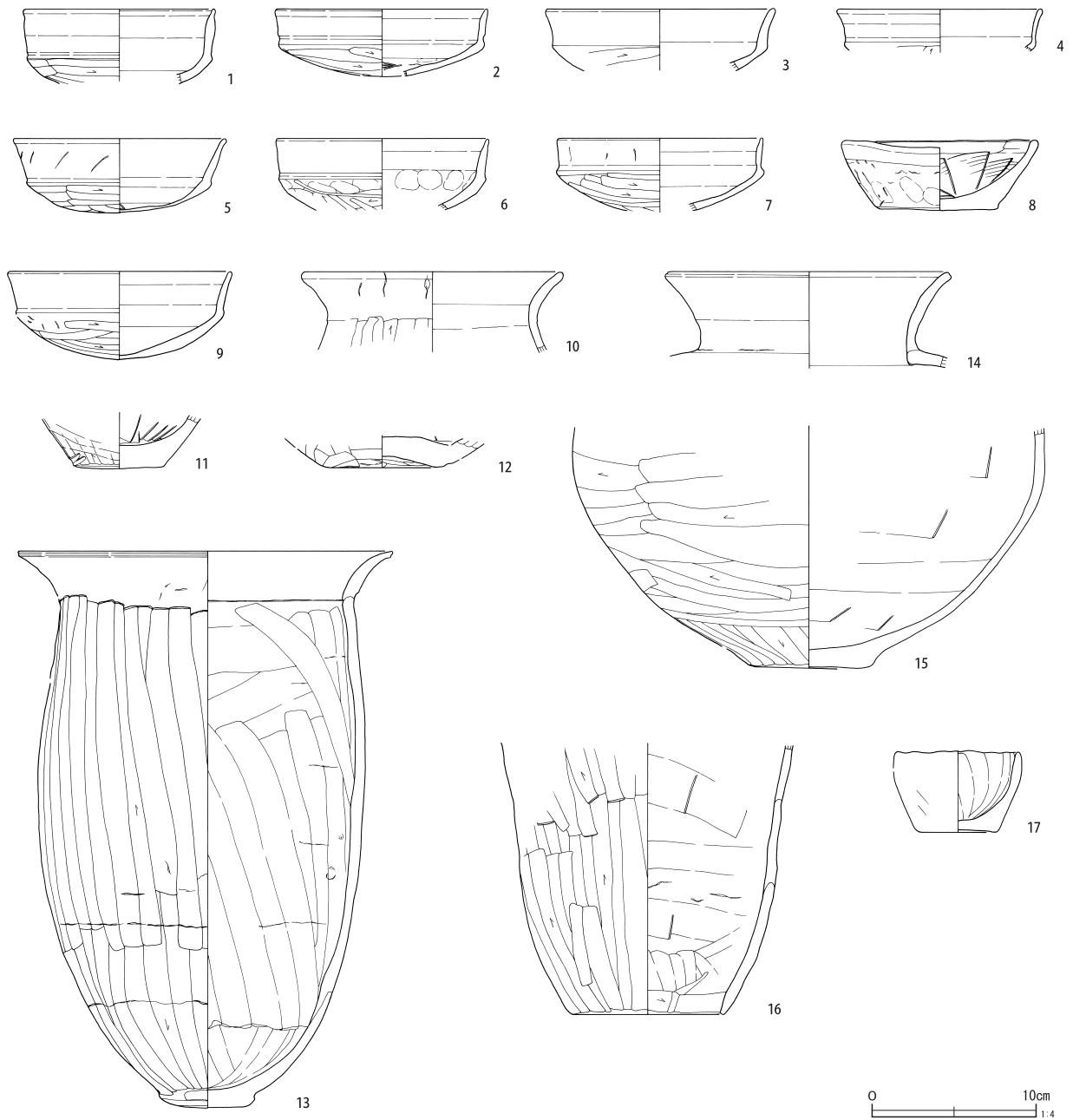
出土遺物は少なく、土師器坏・甕・壺・甑・手捏ね等がある (第193図)。

遺物の出土状況は、カマド左脇から13の甕が横倒しの状態で出土し、その脇に9の坏が置かれていた。前述したように南東壁際のP1内から5の坏が出土している。この他に南隅部寄りから14の壺口縁部と一緒に8の平底坏が出土した。

住居跡の時期は、口縁部が直立ないし外傾する坏蓋模倣坏が主体を占め、胴部に張りのある長胴甕 (13) や二重口縁壺 (14・15) が残存することから、6世紀前葉に位置づけられる。



第192図 第89号住居跡



第193図 第89号住居跡出土遺物

第70表 第89号住居跡出土遺物観察表 (第193図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(11.5)	4.4	—	ACEHI	30	普通	橙		
2	土師器	坏	(12.8)	4.0	—	ACEHI	20	普通	橙		
3	土師器	坏	(13.9)	3.7	—	ABHI	15	普通	にぶい橙	No. 5	
4	土師器	坏	(12.3)	2.5	—	ACEHI	20	普通	橙	カマド	
5	土師器	坏	12.9	4.4	—	ABCEHI	100	普通	橙	外面黒斑 No. 3	76-4
6	土師器	坏	(12.9)	4.2	—	ACHI	15	普通	明赤褐		
7	土師器	坏	(12.3)	4.3	—	ACEHI	30	普通	橙		
8	土師器	坏	11.6	4.2	7.3	ABCEHIK	100	普通	明赤褐	No. 2	76-5
9	土師器	坏	(13.4)	5.2	—	ABCHI	70	普通	明赤褐	No. 5	76-6

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
10	土師器	甕	(15.8)	4.8	—	ABCEHI	15	普通	明赤褐		
11	土師器	甕	—	3.2	5.5	BCEHI	80	普通	にぶい褐	外面黒斑	
12	土師器	甕	—	1.9	6.4	BCEHI	85	普通	明赤褐		
13	土師器	甕	22.8	33.9	5.8	CEGHIL	80	普通	橙	外面黒斑 No.5	76-7
14	土師器	壺	17.0	5.8	—	ACEHI	80	普通	橙	No.1	
15	土師器	壺	—	14.5	7.6	ACEHI	40	普通	橙	外面黒斑	
16	土師器	甗	—	16.3	(9.4)	ABCEHI	10	普通	にぶい黄橙	外面黒斑 貯蔵穴	
17	土師器	手捏ね	(7.4)	4.9	4.9	BCEHI	55	普通	橙		77-1

第90号住居跡 (第194図)

第90号住居跡は調査区中央部北寄りのH-10・11グリッドに位置する。住居跡の北東側を第84・85号住居跡によって切られ、住居跡の北西隅部は第105号住居跡に接している。住居跡の南東側は調査区域外に延び、全容は不明である。

平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長3.10m、短軸長2.24m、深さ0.08mである。主軸方位はN-41°-Wを指す。

床面は概ね平坦で、床面中央部に貼床が認められた。床面の掘り方は壁際を掘り残し、中央部にロームブロックを主体とする明褐色土を用いて貼床を施していた。埋土は褐色土を主体とし、全体に焼土ブロックの混入が顕著で、特に北西壁中央の壁際に焼土ブロック集積層(第3層)が検出されている。断定はできないが焼失住居の可能性もあろう。

ピットは床面中央部に1本検出された。P1は長径0.38m、短径0.36m、深さ0.22mである。埋土は灰色土で、炭化物・焼土ブロックを少量含んでいた。壁溝は北西壁から北東壁にかけて巡り、幅15~29cm、深さ11cmである。

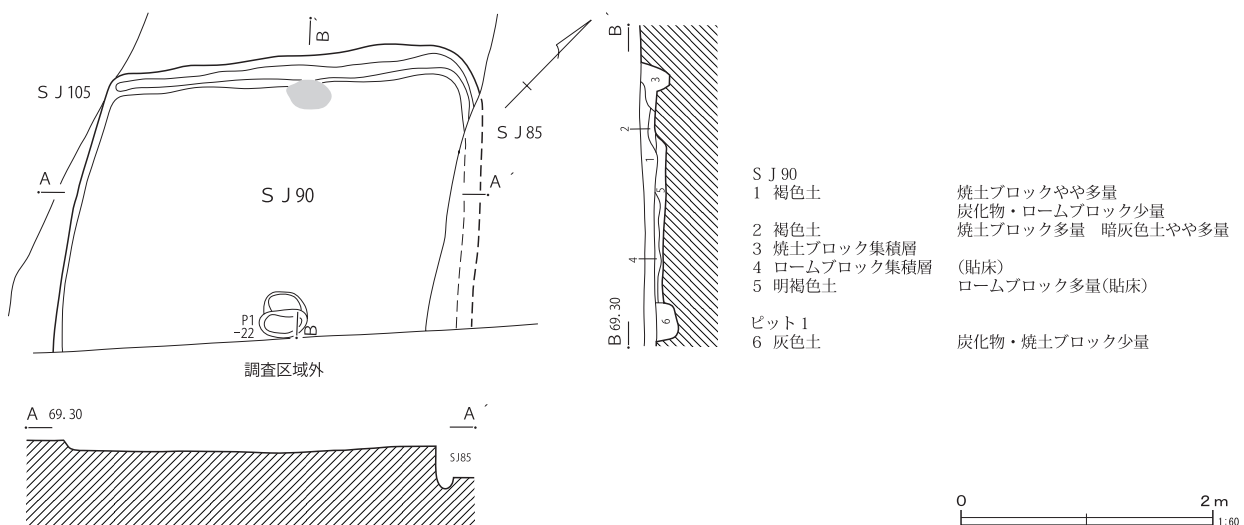
出土遺物はまったくないが、遺構の重複関係から古墳時代前期の五領期に位置づけられる。

第91号住居跡 (第195図)

第91号住居跡は調査区中央部北寄りのG-11グリッドに位置する。第89号住居跡の北側においてカマドの一部を確認した。掘り込みが浅く、住居跡のプランは明確にし得なかったが、南東壁に設けられたカマドで、住居跡の大半は調査区域外に延びるものと思われる。

カマドの残存長0.62m、深さ0.10m、幅0.44mである。主軸方位はN-34°-Wを指す。

出土遺物は土師器坏・壺・甕がある(第196



第194図 第90号住居跡

図)。出土状態の詳細は不明である。2の短く外折する和泉型の埴や、また胴部に張りを残す4の甕の特徴から5世紀後葉に位置づけておきたい。

第92号住居跡 (欠番)

第93号住居跡 (欠番)

第94号住居跡 (第197図)

第94号住居跡は調査区中央部北寄りのG・H-11グリッドに位置する。第85・89号住居跡と重複し、切られる。住居跡南東側が第85号住居跡によって大きく削平され、住居跡全体の3分の1ほどを残すのみである。

平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長5.02m、短軸長1.49m、深さ0.16mである。主軸方位はN-27°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は灰褐色土の単一層であるが、ロームブロックの混入が多く、一概に自然堆積とは言えない。貯蔵穴、ピット等は検出されなかったが、壁溝は北西壁から北東壁にか

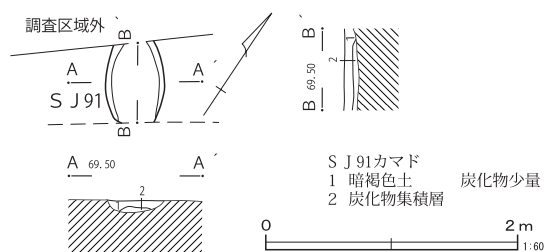
けて巡り、幅14~27cm、深さ4cmほどである。

出土遺物は少なく、土師器甕・台付甕等がある(第198図)。1のS字甕は口径12.6cmの小型品である。住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器から五領期後半の新相に位置づけられる。

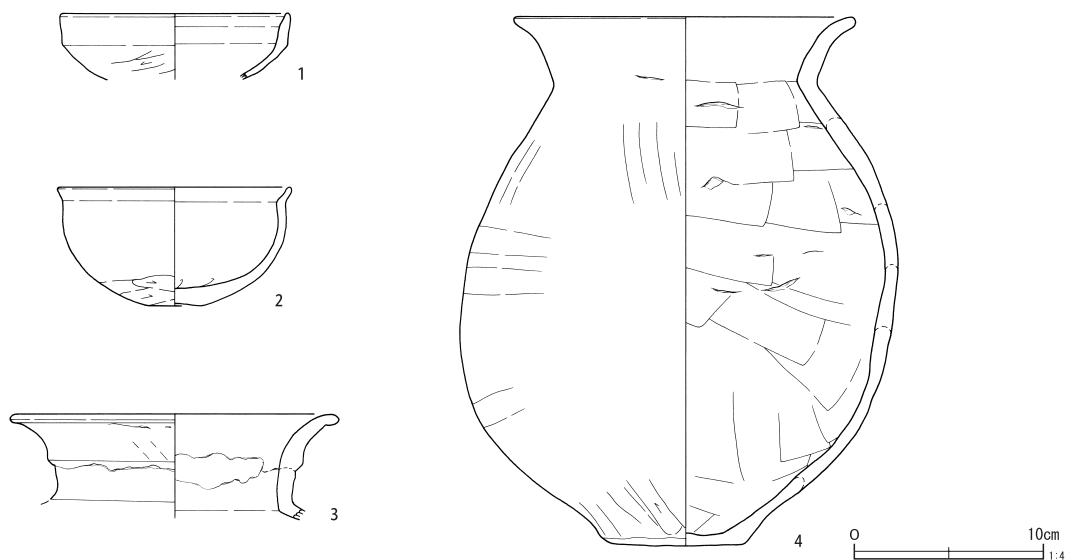
第95号住居跡 (第199図)

第95号住居跡は調査区中央部北寄りのH-10、I-9・10グリッドに位置する。第76・78・82・83・87号住居跡と重複し、本住居跡が第83・87号住居跡を切り、第76・78・82号住居跡に切られる。

平面形はやや歪んだ方形で、規模は長軸長5.45m、短軸長4.80m、深さ0.25mである。主軸方位



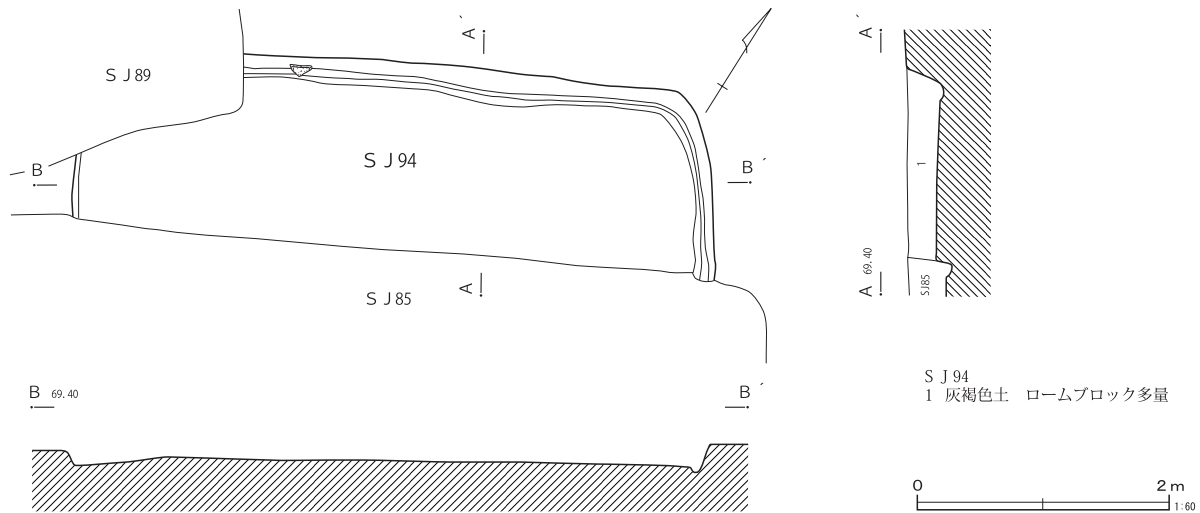
第195図 第91号住居跡



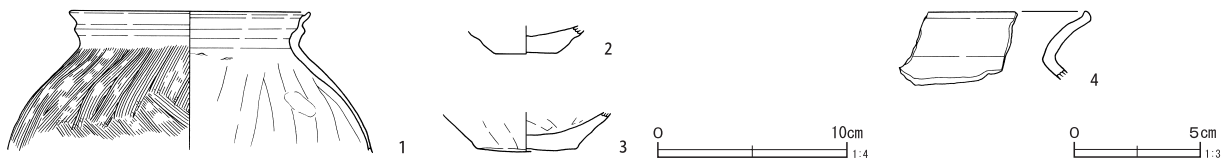
第196図 第91号住居跡出土遺物

第71表 第91号住居跡出土遺物観察表 (第196図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.0)	3.5	—	CDHI	15	普通	明赤褐		
2	土師器	埴	(12.1)	6.2	3.7	CDEH	45	普通	明赤褐		77-2
3	土師器	壺	16.7	5.5	—	CDEHI	80	普通	にぶい褐		
4	土師器	甕	17.6	28.0	7.1	ABCEH	70	普通	橙		77-3



第197図 第94号住居跡



第198図 第94号住居跡出土遺物

第72表 第94号住居跡出土遺物観察表 (第198図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	台付甕	(12.6)	7.3	—	H I K	30	普通	にぶい橙	S字甕 SJ89	
2	土師器	甕	—	1.4	3.2	A C D H I	75	普通	橙		
3	土師器	甕	—	2.0	5.3	A C D H I	30	普通	橙		
4	土師器	甕	—	2.5	—	E H I	5	普通	橙		

はN-80°-Eを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は灰褐色土を主体とする自然堆積である。

カマドは東壁に設けられていた。燃烧部が壁内に収まり、燃烧部奥壁に段を設け、煙道部が壁外に緩やかに立ち上がる。全長2.20m、カマド袖幅0.85m、深さ0.35m、燃烧部長0.98m、燃烧部底面幅0.30m、煙道部長1.22mである。カマド埋土は第8・9層が煙道天井部、第15層が火床面である。袖部は明褐色土によって構築され、被熱により袖部内壁面は良く焼けていた。

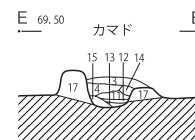
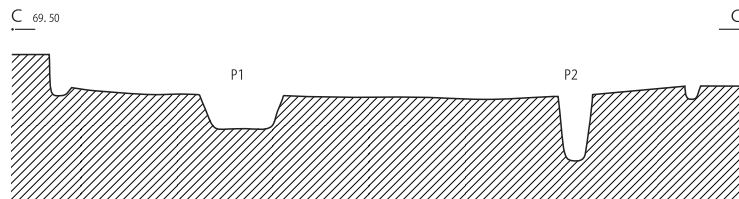
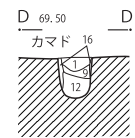
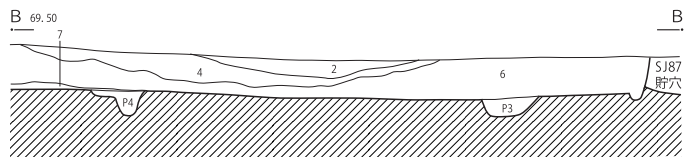
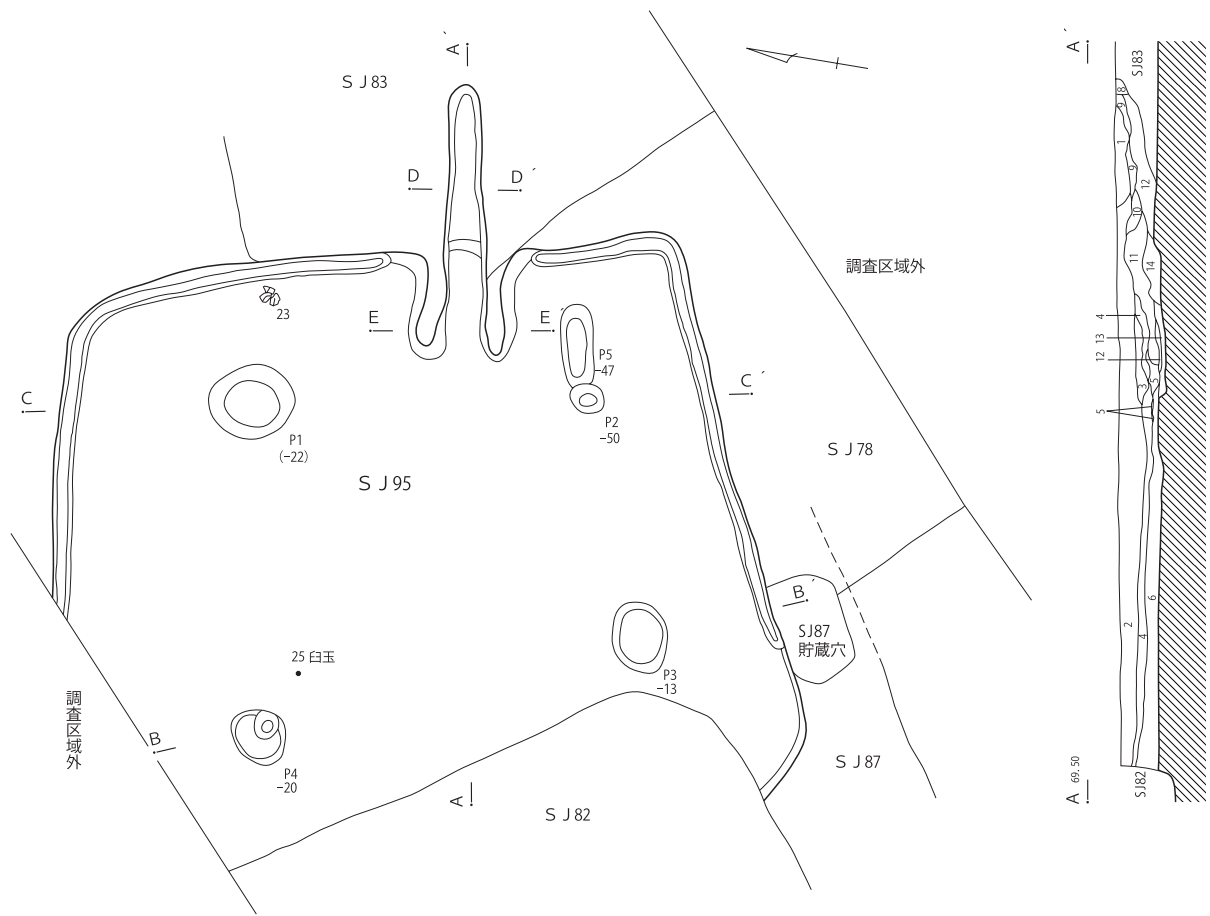
ピットは5本検出された。規則的に配置されたP1～P4が主柱穴である。P2に接するP5は長径0.64m、短径0.26m、深さ0.47mの細長い

ピットで、住居跡に伴うかは明確でない。

壁溝は南隅部付近で途切れるほかは全周し、幅10～20cm、深さ11cmほどである。

出土遺物は、土師器坏・鉢・甕・白玉等がある(第200図)。23の甕底部がカマド左脇、P4付近から25の滑石製白玉が出土している。白玉は側面の膨らんだ太鼓形で、丁寧に研磨を施す。坏は坏蓋模倣坏を主体としているが、複雑な重複関係を反映してか、時期の異なるものが混在している。口縁部が短く外反する小型のものが本来住居に伴うものであろう。20の甕は口縁部に小孔が穿たれている。

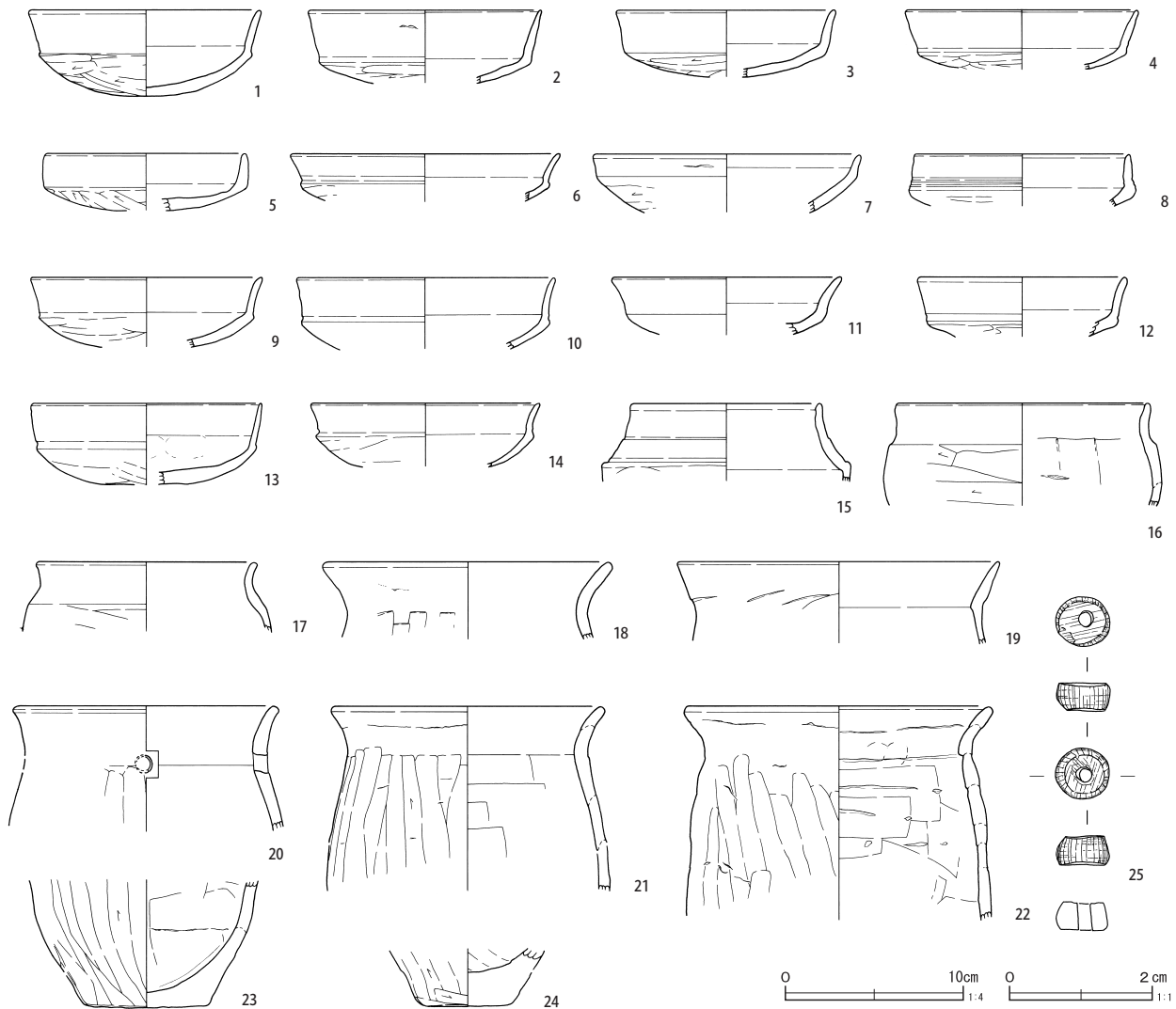
住居跡の時期は、遺構の重複関係や小型化した坏蓋模倣坏から6世紀後葉に位置づけられる。



- | | |
|----------------------|--------------------------------|
| S J 95 | |
| 1 明褐色土 | 焼土ブロックやや多量 ローム粒子多量 |
| 2 褐色土 | 焼土粒子・焼土ブロック極多量 |
| 3 焼土ブロック集積層 | 灰少量 |
| 4 灰褐色土 | 焼土ブロック・ローム粒子少量 炭化物微量 |
| 5 灰集積層 | 焼土ブロック少量 |
| 6 灰褐色土 | 焼土ブロック少量 灰色砂質土多量 ローム粒子微量 |
| 7 黄褐色土 | |
| カマド | |
| 8 焼土ブロック集積層 | 灰少量 |
| 9 焼土ブロック集積層 | (カマド煙道天井部) |
| 10 黒色土 | 焼土粒子・炭化物少量 |
| 11 灰褐色土 | 焼土ブロック・炭化物多量 |
| 12 褐色土 | 焼土ブロック・炭化物少量 灰色砂質土やや多量 ローム粒子微量 |
| 13 ロームブロック集積層 | 灰褐色土多量 |
| 14 灰褐色土 | 焼土ブロック少量 |
| 15 焼土ブロック・ロームブロック集積層 | 焼土ブロック多量 |
| 16 灰褐色土 | (カマド袖) |
| 17 明褐色土 | |



第199図 第95号住居跡



第200図 第95号住居跡出土遺物

第73表 第95号住居跡出土遺物観察表 (第200図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.8)	4.8	—	A E H I K	40	普通	橙	カマド	
2	土師器	坏	(13.0)	4.0	—	A E H I K	20	普通	橙		
3	土師器	坏	(12.0)	3.7	—	A C E H I	30	普通	橙		
4	土師器	坏	(12.8)	3.3	—	A C H I K	20	普通	明赤褐		
5	土師器	坏	(11.2)	3.1	—	A C D E H	30	普通	橙		
6	土師器	坏	(15.0)	2.6	—	A C H I	10	普通	にぶい橙	貯蔵穴	
7	土師器	坏	(15.0)	3.2	—	A C D E H I	10	普通	赤褐		
8	土師器	坏	(12.0)	2.9	—	C E H I	10	良好	黒褐		
9	土師器	坏	(12.8)	3.8	—	E H	10	普通	橙		
10	土師器	坏	(14.4)	3.9	—	C H	20	不良	橙		
11	土師器	坏	(12.8)	3.2	—	A C D H I	10	普通	橙		
12	土師器	坏	(11.6)	3.3	—	A C E H	10	普通	明赤褐		
13	土師器	坏	(12.8)	4.5	—	C E H I	30	普通	橙		
14	土師器	坏	(12.6)	3.5	—	A H I K	15	普通	橙		
15	土師器	坏	(10.6)	4.3	—	A C H I	30	普通	にぶい黄橙		
16	土師器	鉢	(14.2)	5.7	—	A C D H I	10	普通	橙		
17	土師器	鉢	(12.2)	3.8	—	A H I	20	普通	橙	外面一部煤付着	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版	
18	土師器	甕	(15.8)	4.3	—	BEH	10	普通	橙			
19	土師器	甕	(18.0)	4.5	—	AEH	10	普通	橙			
20	土師器	甕	(14.2)	7.0	—	ACEHI	10	普通	明赤褐	貯蔵穴 口縁部穿孔		
21	土師器	甕	(15.0)	10.3	—	ABEHI	40	普通	橙	カマド		
22	土師器	甕	(17.0)	12.0	—	ACDEHI	40	普通	にぶい赤褐			
23	土師器	甕	—	7.1	6.9	ACHIL	50	普通	にぶい赤褐	No.2		
24	土師器	甕	—	3.2	5.1	ABCDEHI	70	普通	橙			
25	石製品	白玉	長さ0.7cm 幅0.8cm 厚さ0.4cm 重さ0.23g				滑石				No.1	88-11

第96号住居跡 (第201図)

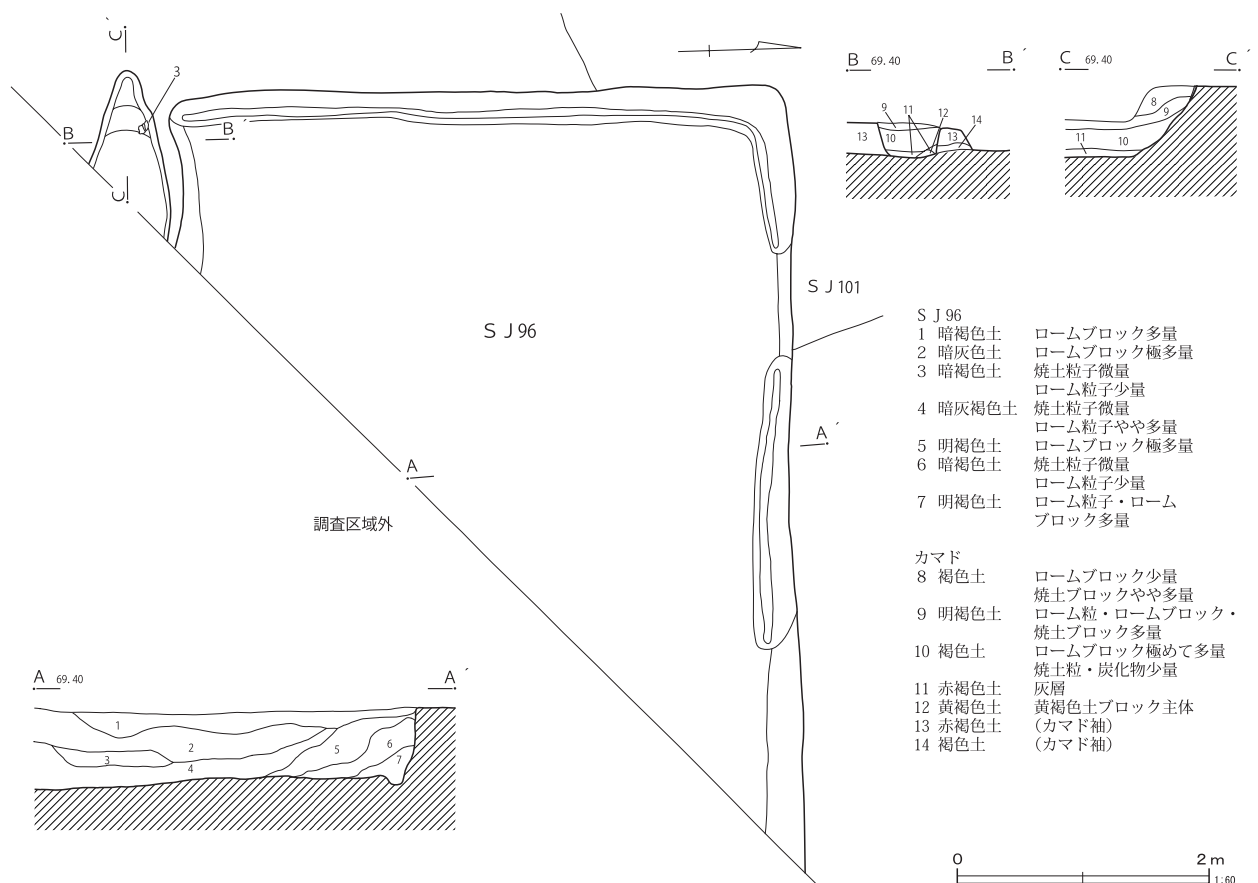
第96号住居跡は調査区北側のG-11・12グリッドに位置する。住居跡の北西隅部が五領期の第101号住居跡を切っている。住居跡南東側の大半が調査区域外に延びており、全容は不明である。しかし、北側に近接する第97号住居跡と同規模の一边8m前後の大型住居跡の可能性がある。

平面形は方形と推定される。残存規模は長軸長

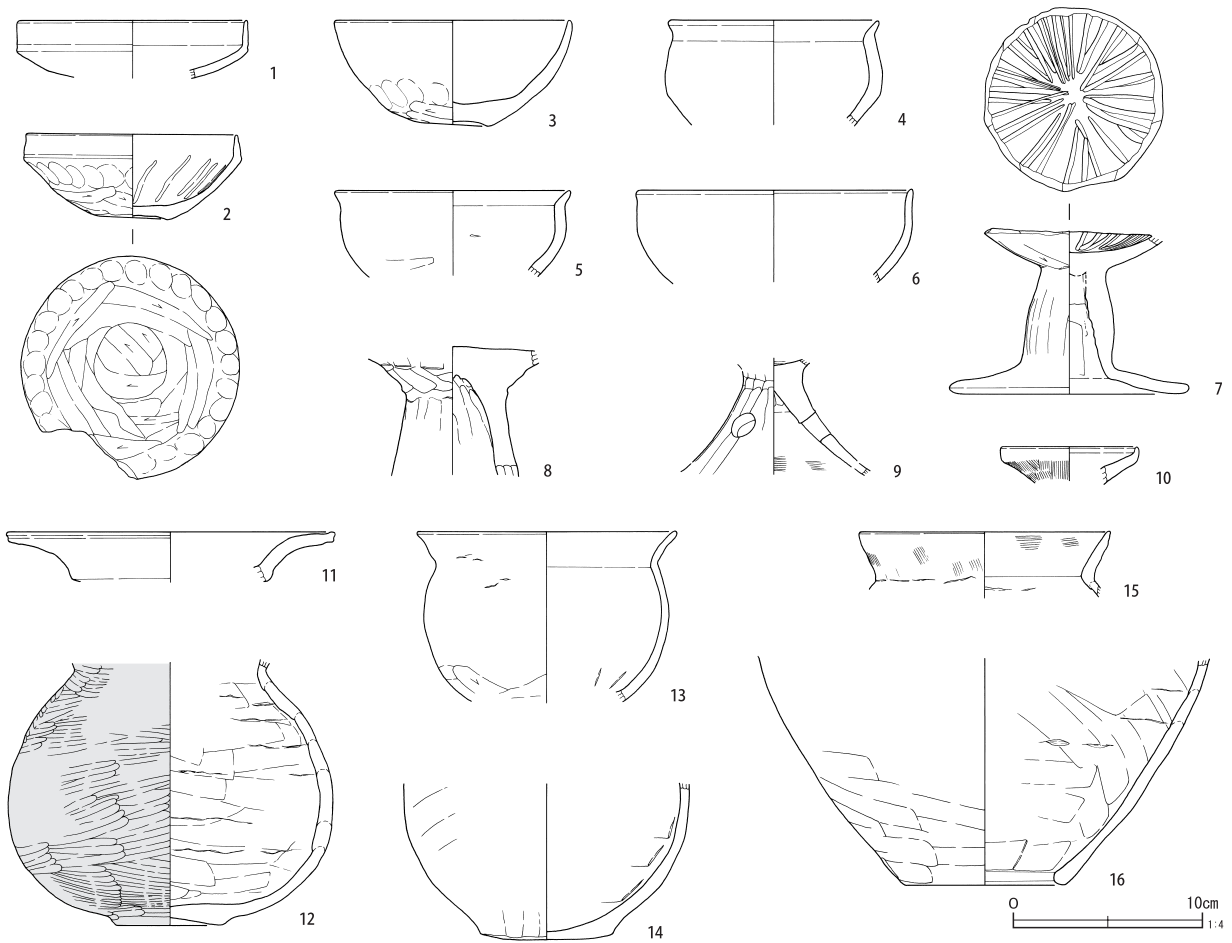
6.20m、短軸長5.62m、深さ0.51mである。主軸方位はN-88°-Wを指す。

床面はやや凹凸が見られる。埋土は7層に分層され、暗褐色土を主体とする。第2・5・7層にロームブロックの混入が顕著なことから、人為的な埋め戻しも考えられる。

カマドは西壁中央、あるいは中央やや左寄りに設けられていた。調査区域の壁際で検出されたた



第201図 第96号住居跡



第202図 第96号住居跡出土遺物

第74表 第96号住居跡出土遺物観察表 (第202図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.0)	3.0	—	CEHI	10	普通	明褐		
2	土師器	坏	11.0	4.4	3.9	ACEHIK	90	良好	にぶい橙	カマド	77-5・6
3	土師器	碗	12.3	5.4	3.4	CDEH	70	普通	橙	カマドNo.1	77-4
4	土師器	碗	(11.0)	5.5	—	ACDEHI	15	普通	明赤褐		
5	土師器	碗	(12.4)	4.5	—	CEHI	10	良好	橙		
6	土師器	碗	(14.3)	4.8	—	AHI	20	普通	橙		
7	土師器	高坏	—	7.7	12.6	ACEH	100	普通	橙	カマド 坏部内面暗文	77-7・8
8	土師器	高坏	—	6.7	—	ABCEH	70	良好	橙		
9	土師器	高坏	—	6.0	—	ACDEHI	60	普通	橙		
10	土師器	器台	(7.1)	1.9	—	ABHIK	20	普通	明赤褐		
11	土師器	壺	(17.2)	2.6	—	AEH	10	普通	橙		
12	土師器	壺	—	13.9	5.5	ACDHI	30	普通	橙	外面赤彩 カマド	
13	土師器	小型甕	(13.6)	8.9	—	ACEI	20	普通	明赤褐	カマド	
14	土師器	甕	—	8.2	7.0	BDEH	30	普通	明赤褐	外面一部赤色化 カマド	
15	土師器	甕	(13.2)	3.5	—	CEHIK	20	普通	明赤褐		
16	土師器	甗	—	11.9	(8.5)	ACEHIK	50	普通	にぶい黄橙	カマド G11G-56	

め全容は不明であるが、燃焼部が壁内に収まり、壁面と一体となって急角度で立ち上がり、壁外に極端に短く煙道部が延びるタイプである。残存するカマドの全長1.35m、カマド袖幅0.92m、深さ0.55m、煙道部長0.25mである。カマド埋土は第9・10層が天井崩落土、第11層が使用面、第12層がカマド掘り方埋土、第13・14層が袖部構築土である。

貯蔵穴、ピット等は検出されなかった。壁溝は北壁で一部途切れるが、ほぼ全周し、幅19～34cm、深さ7cmほどである。

出土遺物は土師器坏・埴・高坏・器台・壺・小型甕・甕・甗等がある(第202図)。重複する第101号住居跡からの混入と考えられる古墳時代前期の遺物が多く含まれている。カマドからは2の坏、3の埴、7の高坏、13の小型甕、14の甕、16の大型甗等が出土している。出土状態の詳細は不明であるが、7の高坏は支脚に転用されていた可能性もある。2は模倣坏であるが、平底で、坏部内面に放射状の暗文を施す。3は平底の埴。4・5は口縁部が短く外折する和泉型埴。7は坏部内面に放射状の暗文を施した和泉型高坏である。9～12は古墳時代前期の土器である。

住居跡の時期は、定型化以前の模倣坏と和泉型埴・高坏の残存から5世紀末葉から6世紀初頭に位置づけられる。

第97号住居跡(第203・204図)

第97号住居跡は調査区北側のF・G-11・12グリッドに位置する。五領期の第99・100・102号住居跡と重複し、それらを切って構築する鬼高期の大型住居跡である。調査区中央部から南側にかけては住居跡が密集し、重複が著しいのに対し、調査区北側の第96・97号住居跡(大型住居跡)周辺には同時期の住居の分布が少なく、住居の占地に何らかの規制があったことを窺わせる。

平面形は方形と推定される東カマドの大型住居跡である。残存規模は長軸長8.48m、短軸長7.03

m、深さ0.44mである。今回調査した住居跡の中では最大規模である。

床面はやや凹凸が見られる。埋土は7層に大きく分層され、このうち第2層に榛名山二ツ岳火山灰(FA)が確認された。FA層は中層から床面直上にかけて堆積しており、住居跡の第一次堆積がはじまった段階に火山灰の降下があったことを示している。

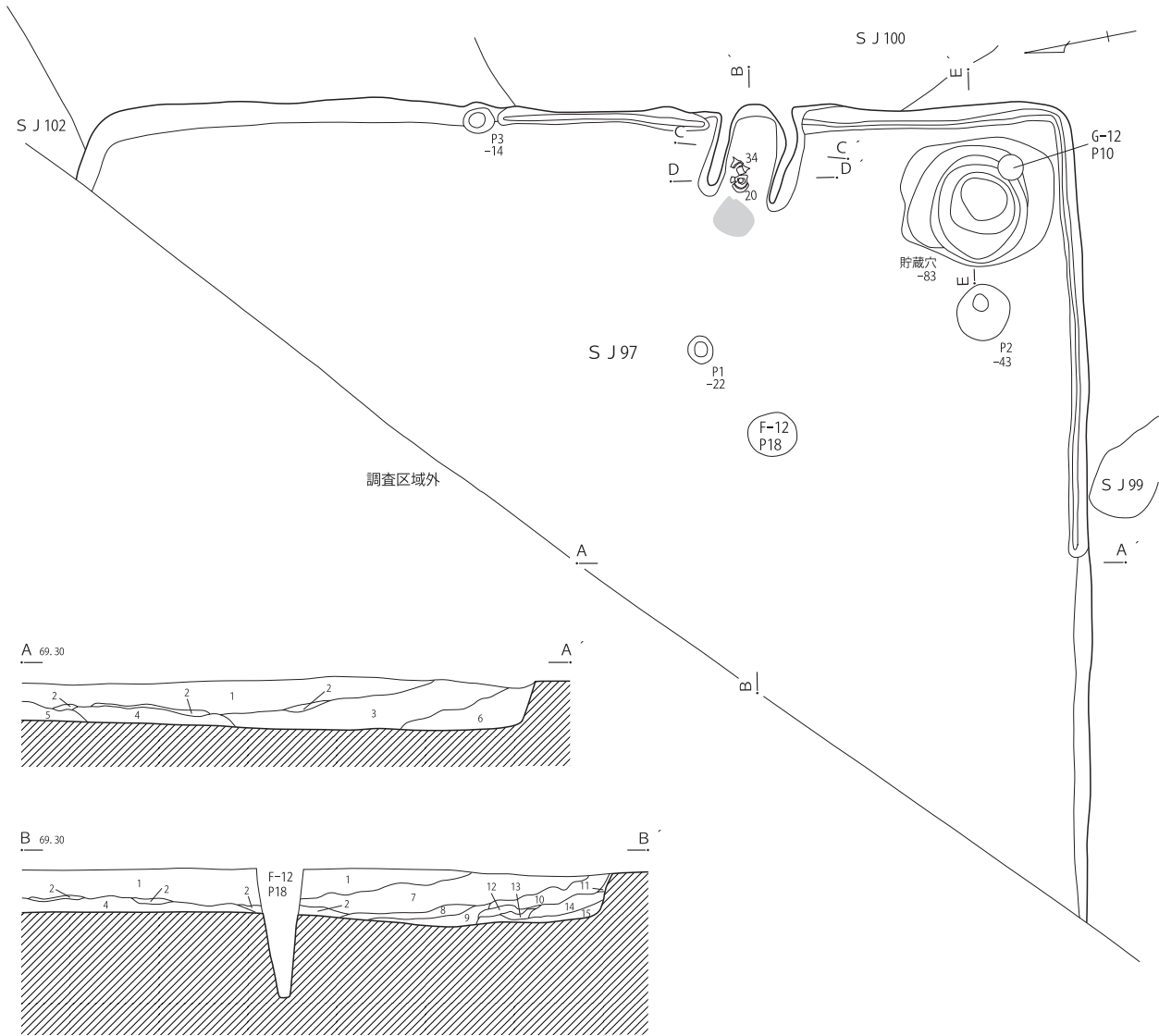
カマドは東壁の中央やや南寄りに設けられていた。燃焼部が壁を切り込まないタイプで、燃焼部奥壁は壁と一体となり、ほぼ垂直に立ち上がる。規模は全長0.95m、カマド袖幅0.80m、燃焼部底面幅0.40mである。埋土は第12・13層が天井崩落土、第14層が使用面に相当する。燃焼部底面の焚口寄りには高坏を(20)を伏せて支脚に転用していた。カマド袖部は明褐色土で構築され、壁に対しやや斜めに取り付く。内壁面は被熱により良く焼けていた。また焚口部前方にも被熱により赤変硬化した部分が確認された。

ピットは3本検出された。位置的に見てP2は支柱穴と考えられるが、P1・P3は住居跡に伴うかどうかは明確でない。

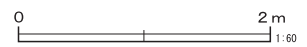
貯蔵穴はカマド右脇の住居跡南東隅部に検出された。平面略円形で、断面形は2段に掘り込まれている。規模は、長径1.31m、短径1.10m、深さ0.83mである。埋土は4層に分層され、明褐色土・褐色土等を主体とする。

壁溝はカマド両脇と南東隅部から南壁中央まで部分的に巡らしていた。規模は幅8～20cm、深さ9cmほどである。

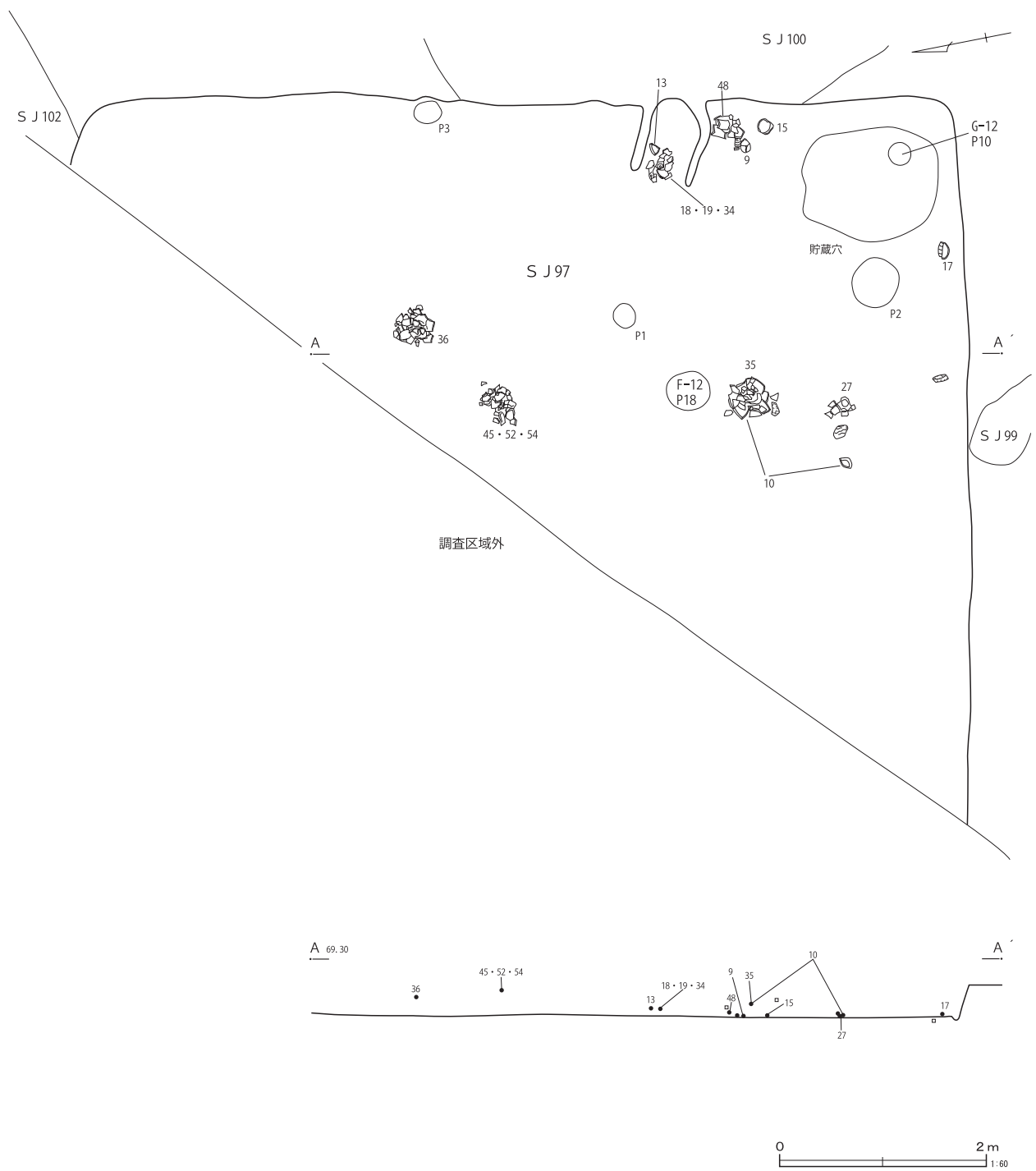
出土遺物は比較的多く、土師器坏・埴・高坏・鉢・小型壺・壺・小型甕・甕・甗・白玉等がある(第205～207図)。カマド内部からは支脚に転用された高坏(20)のほか、13の埴、18・19の高坏、34の壺が出土した。カマド右袖脇では48の甕、9の坏、15の埴がまとめて出土し、貯蔵穴付近からは17の埴が出土した。また、床面中央部付近か



- S J 97
- 1 褐色土 焼土ブロック少量 炭化物微量 白色粒子多量
 - 2 F A層(榛名ニツ岳火山灰)
 - 3 褐色土 ロームブロック少量
 - 4 褐色土 明褐色土との混層 ロームブロックやや多量
 - 5 褐色土 炭化物少量
 - 6 明褐色土 焼土ブロック微量 ロームブロックやや多量
- カマド
- 7 褐色土 焼土ブロック・炭化物・ロームブロック少量
 - 8 炭化物集積層
 - 9 明褐色土 焼土ブロック・ローム粒子やや多量(カマド袖)
 - 10 灰褐色土 砂質 焼土ブロック極多量
 - 11 暗灰色土 焼土ブロック少量 ロームブロック多量
 - 12 焼土ブロック集積層 (カマド天井崩落土)
 - 13 灰集積層
 - 14 焼土ブロック集積層 褐色土ブロック少量 (カマド天井崩落土)
 - 15 褐色土 ローム粒子少量 焼土ブロック極少量 灰少量
 - 16 灰集積層
- 貯蔵穴
- 18 明黄褐色土 炭化物微量 ロームブロック多量
 - 19 褐色土 炭化物微量 ロームブロック少量
 - 20 ロームブロック集積層
 - 21 暗褐色土 粘質 ロームブロック微量



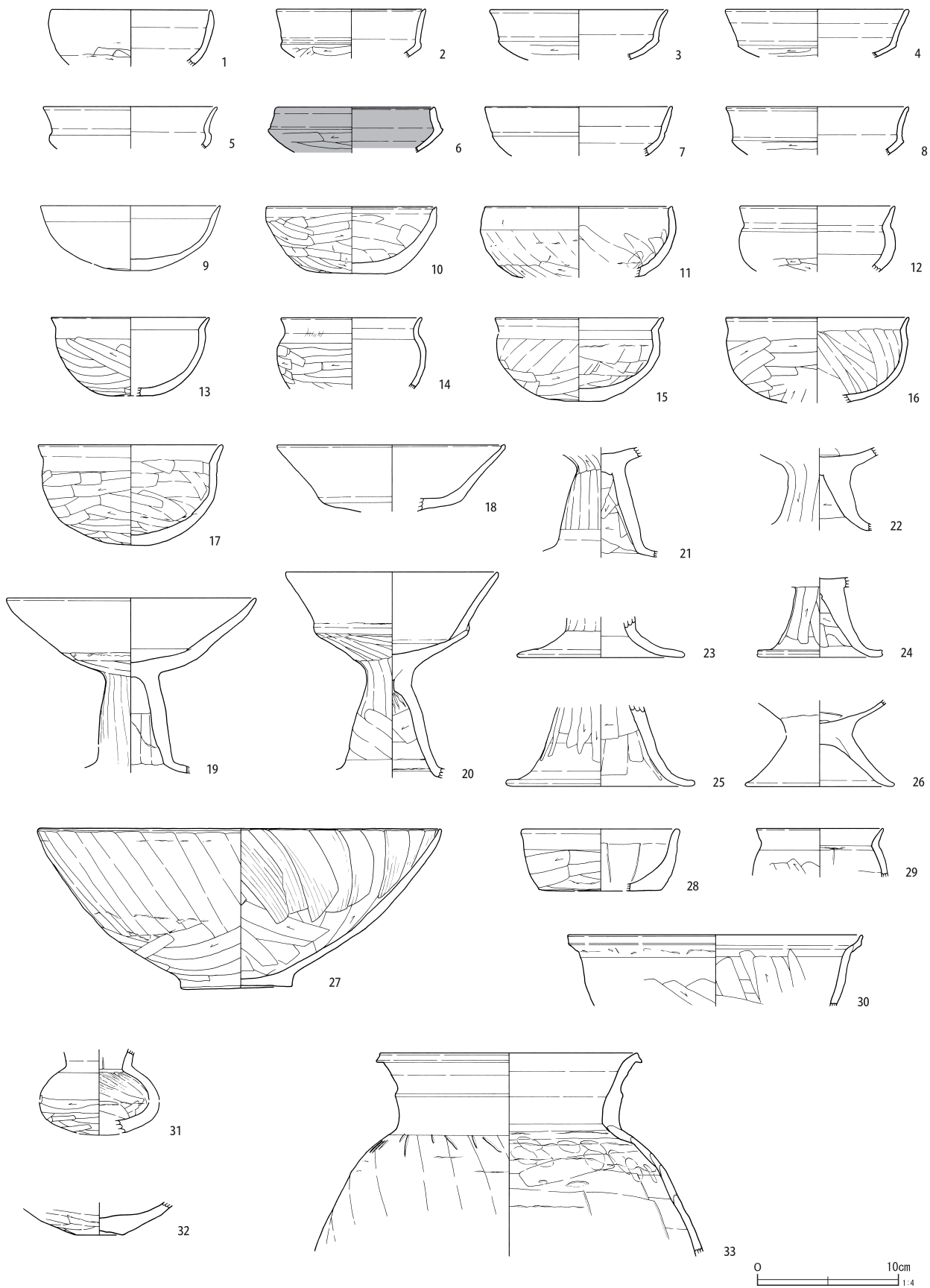
第203図 第97号住居跡



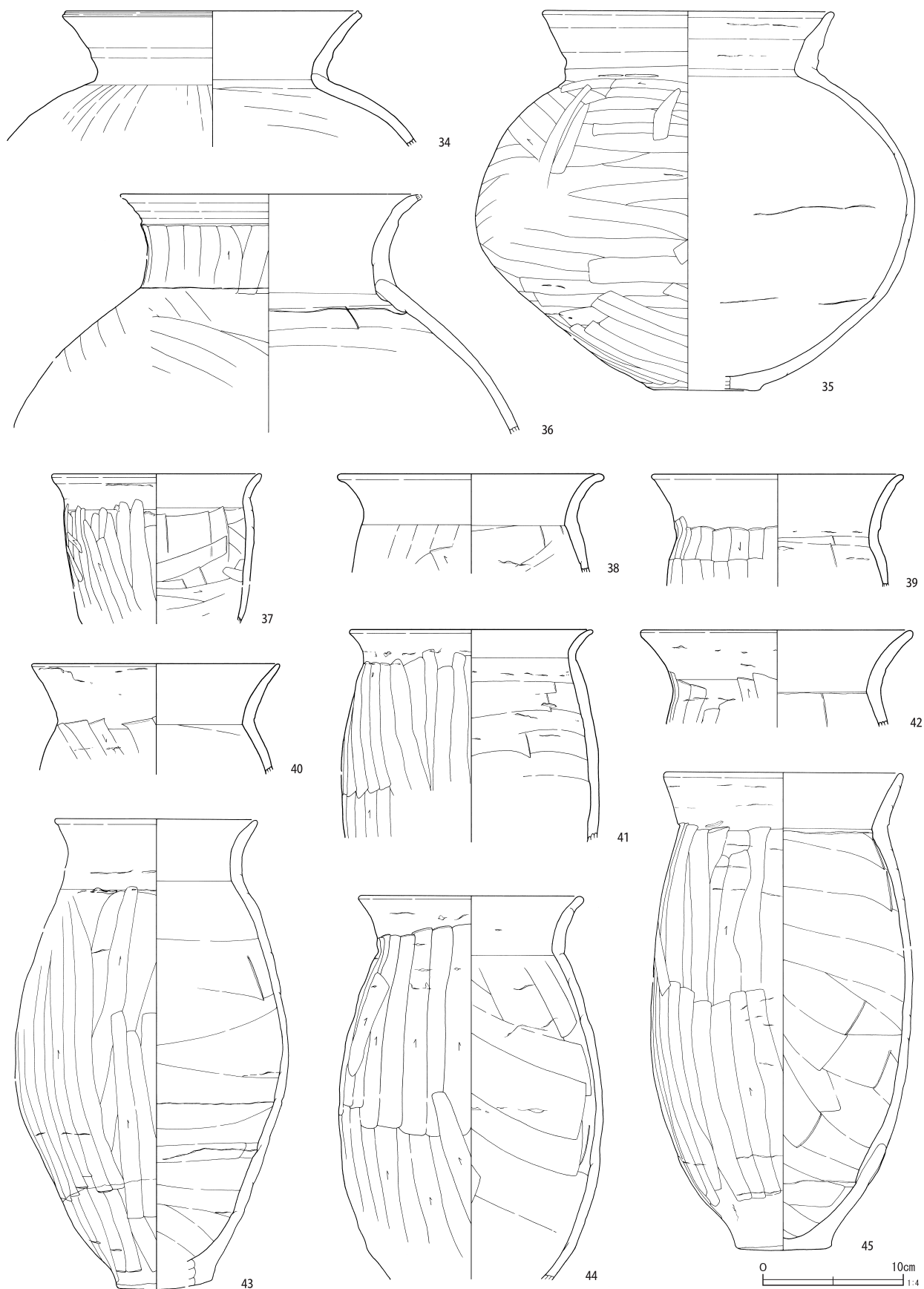
第204図 第97号住居跡遺物出土状況

らは36の大型の二重口縁壺、45・52の長胴甕、54の大型甑がまとめて出土し、南壁寄りの床面からは10の平底坏、27の鉢、35の二重口縁壺等が出土している。坏は新旧のものが混在する。半球形坏（1・9・11）、平底坏（10）、坏蓋模倣坏（2

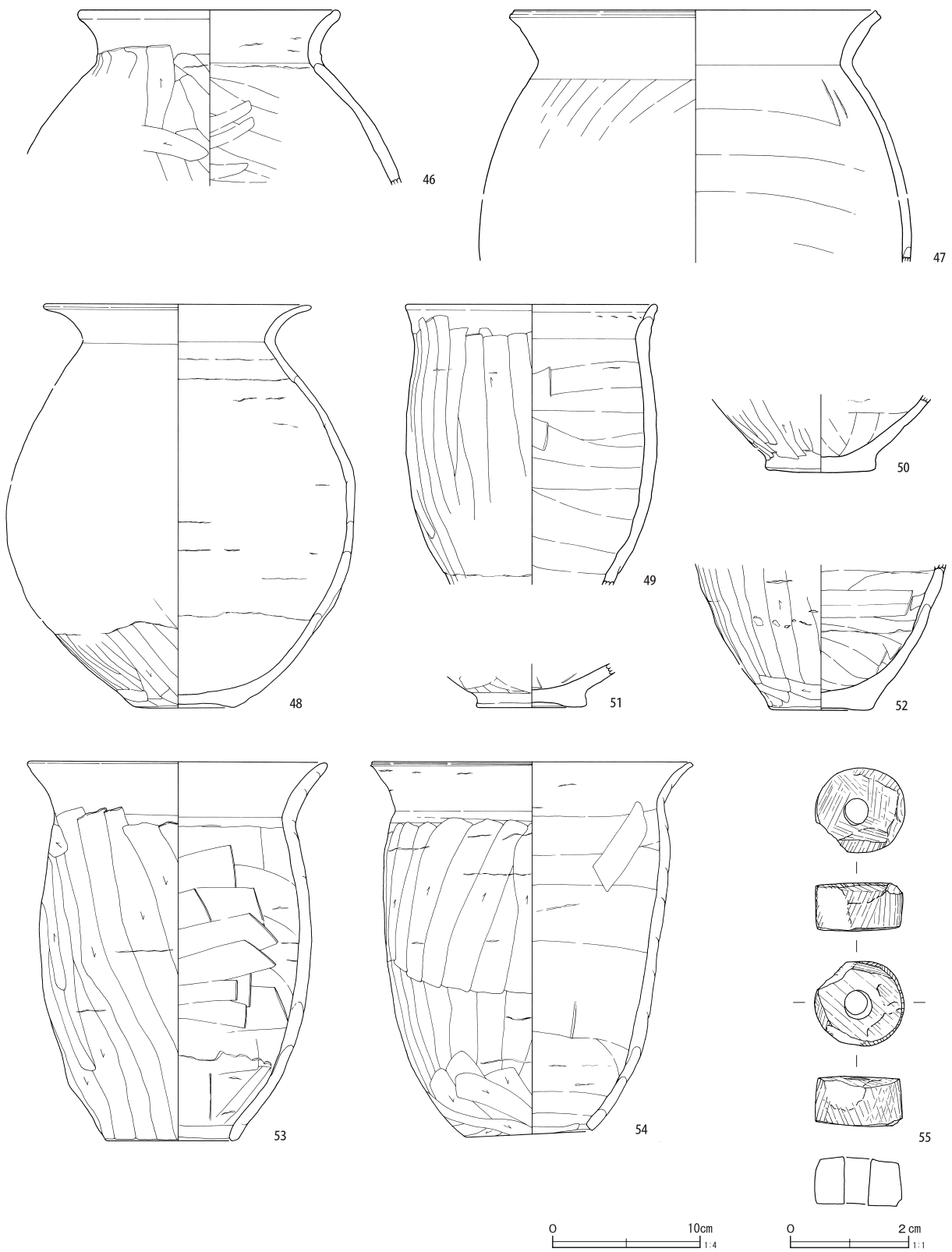
～5・7・8）、坏身模倣坏（6）に大きく分けられ、坏蓋模倣坏や坏身模倣坏の多くは混入の可能性はある。埴は口縁部が短く外折する丸底の和泉型埴（12～17）が主体を占める。高坏は18～21、23の和泉型高坏が主体で、これに短脚高坏（22・



第205図 第97号住居跡出土遺物（1）



第206図 第97号住居跡出土遺物（2）



第207图 第97号住居跡出土遺物（3）

第75表 第97号住居跡出土遺物観察表 (第205~207図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(11.3)	4.0	—	A C H I	25	普通	明赤褐		
2	土師器	坏	(10.5)	3.5	—	A C H I	20	普通	橙		
3	土師器	坏	(12.6)	3.5	—	A H I	10	不良	橙		
4	土師器	坏	(12.8)	3.3	—	C E H I	10	普通	にぶい橙		
5	土師器	坏	(12.3)	2.9	—	A C H I	15	普通	橙		
6	土師器	坏	(11.2)	3.2	—	C E H I	20	普通	黒褐	内外面黒色処理	
7	土師器	坏	(13.1)	3.5	—	A C E G H I	10	普通	橙		
8	土師器	坏	(12.9)	3.4	—	A C E H I	10	普通	明赤褐		
9	土師器	坏	(13.8)	4.9	3.1	A C H	50	普通	橙	No.11	78-1
10	土師器	坏	11.9	4.7	5.5	C E H I	95	良好	橙	No.3・8	78-2
11	土師器	坏	(13.0)	5.0	—	C H I	50	普通	橙		
12	土師器	碗	(11.0)	4.6	—	C E H I	10	普通	橙		
13	土師器	碗	(11.1)	5.5	—	C E H I	25	普通	明赤褐	No.15 カマド	
14	土師器	碗	(10.0)	5.0	—	A C H I	30	普通	赤褐		
15	土師器	碗	(11.9)	5.9	3.8	A C E H I K	70	普通	橙	No.10	78-3
16	土師器	碗	(12.9)	6.0	—	A C H I	25	普通	明赤褐		
17	土師器	碗	13.0	7.1	—	A B C H I	75	普通	明赤褐	No.9	78-4
18	土師器	高坏	16.2	4.7	—	A C H I	50	普通	明赤褐	No.16 カマド	
19	土師器	高坏	17.5	12.4	—	A C E H I	90	良好	明赤褐	No.12・16 カマド	78-5
20	土師器	高坏	15.0	14.5	—	A C E H I	95	普通	橙	No.18 カマド	78-6
21	土師器	高坏	—	7.8	—	A C H I	80	普通	橙		
22	土師器	高坏	—	5.8	—	A C E G H I L	80	普通	橙		
23	土師器	高坏	—	2.8	(12.0)	C E H I	25	普通	橙		
24	土師器	高坏	—	5.6	(8.8)	A E H I	25	普通	橙		
25	土師器	高坏	—	5.8	(13.3)	C E H I	40	良好	橙		
26	土師器	高坏	—	6.1	(10.5)	A B H I	30	不良	橙		
27	土師器	鉢	28.4	11.2	7.9	A B C E G H I L	75	普通	橙	外面黒斑 No.5	
28	土師器	鉢	(11.1)	4.3	(8.6)	C E H I	30	普通	橙	F12G-76	
29	土師器	鉢	(9.0)	3.4	—	C E H I	40	普通	明赤褐		
30	土師器	鉢	(20.9)	5.1	—	C E H I	20	普通	明赤褐	G11G-37	
31	土師器	小型壺	—	5.9	—	A H I K	30	普通	明赤褐		
32	土師器	壺	—	2.3	3.4	C E H I	60	普通	橙		
33	土師器	壺	(18.2)	14.3	—	B C E H I	25	普通	にぶい褐	頸部外面線刻	
34	土師器	壺	20.8	9.6	—	C E H I	30	普通	明赤褐	カマドNo.16・17	
35	土師器	壺	20.7	27.0	(8.2)	C H I	90	普通	橙	外面黒斑 No.8	78-7
36	土師器	壺	—	16.9	—	B E H I L	60	普通	灰黄褐	No.1	
37	土師器	小型甕	14.8	10.6	—	B C E H I	70	普通	橙	外面黒斑	
38	土師器	甕	(18.6)	7.0	—	B C E H I	25	普通	橙		
39	土師器	甕	(17.6)	8.0	—	C E H I	30	普通	橙		
40	土師器	甕	(17.5)	7.8	—	A B C E H I K	20	普通	橙		
41	土師器	甕	17.0	15.0	—	B C H I L	50	普通	橙		
42	土師器	甕	(19.2)	6.9	—	C E H I	30	普通	にぶい褐		
43	土師器	甕	14.2	33.4	6.8	C E H I	50	普通	にぶい赤褐	外面黒斑 F12G-76	79-1
44	土師器	甕	15.5	27.4	—	A C G H	50	普通	灰褐		79-2
45	土師器	甕	(16.8)	34.1	6.8	C E H I	75	普通	にぶい橙	外面胴部下半煤付着 No.2	
46	土師器	甕	(17.6)	11.8	—	A C E H I L	25	普通	にぶい橙		
47	土師器	甕	(24.6)	17.0	—	B C E H I	30	普通	橙	No.1 F12G-76	
48	土師器	甕	18.1	27.3	6.8	B C E G H I	65	普通	橙	底部木葉痕 No.13・16 カマドNo.1	79-3
49	土師器	甕	(16.9)	18.9	—	C E H I	25	普通	褐	黒斑	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
50	土師器	甕	—	5.2	7.4	BCEHI	30	普通	にぶい黄橙	外面煤付着	79-4
51	土師器	甕	—	2.9	7.5	CEGHI	80	普通	明赤褐	No.2	
52	土師器	甕	—	9.8	6.8	BCEHI	40	普通	明赤褐		
53	土師器	甗	20.0	25.7	(9.0)	ACGHIL	60	普通	明赤褐	内外面黒斑 内面黒色	
54	土師器	甗	21.6	25.3	8.6	ACEGHI	50	普通	赤褐		
55	石製品	白玉	長さ1.4cm 幅1.5cm 厚さ0.9cm 重さ2.81g 滑石								88-12

24～26) が伴う。27の大型鉢は壺の胴部下半と同じ作りである。28の平底の鉢は類例の少ないものである。31の小型壺は伴う可能性がある。33～35は二重口縁壺で口縁部形態にバラエティーがある。33の壺の頸部外面には線刻状の文様がある。甕は胴部中位に最大径をもつ長胴甕が主体を占め、46～48の胴張甕が定量で伴う。53・54の大型甗は定型的な砲弾型のものに比べると、口縁部径が大きく器高がやや短い。

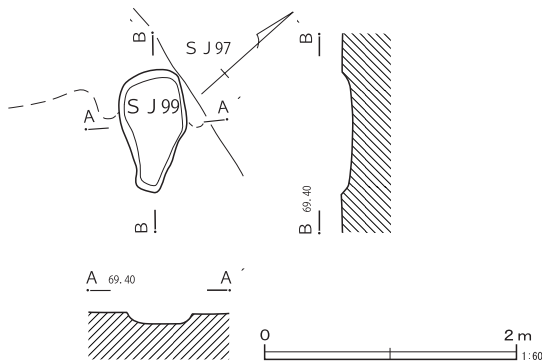
55の滑石製白玉は円柱形を呈し、丁寧な研磨を施している。

住居跡の時期は、坏に新旧の要素が混在し、長胴甕に新しい要素が見られる点に若干問題を残しているが、その他の器種、例えば高坏・埴・壺等には和泉期的な要素が色濃い。また、住居跡埋土中におけるFA層の検出から、5世紀後葉に位置づけておきたい。

第98号住居跡 (欠番)

第99号住居跡 (第208図)

第99号住居跡は調査区北側のG-12グリッドに位置する。住居跡の掘り込みが浅かったため、北西壁に設けられたカマドの一部を検出したにす



第208図 第99号住居跡

ぎない。住居跡認定の根拠にやや乏しい。

カマド燃焼部の底面が僅かに残っていた。残存長0.97m、深さ0.07m、幅0.53mである。主軸方位はN-48°-Wを指す。床面は既に削平されていたため、ピット、壁溝等の付属施設に関しては不明である。

出土遺物がなく時期不詳であるが、カマドをもつことから古墳時代後期に位置づけておきたい。

第100号住居跡 (第209図)

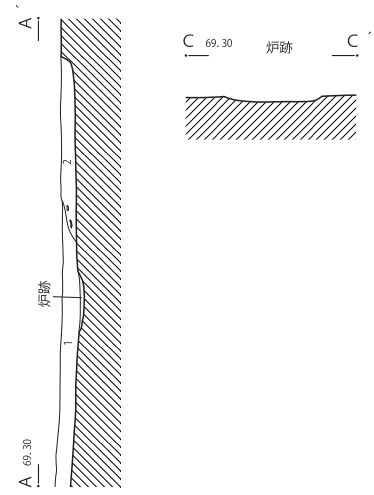
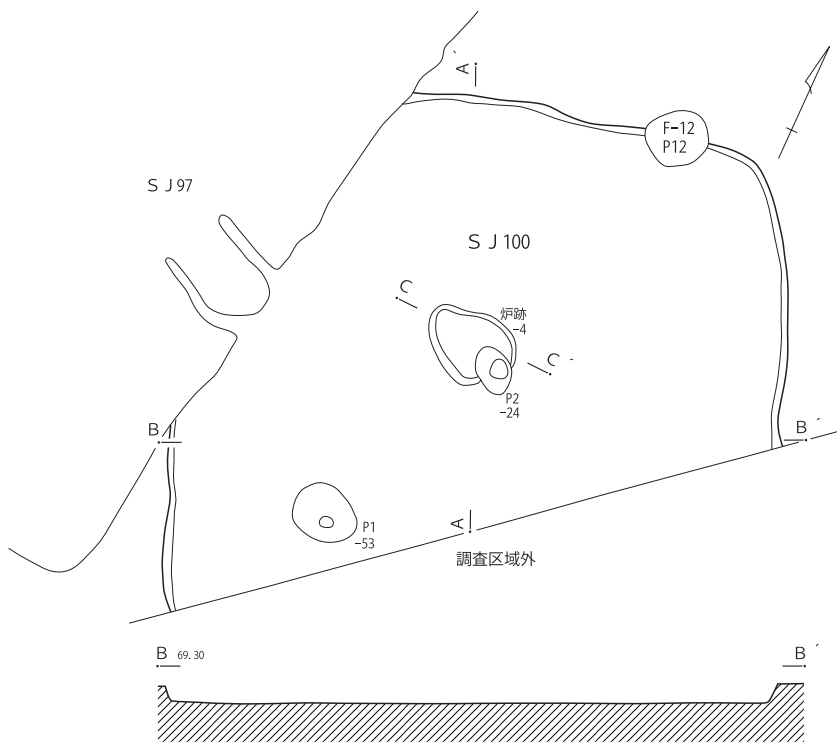
第100号住居跡は調査区北側のF・G-12グリッドに位置する。第97号住居跡と重複し、住居跡南東部の大半は調査区域外に延びている。

平面形は方形と推定される。残存規模は長軸長4.80m、短軸長3.60m、深さ0.12mである。主軸方位はN-21°-Wである。

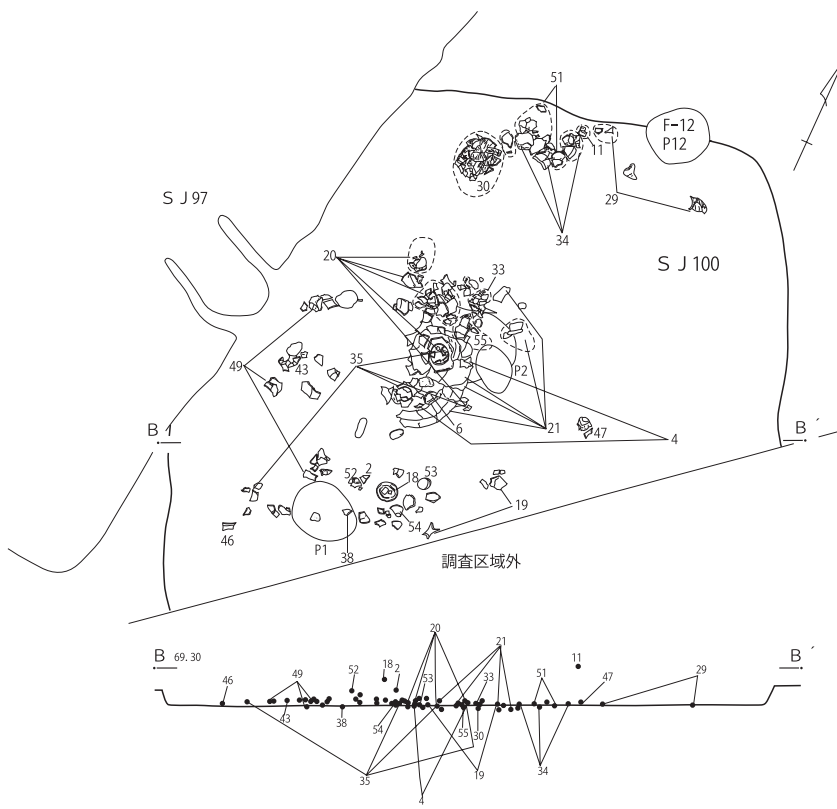
床面は概ね平坦である。埋土は2層に分層され、自然堆積を示す。炉跡は、床面中央に検出された地床炉である。規模は、長径0.76m、短径0.58m、深さ0.04mである。ピットは2本検出された。配置に規則性がなく、住居跡に伴わないものと思われる。貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。

出土遺物は土師器高坏・器台・埴・鉢・壺・小型壺・台付甕・甕・甗・ミニチュアがあり、床面直上からまとめて出土した (第210～212図)。

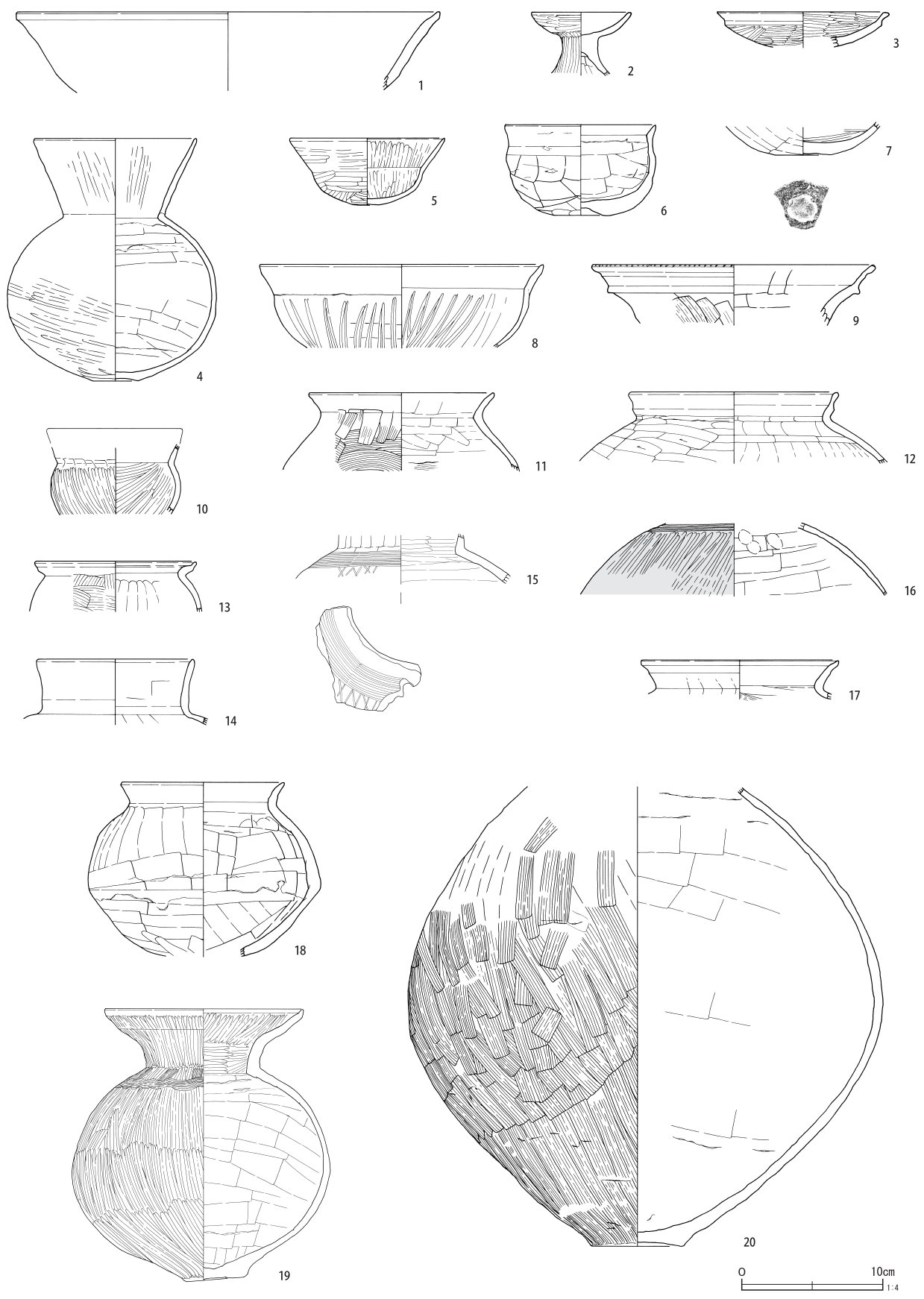
1は高坏と考えられるものである。二重口縁壺の口縁部である可能性もある。風化が著しく、調整は不明である。2・3は小型器台である。2は器受部の穿孔が施されないものである。3は器受部の径が大きいもので、東海地方の模倣品と考えられる。4は小型壺である。大型の埴とも言い得るものである。風化のため調整は不明瞭である。



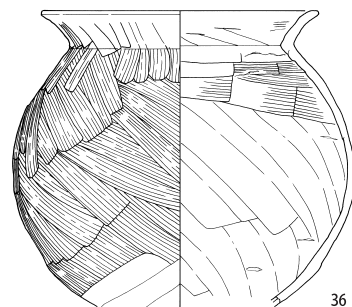
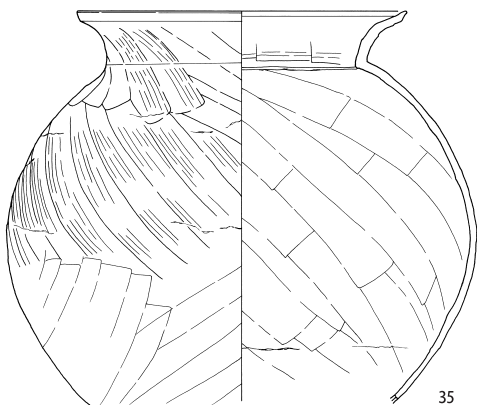
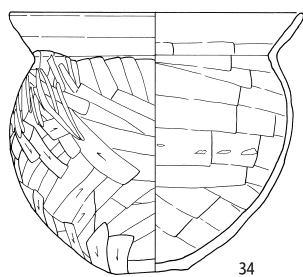
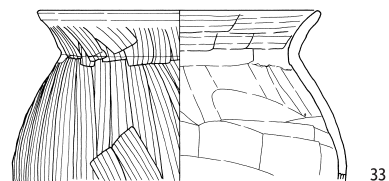
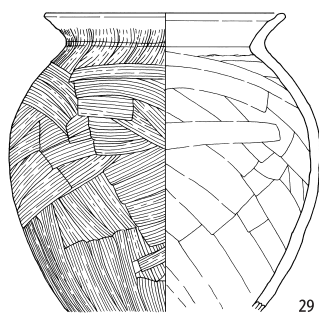
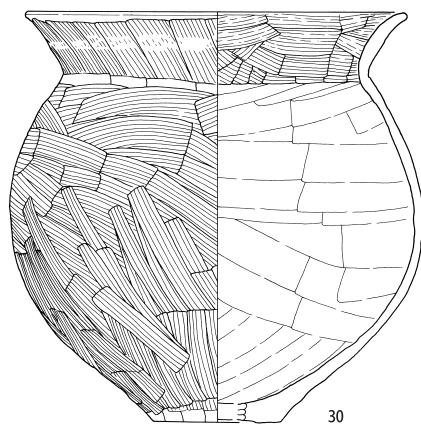
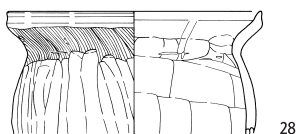
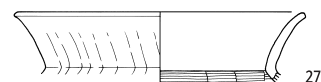
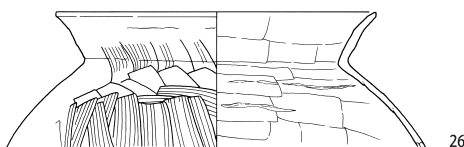
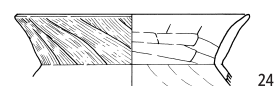
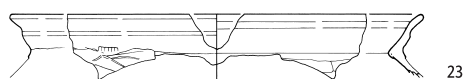
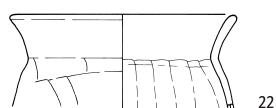
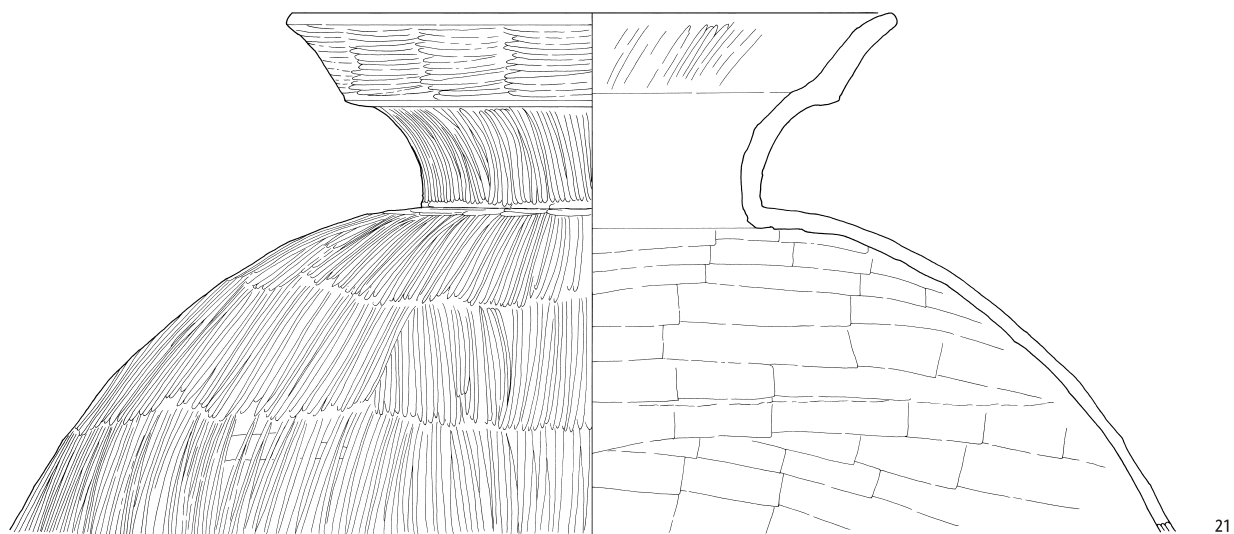
S J 100
 1 灰褐色土 焼土ブロック微量 ローム粒子多量
 2 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック少量
 灰褐色土ブロックやや多量



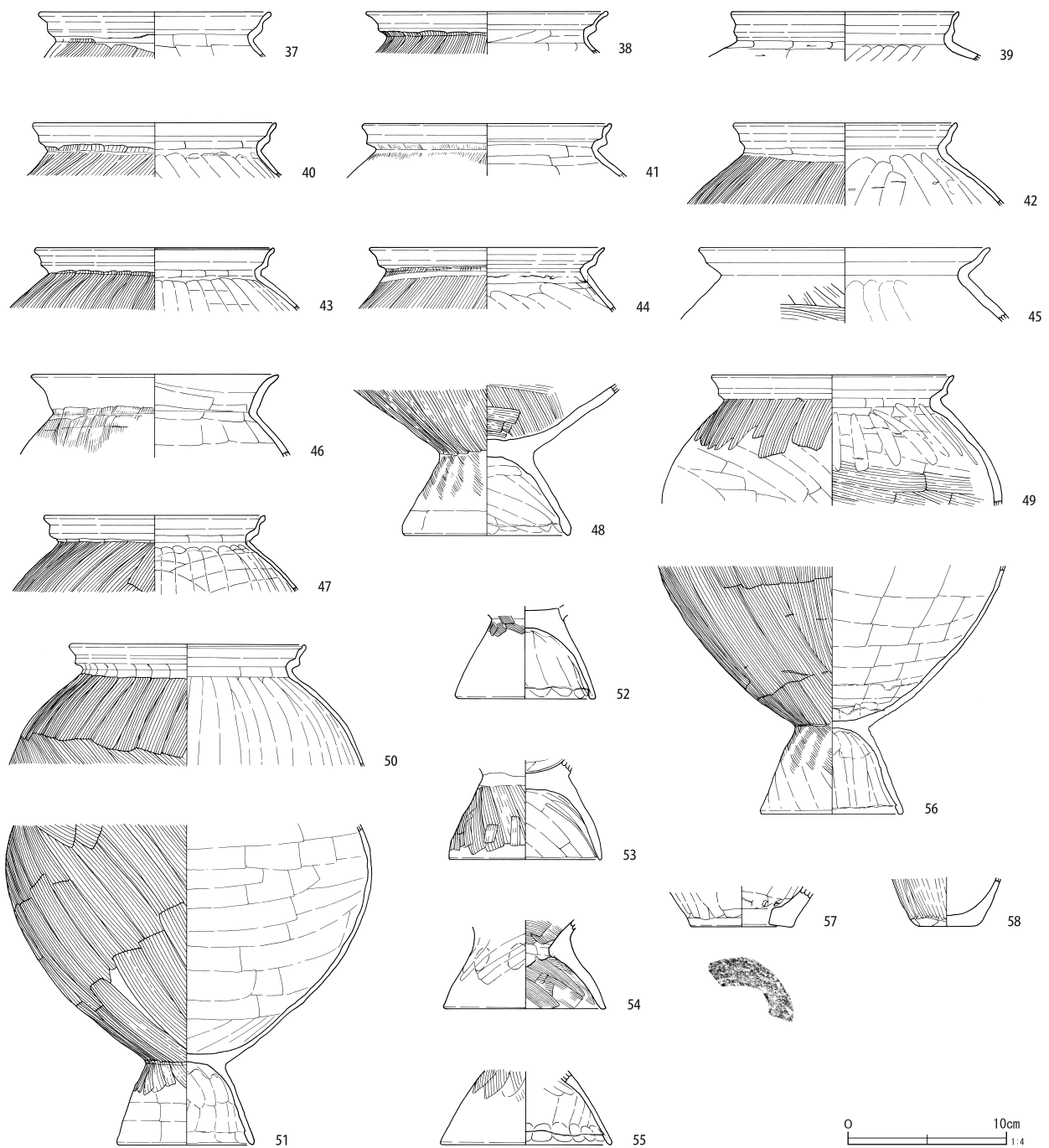
第209図 第100号住居跡・遺物出土状況



第210図 第100号住居跡出土遺物（1）



第211图 第100号住居跡出土遺物(2)



第212図 第100号住居跡出土遺物（3）

5は埴である。口縁部が長く、体部が小さいもので、口縁部と体部の器高がほぼ等しい。底部は丸底ではなく、小さな平底になっている。6・7・8・10・13は鉢で、形態は多様である。7の底部は輪台状である。13はS字状口縁のものである。9・14～16・19～21は壺である。9は二重口縁で、

上段が短い。口縁端部に浅いヘラによる刻み目が施されている。14は口縁部が短く直立し、短頸壺とも言い得るようなものである。15・16は肩部の破片である。15は14条1単位の櫛描平行沈線、ヘラによる山形文が施文されている。16はヘラによる沈線が3条認められる。19は唯一全形の知れ

第76表 第100号住居跡出土遺物観察表 (第210~212区)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	高坏	(29.8)	5.5	—	ACEGHI	5	普通	浅黄橙		
2	土師器	器台	(6.8)	4.3	—	CEHIJ	30	普通	橙	No25	
3	土師器	器台	(12.0)	2.4	—	ACEHI	20	良好	橙	東海的	
4	土師器	小型壺	(11.6)	17.0	3.1	ACDHIJ	50	普通	明赤褐	No1・7	
5	土師器	埴	(11.0)	4.6	1.6	ACEHIJ	40	普通	明赤褐	No49	
6	土師器	鉢	(10.5)	6.3	4.1	ABCEHI	80	普通	明赤褐	No6	80-1
7	土師器	鉢	—	2.3	(4.0)	ACEHK	30	普通	橙		
8	土師器	鉢	(20.0)	5.8	—	ACEHIK	15	普通	橙		
9	土師器	壺	(19.6)	4.2	—	ACEHIJ	15	普通	橙		
10	土師器	鉢	—	4.8	—	ACIK	20	普通	橙		
11	土師器	甕	(12.9)	5.5	—	ACEHI	20	普通	橙	No60	
12	土師器	台付甕	(14.6)	4.9	—	ACEHIK	40	普通	にぶい赤褐	F12G-99	
13	土師器	鉢	(11.4)	3.5	—	ACEI	10	普通	橙	小型S字甕 SJ97	
14	土師器	壺	(11.0)	4.5	—	ACEHI	20	普通	橙		
15	土師器	壺	—	3.6	—	ACEHIK	20	良好	橙	柳ヶ坪型壺 SJ97	
16	土師器	壺	—	5.0	—	ACEHIK	40	良好	にぶい橙	外面赤彩	
17	土師器	甕	(11.9)	2.7	—	ACEHIJK	20	普通	明赤褐		
18	土師器	小型甕	11.4	12.2	—	ACDEGH	80	良好	橙	No26	80-2
19	土師器	壺	14.0	19.1	4.5	ABCEHIK	50	良好	橙	二重口縁壺 No37・40	80-3・4
20	土師器	壺	—	32.4	6.6	ACDEHIJK	80	良好	橙	No3・5・45・47・49	
21	土師器	超大型壺	32.0	27.5	—	ACHIK	70	良好	橙	No2・4・7・48・57	80-5
22	土師器	小型甕	(11.6)	4.9	—	ACEHI	20	普通	明赤褐	内面煤付着	
23	土師器	台付甕	(21.8)	3.3	—	ACEHIK	10	普通	明赤褐	S字甕模倣	
24	土師器	小型甕	(12.2)	3.7	—	ACI	20	良好	明赤褐		
25	土師器	小型甕	(11.4)	4.5	—	ACHIK	20	普通	明赤褐	炉跡	
26	土師器	甕	(17.0)	7.2	—	ACDHI	40	良好	橙		
27	土師器	甕	(15.2)	3.6	—	ACEHI	5	普通	明赤褐		
28	土師器	小型甕	(13.4)	6.4	—	AHEHIJK	30	良好	明赤褐		
29	土師器	甕	(12.6)	15.7	—	ACDEHI	30	良好	橙	No58・59 F12G-88	
30	土師器	甕	19.8	21.6	6.7	CEIK	90	良好	にぶい橙	No68	
31	土師器	甕	(14.8)	4.3	—	ACEHI	10	普通	明赤褐		
32	土師器	甕	(16.3)	4.6	—	AHEHIK	50	普通	橙	G12G-6	
33	土師器	甕	(14.8)	8.9	—	ACDEHI	30	良好	明赤褐	No52	
34	土師器	小型甕	15.3	13.6	3.8	ABCHIK	70	普通	明赤褐	外面煤付着 No61・63・66	81-1
35	土師器	甕	17.4	20.5	—	ACEHI	50	普通	明赤褐	No3・5・8・22	81-2
36	土師器	甕	14.4	15.5	—	ABEHIK	60	普通	橙		81-3
37	土師器	台付甕	(14.6)	2.8	—	ACEHIK	25	普通	にぶい黄橙	S字甕	
38	土師器	台付甕	(15.2)	2.6	—	ACHI	15	良好	灰黄褐	S字甕 No38	
39	土師器	台付甕	(14.3)	3.0	—	ACEHI	20	普通	明赤褐	S字甕 内外面被熱	
40	土師器	台付甕	(15.7)	3.3	—	ACHIK	30	普通	にぶい黄橙	S字甕	
41	土師器	台付甕	(15.4)	3.4	—	ACEHI	40	良好	にぶい黄橙	S字甕	
42	土師器	台付甕	14.0	5.1	—	ABEHIK	70	普通	浅黄橙	S字甕	
43	土師器	台付甕	(15.0)	3.9	—	ABCEHIK	30	普通	黄灰	S字甕 No13	
44	土師器	台付甕	(14.8)	4.0	—	ACEHIK	30	普通	にぶい黄橙	S字甕	
45	土師器	台付甕	(18.0)	4.6	—	ADEGHIJ	15	普通	黒褐	S字甕模倣	
46	土師器	甕	(15.4)	5.1	—	ACEHIJK	25	普通	にぶい褐	No23	
47	土師器	台付甕	13.8	4.7	—	ABCEHIK	50	良好	にぶい黄橙	S字甕 外面煤付着 No41	81-4
48	土師器	台付甕	—	10.0	(10.4)	ACEHI	30	普通	橙	No15 F12G-87	
49	土師器	台付甕	(15.2)	8.2	—	ACEHI	30	良好	にぶい橙	S字甕 外面煤付着 No12・16・19	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
50	土師器	台付甕	(14.8)	7.6	—	ACEIJ	30	普通	灰白	S字甕	
51	土師器	台付甕	—	20.0	8.6	ACDEHI	45	普通	灰褐	S字甕 脚部にぶい橙 No62・65	
52	土師器	台付甕	—	5.7	(8.6)	ACEHIJ	50	普通	橙	No24	
53	土師器	台付甕	—	6.2	9.6	ACDEHIK	100	普通	明赤褐	No28	
54	土師器	台付甕	—	5.6	10.1	ACEGHIK	100	普通	にぶい橙	No31	
55	土師器	台付甕	—	4.6	(10.6)	ACHIK	20	普通	浅黄橙	S字甕	
56	土師器	台付甕	—	15.5	8.9	CEHIK	50	普通	にぶい橙	S字甕 胴部下半内外面煤付着	
57	土師器	甕	—	2.5	(6.4)	ACEHIK	40	良好	明赤褐		
58	土師器	ミニチュア	—	3.0	(3.7)	ACEHK	30	普通	橙		

るもので、二重口縁である。頸部から肩部にかけて縦方向の刷毛目を文様風に等間隔に施し、その上から16条1単位の刷毛目工具による波状文が施文されている。20は胴部のみだが器高32.4cmに及ぶ大型品である。21は口径32cmで、完形ならば器高80cmを超える大型品である。二重口縁で上段が短い。胴部は球形胴になるものと思われる。

18・22・24・25・28・34は小型の甕である。18・34は全形の知れるものである。口縁部は直線的で短く、胴部は球形胴である。18は口径が小さく壺とも言い得るもので、胴部は算盤玉形である。28は端部が摘み上げられている。34の胴部上位には細い工具によりヘラケズリが施されている。11・17・26・27・31～33・46は単口縁の甕の口縁部から胴部上半である。口縁部は短く、直線的に外反する。17・31・32は端部を更に外側に広げている。17・32の端部は摘み上げられ、千種甕を意識しているものと思われる。その他の端部は基本的に丸く収められている。30は唯一全形の知れる甕である。口縁部はやや長く、胴部は球形胴で、底部は突出する。29・35・36は底部を欠失するもので、やや縦長の球形胴を呈する。35の端部は摘み上げられている。

12・23・37～45・47～51はS字状口縁台付甕である。23は頸部で剝離し、下地のヘラケズリが見えている。45は全体に外側に大きく開き崩れが大きい。胴部外面は12・39が頸部にヘラケズリが施されている以外は、羽状の刷毛目が施されている。内面はヘラナデ、もしくはナデが施されている。

48の脚台部の接合はホゾ接合である。52～55は台付甕の脚台部である。いずれも小型で低平である。55は箱形を呈し、外面の刷毛目が等間隔にナデ消され、端部の内面は折り返し状になっており、S字状口縁台付甕の脚台部と考えられる。52の接合部には砂を多く混ぜた粘土が使われている。ホゾとして胴部側から押しこまれている。

57は甕である。底部の穿孔は隅丸方形になっている。58はミニチュアで、外面はヘラ磨きである。

住居跡の時期は、古墳時代前期の五領期後半の古相に位置づけられる。

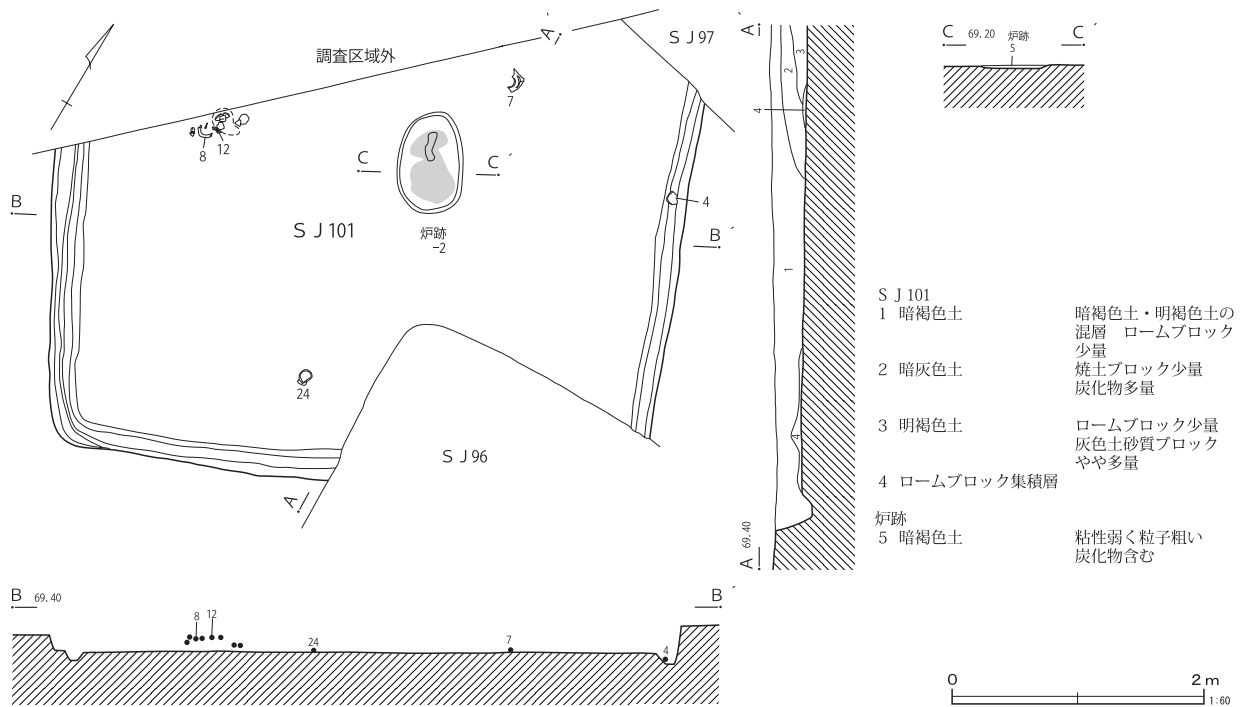
第101号住居跡 (第213図)

第101号住居跡は調査区北側のG-11グリッドに位置する。第96・97号住居跡と重複し、それらに切られていた。住居跡の北西側は調査区外に延びる。東側へ約6mに第100号住居跡、南へ約3mに第94号住居跡が隣接しており、古墳時代前期の住居跡群を構成している。

平面形は隅部の明瞭な方形の住居跡と推定される。残存規模は長軸長4.96m、短軸長3.26m、深さ0.13mである。主軸方位はN-26°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は大きく4層に分層される。第2層に炭化物の顕著な混入が観察され、人為的な埋め戻しの可能性もある。

炉跡は床面のほぼ中央に設けられていた。平面楕円形の地床炉で、長径0.80m、短径0.52m、深さ0.02mである。炭化物を含む暗褐色土が薄く堆積し、火床面は被熱により赤色硬化していた。壁溝は残存する壁際を全周し、幅15～24cm、深さ4



第213図 第101号住居跡

～13cmである。ピットは検出されなかった。

出土遺物は土師器壺・埴・壺・高坏・器台・甕・台付甕等がある(第214図)。7の壺と24のS字甕の脚台部は床直から、その他は床面から少し浮いた状態で出土した。7の壺は二重口縁の段の下端に粘土を貼付して複合口縁風に仕上げている。断面三角形の棒状浮文が2本貼付される。破片のためいくつかの単位が貼付されたかは不明である。同様に27の壺は斜めに細い棒状浮文が貼付されている。剥離しているため詳細は不明である。8の壺は頸部に断面が丸い突帯が貼付される。刷毛目工具による押捺が施されている。9・16・17・20は単口縁の甕の口縁部、10は二重口縁壺の口縁部で、双方とも端部が摘み上げられている。23～26は台付甕の脚台部である。いずれも小型で低平である。23・24・26は箱形を呈し、外面の刷毛目が等間隔にナゲ消され、端部の内面は折り返し状になっており、S字状口縁台付甕の脚台部と考えられる。24の天井部には砂を混入した粘土が使われている。26の剥離した接合面には指頭痕が残る。

住居跡の時期は、古墳時代前期の五領期後半の古相に位置づけられる。

第102号住居跡(第215図)

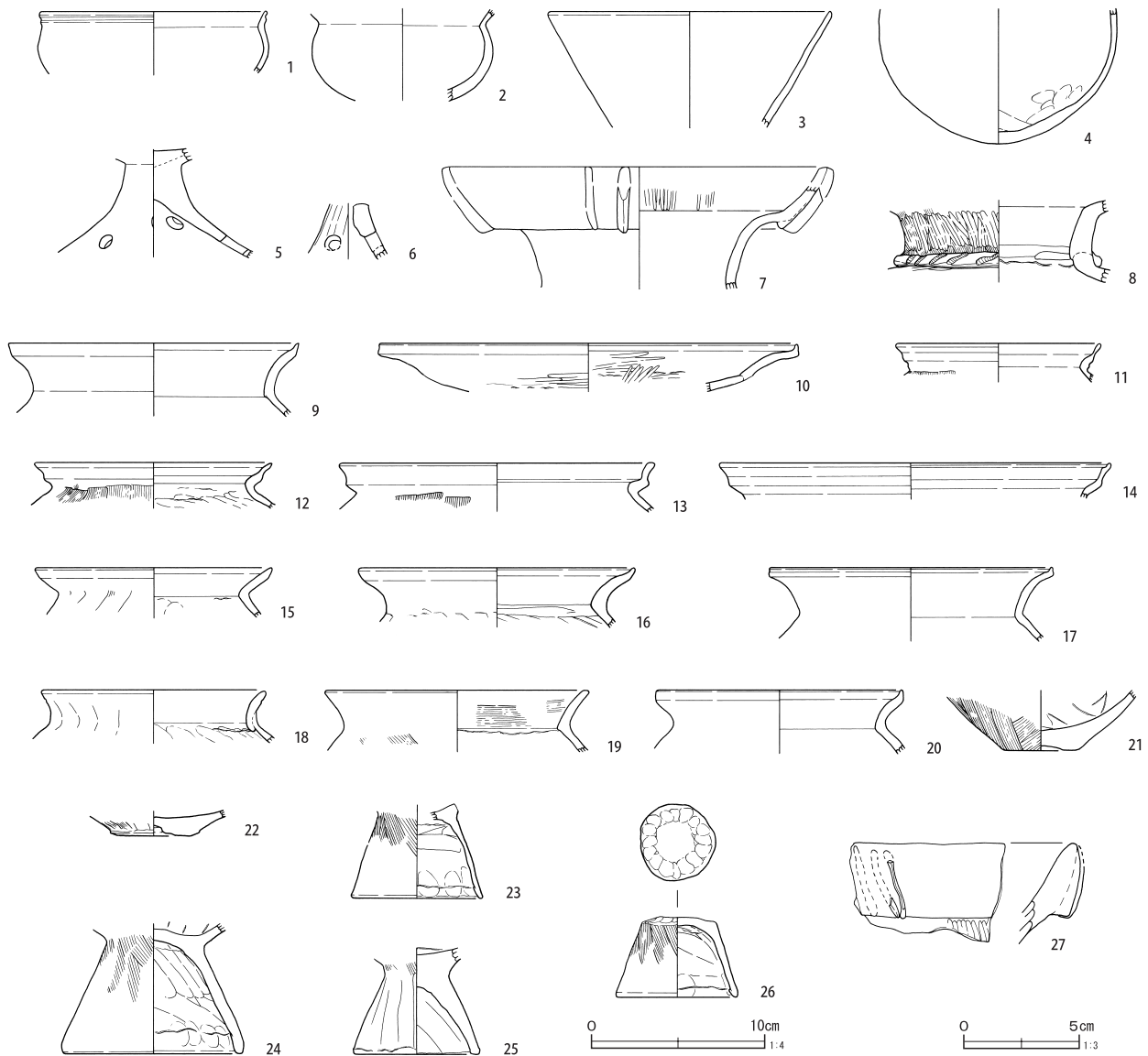
第102号住居跡は調査区北側のF-12グリッドに位置する。大半が調査区外に延び、南東隅部付近のみを検出した。南西側に第97号住居跡が重複し、南壁の一部を削平する。

平面形は不明であるが方形系と推定される。残存規模は長軸長2.18m、短軸長1.27m、深さ0.25mである。主軸方位はN-16°-Wを指す。

床面は中央部がやや高く、壁際に向かって緩やかに傾斜している。壁溝、ピット等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は南東隅部寄りの壁際から土師器埴2個体が口縁を接するように床面上に置かれていた(第215図)。1は外面に赤彩を施した埴で、胴部に焼成後の穿孔がある。2は広口の埴で外面に入念なヘラミガキを施す。

住居跡の時期は、古墳時代前期の五領期後半の新相に位置づけられる。

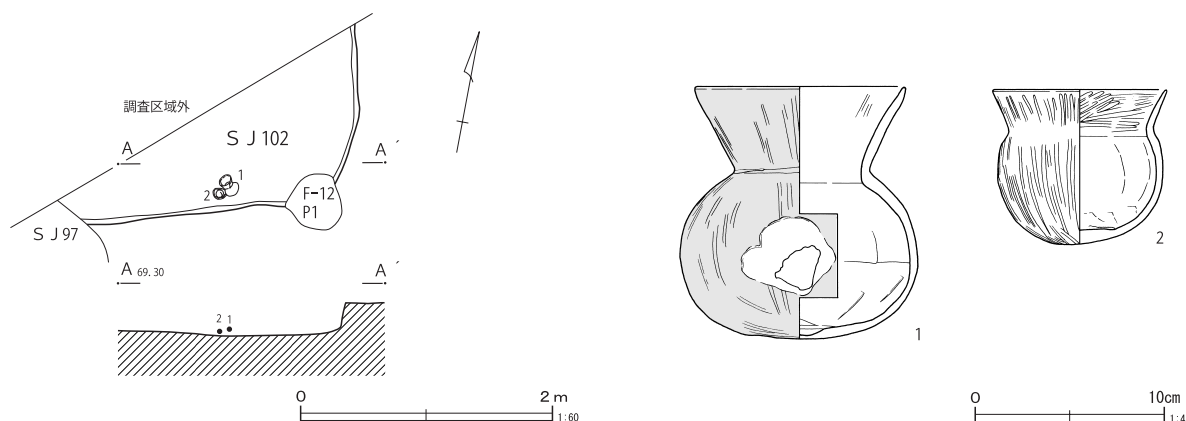


第214図 第101号住居跡出土遺物

第77表 第101号住居跡出土遺物観察表 (第214図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	碗	(13.1)	3.6	—	CEHI	15	普通	橙		
2	土師器	碗	—	5.3	—	CEHI	30	普通	橙		
3	土師器	柑	(16.2)	6.7	—	ABCHIK	15	普通	橙		
4	土師器	柑	—	7.7	—	ABDEHI	20	普通	にぶい褐	No. 2	
5	土師器	高坏	—	6.1	—	CHIK	40	不良	橙		
6	土師器	器台	—	3.2	—	ACEHI	65	普通	明赤褐		
7	土師器	壺	—	6.0	—	ABCEHIK	30	普通	橙	断面三角形棒状浮文 2 条 貼付 No. 1	
8	土師器	壺	—	4.7	—	ACEHI	40	普通	橙	No. 6	
9	土師器	壺	(16.7)	4.1	—	CEHK	15	普通	橙		
10	土師器	壺	(24.0)	2.7	—	AHIK	10	普通	橙		
11	土師器	台付甕	(11.6)	2.2	—	CEHIK	20	普通	灰褐	S字甕	
12	土師器	台付甕	(13.5)	2.6	—	ACDEHI	15	普通	にぶい黄橙	S字甕 No. 7	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
13	土師器	台付甕	(17.8)	2.8	—	CDEH	10	良好	にぶい黄橙	S字甕	
14	土師器	台付甕	(22.5)	2.0	—	A E H I K	20	普通	橙	S字甕	
15	土師器	甕	(13.6)	2.9	—	A B C D H I	20	普通	明赤褐		
16	土師器	甕	(15.8)	3.4	—	C E H K	20	普通	明赤褐		
17	土師器	甕	(16.2)	4.2	—	A B C H I K	10	普通	にぶい赤褐		
18	土師器	甕	(12.9)	3.0	—	C D E H	30	普通	橙		
19	土師器	甕	(15.3)	3.5	—	D E H	15	普通	明赤褐		
20	土師器	甕	(12.0)	3.6	—	C E H I	20	普通	橙		
21	土師器	甕	—	3.5	(4.0)	C E H	30	普通	灰赤		
22	土師器	甕	—	1.4	—	C E H I K	80	普通	橙		
23	土師器	台付甕	—	5.3	(7.4)	A B C E H I K	25	普通	橙		
24	土師器	台付甕	—	7.5	10.0	C D E H	70	良好	明黄褐	S字甕 No.3	
25	土師器	台付甕	—	6.1	(7.0)	C E H I K	40	普通	にぶい橙		
26	土師器	台付甕	—	4.6	(7.0)	A D E H I	45	普通	にぶい橙		
27	土師器	壺	—	4.3	—	A C D H I	5	普通	橙		



第215図 第102号住居跡・出土遺物

第78表 第102号住居跡出土遺物観察表 (第215図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	埴	11.0	13.2	—	B C D H	95	良好	橙	外面赤彩 底部外面黒斑 No.1	81-5
2	土師器	埴	9.1	8.1	—	A C D H I	100	普通	明赤褐	No.2	81-6

第103号住居跡 (第216図)

第103号住居跡は調査区北側のF-13グリッドに位置する。住居跡東半部は調査区域外に延びる。重複の著しい調査区中央部から南側に比べると、調査区北側は住居跡の分布がやや散漫となり、本住居跡は単独で位置する。

住居跡の北半部が削平され、南西隅部付近を検出しただけであるが、方形系の平面形と推定される。残存規模は、長軸長2.42m、短軸長0.94m、深さ0.11mである。主軸方位はN-3°-Eを指す。

床面は概ね平坦である。壁溝はない。ピットは西壁に沿うように並んで2本検出された。直径40cm前後、深さ12~22cmである。住居跡に伴うかどうかは明確でない。出土遺物はまったくないため、住居跡の時期は不明である。

第104号住居跡 (第217図)

第104号住居跡は調査区中央部北寄りのH-10グリッドに位置する。第88・105号住居跡と重複し、両方に切られている。住居跡の北東側にある第88号住居跡の調査の際に、床面部分を下げすぎ

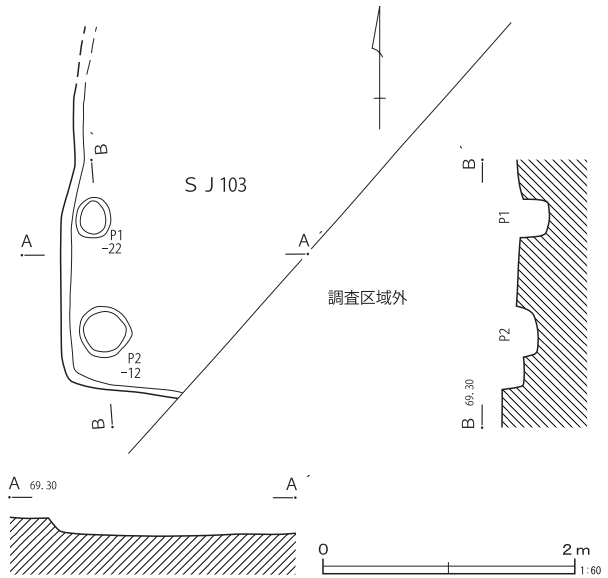
てしまったため、南西壁部分のカマドと貯蔵穴を検出したにすぎない。

平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長2.48m、深さ0.08mである。主軸方位はN-105°-Wを指す。

カマドは南西壁の中央やや左寄りに設けられていた。燃烧部が壁を切り込まないタイプである。カマド袖部の先端が削平され、燃烧部残存長0.75m、カマド袖幅0.72m、燃烧部底面幅0.27mである。燃烧部底面中央やや奥壁寄りに高坏（4）を逆に置いて支脚として用いていた。カマド埋土は第2・3層が天井崩落土、第4・5層が使用面、第6層が火床面に相当する。カマド袖は黄褐色土を用いて構築され、焚口部に向かって僅かに開く形態である。

床面は概ね平坦である。埋土は明褐色土を主体とする。貯蔵穴は、カマド左脇の住居跡南隅部に検出された。平面楕円形を呈し、長径0.94m、短径0.70m、深さ0.10mである。

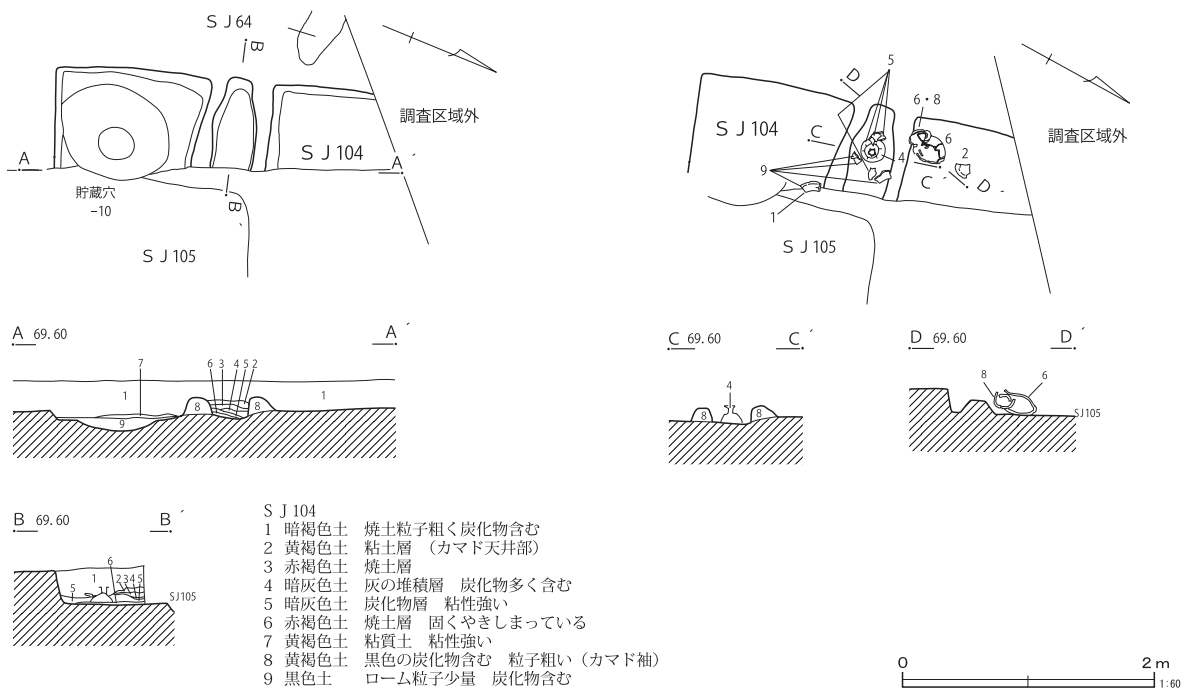
出土遺物は土師器 坏・高坏・鉢・甕・壺等がある（第218図）。カマド燃烧部底面に4の高坏が転



第216図 第103号住居跡

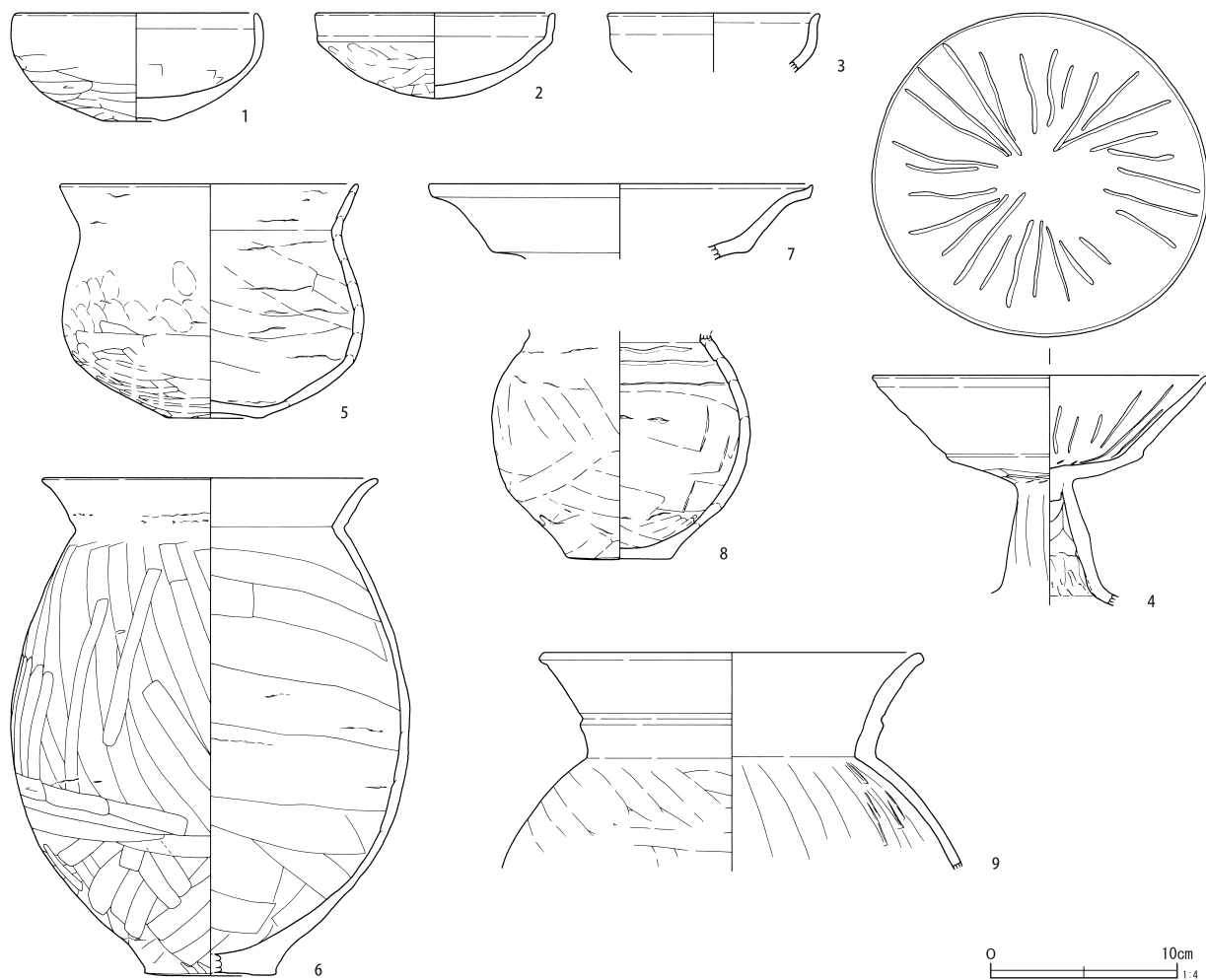
用支脚として用いられていた。内面にやや疎らに放射状暗文をもつ和泉型高坏である。この他にカマド内部からは5の鉢と9の二重口縁壺が出土している。また、カマド袖右脇からは6の甕の上に8の小型壺が載せられた状態で出土している。

1は底部に小さな平底をもつ内湾口縁の坏、2は典型的な坏蓋模倣坏出現以前の模倣坏、3は口



第217図 第104号住居跡・遺物出土状況

- S J 104
- 1 暗褐色土 焼土粒子粗く炭化物含む
 - 2 黄褐色土 粘土層 (カマド天井部)
 - 3 赤褐色土 焼土層
 - 4 暗灰色土 灰の堆積層 炭化物多く含む
 - 5 暗灰色土 炭化物層 粘性強い
 - 6 赤褐色土 焼土層 固くやきしまっている
 - 7 黄褐色土 粘質土 粘性強い
 - 8 黄褐色土 黒色の炭化物含む 粒子粗い (カマド袖)
 - 9 黒色土 ローム粒子少量 炭化物含む



第218図 第104号住居跡出土遺物

第79表 第104号住居跡出土遺物観察表（第218図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	12.7	5.7	3.3	CEH	70	普通	橙		81-7
2	土師器	坏	(12.6)	4.5	—	AHIK	60	普通	明赤褐	No. 3	82-1
3	土師器	坏	(11.1)	3.1	—	CEHI	20	普通	橙		
4	土師器	高坏	17.6	12.3	—	A EHI	90	普通	橙	坏部内面放射状暗文	No.12 82-4・5
5	土師器	鉢	(15.8)	12.4	4.4	ACHI	30	普通	橙	No. 5～8 カマド	
6	土師器	甕	(17.7)	26.5	7.1	CEHIK	50	普通	にぶい橙	No. 1・2	82-2
7	土師器	壺	(20.6)	4.0	—	CEHIK	15	普通	浅黄橙		
8	土師器	小型壺	—	12.1	5.6	ABCDEHI	80	普通	にぶい橙	No. 2	
9	土師器	壺	(20.1)	11.6	—	DEH	30	普通	明赤褐	No. 4・9～11 SJ95	82-3

縁部が短く外反する坏である。5は胴部最大径を中位にもつ広口の鉢で、底部はやや上げ底気味である。6は長胴甕で最大径を胴部中位にもつものの、胴の張りは相対的に弱い。7は五領期の有段口縁壺で混入と考えられる。8の小型壺としたものは口縁部を欠損するため、器種の判別が難しい。

小型甕の可能性も考えられる。9の二重口縁壺は口頸部が直立気味で、口縁部上半が長く延びるものである。

住居跡の時期は、典型的な模倣坏出現以前の5世紀後葉に位置づけられる。本遺跡におけるカマド普及期の具体相を示す事例として注目される。

第105号住居跡 (第219図)

第105号住居跡は調査区中央部北寄りのH-10グリッドに位置する。第83・88・104号住居跡と重複し、第104号住居跡を切り、第83・88号住居跡に切られる。特に南側に位置する第83号住居跡によってカマド及び床面が大きく削平される。

平面形は、南北方向に長い長方形と推定される。残存規模は、長軸長4.42m、短軸長3.80m、深さ0.32mである。主軸方位はN-109°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は暗褐色土を主体とし、自然堆積を示す。

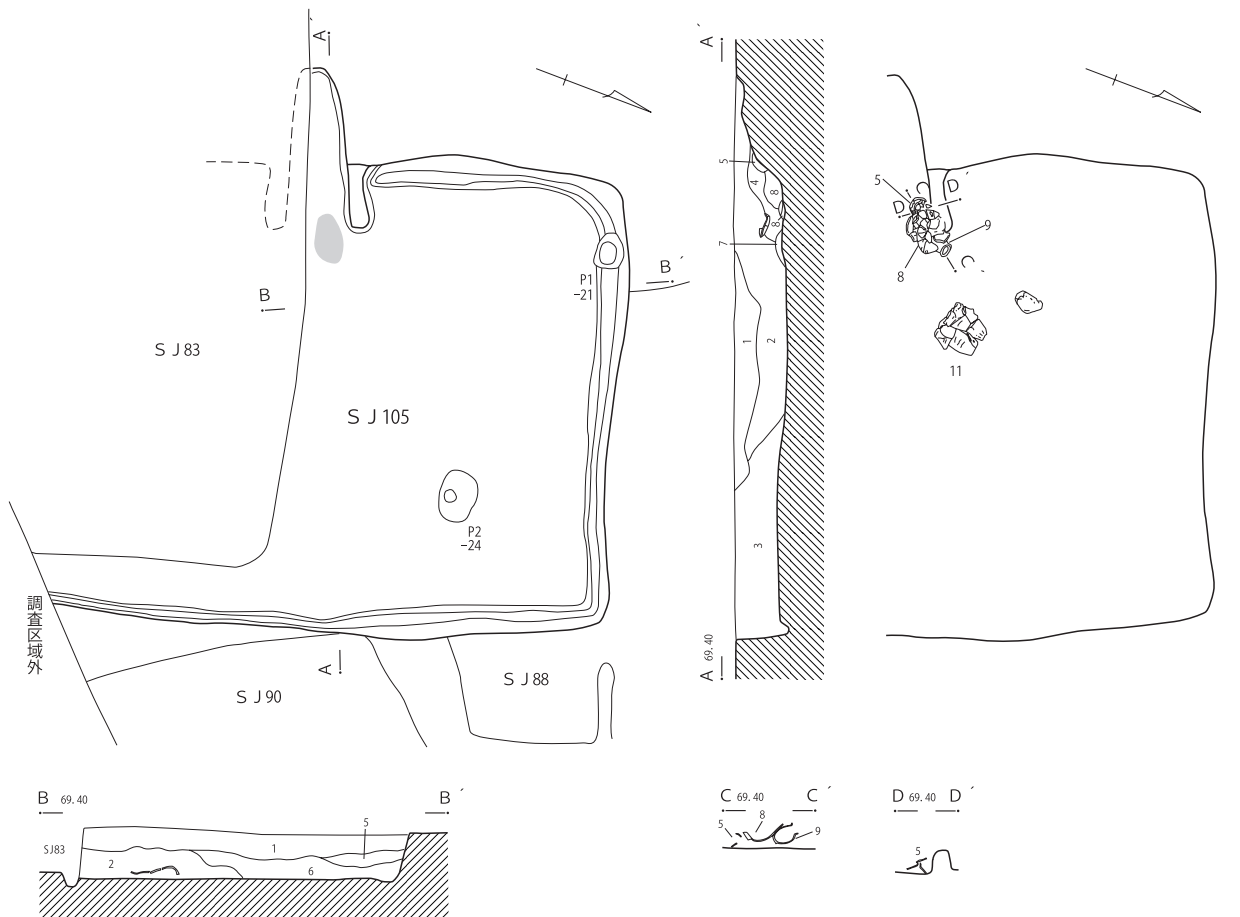
カマドは西壁の中央部に設けられ、カマドの南

半部が削平されていた。カマドの形態は燃焼部を壁内に収め、壁と一体になって煙道部へ立ち上がる。全長1.30m、深さ0.40m、燃焼部長0.55m、煙道部長0.75mである。被熱により赤色硬化した部分が焚口に見られる。カマド袖部は明褐色土を用いて構築されていた。

ピットは2本検出された。P2は位置的に支柱穴の可能性も考えられる。壁溝はほぼ全周し、幅8~26cm、深さ7cmほどである。

出土遺物は土師器坏・高坏・小型甕・甕・甑、須恵器坏身等がある (第220図)。

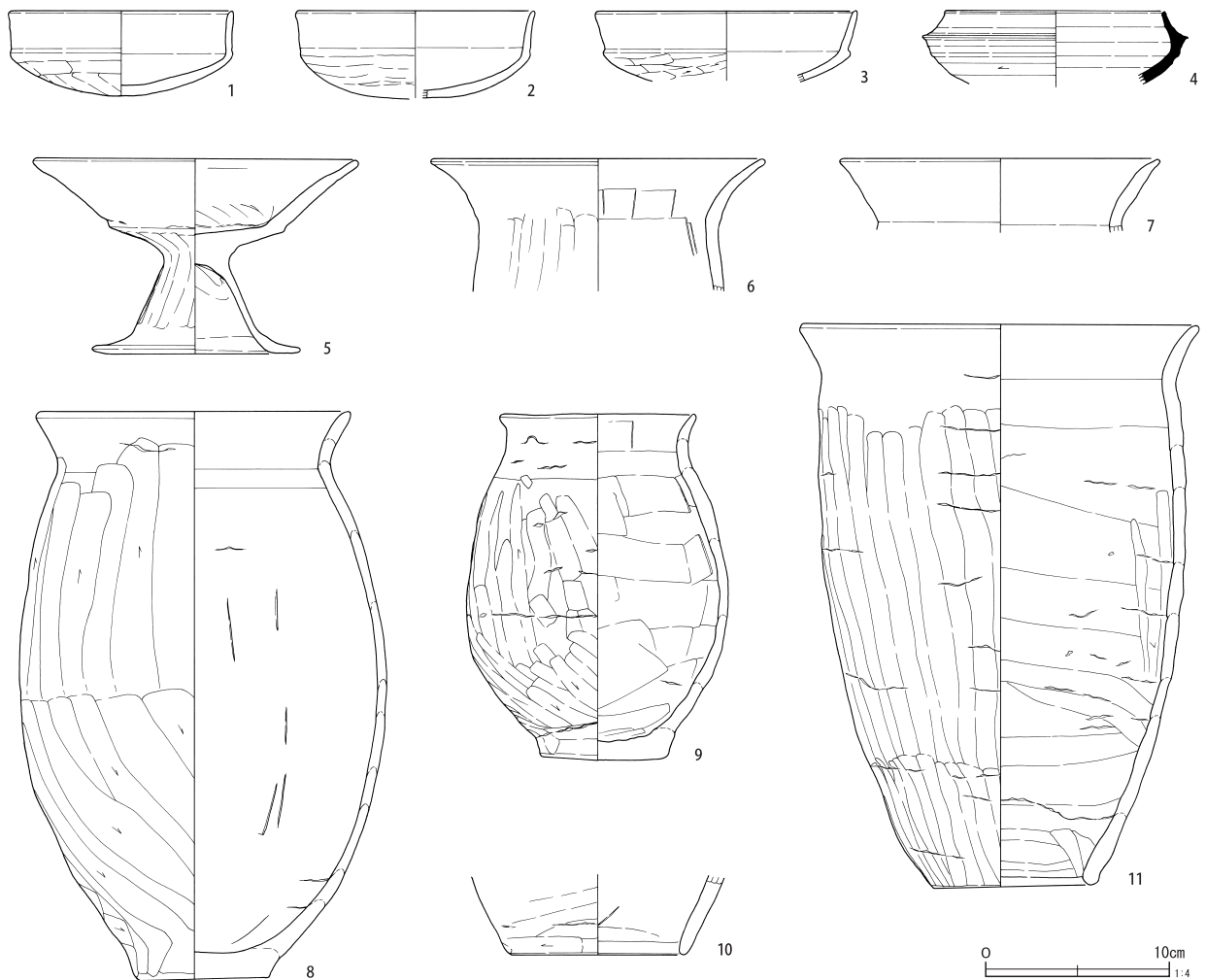
遺物の出土状況は、カマド右袖にもたれ掛かる



- | | |
|-------------|--------------------------|
| S J 105 | |
| 1 暗褐色土 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色土 | ロームブロック多量 粘性強く粒子粗い 炭化物なし |
| 3 暗褐色土 | 焼土粒子含む ローム粒子少量 |
| 4 褐色土 | ロームブロックやや多量 |
| 5 褐色土 | 焼土ブロック少量 ローム粒子やや多量 |
| 6 灰褐色土 | 焼土ブロックやや多量 |
| 7 焼土ブロック集積層 | |
| 8 明褐色土 | 焼土ブロック・灰極多量 ローム粒子少量 |

0 2m 1:60

第219図 第105号住居跡・遺物出土状況



第220図 第105号住居跡出土遺物

第80表 第105号住居跡出土遺物観察表（第220図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.0)	4.6	—	ACHIK	65	普通	橙		82-6
2	土師器	坏	(12.8)	4.6	—	CHI	20	普通	橙		
3	土師器	坏	(14.0)	3.7	—	BCHIK	20	普通	橙		
4	須恵器	坏身	(11.9)	4.0	—	E I J K	30	良好	灰	藤岡産	
5	土師器	高坏	17.3	10.6	11.3	ACEHI	95	普通	橙	No.3	82-7
6	土師器	甕	(18.0)	7.2	—	ABCDHI	15	普通	橙		
7	土師器	甕	(17.0)	3.9	—	ACEHIK	10	良好	にぶい橙		
8	土師器	甕	16.8	30.9	7.0	ACGI	70	普通	灰褐	カマド No.2	83-1
9	土師器	小型甕	10.4	18.7	7.0	ABHIK	100	普通	橙	No.1	83-3
10	土師器	甕	—	4.3	(9.2)	ABCHIK	20	普通	褐		
11	土師器	甕	21.2	30.6	8.5	ACEHIK	100	普通	橙	No.4	83-2

ように5の高坏、8の甕、9の小型甕がまとまっていた。また、カマドの手前からは11の甕が潰れた状態で出土しているほか、円礫が床面上に置か

れていた。

1～3は模倣坏で、口縁部が直立するタイプと外傾するタイプがある。4の須恵器坏身は蓋受部

が水平方向に短く突出するもので、藤岡産と考えられる。時期的にはTK10型式併行期に位置づけられる。5は和泉型高坏で、脚部は短脚で大きく開く。8の甕は胴部中位に最大径をもっているが、胴の張りも弱く長胴化が進行している。9は小型甕で、胴の張りは弱い。11の大型甕は、砲弾形で器高の高いものである。内面は丁寧にナデを施した後、縦位のヘラミガキを施している。

住居跡の時期は、模倣坏や長胴甕、大型甕等の特徴及び伴出した須恵器坏身から6世紀前葉に位置づけられる。

第106号住居跡 (第172図)

第106号住居跡は調査区中央部北寄りのI-9・10グリッドに位置する。調査区内で最も重複の著しい部分にあたる。第77・78・87号住居跡や第57号溝跡と重複し、それらに切られている。僅かに残存した床面と西壁際を巡る壁溝によって住居跡と認定したものである。

重複が著しく、平面形を復元することは難しい。東西方向に残る床面の長さ3.20m、南北方向の床面の長さ1.70mである。確認面から床面までの深さは4cmほどである。主軸方位は西壁を基準に採れば、N-7°-Eを指す。

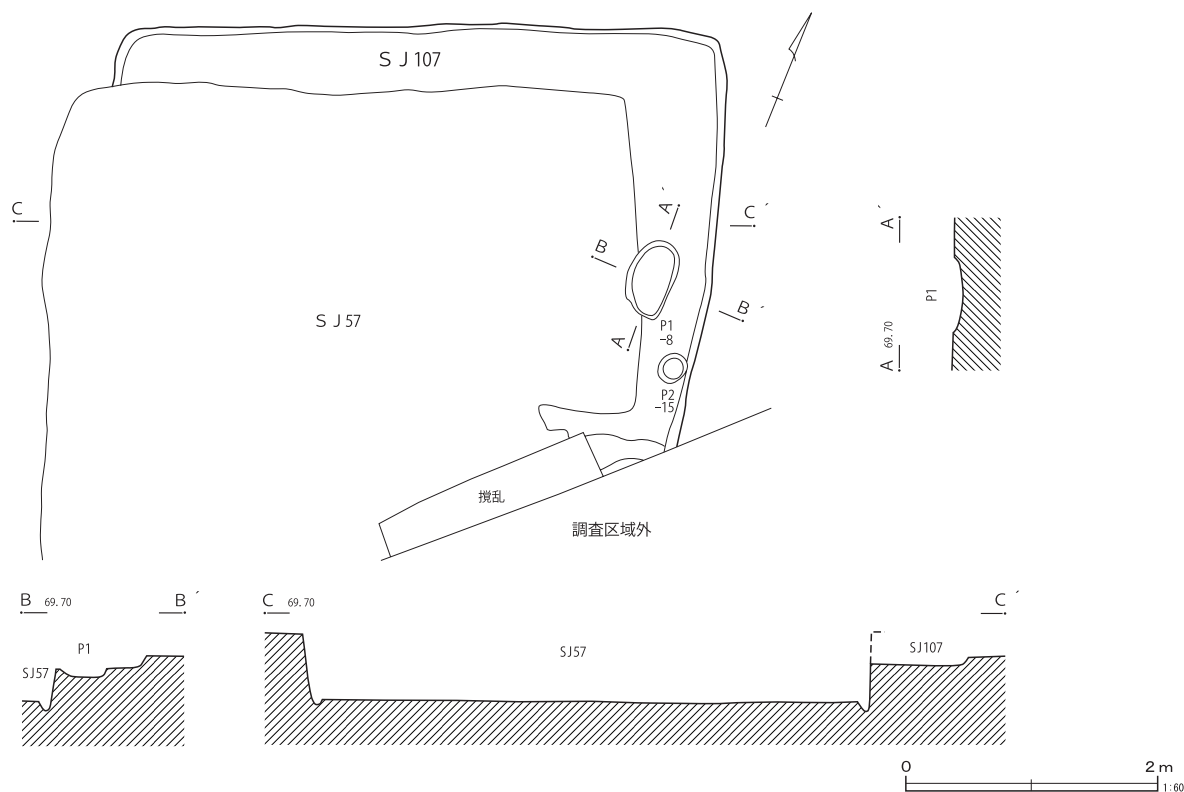
床面はやや凹凸をもつ。壁溝は幅37cm、深さ7cmほどである。ピット等は検出されなかった。

出土遺物はまったくなく、時期を判断する材料に乏しい。ただ重複関係から見ると、典型的な模倣坏出現以前の土器様相を示す第87号住居跡に先行していることから、古墳時代前期の五領期に遡る可能性が考えられる。

第107号住居跡 (第221図)

第107号住居跡は調査区中央部のJ-8・9グリッドに位置する。第56・57号住居跡と重複し、住居跡の北壁から東壁部分を残す。住居跡の南側は調査区域外に延びている。

平面形は方形と推定される。残存規模は長軸長



第221図 第107号住居跡

4.82m、短軸長3.38mで、一辺5m前後の住居跡であろう。確認面からの深さは8cmと浅い。主軸方位はN-20°-Wを指す。

床面は平坦で、壁溝はない。ピットは東壁際に2本検出された。P1は長径0.62m、短径0.36mの楕円形で、皿状に浅く掘り込まれている。P2は直径0.24mほどで深さ0.15mである。

出土遺物がなく時期は不明であるが、遺構の重複関係から古墳時代前期の五領期の所産と考えられる。

第108号住居跡 (第222図)

第108号住居跡は調査区中央部のJ-8グリッドに位置する。大半が調査区外に延びており、僅かに南隅部付近を検出した。第50号住居跡と第59号住居跡に挟まれた空閑地にあり、調査区内における他遺構との重複はない。

平面形は方形系と推定されるが、隅部がやや鋭角的なため住居跡でない可能性も残る。残存規模は長軸長1.80m、短軸長0.80m、深さ0.08mである。主軸方位はN-24°-Eを指す。

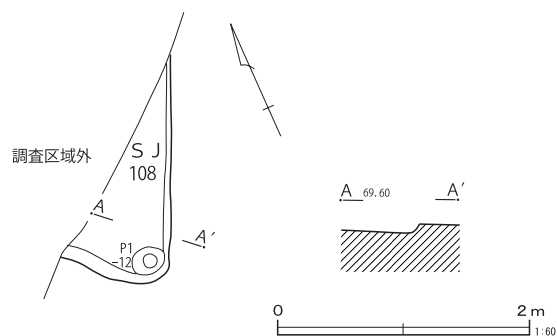
床面は平坦である。壁溝は検出されなかったが、隅部からピットが検出された。P1の規模は、長径0.28m、短径0.21m、深さ0.12mで住居に伴うかどうかは明確でない。

出土遺物がなく、時期は不明である。

第109号住居跡 (第135図)

第109号住居跡は調査区中央部南寄りのK・L-6グリッドに位置する。第58号住居跡の西壁部に重複し、カマド煙道部のみを残す。

住居跡の全容は不明であるが、西壁にカマドを設けていたと推定される。残存する煙道部は先端に向かって尖り、燃焼部との境目が強く被熱して



第222図 第108号住居跡

いた。残存規模は、長さ0.48m、幅0.33m、深さ0.11mである。煙道部の主軸方位はN-124°-Wを指す。

出土遺物がなく時期は不明であるが、遺構の重複関係から古墳時代後期に位置づけられる。

第110号住居跡 (第56図)

第110号住居跡は調査区北側のF-13グリッドに位置する。第28号住居跡の南壁と重複し、それに切られる。住居跡東側の大半が調査区外に延び、床面と西壁際に巡る壁溝の一部が残る。

平面形は方形系と推定されるが、全容は不明である。西壁の残存長2.05m、西壁を基準とした主軸方位はN-22°-Eを指す。

床面は平坦である。ピットは北寄りに並列する2本を検出した。直径30cm前後のピットで、P1は深さが56cmと深く、住居跡に伴う可能性が大きい。壁溝は西壁際に巡らしている。幅18cm、深さ7cmほどと浅く、途切れる部分がある。

出土遺物はなく時期は不明である。しかし、重複する第28号住居跡からは典型的な坏蓋模倣坏が出土しており、5世紀末葉から6世紀初頭に位置づけられることから、本住居跡は古墳時代前期の五領期の可能性が考えられる。

2. 溝跡

今回の調査で溝跡は59条が検出された。時期別の内訳は下層遺構確認面で検出された古墳時代の溝跡13条（第1・48・50～54・56～61号溝跡）、上層遺構確認面で検出された古代から中・近世の溝跡46条（第2～46・55号溝跡）である（第223図）。

古墳時代の溝跡は、調査区北側の第1・50～52号溝跡、調査区中央部の第53・54・56～60号溝跡、調査区南端の第48・61号溝跡の大きく3群に分けられる。第1号溝跡は、居住域の北端を画する幅約8mの大規模な溝跡で、南東から北西に向かって直線的に走行する。本溝跡は、東側に隣接するE地点の調査で検出された1号河川跡と同一の流路跡と考えられるものである。E地点の調査成果によれば、1号河川跡は古墳時代の埋没河川跡である2号河川跡に対して、ほぼ直交するように合流していることから、人為的に開削された水路跡と想定されている。今回の調査でも溝跡の埋没土は鉄分凝集層を境に上層と下層に分けられ、下層には砂・砂利層の堆積が確認されている。出土遺物は五領期も若干含まれているが、最下層の砂利層から和泉期末から鬼高I期中段階の土器が主体的に出土した。これらの点から開削時期は和泉期にまで遡り、鬼高期まで一定の水流が存在していたものと推定される。

調査区南西端に検出された直線的に走行する第48号溝跡は、口縁部に穿孔をもつ坏身模倣坏や短脚の有稜高坏から鬼高I期中段階の所産と考えられる。また、調査区中央部の住居跡集中部分に重なるように検出された第57～60号溝跡は不整形の掘り込みをもつ溝跡であることを考え合みると、住居の掘り方や倒木痕等であった可能性も捨てきれない。調査区北側の緩やかに蛇行する第51・56号溝跡は、住居跡埋没後に掘削された溝跡で、性格等については不明である。直線的に走行する第52・53号溝跡などは区画溝としての機能が

想定されるものである。いずれの溝跡も出土遺物が少なく、時期を特定することは難しいが、鬼高期の住居跡を切るものが多いことからすれば、古墳時代後期以降の所産が大半を占めるものと想定される。

上層遺構確認面からは古代から近世の多数の溝跡が検出された。いずれも掘り込みが浅く、遺物の出土は見られなかった。このうち東西方向に併行して延びる第10・14号溝跡と南北方向に延びる第19・45号溝跡は、現在の水田部に見られる条里型地割の坪線にほぼ一致することから、水田に引水するための溝であると考えられる。時期を示すような遺物は出土していないが、中世以降における地割を示す溝跡であろう。

この他に調査区中央部北寄りの第29～42号溝跡は、14列の同じ走行方向、間隔の平行する溝状の畝間（サク）が並んだ畝跡と考えられる。畝間の芯々間距離はおよそ0.8～1.5m、畝間列の長さには両端部とも調査区域外に延びているため不明であるが、10m前後と推定される。走行方向はN-70°-Wを示す。畝間溝の規模は幅20～30cm、深さ10cmほどである。出土遺物がなく時期は不明であるが、古代以降における土地利用の変遷を垣間見ることができる。同様に、調査区中央部の南北方向に走行する6条の小規模な溝跡（第20～26号溝跡）も、畝跡の可能性が考えられる。

調査区のすぐ西脇を流れる現在の女堀川の旧流路によって、調査区の南北両端部は大きく抉り取られ浸食されている。とりわけ調査区南西端部は住居跡の多くが削平されており、往時の水流の激しさを物語っている。この地点に位置する第2～7号溝跡は、調査区内において東西方向から南北方向に大きく向きを変えていることからすると、河川跡を避けるように掘削された区画溝であった可能性が強い。



第223図 溝跡全体図

第1号溝跡（第224図）

第1号溝跡は調査区北側のC・D—15・16グリッドに位置する。居住域の北端を画する溝跡で、南東から北西に向かって直線的に延びる。規模は確認長5.30m、上幅6.90～7.30m、底面幅4.3～5.9m、確認面からの深さ1.40～1.60mである。走行方向はN—52°—Wを指す。断面形は底面幅の広い逆台形で、底面には凹凸が見られた。

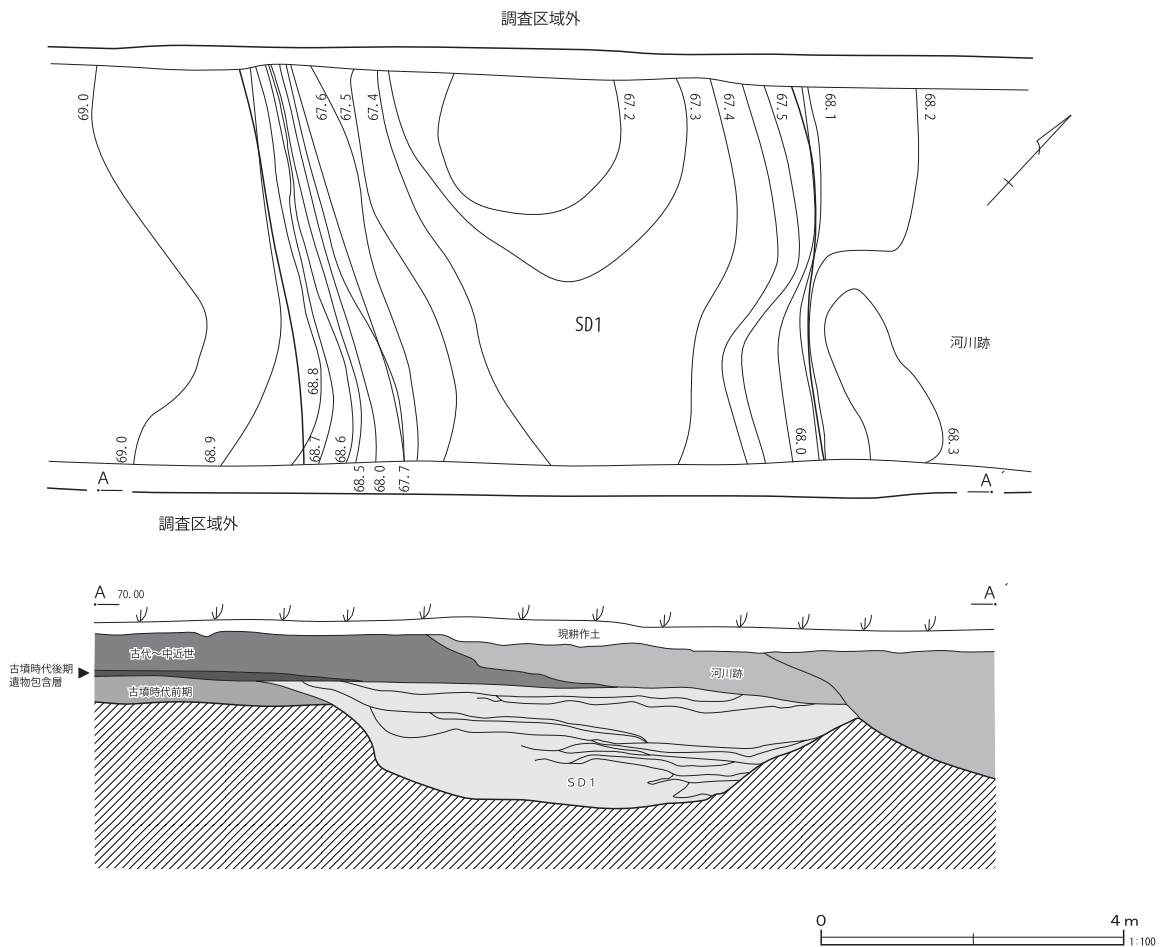
調査区北壁の土層断面の観察によれば、現女堀川の改修前の河川跡によって溝跡の上面が削平されており、本来は幅8m、深さ2mを越す大溝に復元される。この溝跡は、東側に隣接するE地点の調査で検出された1号河川跡と同一の流路跡と考えられる（第7図）。E地点の調査成果によれば、1号河川跡は古墳時代の埋没河川跡である2号河川跡に対して、ほぼ直交するように合流すること

から人為的に開削された水路跡と想定されている。

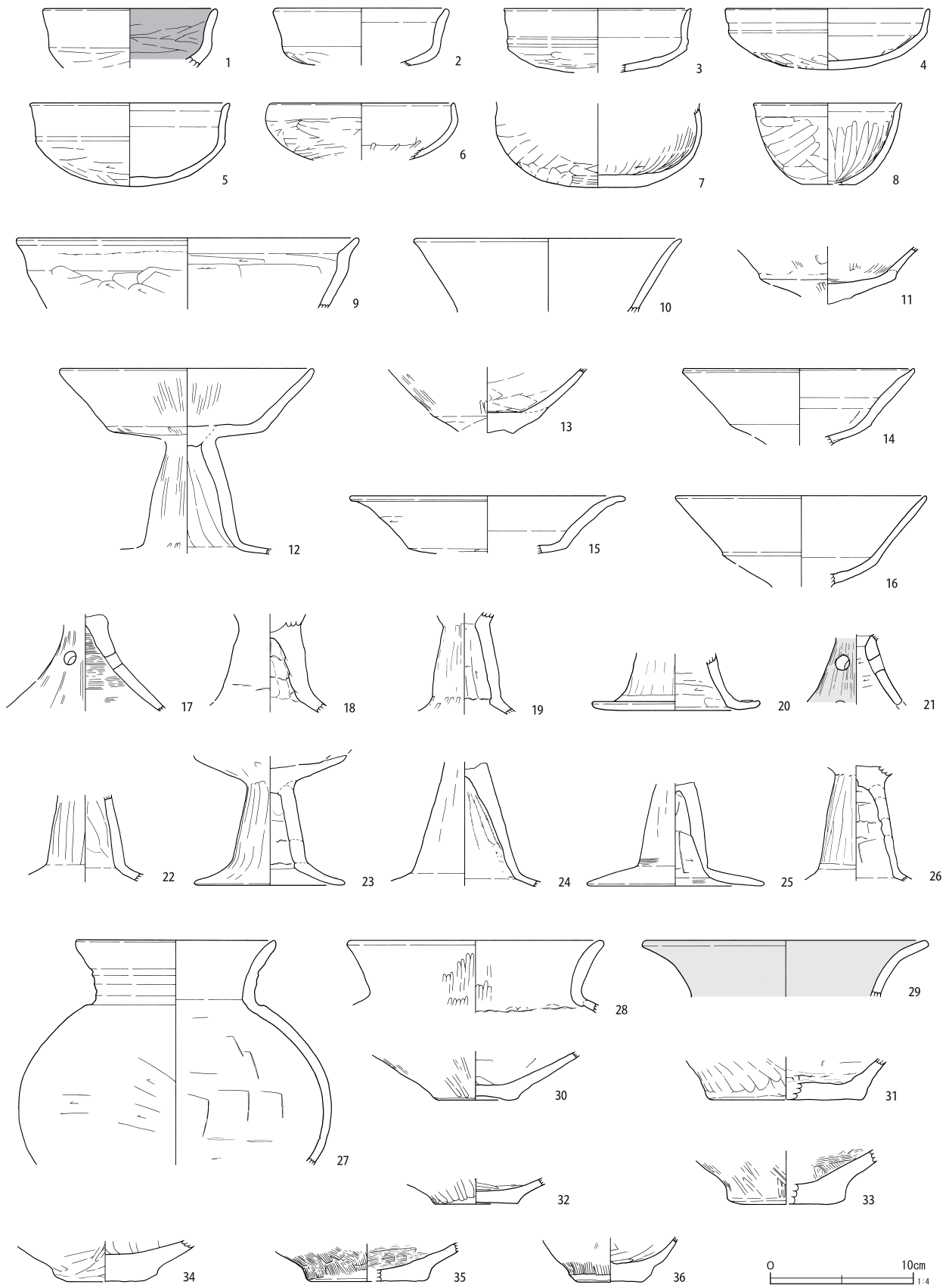
今回の調査でも溝跡の埋没土は鉄分凝集層を境に上層と下層に分けられ、下層には砂・砂利層が堆積し、流水の痕跡が確認されている。

出土遺物は、上層から土師器模倣坏（1～3）、高坏（14・15・20）、壺（34）、甕（39・40・42～47）、須恵器甕（51）等が出土した。下層および砂・砂利層からは、土師器坏（4～6）・埴（7・8）・鉢（9）・高坏（10・11・13・16～18・22～26）・器台（21）・壺（28～33・35・36）・甕（37・38）・甗（48）等が出土した（第225・226図）。

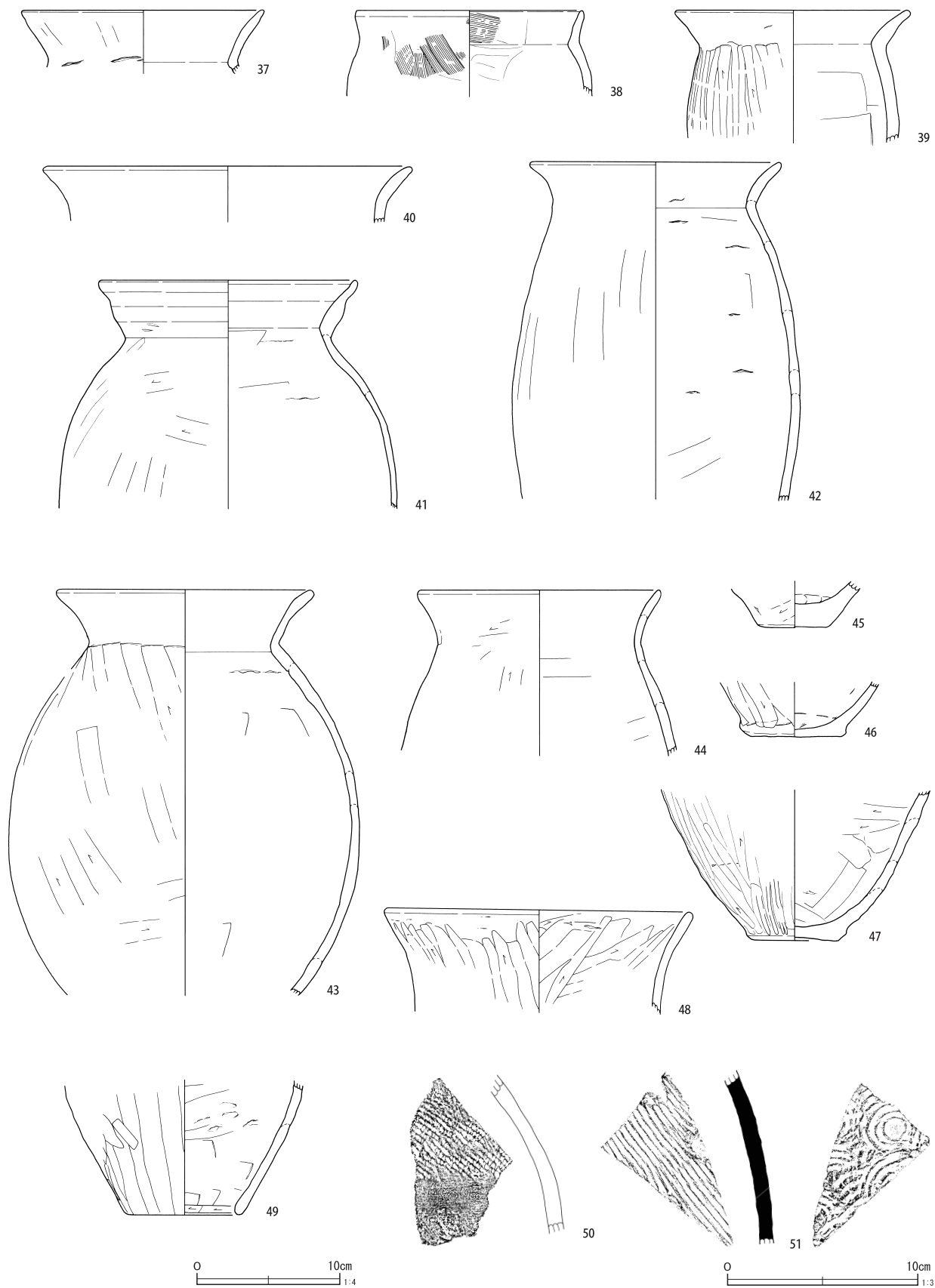
遺物には五領式土器も若干含まれているが、最下層の砂利層からは和泉期後半から鬼高I期の土器が主体的に出土している。このことから溝跡の開削時期は和泉期まで遡り、鬼高期まで一定の水流が存在していたものと想定される。



第224図 第1号溝跡



第225图 第1号沟迹出土遗物(1)



第226图 第1号沟迹出土遗物(2)

第81表 第1号溝跡出土遺物観察表 (第225・226図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.0)	4.1	—	CEI	20	普通	にぶい橙	内面黒色処理 上層	
2	土師器	坏	(11.8)	3.9	—	AHIK	20	普通	にぶい赤褐	上層	
3	土師器	坏	(13.0)	4.4	—	AHEHIK	20	普通	にぶい黄橙	底部外面黒斑 上層	
4	土師器	坏	(14.1)	4.2	—	CEHIK	50	普通	にぶい橙	砂利層	
5	土師器	坏	(13.8)	5.7	—	AHEHIK	25	普通	橙	砂利層	
6	土師器	坏	(12.7)	3.9	—	CEI	30	普通	にぶい橙	砂利層	
7	土師器	碗	—	5.8	—	AHI	45	良好	にぶい赤褐	砂利層	
8	土師器	碗	(10.2)	5.6	(3.7)	AHEHIK	35	普通	橙	下層 砂・砂利層	
9	土師器	鉢	(23.8)	4.9	—	ACEHIK	15	良好	にぶい赤褐	砂利層	
10	土師器	高坏	(18.5)	5.1	—	CEHIK	20	普通	橙	砂利層	
11	土師器	高坏	—	4.0	—	AHEI	50	普通	橙	砂利層	
12	土師器	高坏	17.4	12.8	—	CEIK	50	普通	にぶい赤褐		83-4
13	土師器	高坏	—	4.5	—	CEHIK	40	普通	橙	砂利層	
14	土師器	高坏	(16.0)	5.3	—	CHI	50	普通	橙	上層	
15	土師器	高坏	(18.7)	3.9	—	AHEHIK	40	良好	にぶい橙	上層	
16	土師器	高坏	17.3	6.3	—	CEHIK	50	不良	橙	砂利層	
17	土師器	高坏	—	6.7	—	CEHI	50	普通	にぶい橙	下層 砂・砂利層	
18	土師器	高坏	—	6.8	—	CEHI	90	普通	明赤褐	砂利層	
19	土師器	高坏	—	7.1	—	AHEHIK	70	良好	にぶい橙		
20	土師器	高坏	—	3.9	(11.5)	AHEHIK	30	良好	にぶい橙	上層	
21	土師器	器台	—	4.8	—	CEHI	90	普通	にぶい橙	外面赤彩 砂利層	
22	土師器	高坏	—	6.0	—	AEEK	50	良好	橙	砂利層	
23	土師器	高坏	—	9.0	(10.0)	CEHIK	90	普通	明赤褐	砂利層	
24	土師器	高坏	—	8.6	—	AHK	50	良好	にぶい黄橙	砂利層	
25	土師器	高坏	—	7.1	11.7	CEI	95	普通	にぶい橙	砂利層	
26	土師器	高坏	—	8.0	—	AHEHIK	90	良好	橙	砂利層	
27	土師器	甕	(13.7)	15.6	—	CEHIK	20	普通	橙		
28	土師器	壺	(17.3)	5.0	—	BCHI	40	普通	にぶい褐	砂利層	
29	土師器	壺	(19.4)	3.9	—	CHI	15	普通	橙	内外面赤彩 砂利層	
30	土師器	壺	—	3.4	(5.8)	CEHI	30	普通	橙	下層 砂・砂利層	
31	土師器	壺	—	3.0	(10.7)	AHEHIK	45	良好	にぶい黄橙	砂利層	
32	土師器	壺	—	1.8	(5.8)	CEHI	70	普通	赤	下層 砂・砂利層	
33	土師器	壺	—	3.7	(8.2)	CEHI	20	普通	にぶい黄褐	下層 砂・砂利層	
34	土師器	壺	—	2.8	(7.0)	CEHI	20	普通	橙	上層	
35	土師器	壺	—	2.6	(8.4)	AHEHIK	40	良好	にぶい赤褐	砂利層	
36	土師器	壺	—	3.0	(4.4)	CEHIK	30	普通	明赤褐	下層 砂・砂利層	
37	土師器	甕	(16.8)	3.4	—	AHEHIK	25	良好	灰黄	砂利層	
38	土師器	甕	(15.8)	5.9	—	AHIK	20	良好	橙	砂利層	
39	土師器	甕	(16.1)	9.2	—	CEHIK	20	良好	にぶい赤褐	上層	
40	土師器	甕	(25.4)	3.9	—	ACEHIK	25	普通	にぶい赤褐	上層	
41	土師器	甕	(17.6)	15.9	—	CEHIK	40	普通	にぶい褐	No.3	
42	土師器	甕	17.2	23.5	—	CEHIK	70	普通	にぶい橙	上層	83-5
43	土師器	甕	(17.4)	28.3	—	CEHIK	60	普通	にぶい赤褐	上層	84-1
44	土師器	甕	16.6	11.5	—	CEIJK	40	普通	にぶい橙	上層	
45	土師器	甕	—	3.2	(7.1)	CEHI	70	普通	橙	上層	
46	土師器	甕	—	3.8	7.2	CEHI	90	普通	にぶい橙	上層	
47	土師器	甕	—	10.5	6.0	AHEHIK	40	良好	にぶい橙	上層	
48	土師器	甗	(21.0)	7.1	—	CEHI	15	普通	橙	砂利層	
49	土師器	甗	—	9.4	(7.9)	CEHI	20	普通	橙	内面黒色 外面黒斑	
50	土師器	壺	—	8.2	—	CEHI	5	普通	にぶい橙	外面帯縄文 一部赤彩	
51	須恵器	甕	—	9.0	—	IK	5	良好	灰白	上層	

第2号溝跡 (第227図)

第2号溝跡は調査区南西端のN・O-3、P-2・3グリッドに位置する。上層遺構確認面で検出された。南北方向に直線的に延びる溝跡で、北端のN-4グリッド付近で向きを東に変え、第7号溝跡に合流する。走行方向は北東側がN-80°-E、南西側がN-22°-Eを指す。検出された長さは22.90m、幅は0.92~1.25m、深さは0.13~0.26mである。断面形は東側が深くなった二段掘りで、西側にテラス面を作り出す。

出土遺物は土師器鉢・甕等がある(第233図1~3)。1は頸部の収縮した鉢、2は単口縁の甕、3は甕の底部である。1・3は鬼高期、2は五領期に位置づけられる。

第3号溝跡 (第227図)

第3号溝跡は調査区南西端のN-4・5、O-3・4グリッドに位置する。上層遺構確認面で検出され、第5・7・46号溝跡と重複する。西に大きくカーブしながら延びている。走行方向は北東側でN-73°-E、西側でN-45°-E、南東側でN-27°-Eを指す。検出された長さは15.05m、幅は0.40~0.95m、深さは0.26~0.40mである。底面は南西に向かって低くなる。断面形は深い逆台形である。遺物は出土しなかった。

第4号溝跡 (第227図)

第4号溝跡は調査区南西端のO-3グリッドに位置する。上層遺構確認面で検出され、南北方向に延びている。走行方向はN-25°-Eを指す。検出された長さは8.25m、幅は0.55~1.50m、深さは0.02~0.12mである。底面は北東に向かって低くなる。遺物は出土しなかった。

第5号溝跡 (第227図)

第5号溝跡は調査区南西端のN-3・4グリッドに位置する。上層遺構確認面で検出され、東西方向に延び、西端で第2号溝跡に合流する。第3号溝跡に切られる。走行方向はN-89°-Eを指す。検出された長さは7.20m、幅は0.16~0.36m、

深さは0.02~0.56mである。底面は西に向かって低くなる。遺物は出土しなかった。

第6号溝跡 (第227図)

第6号溝跡は調査区南西端のN・O-3グリッドに位置する。上層遺構確認面で検出され、南北方向に緩やかに屈曲して延びる。走行方向はN-26°-Eを指す。検出された長さは5.12m、幅は0.15~0.35m、深さは0.02~0.04mである。断面形は浅いU字形である。遺物は出土しなかった。

第7号溝跡 (第227図)

第7号溝跡は調査区南西端のM-5、N-4・5グリッドに位置する。上層遺構確認面で検出され、南端は第2号溝跡に合流する。第3・9・46号溝跡と重複するが、新旧関係は明確でない。走行方向はN-65°-Eを指す。検出された長さは15.00m、幅は0.15~0.33m、深さは0.12~0.32mである。底面は北東に向かって低くなる。

出土遺物は土師器甕がある(第233図4)。4は口径22.6cmの広口甕である。所産時期を詳らかにできないが、鬼高期の所産であろう。

第8号溝跡 (第227図)

第8号溝跡は調査区南西端のN-4グリッドに位置する。上層遺構確認面で検出され、第28号溝跡と交差し、東西方向に直線的に延びる。走行方向はN-87°-Wを指す。検出された長さは5.62m、幅は0.27~0.46m、深さは0.02~0.04mである。底面は東に向かって低くなる。遺物は出土しなかった。

第9号溝跡 (第227図)

第9号溝跡は調査区南西端のN-4グリッドに位置する。上層遺構確認面で検出され、第7号溝跡に切られる。東西方向に直線的に延びる溝跡で、走行方向はN-55°-Wを指す。検出された長さは3.55m、幅は0.58~0.64m、深さは0.01~0.03mである。底面は南東に向かって低くなる。

出土遺物は土師器坏がある(第233図5)。5は口縁部が大きく外反する模倣坏である。内外面赤

彩を施す。鬼高II期に位置づけられる。

第10号溝跡 (第227図)

第10号溝跡は調査区南側のM-5・6グリッドに位置する。上層遺構確認面で検出され、第11・12・13号溝跡を切る。北側約3mに併行する第14号溝跡とともに条里型水田に伴う溝跡と推定される。走行方向はN-88°-Wを指す。検出された長さは8.13m、幅は0.62~1.45m、深さは0.15~0.28mである。底面は東に向かって低くなっている。遺物は出土しなかった。

第11号溝跡 (第227図)

第11号溝跡は調査区南側のL・M-5グリッドに位置する。上層遺構確認面で検出され、第10号溝跡に切られる。東側に第12号溝跡が近接し、南北方向に延びる。走行方向はN-5°-Eを指す。検出された長さは2.42m、幅は0.32~0.40m、深さは0.05~0.07mである。断面形は浅いU字形である。遺物は出土しなかった。

第12号溝跡 (第227図)

第12号溝跡は調査区南側のL・M-5グリッドに位置する。上層遺構確認面で検出され、第10・14号溝跡に切られる。東側約1.5mに第13号溝跡が併行する。走行方向はN-11°-Eを指す。検出された長さは3.17m、幅は0.27~0.34m、深さは0.04~0.05mである。断面形は浅いU字形である。遺物は出土しなかった。

第13号溝跡 (第227図)

第13号溝跡は調査区南側のL・M-5グリッドに位置する。上層遺構確認面で検出され、第10・14号溝跡に切られる。西側約1.5mには第12号溝跡が併行する。走行方向はN-11°-Eを指す。検出された長さは4.90m、幅は0.23~0.35m、深さは0.01~0.04mである。断面形は浅いU字形である。遺物は出土しなかった。

第14号溝跡 (第227図)

第14号溝跡は調査区南側のL-5・6グリッドに位置する。上層遺構確認面で検出され、第12・

13号溝跡を切っている。南側約3mに併行する第10号溝跡とともに条里型水田に伴う溝跡と推定される。走行方向はN-89°-Wを指す。検出された長さは7.73m、幅は0.83~1.00m、深さは0.05~0.11mである。断面形は底面の幅広い逆台形である。遺物は出土しなかった。

第15号溝跡 (第227図)

第15号溝跡は調査区南側のM-5グリッドに位置する。上層遺構確認面で検出され、トレンチによって一部削平されている。南北方向に直線的に延びる溝跡で、走行方向はN-2°-Wを指す。検出された長さは2.57m、幅は0.76~0.80m、深さは0.12~0.13mである。底面は南に向かって低くなる。遺物は出土しなかった。

第16号溝跡 (第228図)

第16号溝跡は調査区中央部のK・L-6グリッドに位置する。上層遺構確認面で検出され、第18号溝跡と重複する。南北方向に緩やかにカーブを描く。走行方向は北側がN-13°-E、南側がN-30°-Eを指す。検出された長さは7.62m、幅は0.35~0.72m、深さは0.02~0.05mである。底面は南西に向かって低くなる。

出土遺物は管状土錘1点である(第233図6)。

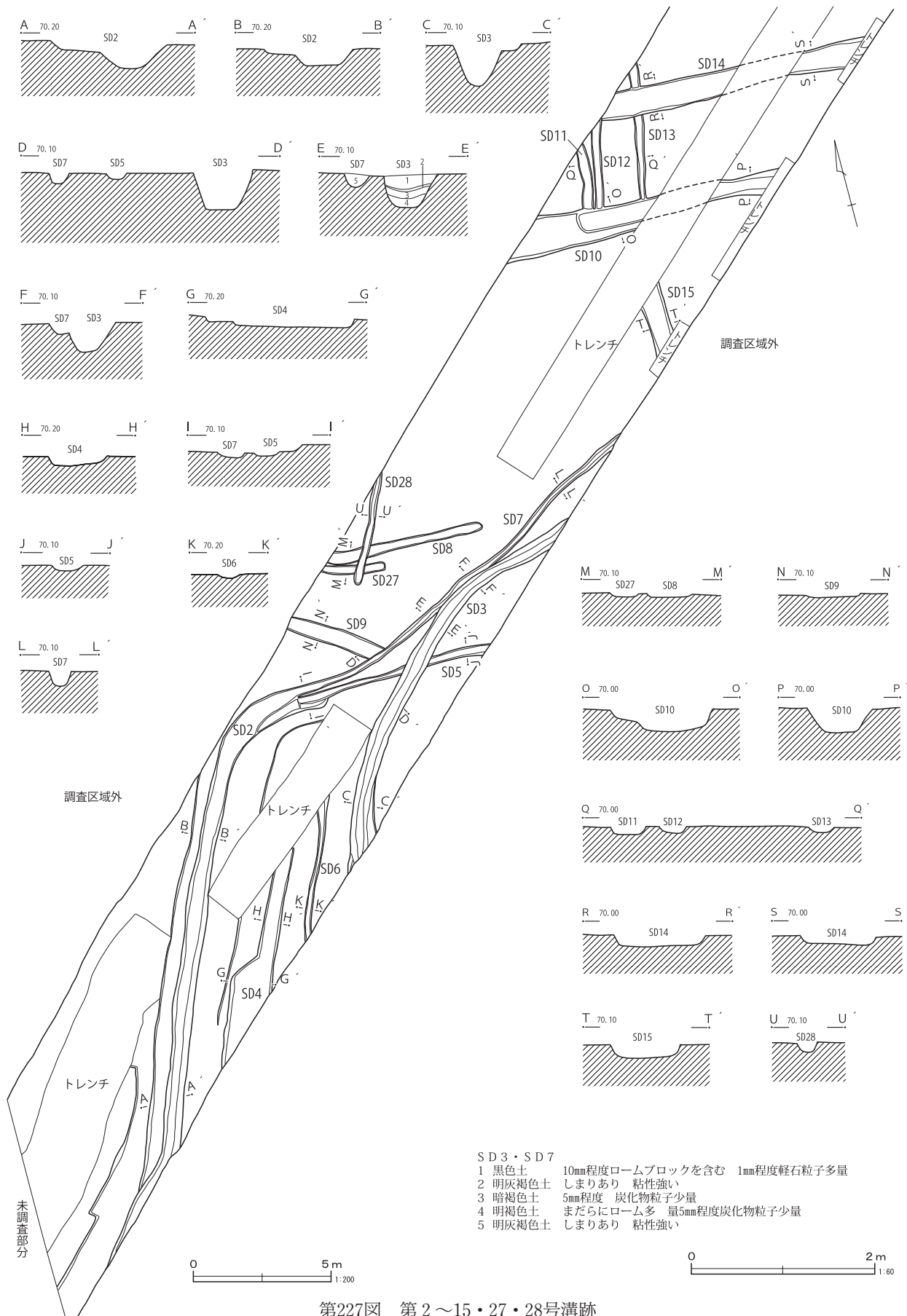
第17号溝跡 (第228図)

第17号溝跡は調査区中央部のK-6・7、L-7グリッドに位置する。上層遺構確認面で検出され、第18号溝跡と重複する。調査区内を直線的に横断する溝跡で、走行方向はN-45°-Wを指す。検出された長さは3.92m、幅は0.35~0.47m、深さは0.03~0.05mである。断面形は逆台形である。

遺物は出土しなかった。

第18号溝跡 (第228図)

第18号溝跡は調査区中央部のK-6・7グリッドに位置する。上層遺構確認面で検出され、第16・17・19・54号溝跡と交差する。調査区内を直線的に横断する溝跡で、走行方向はN-81°-Eを指す。検出された長さは6.05m、幅は0.23~0.42m、



第227図 第2・15・27・28号溝跡

深さは0.04～0.06mである。断面形は浅いU字形である。遺物は出土しなかった。

第19号溝跡 (第228図)

第19号溝跡は調査区中央部のK・L-7グリッドに位置する。上層遺構確認面で検出され、第18・53号溝跡と重複する。調査区内を南北方向に縦断する溝跡で、走行方向はN-11°-Eを指す。検出された長さは9.70m、幅は0.42～0.75m、深さは0.05～0.07mである。断面形は底面の平坦な逆台形である。遺物は出土しなかった。

第20号溝跡 (第228図)

第20号溝跡は調査区中央部のK-7グリッドに位置する。上層遺構確認面で検出され、直線的に南北に延びる。走行方向はN-12°-Eを指す。検出された長さは3.30m、幅は0.20～0.26m、深さは0.05～0.07mである。断面形は浅いU字形である。遺物は出土しなかった。

第21号溝跡 (第228図)

第21号溝跡は調査区中央部のJ・K-7グリッドに位置する。上層遺構確認面で検出され、第58号溝跡と重複する。東側を第22号溝跡が併行する。走行方向はN-2°-Eを指す。検出された長さは4.65m、幅は0.22～0.27m、深さは0.05～0.07mである。断面形は浅いU字形である。

遺物は出土しなかった。

第22号溝跡 (第228図)

第22号溝跡は調査区中央部のJ・K-7グリッドに位置する。上層遺構確認面で検出された。西側の第21号溝跡と併行し、走行方向はN-2°-Eを指す。検出された長さは4.72m、幅は0.26～0.32m、深さは0.05～0.08mである。断面形は浅いU字形である。遺物は出土しなかった。

第23号溝跡 (第228図)

第23号溝跡は調査区中央部のJ-8グリッドに位置する。上層遺構確認面で検出され、東側の第24号溝跡と併行する。走行方向はN-9°-Eを指す。検出された長さは2.43m、幅は0.15～0.21

m、深さは0.05～0.06mである。断面形は浅いU字形である。遺物は出土しなかった。

第24号溝跡 (第228図)

第24号溝跡は調査区中央部のJ-8グリッドに位置する。上層遺構確認面で検出され、西側の第23号溝跡と併行する。走行方向はN-12°-Eを指す。検出された長さは1.40m、幅は0.19～0.22m、深さは0.03～0.05mである。断面形は浅いU字形である。遺物は出土しなかった。

第25号溝跡 (第228図)

第25号溝跡は調査区中央部のJ-8グリッドに位置する。上層遺構確認面で検出され、東側に第26号溝跡が併行する小規模な溝跡である。走行方向はN-10°-Eを指す。検出された長さは1.04m、幅は0.15～0.20m、深さは0.02mである。断面形は浅いU字形である。遺物はない。

第26号溝跡 (第228図)

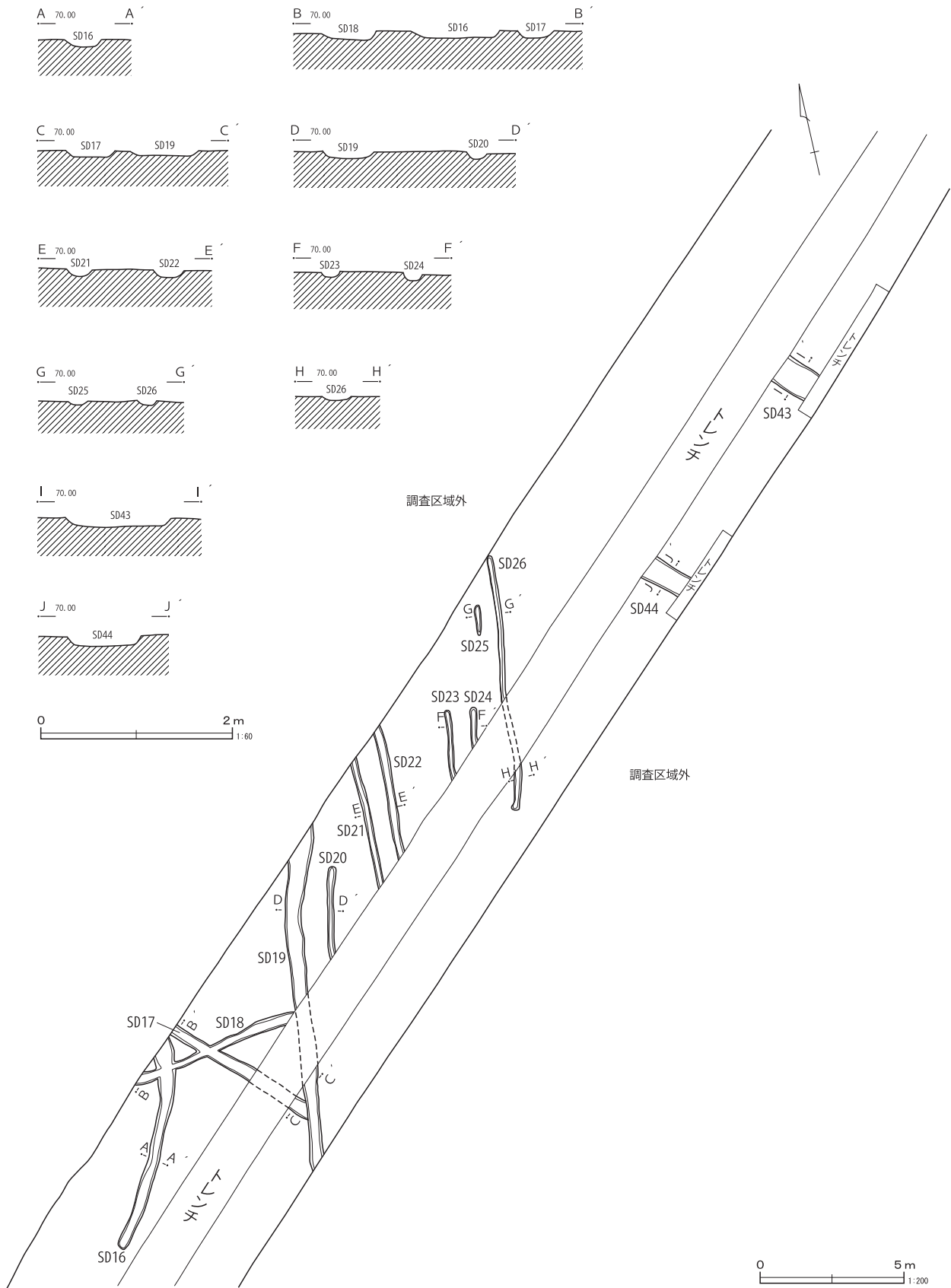
第26号溝跡は調査区中央部のJ・K-8グリッドに位置する。上層遺構確認面で検出された。南北に延びる溝跡で、西側に第25号溝跡が併行する。走行方向はN-10°-Eを指す。検出長は6.48m、幅は0.15～0.27m、深さは0.01～0.06mである。断面形は浅いU字形である。遺物はない。

第27号溝跡 (第227図)

第27号溝跡は調査区南西端のN-4グリッドに位置する。上層遺構確認面で検出され、第28号溝跡に切られていた。北側に第8号溝跡が近接し、走行方向はN-76°-Wを指す。検出された長さは2.32m、幅は0.28～0.32m、深さは0.02～0.32mである。底面は東に向かって低くなっている。断面形は浅いU字形である。遺物はない。

第28号溝跡 (第227図)

第28号溝跡は調査区南西端のM・N-4グリッドに位置する。上層遺構確認面で検出され、第8・27号溝跡と重複し、それらを切っていた。南北方向に延びる直線的な溝跡である。走行方向はN-25°-Eを指す。検出された長さは4.20m、幅は



第228図 第16~26・43・44号溝跡

0.20～0.30m、深さは0.03～0.10mである。断面形は逆台形である。遺物は出土しなかった。

第29号溝跡 (第229図)

第29号溝跡はH-10・11グリッドに位置する。畝跡の畝間溝と考えられる。走行方向はN-78°-Wを指す。長さは2.90m、幅は0.36～0.47m、深さは0.08～0.13mである。

第30号溝跡 (第229図)

第30号溝跡はH-10・11グリッドに位置する。畝跡の畝間溝と考えられる。走行方向はN-70°-Wを指す。長さは2.60m、幅は0.19～0.25m、深さは0.02～0.04mである。

第31号溝跡 (第229図)

第31号溝跡はH-10・11グリッドに位置する。畝跡の畝間溝と考えられる。走行方向はN-67°-Wを指す。長さは2.75m、幅は0.22～0.29m、深さは0.03～0.04mである。

第32号溝跡 (第229図)

第32号溝跡はH-10・11グリッドに位置する。畝跡の畝間溝と考えられる。走行方向はN-69°-Wを指す。長さは3.27m、幅は0.22～0.28m、深さは0.03～0.06mである。

第33号溝跡 (第229図)

第33号溝跡はH-10・11グリッドに位置する。畝跡の畝間溝と考えられる。走行方向はN-70°-Wを指す。長さは3.70m、幅は0.19～0.29m、深さは0.03～0.06mである。

第34号溝跡 (第22図)

第34号溝跡はH-10・11グリッドに位置する。畝跡の畝間溝と考えられる。走行方向はN-69°-Wを指す。長さは3.77m、幅は0.16～0.27m、深さは0.03～0.05mである。

第35号溝跡 (第229図)

第35号溝跡はH-10・11グリッドに位置する。畝跡の畝間溝と考えられる。走行方向はN-68°-Wを指す。長さは4.19m、幅は0.14～0.25m、深さは0.02～0.05mである。

第36号溝跡 (第229図)

第36号溝跡はH-10・11グリッドに位置する。畝跡の畝間溝と考えられる。走行方向はN-67°-Wを指す。長さは4.38m、幅は0.18～0.26m、深さは0.03～0.07mである。

第37号溝跡 (第229図)

第37号溝跡はG-10、H-10・11グリッドに位置する。畝跡の畝間溝と考えられ、走行方向はN-62°-Wを指す。長さは4.48m、幅は0.15～0.22m、深さは0.03～0.07mである。

第38号溝跡 (第229図)

第38号溝跡はG・H-11グリッドに位置する。畝跡の畝間溝と考えられる。走行方向はN-59°-Wを指す。長さは4.89m、幅は0.33～0.42m、深さは0.02～0.07mである。

第39号溝跡 (第229図)

第39号溝跡はG・H-11グリッドに位置する。畝跡の畝間溝と考えられる。走行方向はN-57°-Wを指す。長さは4.84m、幅は0.16～0.24m、深さは0.03～0.04mである。

第40号溝跡 (第229図)

第40号溝跡はG・H-11グリッドに位置する。畝跡の畝間溝と考えられる。走行方向はN-58°-Wを指す。長さは4.75m、幅は0.18～0.26m、深さは0.06～0.07mである。

第41号溝跡 (第229図)

第41号溝跡はG-11グリッドに位置する。畝跡の畝間溝と考えられる。走行方向はN-65°-Wを指す。長さは3.23m、幅は0.19～0.25m、深さは0.08～0.09mである。

第42号溝跡 (第229図)

第42号溝跡はG-10・11グリッドに位置する。畝跡の畝間溝と考えられる。走行方向はN-61°-Wを指す。長さは0.87m、幅は0.25～0.27m、深さは0.03～0.04mである。

第43号溝跡 (第228図)

第43号溝跡は調査区中央部のI・J-9グリッ

ドに位置する。上層遺構確認面で検出され、トレンチによって一部削平される。南西側約8mの第44号溝跡と併行し、走行方向はN-42°-Wを指す。検出された長さは1.30m、幅は1.04~1.06m、深さは0.09mである。断面形は底面幅の広い箱形である。遺物は出土しなかった。

第44号溝跡 (第228図)

第44号溝跡は調査区中央部のJ-8グリッドに位置する。上層遺構確認面で検出され、トレンチによって一部削平される。北東側約8mの第43号溝跡と併行し、走行方向はN-46°-Wを指す。検出された長さは1.43m、幅は0.75~0.87m、深さは0.10mである。断面形は底面幅の広い箱形である。遺物は出土しなかった。

第45号溝跡 (第230図)

第45号溝跡は調査区北側のF-13グリッドに位置する。上層遺構確認面で検出され、第52号溝跡と一部接する。条里型水田に伴う溝跡と推定される。走行方向はN-2°-Wを指す。検出された長さは5.95m、幅は0.78~0.86m、深さは0.29mである。断面形は、底面幅の広い逆台形である。

遺物は出土しなかった。

第46号溝跡 (第230図)

第46号溝跡は調査区南側のN-3・4グリッドに位置する。下層遺構確認面で検出され、第9号住居跡、第3・5・7号溝跡と重複する。調査区内をやや蛇行しながら横断する。走行方向は北側がN-60°-W、南側がN-38°-Wを指す。検出長は6.65m、幅は0.15~0.29m、深さは0.23~0.31mである。断面形は底面幅の狭い逆台形である。遺物は出土しなかった。

第47号溝跡 (欠番)

第48号溝跡 (第230図)

第48号溝跡は調査区南西端のP-2グリッドに位置する。下層遺構確認面で検出され、第2号溝跡、第1号土壌と重複する。直線的な溝跡で、走行方向はN-87°-Eを指す。検出長は2.75m、

幅は0.73~0.87m、深さは0.12mである。断面形は箱形で、底面に長径0.78m、短径0.45m、深さ0.35mの土壌が掘り込まれていた。

出土遺物は土師器坏・高坏・鉢・甕等がある(第233図7~11)。7は口径10.1cmの坏身模倣坏で、口縁部と体部の境に二次的な小孔を穿つ。8・9は同形同大の高坏である。短脚で脚部上半が中実に作られ、端部は大きくハの字に開く。坏部は大きく外反して立ち上がる特徴的なもので、和泉型高坏の系譜を引くものであろう。10は口縁部が緩やかに外反する鉢である。11は口縁部が内湾気味に立ち上がる甕である。

時期的にはやや幅があるが小型の坏身模倣坏や退化形態の和泉型高坏の特徴から6世紀前葉に位置づけられる。

第49号溝跡 (欠番)

第50号溝跡 (第229図)

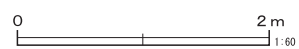
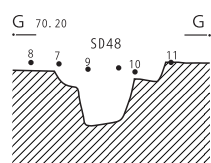
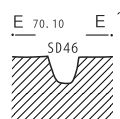
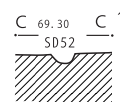
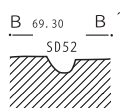
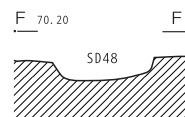
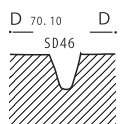
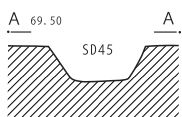
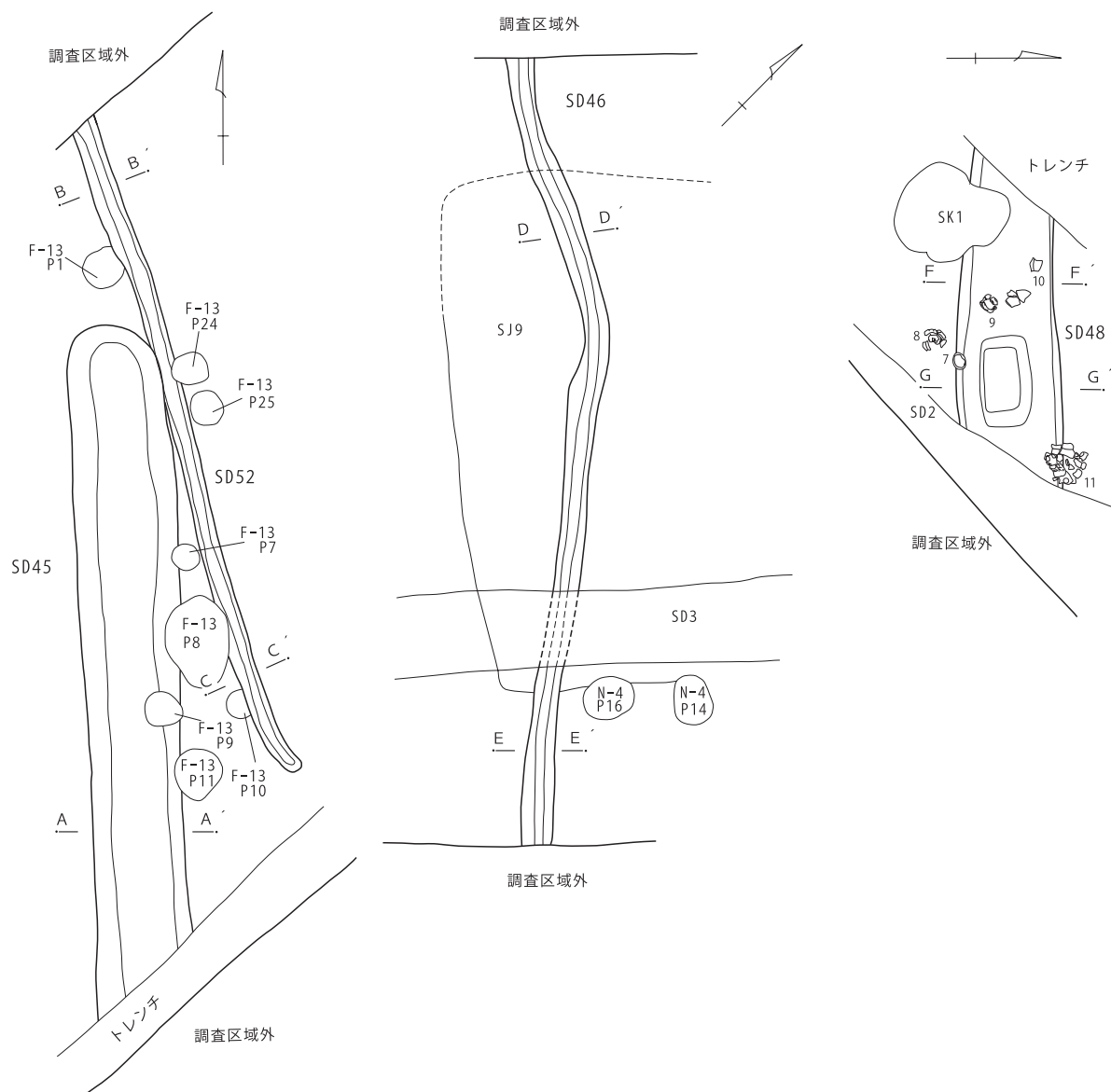
第50号溝跡は調査区北側のD-15グリッドに位置する。下層遺構確認面の調査で検出された小規模な溝跡である。直線的に延び、走行方向はN-28°-Wを指す。長さ1.65m、幅0.18~0.33m、深さ0.04~0.08mである。断面形は逆台形である。遺物は出土しなかった。

第51号溝跡 (第229図)

第51号溝跡は調査区北側のD-14・15、E-14グリッドに位置する。下層遺構確認面で検出され、緩やかに蛇行する溝跡である。走行方向はN-63°-Eを指す。検出長は17.40m、幅は0.15~0.37m、深さは0.05~0.21mである。底面は北東に向かって緩やかに傾斜する。断面形は逆台形である。遺物は出土しなかった。

第52号溝跡 (第230図)

第52号溝跡は調査区北側のE・F-13グリッドに位置する。下層遺構確認面で検出され、第45号溝跡と一部接している。直線的に走行する溝跡で、走行方向はN-18°-Wを指す。検出された長さは5.82m、幅は0.16~0.35m、深さは0.03~0.09m



第230図 第45・46・48・52号溝跡

である。底面は北西に向かって低くなる。断面形は逆台形である。遺物は出土しなかった。

第53号溝跡 (第231図)

第53号溝跡は調査区中央部のK-7グリッドに位置する。下層遺構確認面で検出され、調査区内を横断するように直線的に延びる。走行方向はN-45°-Wを指す。検出された長さは5.62m、幅は0.25~0.47m、深さは0.09~0.20mである。断面形は逆台形である。遺物は出土しなかった。

第54号溝跡 (第231図)

第54号溝跡は調査区中央部のK-7グリッドに位置する。下層遺構確認面で検出され、第58・71号住居跡、第18号溝跡と重複する。ほぼ直線的に延び、走行方向はN-81°-Wを指す。検出長は3.05m、幅は0.23~0.46m、深さは0.03~0.05mである。断面形は逆台形である。

出土遺物は土師器坏がある(第233図12)。12は須恵器坏蓋模倣坏で、鬼高II期の所産である。

第55号溝跡 (第232図)

第55号溝跡は調査区北側のG-11・12グリッドに位置する。下層遺構確認面で検出されたが、溝跡の走行方向が、上層遺構検出面の条里型水田に伴う溝跡と一致することから、古代以降の所産と推定される。

第99号住居跡と重複し、東西に直線的に延びる。走行方向はN-80°-Wを指す。検出された長さは8.15m、幅は0.31~0.40m、深さは0.08~0.12mである。底面は東に向かって緩やかに傾斜する。断面形は台形である。

出土遺物は土師器坏・壺がある(第233図13・14)。13は須恵器坏蓋模倣坏で、鬼高II期の所産である。14は単口縁の壺で、五領期の所産である。

第56号溝跡 (第229図)

第56号溝跡は調査区北側のG-11、H-10・11グリッドに位置する。下層遺構確認面で検出され、畠跡と推定される第30~41号溝跡と重複する。緩やかに蛇行しながら調査区内を斜めに走行し、走

行方向はN-64°-Eを指す。検出された長さは18.35m、幅は0.50~1.03m、深さは0.14~0.25mである。底面は北東に向かって低くなる。断面形は逆台形である。遺物は出土しなかった。

第57号溝跡 (第232図)

第57号溝跡は調査区中央部のI-9グリッドに位置する。下層遺構確認面で検出され、第106号住居跡と重複する土壌状の溝跡である。走行方向はN-4°-Eを指す。検出された長さは1.30m、幅は0.45~1.05m、深さは0.33~0.42mである。不整形の掘り込みから住居跡の掘り方の可能性もある。遺物は出土しなかった。

第58号溝跡 (第231図)

第58号溝跡は調査区中央部のJ・K-7グリッドに位置する。下層遺構確認面で検出され、第21号溝跡と重複する。走行方向はN-4°-Wを指す。検出長は4.43m、幅は0.74~2.10m、深さは0.17~1.06mである。形態から住居跡の掘り方の可能性もある。遺物はなかった。

第59号溝跡 (第231図)

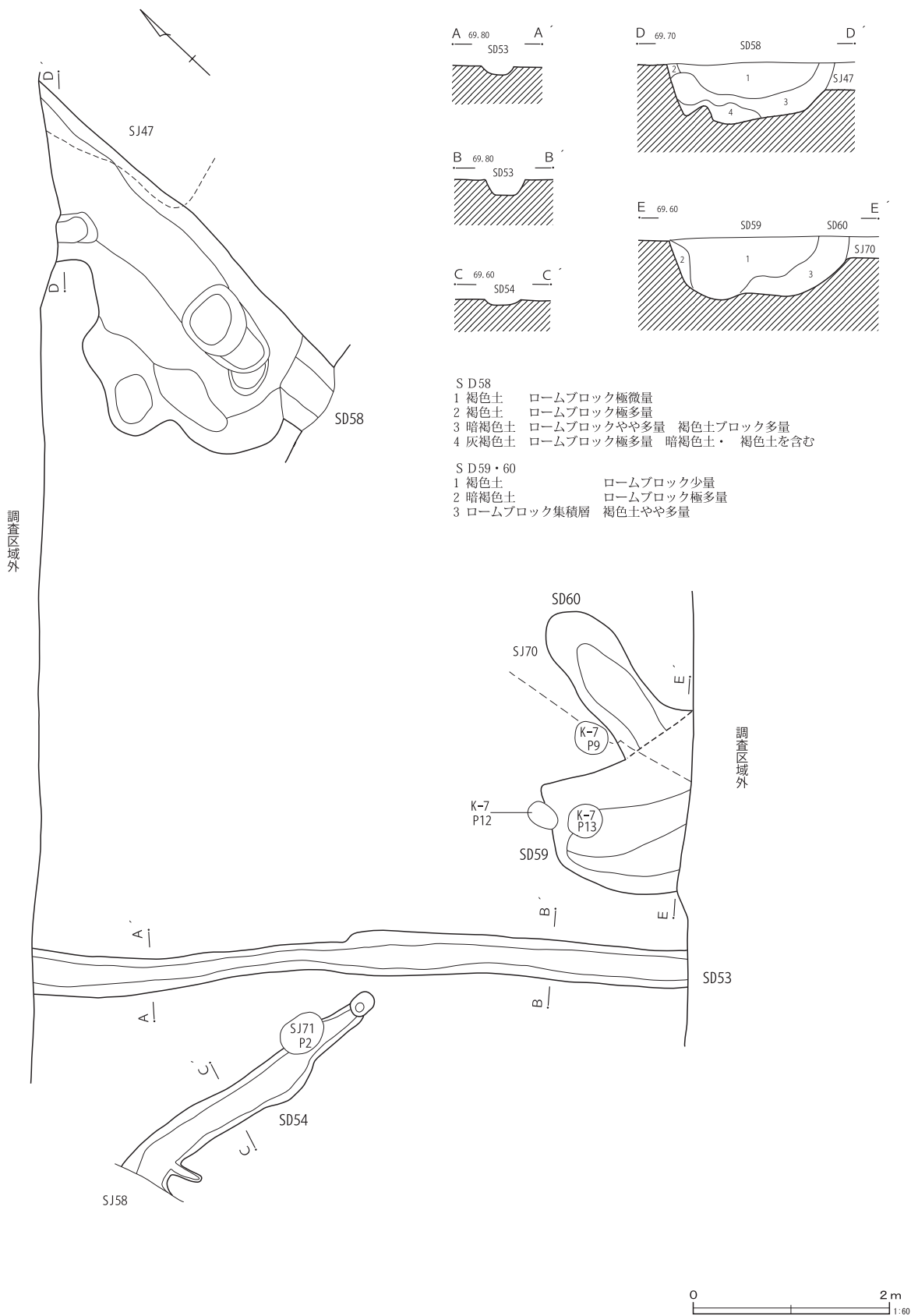
第59号溝跡は調査区中央部のK-7グリッドに位置する。下層遺構確認面で検出され、第70号住居跡、第60号溝跡と重複する土壌状の溝跡である。走行方向はN-49°-Wを指す。検出長は1.50m、幅は0.54~0.56m、深さは0.61~0.77mである。不整形の掘り込みから住居跡の掘り方の可能性もある。遺物は出土しなかった。

第60号溝跡 (第231図)

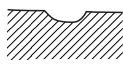
第60号溝跡は調査区中央部のK-7グリッドに位置する。下層遺構確認面で検出され、第70号住居跡、第59号溝跡と重複する土壌状の溝跡である。走行方向はN-7°-Eを指す。検出長は1.59m、幅は0.57~0.80m、深さは0.34~0.40mである。不整形の掘り込みから住居跡の掘り方の可能性もある。遺物は出土しなかった。

第61号溝跡 (第232図)

第61号溝跡は調査区南西端のO-2・3、P-3



A 69.80 A'



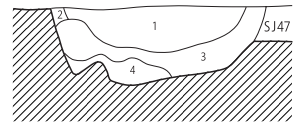
B 69.80 B'



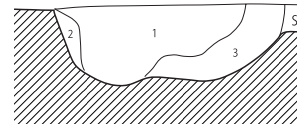
C 69.60 C'



D 69.70 D'



E 69.60 E'



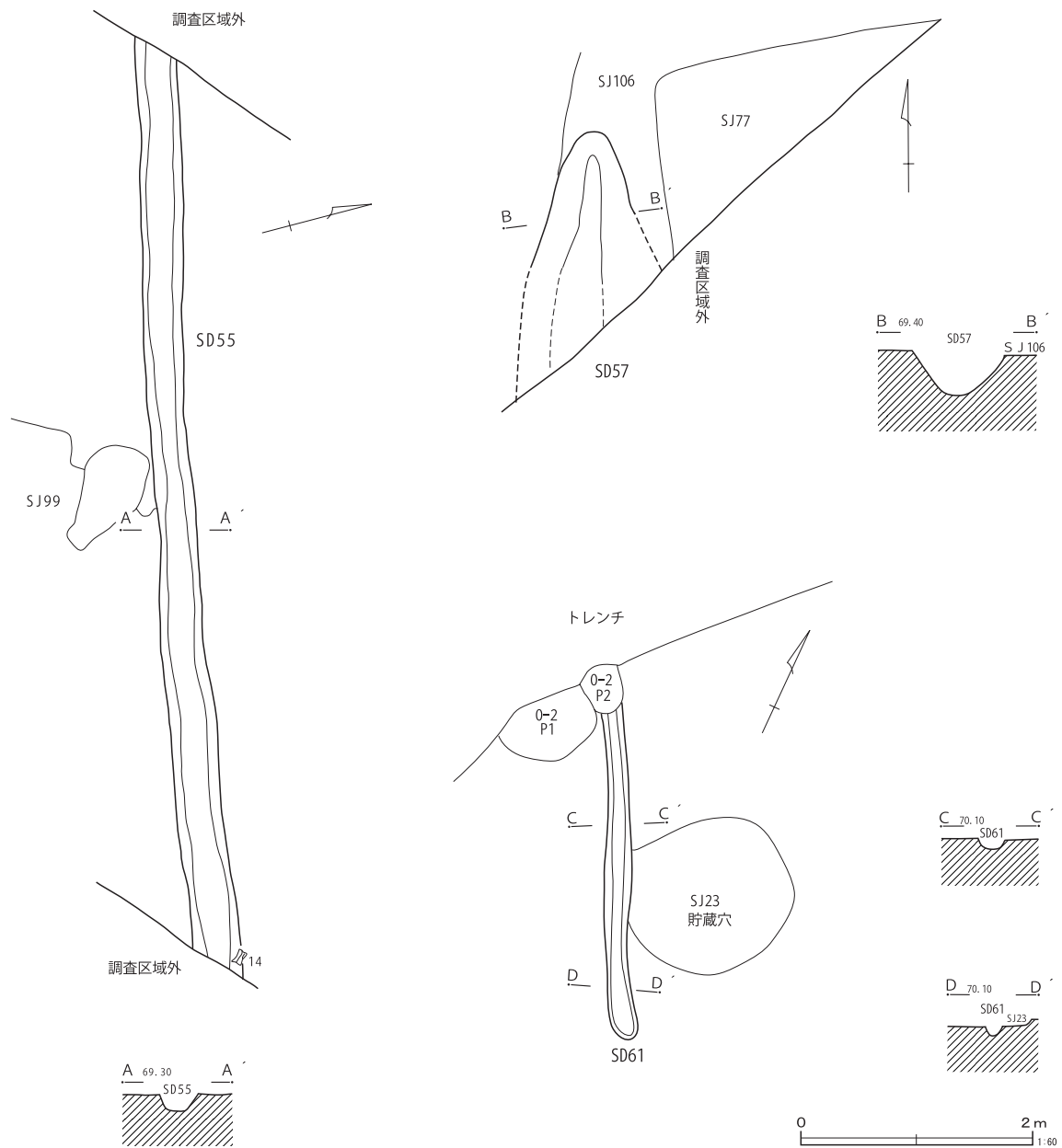
S D 58

- 1 褐色土 ロームブロック極微量
- 2 褐色土 ロームブロック極多量
- 3 暗褐色土 ロームブロックやや多量 褐色土ブロック多量
- 4 灰褐色土 ロームブロック極多量 暗褐色土・褐色土を含む

S D 59・60

- 1 褐色土 ロームブロック少量
- 2 暗褐色土 ロームブロック極多量
- 3 ロームブロック集積層 褐色土やや多量

第231図 第53・54・58～60号溝跡



第232図 第55・57・61号溝跡

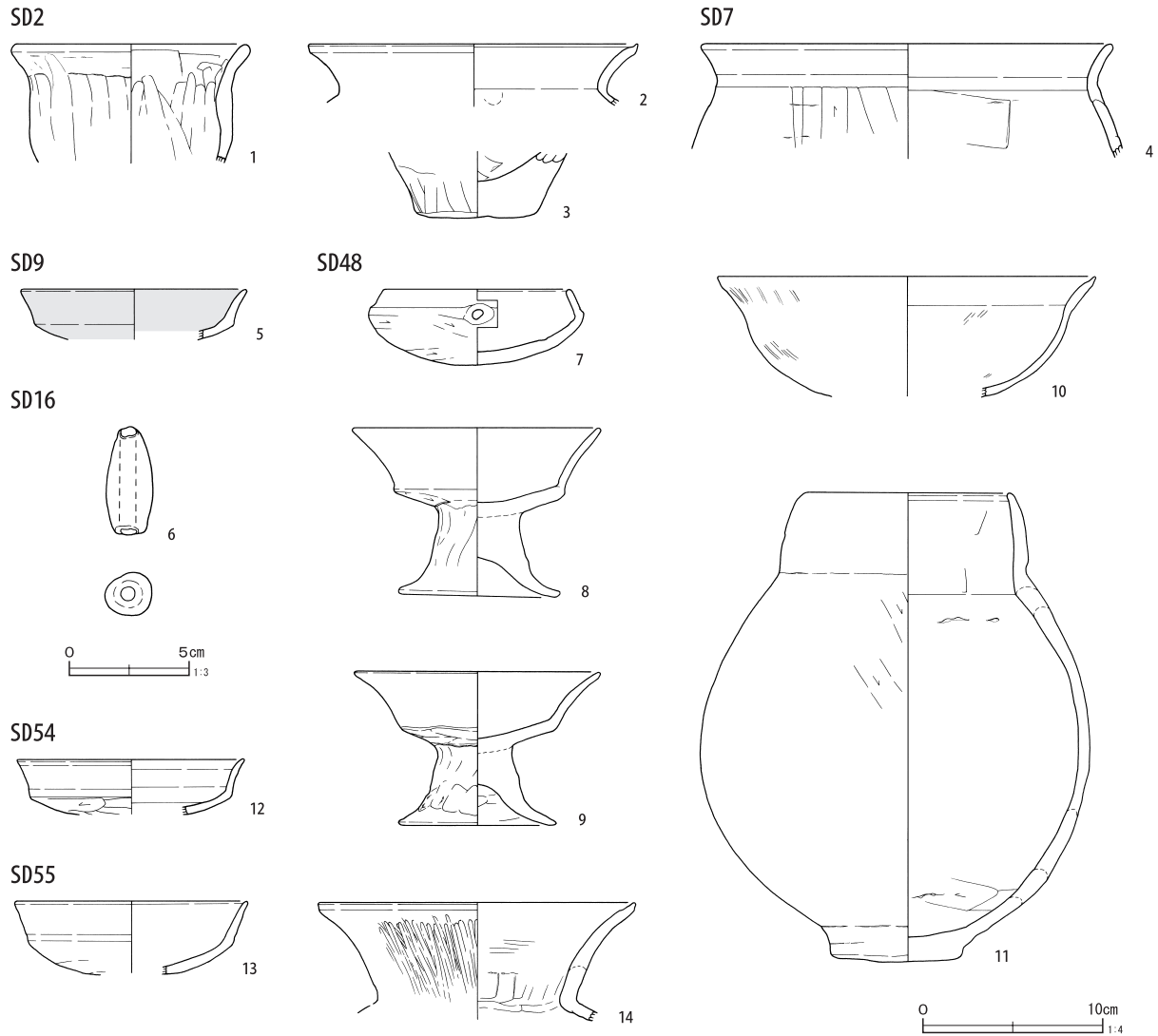
グリッドに位置する。下層遺構確認面で検出され、第23号住居跡と重複する小規模な溝跡である。走行方向はN-28°-Wを指す。検出長は2.90m、幅

は0.15~0.22m、深さは0.06~0.07mである。底面は北西方向に向かって傾斜する。遺物は出土しなかった。

3. 河川跡

今回の調査地点のすぐ西側を流れる現女堀川の河川改修以前の旧流路跡が調査区の北東端と南西端の2箇所で検出された。この流路跡は古墳時代

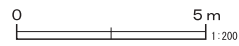
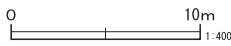
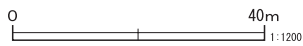
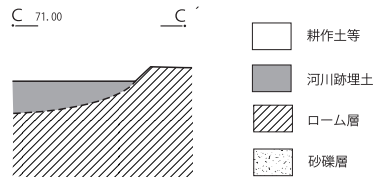
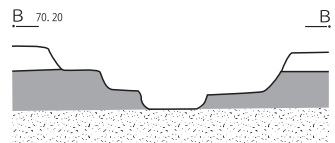
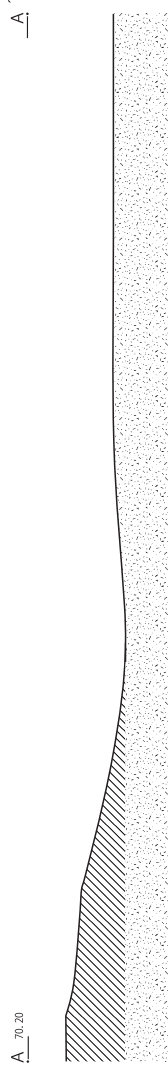
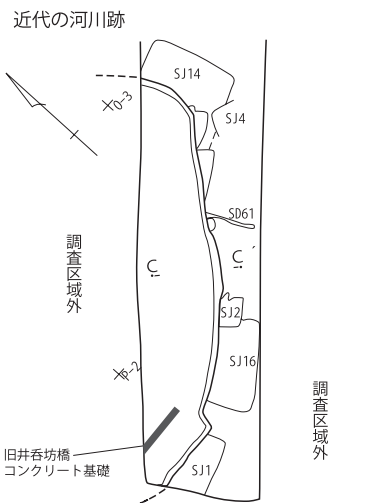
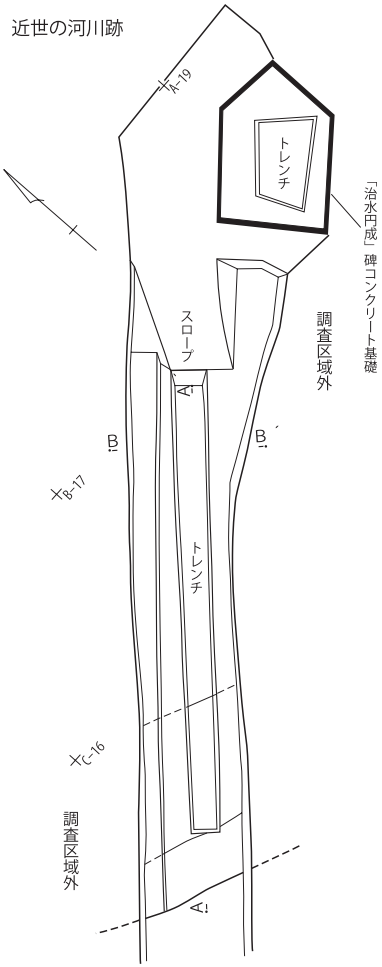
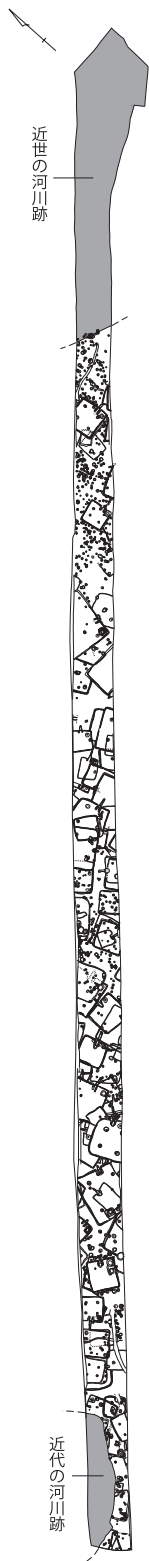
の住居跡群を大規模に削平していることから考えて、近世以前に、これまで居住域であった自然堤防を分断するような形で人口的に開削された流路



第233図 溝跡出土遺物

第82表 溝跡出土遺物観察表 (第233図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	鉢	(12.7)	6.6	—	ACEHIK	15	普通	明赤褐	SD 2	
2	土師器	甕	(18.2)	3.5	—	ACEHI	10	普通	橙	SD 2	
3	土師器	甕	—	3.6	6.6	CDEHI	50	普通	にぶい橙	SD 2	
4	土師器	甕	(22.6)	6.3	—	CEHI	10	普通	橙	SD 7	
5	土師器	坏	(12.3)	2.7	—	EIK	20	普通	にぶい橙	SD 9	内外面赤彩
6	土製品	土錘	長さ4.4cm 最大径1.4cm 孔径0.6cm 重さ13.23g		—	CEHI	100	普通	橙	SD16	
7	土師器	坏	10.1	4.2	—	CEHI	95	普通	にぶい赤褐	SD48 No. 4	小穿孔あり
8	土師器	高坏	13.4	9.2	8.9	CEHI	90	普通	橙	SD48 No. 5	84-2
9	土師器	高坏	13.4	8.4	(8.8)	CEHI	95	不良	橙	SD48 No. 3	84-3
10	土師器	鉢	(20.8)	6.6	—	CEHI	20	普通	明赤褐	SD48 No. 1	84-4
11	土師器	甕	11.2	25.8	7.2	CEHIK	80	普通	にぶい赤褐	SD48 No. 6	84-5
12	土師器	坏	(12.6)	3.0	—	CHI	20	普通	橙	SD54	
13	土師器	坏	(12.7)	3.9	—	CEH	30	不良	橙	SD55	
14	土師器	壺	(17.5)	6.5	—	CEHI	60	普通	橙	SD55 No. 1	



第234図 河川跡

跡の可能性も考えられる。この流路跡(旧女堀川)の開削時期については明確にし得ないが、先人達がどのように河川を制禦し、水田の開墾や治水のために尽力してきたのか雄弁に物語っている。

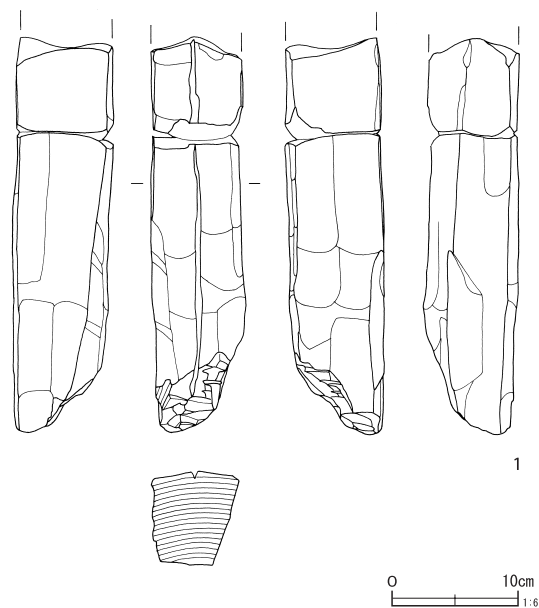
近世の河川跡 (第234図)

調査区の北東端で、すぐ西側を流れる現女堀川の新流路が1条検出された。南西から北東に向かって調査区を斜めに横切るように流れている。流路跡右岸の川岸部分を検出しただけで、その全体像は明確ではないが、A・B・E地点の調査でも確認されている河川跡と同一のものである。

調査では、天明三年(1783)の浅間山大噴火によって降下した火山灰層(浅間A軽石)を取り除いた面を上層遺構確認面として把握した。河川跡の確認状況は、上面に砂が厚く堆積していた状態であった。作業効率、安全性を考慮して、人力による掘削を断念した。それに替わり重機を用いて、長さ約30m、幅約4mの範囲を階段状に掘り下げ、調査を実施した。激しい湧水や壁面の崩落等の危険もあり、制約された調査ではあったが、底面を確認することができた。確認面から底面までの深さはおよそ1.0~1.4mで、底面には砂礫や河原石の堆積が見られた。

遺物は木製杭が1点埋土中から出土した(第235図)。1は木製品の杭である。上部を欠損し、杭先端部が残存する。残存長31.7cm、幅7.1cm、厚さ7.5cmである。みかん割材の芯側を切断し、断面形は台形に作られている。表面は、木材の分割時にできた凹凸部分を中心にチョウナで加工され、概ね平坦になっている。杭先端部の長さは6.5cmで、1面のみを斜めに削って杭先とする。

杭は、木を割らずにそのまま使う丸材や、丸材を2分割、4分割した分割材などを用いて作られることが多いが、分割面を丁寧に加工する例はあまり見られない。よってこの杭は、他の製品からの転用品と考えられる。杭表面の調整や形状から考えると調度品であった可能性は低く、建築材な



第235図 河川跡出土遺物

どの外見より実用性が重視される場所で使用された角材だったと考えられる。

このように河川跡の開削時期を示すような遺物はないが、埋土上層に浅間A軽石が堆積していたことから江戸後期にはかなり埋没が進んでいたものと考えられる。

近代の河川跡 (第234図)

調査区南西端において、西方から調査区内に大きく湾入する長さ約22mの砂利混じりの大規模な落ち込みが確認された。流路跡や埋没谷の可能性が考えられたため、重機を用いて掘削を行った。掘削の結果、その内部から旧井呑坊橋の橋脚部分と考えられるコンクリート基礎が検出されたことから、調査区のすぐ西側を流れる現女堀川の改修以前の旧流路であることが判明した。基本的に遺物等が出土しなかったため、近代における改修前の河川跡として、その範囲を記録するに留めた。

なお、試掘調査の際にも井呑坊橋に通じる町道から下流方向、約20mの範囲から近代の陶磁器片やコンクリート塊が大量に出土し、土層が大きく攪乱を受けていることが確認されており、それを裏付ける結果となった。

4. 土壌

土壌は11基検出された。いずれも下層遺構確認面から検出されており、また出土遺物からも古墳時代に帰属するものと思われる。分布に濃淡はあるが、住居跡の分布範囲に重なるように調査区内に広く展開する（第236図）。

各土壌の分布状況を概観すると、第1・2号土壌は調査区南西端に隣接して位置する。第1号土壌は住居跡との重複がなく単独で検出され、出土遺物も多い。また、被熱面を有することから鍛冶炉の可能性が考えられる。第4～6・11号土壌の4基は調査区中央部南寄りに散在していた。このうち第5・6号土壌は隣接し、同形・同大である。第7～10号土壌の4基は、調査区中央部北寄りの狭い範囲に集中していた。このうち第7・8・10号土壌の3基は重複関係にあり、近接した時期の所産と考えられる。第3号土壌は調査区北東側で住居跡と重複して検出された。矩形平面の大型の土壌で、完形に近い甕が埋土中から単独で出土し、他のものとはやや様相を異にする。

遺物の出土した土壌は、第1～3・7・8・10号土壌の6基である。その多くは他遺構と重複関係にあるため、混入の可能性が強く、遺物の帰属については不明確である。ただ、第8号土壌の平底の鉢、第10号土壌の砥石は注意されよう。

第1号土壌（第237図）

第1号土壌は調査区南西端のP-2グリッドに位置する。第48号溝跡を切り、至近まで河川跡によって削平される。平面形は不整形で、南側に深い掘り込み部分を有する。規模は長径0.75m、短径0.65m、深さ0.56mである。長軸方位はN-85°-Wを指す。土壌の掘り込み部の北側に被熱痕跡が認められ、埋土中にも多量の焼土が含まれていたことから、鍛冶炉の可能性も考えられる。

出土遺物は土師器鉢・壺・甕がある（第238図1～4）。いずれも本土壌の周囲から出土し、4の甕だけは被熱部分から出土した。1・2は広口鉢の

大小のセットである。3は口縁部の中位に沈線により弱い段を作出した二重口縁壺である。4は胴部外面に縦方向のヘラケズリを施す長胴甕で、胴部中位に最大径をもつものであろう。

土器の時期は鬼高I期の6世紀前半に位置づけられる。

第2号土壌（第237図）

第2号土壌は調査区南西端のP-2グリッドに位置する。第16号住居跡を切り、北西側は河川跡によって削平される。平面形は不整楕円形と推定され、規模は長径1.13m、短径0.72m、深さ0.15mである。長軸方位はN-35°-Eを指す。

出土遺物は土師器甕の上半部が出土した（第238図5）。口縁部が長く外反する長胴甕で、胴部の張りは弱い。土器の時期は鬼高期後半である。

第3号土壌（第237図）

第3号土壌は調査区北側のD・E-14グリッドに位置し、他の土壌と大きく離れて単独で検出された。第30号住居跡に切られ、第34・35号住居跡を切っている。平面形は長方形と推定され、規模は長径2.05m、短径1.85m、深さ0.43mである。長軸方位はN-49°-Eを指す。埋土下層に炭化物の混入が目立つ。出土位置だけでなく、形状・規模とも他の土壌とは大きく異なっている。

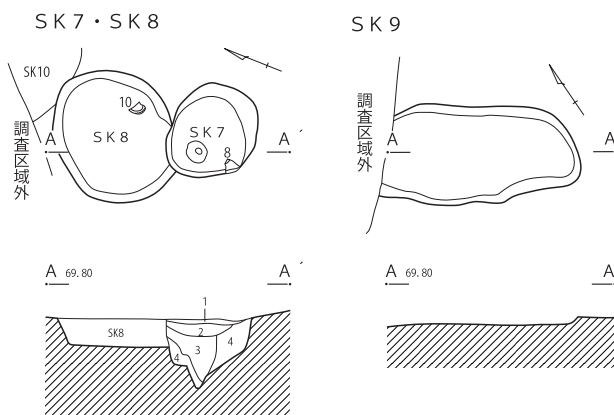
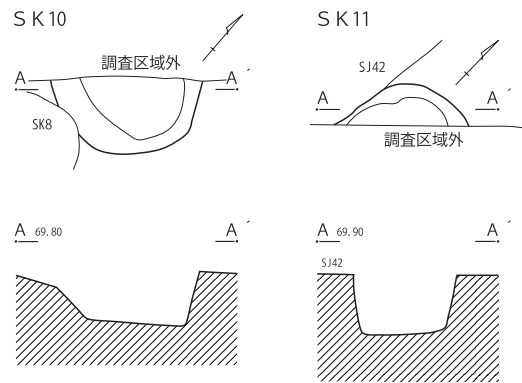
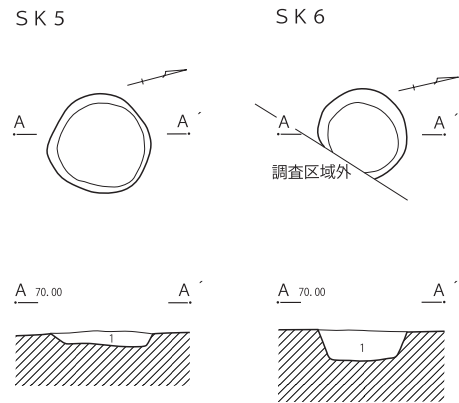
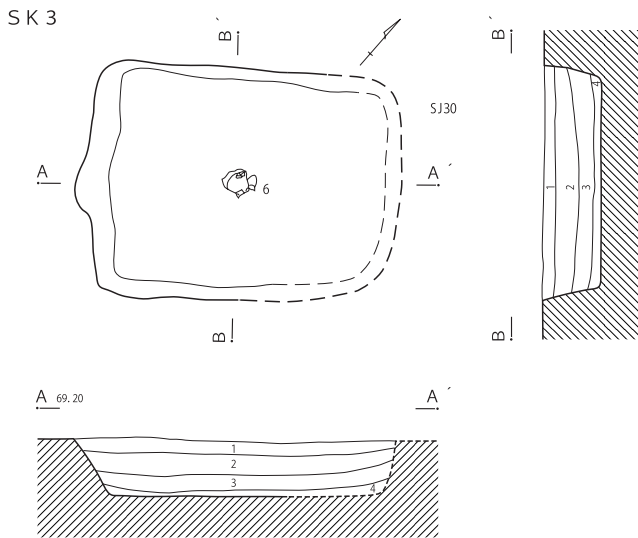
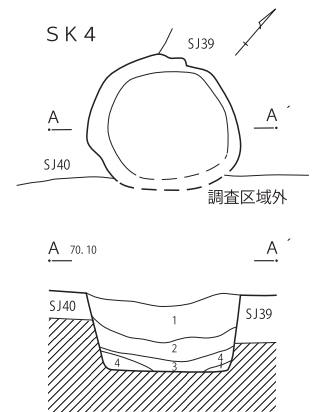
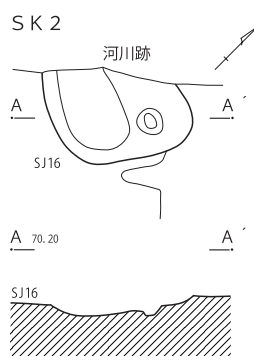
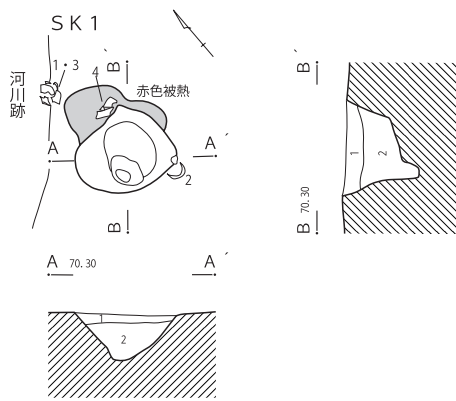
出土遺物は土壌中央部の第3層中からほぼ完形の甕が出土した（第238図6）。口唇部が面取りされた胴張甕で、頸部の括れはやや弱い。遺構の重複関係や土器の特徴から、鬼高I期の古段階に位置づけられる。

第4号土壌（第237図）

第4号土壌は調査区南側のM-5グリッドに位置し、南側の一部は調査区域外にかかる。第39・40号住居跡を切っている。平面形はほぼ円形を呈し、規模は長径1.21m、短径1.00m、深さ0.65mと掘り込みも深い。長軸方位はN-49°-Eを指す。遺物は出土しなかった。



第236図 土壌全体図

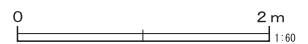


- SK 1
 1 黒色土 1mm程度の焼土粒子多量
 2 黒色土 5~10mm程度の焼土粒子多量
 ローム多量

- SK 3
 1 黒色土 1mm程度の焼土粒子少量
 2 黒色土 1mm程度の焼土粒子少量 炭化物少量
 3 明褐色土 炭化物多量 ローム少量
 4 明褐色土 ローム多量

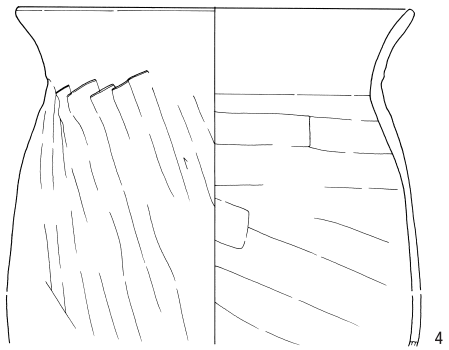
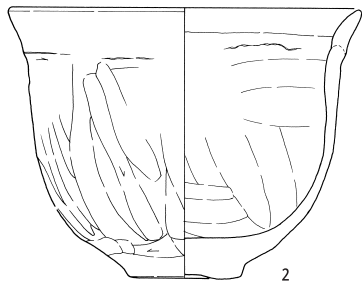
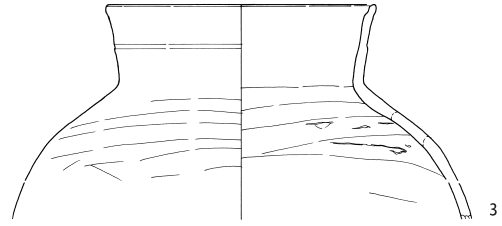
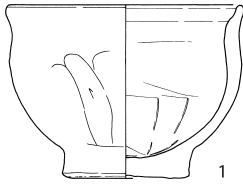
- SK 4
 1 黒色土 5mm程度の焼土粒子・ローム粒子少量 50~100mmのロームブロック含む
 2 灰褐色土 5mm程度のローム粒子少量 粘性強い
 3 暗褐色土 ローム少量
 4 明褐色土 ローム多量

- SK 5・6・7
 1 黒褐色土 炭化物ブロック・焼土ブロック少量
 2 灰褐色土 焼土粒子微量 ローム粒子少量
 3 灰褐色土 炭化物ブロック少量 焼土ブロック多量
 4 灰褐色土 炭化物ブロック少量 焼土粒子少量 ロームブロックやや多量

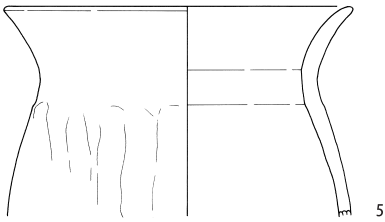


第237図 土壌

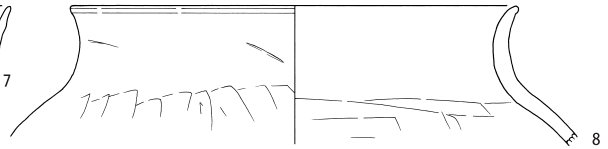
SK1



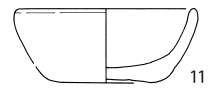
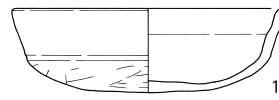
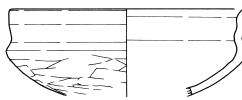
SK2



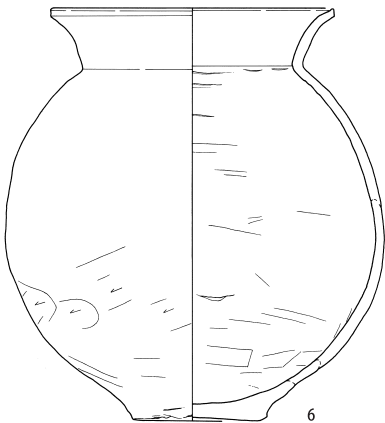
SK7



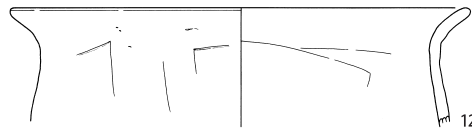
SK8



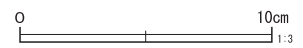
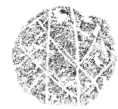
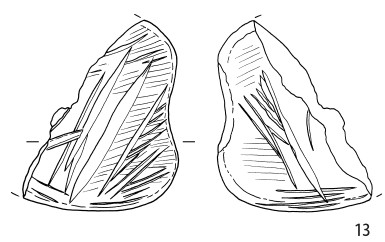
SK3



SK8



SK10



第238図 土壙出土遺物

第83表 土壌出土遺物観察表 (第238図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	鉢	(12.0)	9.1	6.6	E H I K	20	普通	にぶい赤褐	SK 1 No. 3	84-6
2	土師器	鉢	(18.2)	14.2	5.9	C E H I	20	普通	明赤褐	SK 1 No. 2	
3	土師器	壺	(14.0)	11.2	—	C E H I	50	普通	橙	SK 1 No. 3	
4	土師器	甕	(20.4)	17.7	—	C E H I	15	普通	明赤褐	SK 1 No. 1	
5	土師器	甕	(18.0)	11.0	—	A B E G H	10	普通	橙	SK 2	
6	土師器	甕	14.8	21.5	7.1	C E H I K	90	普通	橙	SK 3 No. 1	
7	土師器	坏	(11.7)	4.2	—	E H I	30	普通	橙	SK 7	
8	土師器	甕	(23.4)	7.2	—	B C E H I	15	普通	にぶい赤褐	SK 7 No. 1	
9	土師器	坏	(12.2)	4.5	—	C E H I	20	普通	にぶい橙	SK 8	
10	土師器	坏	(14.0)	4.4	—	C E H I	50	普通	橙	SK 8 No. 1	
11	土師器	鉢	(9.1)	3.9	(5.4)	C E H I	50	普通	橙	SK 8 底部木葉痕	
12	土師器	甕	(23.8)	6.2	—	B C E H I	10	普通	橙	SK 8	
13	石製品	砥石	長さ7.5cm 幅6.2cm 厚さ3.8cm 重さ77.82g 安山岩						SK10	92-3	

第5号土壌 (第237図)

第5号土壌は調査区中央部南寄りのK-7グリッドに位置する。第65・71号住居跡と重複していた。平面形は円形で、規模は長径0.83m、短径0.82m、深さ0.10mである。長軸方位はN-8°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第6号土壌 (第237図)

第6号土壌は調査区中央部南寄りのL-7グリッドに位置する。南東側の一部は調査区外になる。北側には第5号土壌がある。平面形はほぼ円形で、規模は長径0.73m、短径0.63m、深さ0.23mである。長軸方位はN-62°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第7号土壌 (第237図)

第7号土壌は調査区中央部北寄りのI・J-8グリッドに位置する。第59号住居跡、第8号土壌と重複していた。平面形は東西に長い楕円形で、規模は長径0.80m、短径0.67m、深さ0.55mである。長軸方位はN-78°-Wを指す。中央部が深く掘られており、柱等の抜き取り痕と考えられる。

出土遺物は土師器坏・甕が出土した (第238図7・8)。7は須恵器坏蓋模倣坏である。体部が扁平で、口縁部は長く外反する。8は広口甕で、口縁部は短く外反する。土器の時期は鬼高II期に位置づけられる。

第8号土壌 (第237図)

第8号土壌は調査区中央部北寄りのI・J-8グリッドに位置する。第59号住居跡、第7・10号土壌と重複していた。平面形は楕円形で、規模は長径1.12m、短径0.92m、深さ0.22mである。長軸方位はN-50°-Eを指す。

出土遺物は土師器坏・鉢・甕が出土した (第238図9~12)。9は口縁部が短く直立気味に立ち上がる坏身模倣坏である。10は体部と口縁部の境が不明瞭な坏蓋模倣坏である。11は口径9・1cmに復元される小型の鉢である。平底で二重に木葉痕が残る。12は甕の口縁部である。頸部から強く外反する。甗の可能性もある。土器の時期は鬼高II期に位置づけられる。

第9号土壌 (第237図)

第9号土壌は調査区中央部北寄りのI-8グリッドに位置し、北西側の一部は調査区域外になる。第59号住居跡を切っている。平面形は長楕円形で、規模は長径1.53m、短径0.82m、深さ0.05mと非常に浅く、他の土壌と異なる。長軸方位はN-55°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第10号土壌 (第237図)

第10号土壌は調査区中央部北側のI-8グリッドに位置する。第59号住居跡、第8号土壌と重複し、北西部分は調査区域外である。平面形は

楕円形と推定され、規模は長径1.20m、短径0.61m、深さ0.42mである。長軸方位はN-50°-Eを指す。

出土遺物は安山岩製の砥石1点が出土した(第238図13)。一部欠損しているが、表裏面及び下面に、刀子等の刃砥ぎ状の断面三角形の使用痕が顕著に残る。

5. ピット

調査区内から単独のピット(小穴)が計547基検出された(第239~255図)。いずれも下層遺構確認面において検出されたものである。明確な柱痕等の確認されたものはないが、埋土中に浅間B軽石等の火山灰をほとんど含まないことから、その大半が古墳時代の所産と考えられる。しかし、住居跡の埋土を切り込んでいるものも数多く、ある程度の期間内に累積した結果であることは間違いない。ただし、出土遺物も少なく時期細分することは至難である。

ピットの分布状況は、狭長な調査区の北側、第1号溝跡から大型住居跡の第97号住居跡の位置するF-12・13グリッドの間に集中していた。すなわち、大溝によって区画された居住域の中でも住居の分布密度の低い空閑地を中心に全体の6割弱が集中していたことになる。特に、第28号住居跡の周辺は足の踏み場のないほどに密集しており、そこには意図的な配置を読み取ることができる。しかし、規則的な配置や埋土の共通性などを認識することができず、掘立柱建物跡や柵列等を検出するまでには至らなかった。

また、調査区中央部の第47号住居跡と第57号住居跡に挟まれたJ-8グリッド周辺にも100基前後のピットの集中が認められた。その他にも第43号住居跡と第58号住居跡の間の空閑地に40基、調査区南側の第25号住居跡北側の空閑地に30基前後の分布が認められ、あたかも住居密集地を避けるように分布していた。とりわけ、第25号住居跡

第11号土壌(第237図)

第11号土壌は調査区中央部南寄りのL・M-6グリッドに位置し、南東部分は調査区域外である。第42号住居跡と重複する。平面形は楕円形と推定され、規模は長径1.00m、短径0.32m、深さ0.47mである。長軸方位はN-2°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

の南西壁に沿って一列に並ぶピット列(第253図)などは規則的な配列を窺うことができる。何ら根拠のない憶測にすぎないが、垣根等の遮蔽物の存在した可能性も想起されよう。

ピットの平面形は円形・楕円形・方形・不整形等の多種類が見られる。規模は、直径10cm前後の小規模なものから長径が80cmを超える大型のものまであり、直径30cm前後のものが大半を占める。深度は10cm以下のものから80cmまでの幅があり、一様ではない。

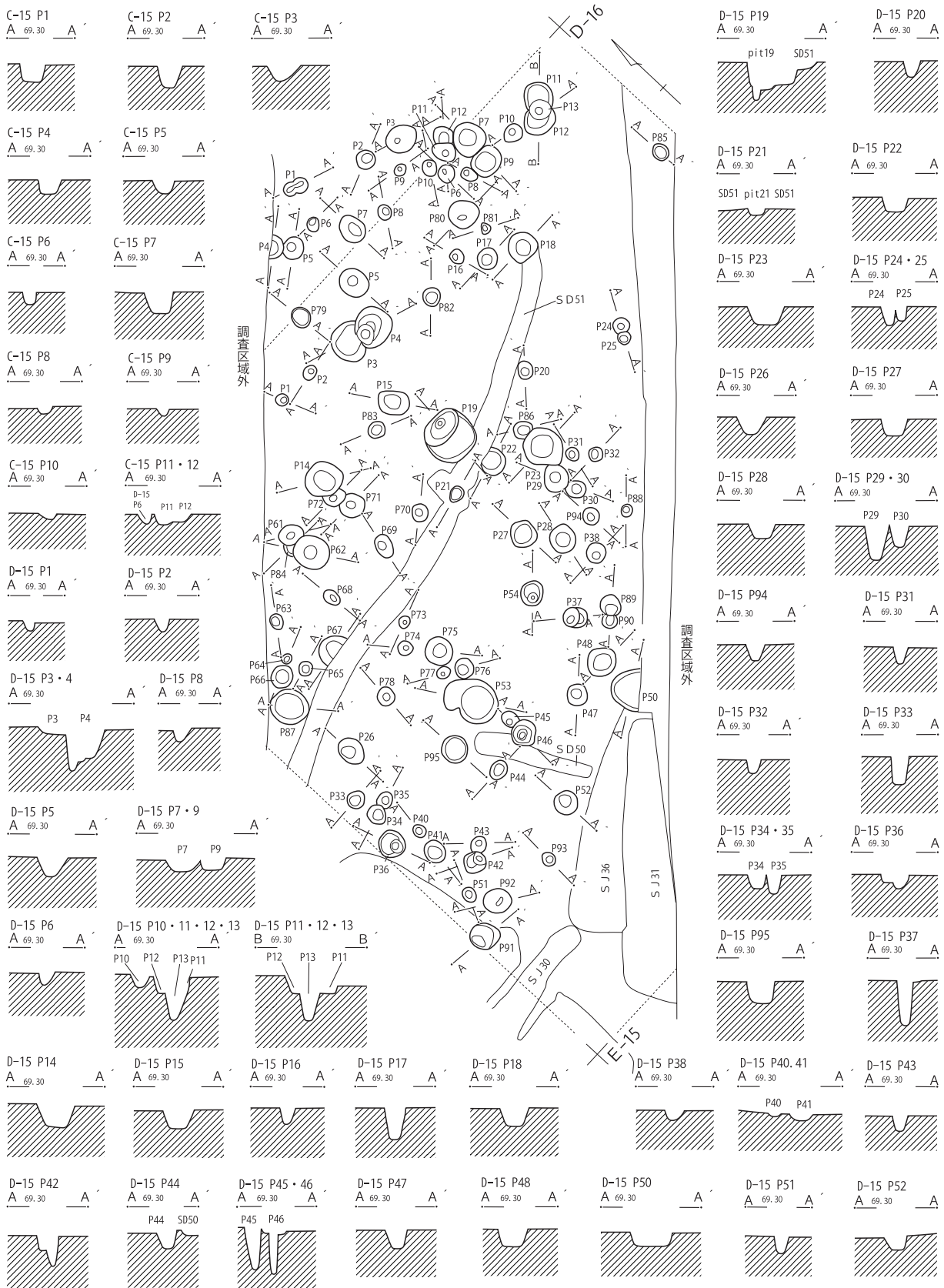
ピットはグリッド毎に番号を付して調査を行った。各グリッドにおけるピット数の内訳は以下の通りである。

- ・C-15グリッド12基
- ・D-14グリッド1基 D-15グリッド87基
- ・E-13グリッド48基 E-14グリッド86基
- ・F-12グリッド18基 F-13グリッド66基
- ・G-11グリッド8基 G-12グリッド9基
- ・I-9グリッド23基
- ・J-8グリッド60基 J-9グリッド11基
- ・K-7グリッド14基 K-8グリッド3基
- ・L-6グリッド5基 L-7グリッド18基
- ・M-4グリッド9基 M-5グリッド24基
- ・N-3グリッド1基 N-4グリッド24基
- ・O-2グリッド3基 O-3グリッド3基
- ・P-1グリッド5基 P-2グリッド9基

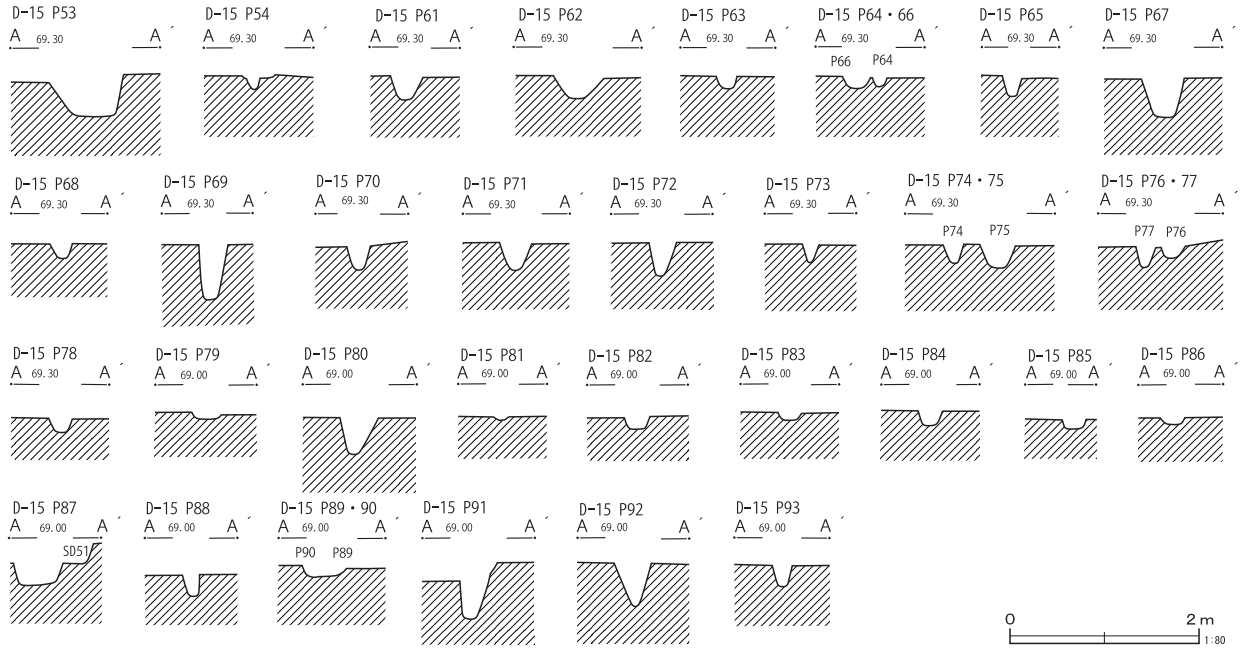
なお、ピットの計測値等については第84表から第91表のピット一覧表に示した。



第239図 ピット全体図



第240図 ピット (1)

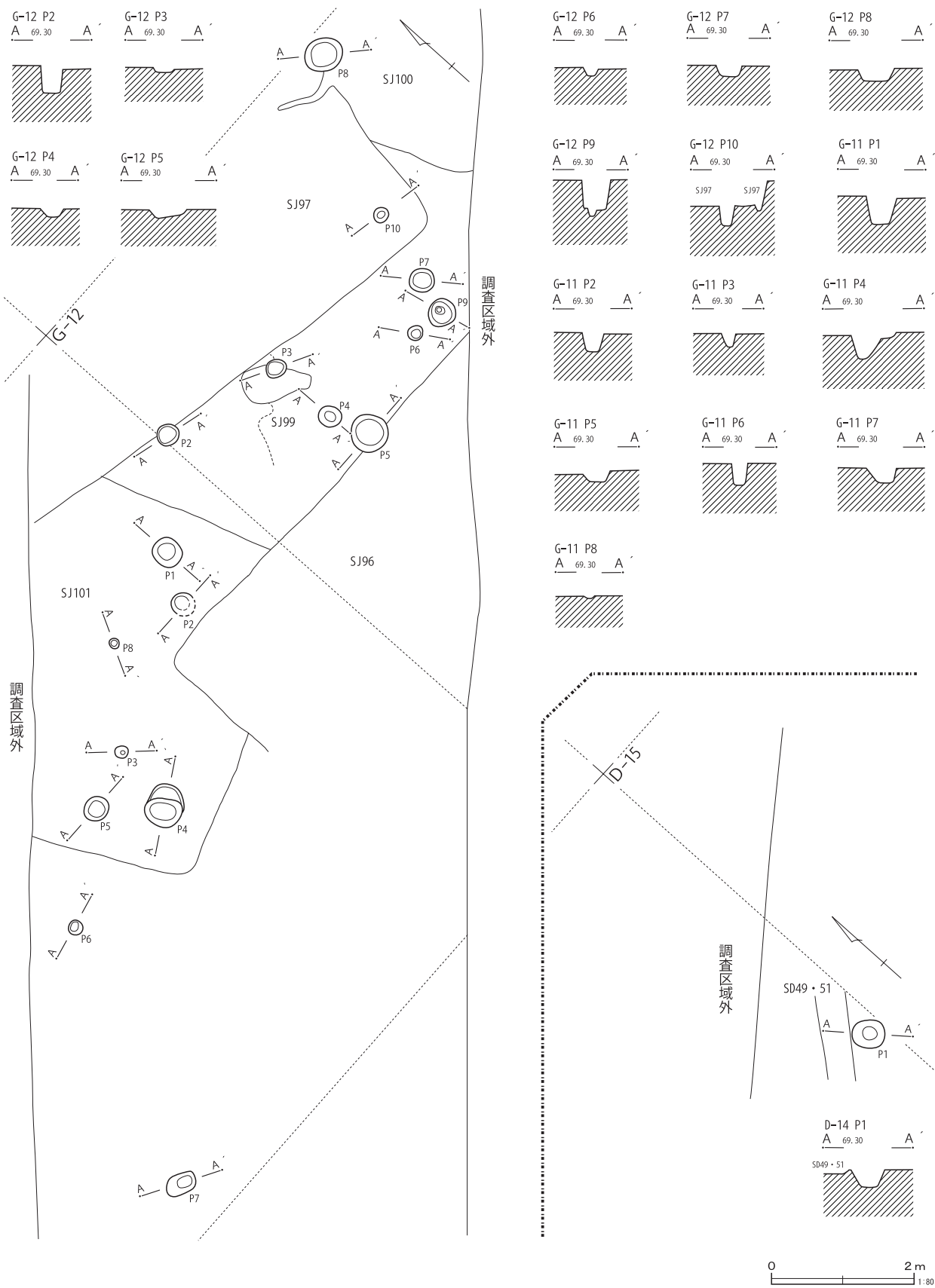


第241図 ピット (2)

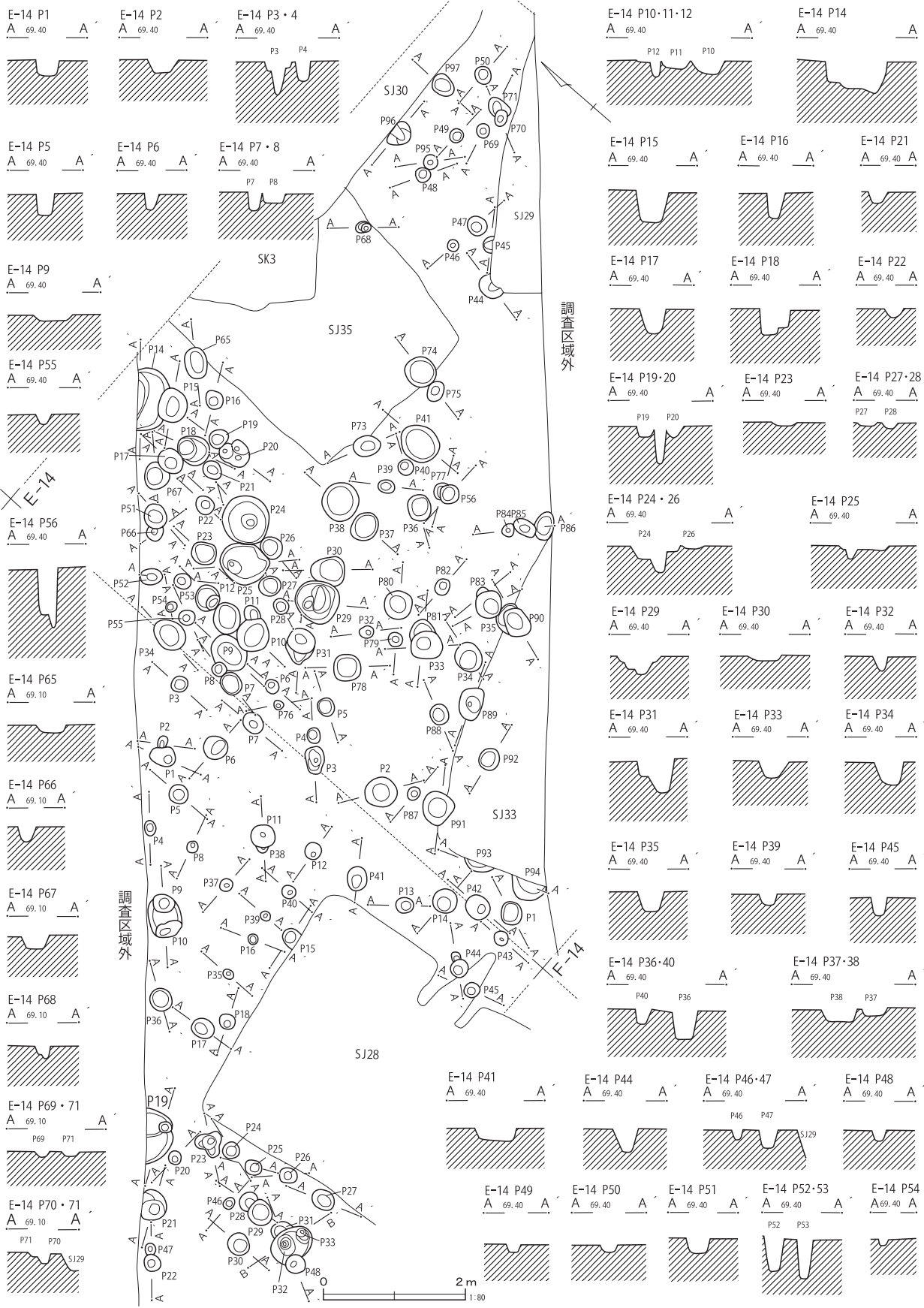
第84表 ピット一覧表 (1)

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
C-15	P 1	35	21	23	
C-15	P 2	25	24	29	
C-15	P 3	44	37	20	
C-15	P 4	33	(17)	21	
C-15	P 5	30	28	17	
C-15	P 6	20	17	15	
C-15	P 7	40	33	28	
C-15	P 8	20	19	9	
C-15	P 9	18	14	8	
C-15	P10	24	19	7	
C-15	P11	33	25	13	
C-15	P12	28	23	9	
D-14	P 1	45	39	24	
D-15	P 1	17	15	11	
D-15	P 2	21	17	16	
D-15	P 3	54	(37)	11	
D-15	P 4	55	52	45	
D-15	P 5	42	36	26	
D-15	P 6	23	22	15	
D-15	P 7	47	45	14	
D-15	P 8	24	17	18	
D-15	P 9	42	36	15	
D-15	P10	28	25	16	
D-15	P11	38	(24)	15	
D-15	P12	42	(21)	24	
D-15	P13	28	28	62	
D-15	P14	49	47	30	
D-15	P15	42	33	23	

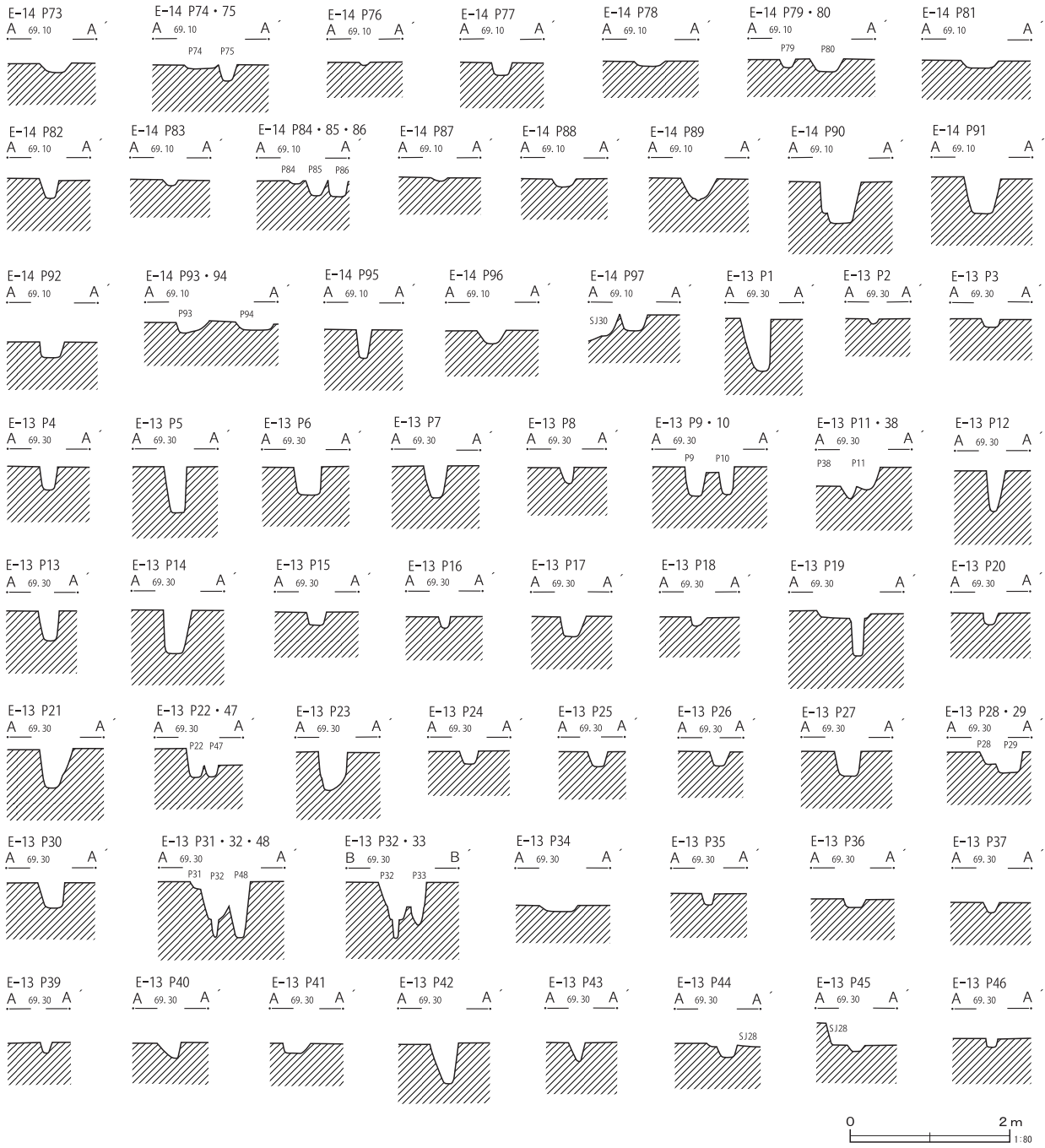
グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
D-15	P16	22	18	21	
D-15	P17	28	28	44	
D-15	P18	40	37	24	
D-15	P19	67	65	52	
D-15	P20	24	21	20	
D-15	P21	23	18	5	
D-15	P22	35	(29)	19	
D-15	P23	58	51	24	
D-15	P24	24	21	26	
D-15	P25	18	15	20	
D-15	P26	40	30	24	
D-15	P27	37	35	12	
D-15	P28	37	35	18	
D-15	P29	36	36	47	
D-15	P30	26	24	28	
D-15	P31	19	17	22	
D-15	P32	20	20	19	
D-15	P33	23	23	38	
D-15	P34	27	26	19	
D-15	P35	21	20	26	
D-15	P36	38	36	18	
D-15	P37	34	28	30	
D-15	P38	28	27	12	
D-15	P39	—	—	—	欠番
D-15	P40	18	16	4	
D-15	P42	32	30	32	
D-15	P43	23	22	21	
D-15	P44	28	22	22	



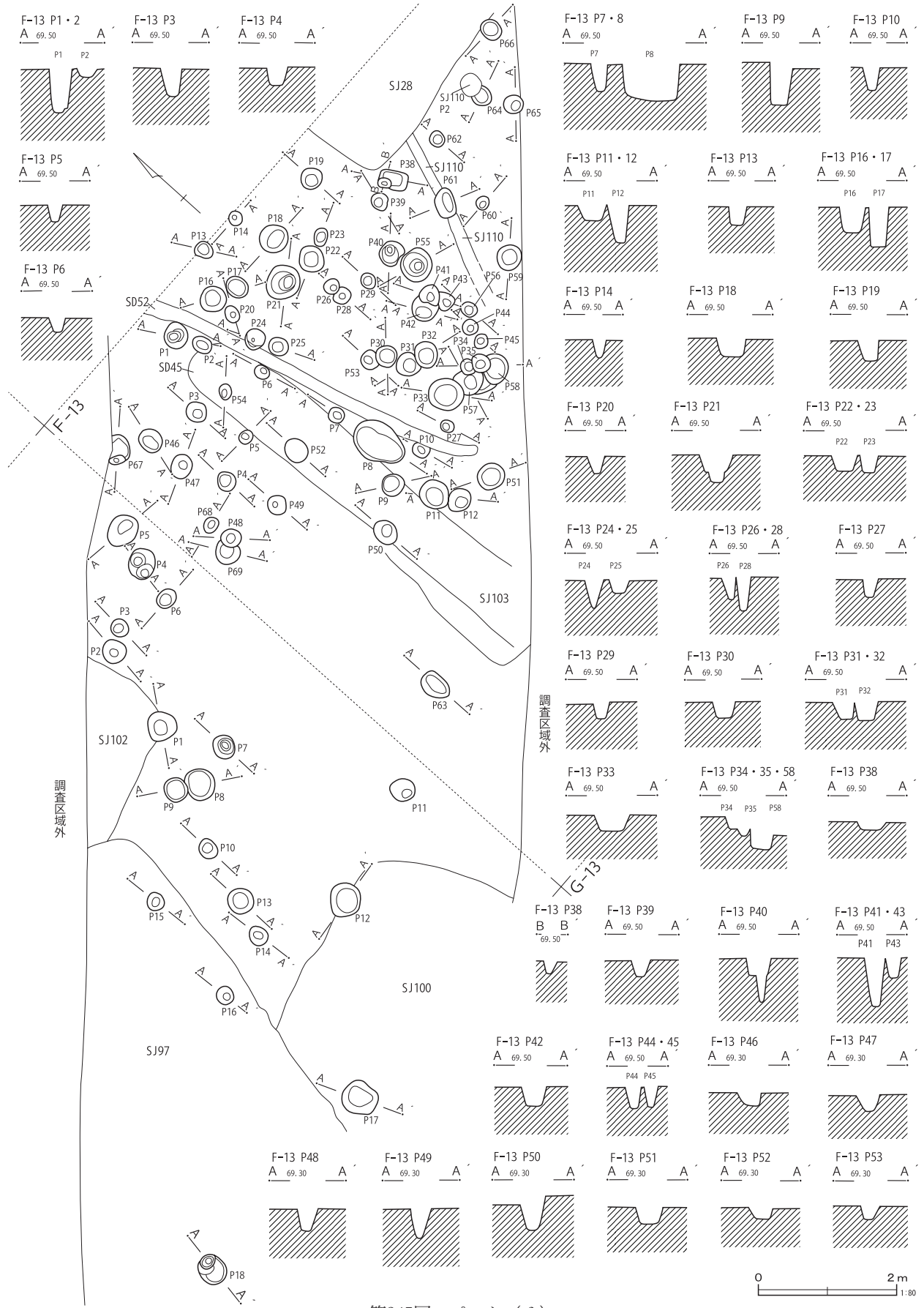
第242図 ピット (3)



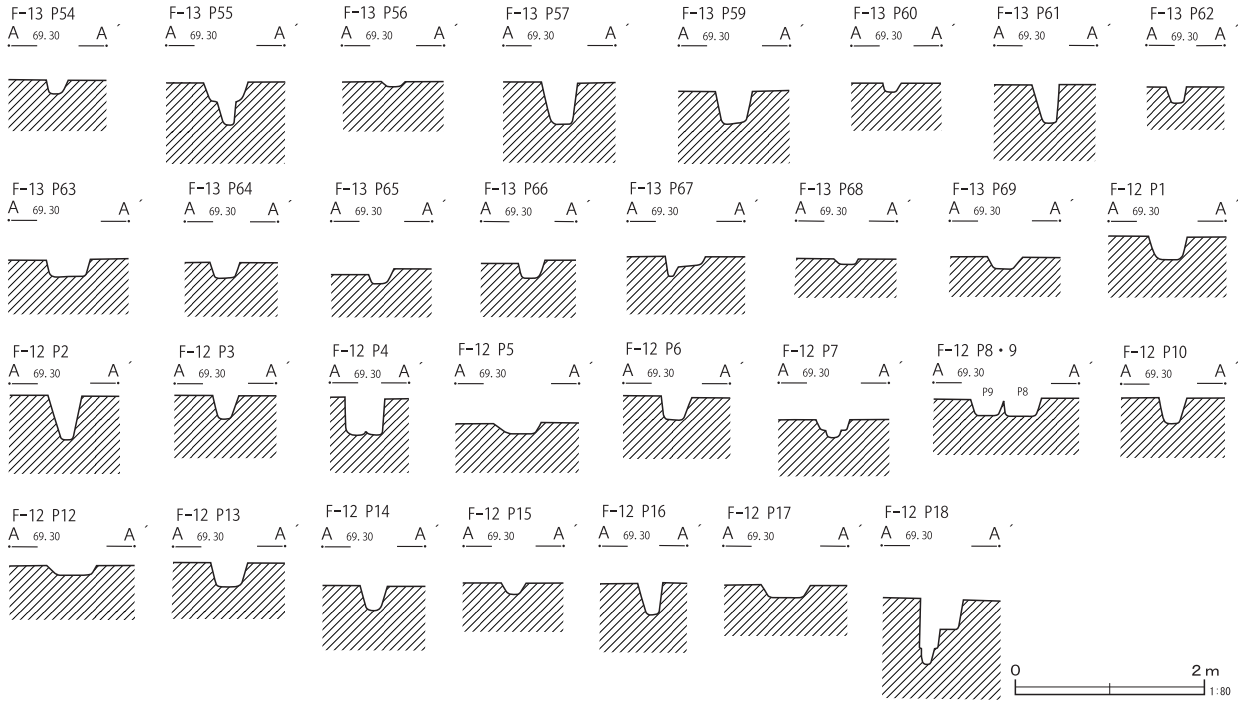
第243図 ピット (4)



第244図 ピット (5)



第245図 ピット (6)

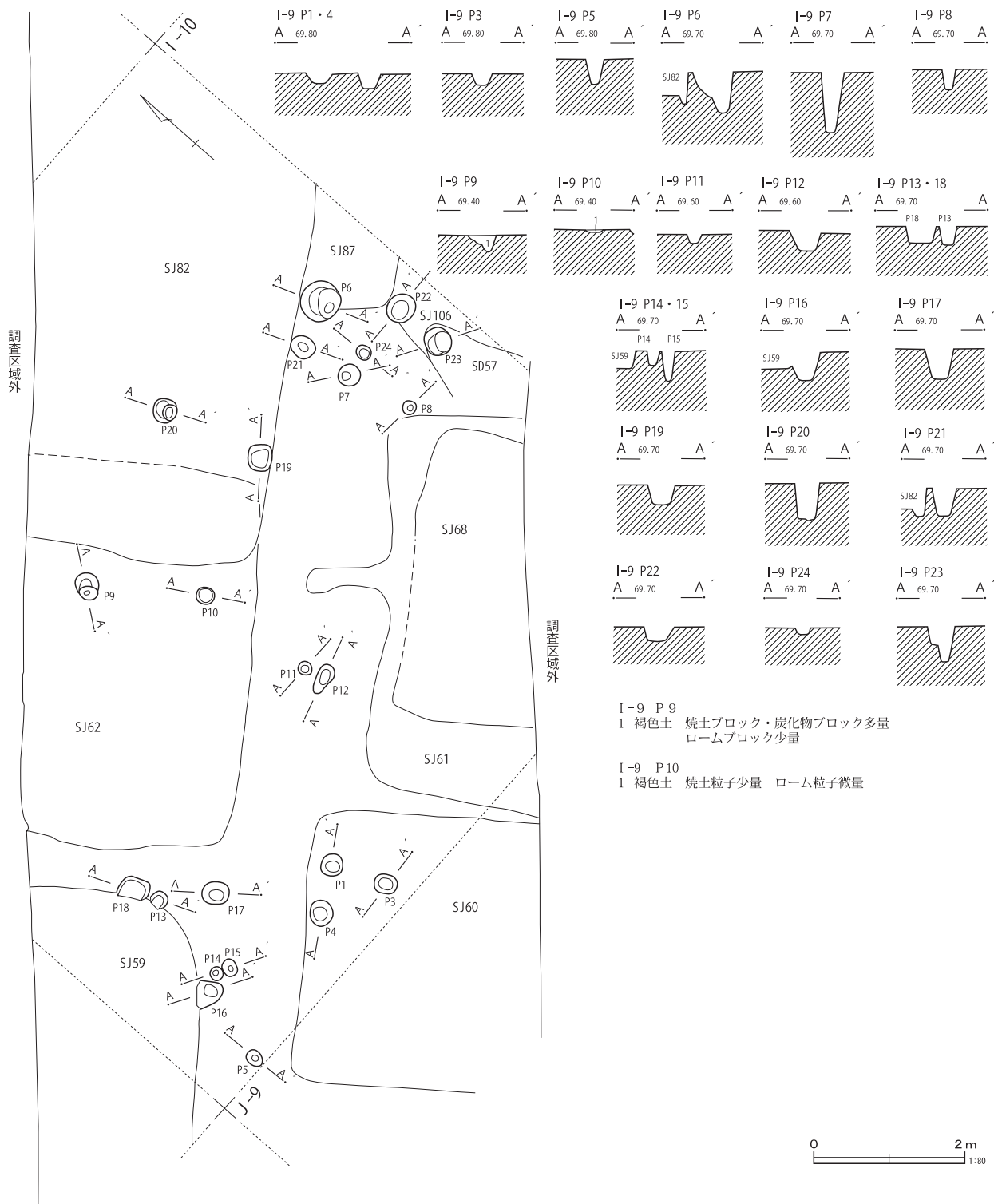


第246図 ピット (7)

第85表 ピット一覧表 (2)

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
D-15	P 45	(22)	20	15	
D-15	P 46	36	36	19	
D-15	P 47	30	28	25	
D-15	P 48	42	39	23	
D-15	P 49	—	—	—	欠番
D-15	P 50	59	(37)	21	
D-15	P 51	20	17	22	
D-15	P 52	32	30	17	
D-15	P 53	77	58	35	
D-15	P 54	35	30	14	
D-15	P 55	—	—	—	欠番
D-15	P 56	—	—	—	欠番
D-15	P 57	—	—	—	欠番
D-15	P 58	—	—	—	欠番
D-15	P 59	—	—	—	欠番
D-15	P 60	—	—	—	欠番
D-15	P 61	34	28	23	
D-15	P 62	48	44	22	
D-15	P 63	22	17	11	
D-15	P 64	14	12	9	
D-15	P 65	20	19	19	
D-15	P 66	31	29	13	
D-15	P 67	46	(26)	40	
D-15	P 68	24	17	15	
D-15	P 69	32	23	58	
D-15	P 70	24	22	23	
D-15	P 71	36	32	29	
D-15	P 72	28	(17)	36	

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
D-15	P 73	17	15	19	
D-15	P 74	21	20	20	
D-15	P 75	39	37	24	
D-15	P 76	27	25	13	
D-15	P 77	20	15	22	
D-15	P 78	25	23	13	
D-15	P 79	30	25	8	
D-15	P 80	40	40	40	
D-15	P 81	16	12	4	
D-15	P 82	25	25	13	
D-15	P 83	24	23	8	
D-15	P 84	28	25	16	
D-15	P 85	24	21	10	
D-15	P 86	25	23	8	
D-15	P 87	53	47	20	
D-15	P 88	18	16	22	
D-15	P 89	31	26	8	
D-15	P 90	20	(16)	11	
D-15	P 91	43	36	59	
D-15	P 92	38	34	45	
D-15	P 93	21	17	23	
D-15	P 94	25	23	22	D-15 P 29-2 から変更
D-15	P 95	37	36	29	D-15 P 36-2 から変更
E-13	P 1	38	29	65	
E-13	P 2	(16)	15	6	
E-13	P 3	23	23	10	
E-13	P 4	22	16	29	
E-13	P 5	27	27	57	

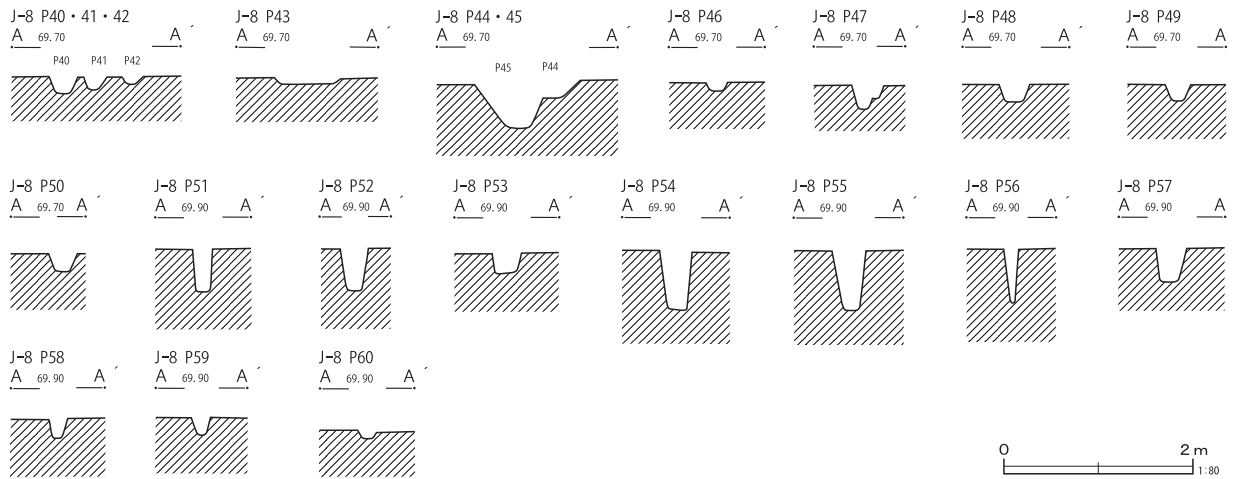


第247図 ピット (8)



J-9 P 3
 1 暗褐色土 ローム粒子やや多量
 2 暗褐色土 ロームブロック多量
 3 暗褐色土 ロームブロック主体層
 暗褐色土やや多量

第248図 ピット (9)

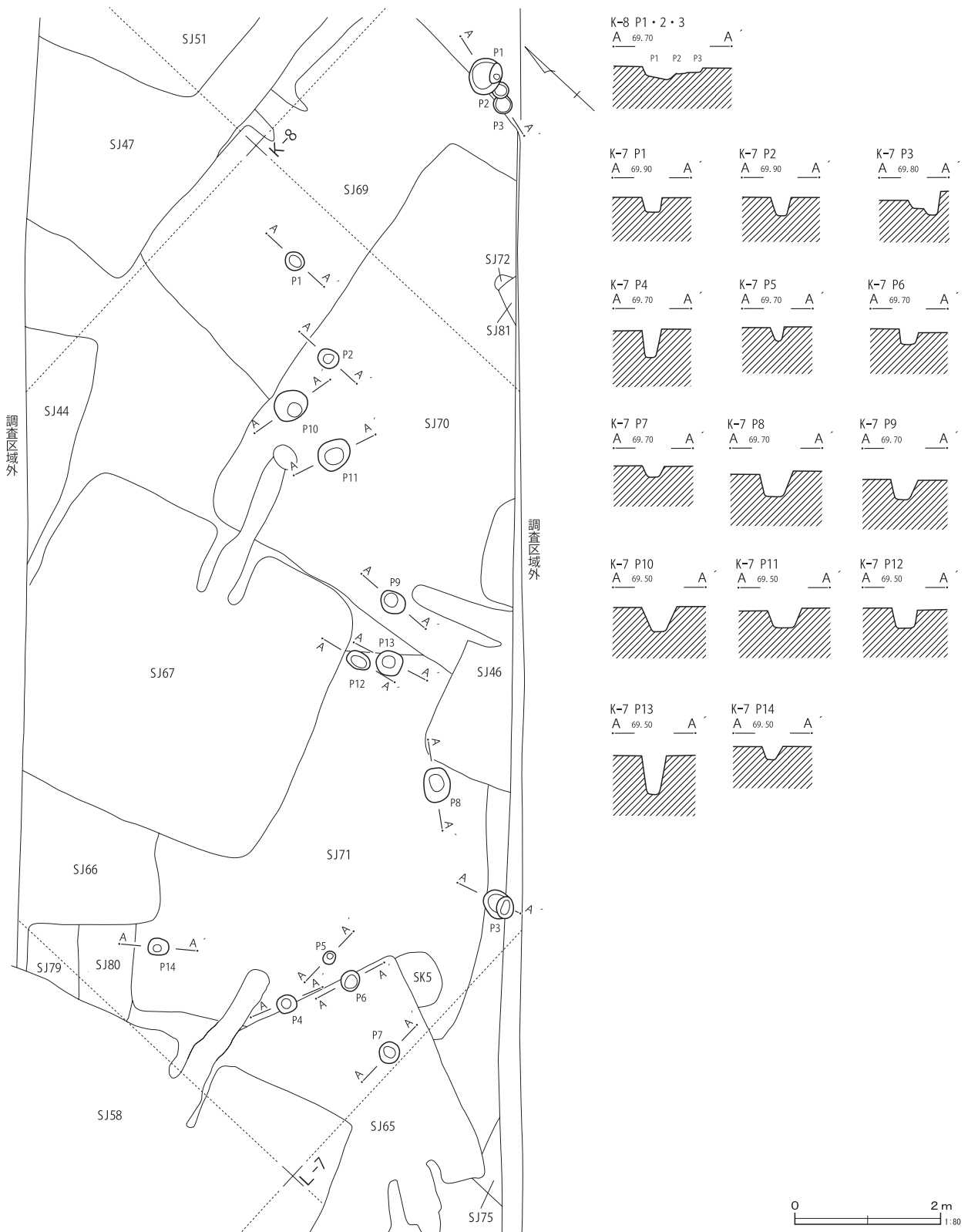


第249図 ピット (10)

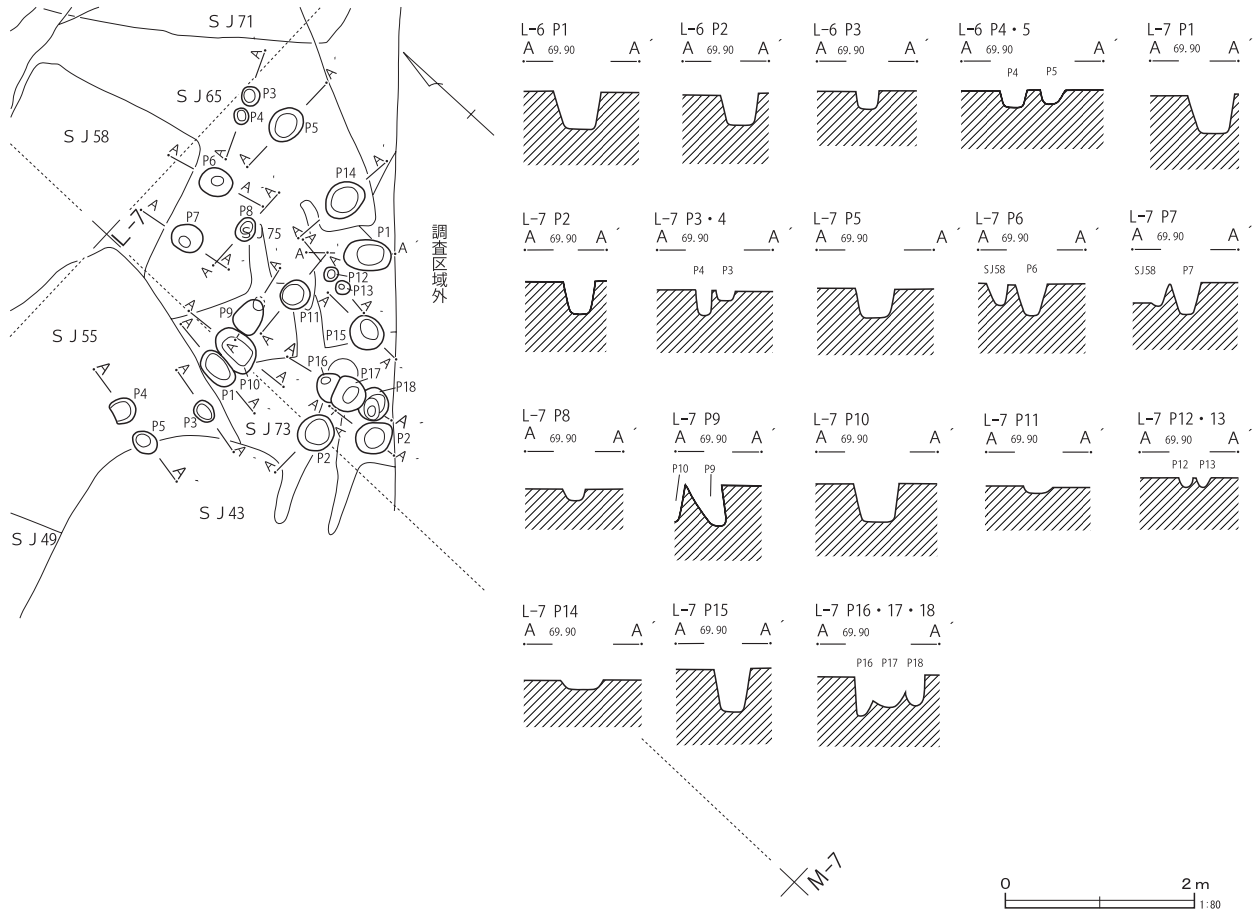
第86表 ピット一覧表 (3)

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
E-13	P 6	34	33	34	
E-13	P 7	30	25	39	
E-13	P 8	18	15	20	
E-13	P 9	31	27	36	
E-13	P 10	39	20	34	
E-13	P 11	35	35	26	
E-13	P 12	25	23	52	
E-13	P 13	24	24	37	
E-13	P 14	36	33	54	
E-13	P 15	(24)	25	19	
E-13	P 16	15	14	14	
E-13	P 17	32	27	24	
E-13	P 18	22	21	11	
E-13	P 19	(79)	(36)	53	
E-13	P 20	19	18	14	
E-13	P 21	43	(34)	49	
E-13	P 22	25	23	35	
E-13	P 23	37	37	47	
E-13	P 24	23	22	16	
E-13	P 25	24	21	19	
E-13	P 26	26	24	18	
E-13	P 27	34	29	30	
E-13	P 28	28	(19)	15	
E-13	P 29	38	33	26	
E-13	P 30	32	30	32	
E-13	P 31	27	(13)	8	
E-13	P 32	31	23	68	
E-13	P 33	28	20	54	
E-13	P 34	49	37	7	
E-13	P 35	16	13	12	
E-13	P 36	32	31	9	
E-13	P 37	19	18	13	
E-13	P 38	18	16	16	
E-13	P 39	15	13	13	

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
E-13	P 40	19	19	20	
E-13	P 41	34	28	12	
E-13	P 42	34	30	49	
E-13	P 43	21	18	24	
E-13	P 44	26	25	17	
E-13	P 45	23	21	8	
E-13	P 46	17	15	11	
E-13	P 47	18	14	12	
E-13	P 48	63	46	70	F 13-P 15から変更
E-14	P 1	32	30	21	
E-14	P 2	45	42	19	
E-14	P 3	36	26	44	
E-14	P 4	21	19	26	
E-14	P 5	25	23	29	
E-14	P 6	20	18	22	
E-14	P 7	32	28	13	
E-14	P 8	20	18	26	
E-14	P 9	56	43	9	
E-14	P 10	48	45	18	
E-14	P 11	44	37	12	
E-14	P 12	35	34	41	
E-14	P 13	—	—	—	欠番
E-14	P 14	87	(44)	39	
E-14	P 15	46	42	43	
E-14	P 16	25	24	35	
E-14	P 17	37	33	35	
E-14	P 18	43	40	36	
E-14	P 19	39	25	16	
E-14	P 20	43	36	52	
E-14	P 21	29	25	15	
E-14	P 22	26	24	12	
E-14	P 23	36	26	3	
E-14	P 24	68	64	37	
E-14	P 25	70	58	19	



第250図 ピット (11)

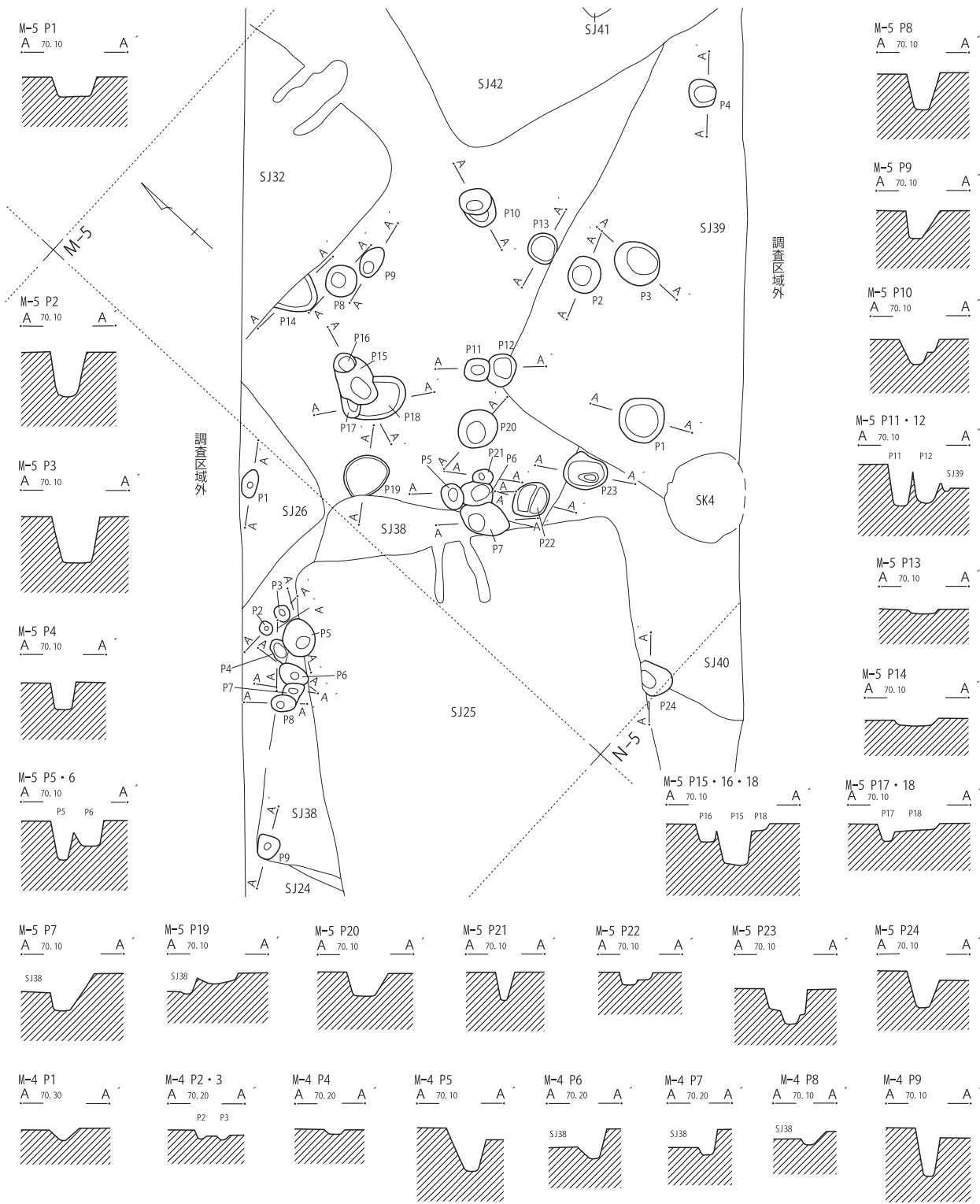


第251図 ピット (12)

第87表 ピット一覧表 (4)

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
E-14	P26	30	28	4	
E-14	P27	32	28	4	
E-14	P28	24	22	8	
E-14	P29	62	58	27	
E-14	P30	46	34	7	
E-14	P31	50	40	46	
E-14	P32	20	16	21	
E-14	P33	44	39	23	
E-14	P34	40	35	32	
E-14	P35	38	38	27	
E-14	P36	36	34	40	
E-14	P37	44	36	11	
E-14	P38	52	52	17	
E-14	P39	24	18	16	
E-14	P40	22	22	21	
E-14	P41	56	48	18	
E-14	P42	—	—	—	SI35-P 5 に変更
E-14	P43	—	—	—	SI35-P 2 に変更
E-14	P44	36	(20)	33	
E-14	P45	22	(13)	22	
E-14	P46	16	16	14	
E-14	P47	38	26	25	

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
E-14	P48	20	20	15	F13-P15から変更
E-14	P49	20	18	11	
E-14	P50	24	24	10	
E-14	P51	34	32	20	
E-14	P52	30	24	49	
E-14	P53	24	22	56	
E-14	P54	16	14	8	
E-14	P55	24	21	14	
E-14	P56	26	26	82	
E-14	P57	—	—	—	欠番
E-14	P58	—	—	—	欠番
E-14	P59	—	—	—	欠番
E-14	P60	—	—	—	欠番
E-14	P61	—	—	—	欠番
E-14	P62	—	—	—	欠番
E-14	P63	—	—	—	欠番
E-14	P64	—	—	—	欠番
E-14	P65	44	30	11	
E-14	P66	26	22	21	
E-14	P67	40	36	20	
E-14	P68	22	16	18	
E-14	P69	20	18	8	



第252図 ピット (13)



第253図 ピット (14)



第254図 ピット (15)

第88表 ピット一覧表 (5)

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
E-14	P70	24	16	15	
E-14	P71	34	25	7	
E-14	P72	46	45	8	
E-14	P73	38	28	12	
E-14	P74	46	42	5	
E-14	P75	30	24	20	
E-14	P76	14	12	4	
E-14	P77	24	24	16	
E-14	P78	38	37	7	
E-14	P79	20	20	11	
E-14	P80	41	40	17	
E-14	P81	46	38	9	
E-14	P82	24	20	25	
E-14	P83	19	18	7	
E-14	P84	20	14	3	
E-14	P85	34	24	21	
E-14	P86	40	28	19	
E-14	P87	20	16	5	
E-14	P88	28	26	10	

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
E-14	P89	45	32	25	
E-14	P90	50	40	52	
E-14	P91	44	42	46	
E-14	P92	32	28	20	
E-14	P93	(44)	(14)	10	
E-14	P94	(50)	(24)	10	
E-14	P95	20	20	36	
E-14	P96	36	(28)	17	
E-14	P97	34	28	21	
F-12	P1	43	43	24	
F-12	P2	34	34	46	
F-12	P3	26	25	24	
F-12	P4	45	38	38	
F-12	P5	50	40	11	
F-12	P6	32	26	24	
F-12	P7	34	31	18	
F-12	P8	45	42	19	
F-12	P9	36	34	17	
F-12	P10	29	25	25	



第255図 ピット (16)

第89表 ピット一覧表（6）

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備 考
F-12	P11	36	33	—	レベル記載漏れ
F-12	P12	48	44	10	
F-12	P13	37	35	25	
F-12	P14	29	25	26	
F-12	P15	26	24	11	
F-12	P16	26	25	33	
F-12	P17	50	47	13	
F-12	P18	45	38	69	
F-13	P 1	38	33	63	
F-13	P 2	30	23	13	
F-13	P 3	29	29	41	
F-13	P 4	30	29	27	
F-13	P 5	22	18	25	
F-13	P 6	22	20	20	
F-13	P 7	34	36	38	
F-13	P 8	82	60	56	
F-13	P 9	37	34	61	
F-13	P10	34	25	32	
F-13	P11	42	40	22	
F-13	P12	37	36	54	
F-13	P13	26	22	28	
F-13	P14	21	20	26	
F-13	P15	—	—	—	E13-P48に変更
F-13	P16	36	36	39	
F-13	P17	34	30	60	
F-13	P18	42	40	26	
F-13	P19	34	30	29	
F-13	P20	24	20	25	
F-13	P21	52	48	40	
F-13	P22	40	37	22	
F-13	P23	26	20	24	
F-13	P24	30	29	41	
F-13	P25	29	26	40	
F-13	P26	24	22	32	
F-13	P27	20	16	27	
F-13	P28	26	24	40	
F-13	P29	24	22	24	
F-13	P30	30	32	23	
F-13	P31	37	34	24	
F-13	P32	38	34	27	
F-13	P33	50	46	22	
F-13	P34	24	(18)	18	
F-13	P35	30	26	27	
F-13	P36	—	—	—	SJ110-P2に変更
F-13	P37	—	—	—	SJ110-P1に変更
F-13	P38	42	28	19	
F-13	P39	28	24	24	
F-13	P40	38	32	64	
F-13	P41	32	28	70	
F-13	P42	38	(26)	28	
F-13	P43	28	26	29	
F-13	P44	24	24	30	
F-13	P45	24	20	30	

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備 考
F-13	P46	36	32	19	
F-13	P47	35	30	24	
F-13	P48	30	28	33	
F-13	P49	28	28	43	
F-13	P50	38	32	49	
F-13	P51	40	36	25	
F-13	P52	39	28	17	
F-13	P53	28	26	19	
F-13	P54	23	18	14	
F-13	P55	46	46	44	
F-13	P56	24	20	5	
F-13	P57	46	38	44	
F-13	P58	44	38	22	
F-13	P59	38	36	34	
F-13	P60	19	18	9	
F-13	P61	44	28	40	
F-13	P62	22	22	17	
F-13	P63	46	32	18	
F-13	P64	36	28	51	
F-13	P65	28	24	15	
F-13	P66	32	28	16	
F-13	P67	42	(25)	20	
F-13	P68	26	20	6	
F-13	P69	36	(24)	13	
G-11	P 1	42	38	39	
G-11	P 2	(20)	30	27	
G-11	P 3	20	18	19	
G-11	P 4	64	45	25	
G-11	P 5	38	35	14	
G-11	P 6	22	20	31	
G-11	P 7	42	28	20	
G-11	P 8	16	14	3	
G-12	P 1	—	—	—	SJ97-P2に変更
G-12	P 2	32	30	34	
G-12	P 3	28	26	9	
G-12	P 4	33	30	12	
G-12	P 5	54	53	10	
G-12	P 6	22	20	11	
G-12	P 7	37	34	16	
G-12	P 8	56	48	17	
G-12	P 9	40	38	51	
G-12	P10	22	20	28	
I-9	P 1	29	29	18	
I-9	P 2	—	—	—	SJ60-P2に変更
I-9	P 3	30	26	15	
I-9	P 4	35	30	13	
I-9	P 5	24	19	31	
I-9	P 6	52	51	53	
I-9	P 7	29	28	80	
I-9	P 8	17	16	27	
I-9	P 9	36	31	21	
I-9	P10	24	22	3	
I-9	P11	18	18	12	

第90表 ピット一覧表（7）

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
I-9	P12	42	22	23	
I-9	P13	(21)	22	23	
I-9	P14	19	17	19	
I-9	P15	23	18	39	
I-9	P16	(36)	38	37	
I-9	P17	38	31	40	
I-9	P18	40	(28)	20	
I-9	P19	35	32	25	
I-9	P20	33	32	48	
I-9	P21	32	28	36	
I-9	P22	39	36	18	
I-9	P23	36	36	46	
I-9	P24	20	19	9	
J-8	P 1	38	34	37	
J-8	P 2	24	24	25	
J-8	P 3	28	27	31	
J-8	P 4	37	37	37	
J-8	P 5	36	33	52	
J-8	P 6	16	15	22	
J-8	P 7	15	15	25	
J-8	P 8	31	30	31	
J-8	P 9	40	35	33	
J-8	P10	33	31	46	
J-8	P11	30	28	22	
J-8	P12	19	19	23	
J-8	P13	29	28	50	
J-8	P14	48	44	53	
J-8	P15	35	35	38	
J-8	P16	39	(20)	19	
J-8	P17	21	18	21	
J-8	P18	40	35	21	
J-8	P19	32	24	38	
J-8	P20	24	24	18	
J-8	P21	42	36	21	
J-8	P22	52	45	15	
J-8	P23	34	33	29	
J-8	P24	17	17	33	
J-8	P25	16	15	3	
J-8	P26	39	38	11	
J-8	P27	28	26	51	
J-8	P28	22	21	21	
J-8	P29	28	25	37	
J-8	P30	33	32	15	
J-8	P31	36	35	33	
J-8	P32	30	27	30	
J-8	P33	37	32	45	
J-8	P34	24	23	11	
J-8	P35	37	27	20	
J-8	P36	37	26	19	
J-8	P37	40	32	5	
J-8	P38	52	47	18	
J-8	P39	23	19	20	
J-8	P40	29	25	17	

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
J-8	P41	25	23	13	
J-8	P42	22	17	7	
J-8	P43	69	54	7	
J-8	P44	(39)	42	16	
J-8	P45	72	72	46	
J-8	P46	21	19	9	
J-8	P47	26	21	25	
J-8	P48	32	16	18	
J-8	P49	25	22	17	
J-8	P50	29	28	19	
J-8	P51	21	21	45	
J-8	P52	29	26	44	
J-8	P53	30	22	21	
J-8	P54	34	32	61	
J-8	P55	34	30	62	
J-8	P56	16	14	56	
J-8	P57	35	31	35	
J-8	P58	18	16	20	
J-8	P59	17	14	17	
J-8	P60	19	16	8	
J-9	P 1	39	35	54	
J-9	P 2	22	21	22	
J-9	P 3	39	32	60	
J-9	P 4	38	38	46	
J-9	P 5	23	21	6	
J-9	P 6	(43)	52	47	
J-9	P 7	25	24	32	
J-9	P 8	33	27	31	
J-9	P 9	—	—	—	SJ60-P3に変更
J-9	P10	—	—	—	SJ60-P3に変更
J-9	P10	—	—	—	SJ60-P5に変更
J-9	P11	—	—	—	SJ60-P6に変更
J-9	P12	—	—	—	SJ60-P4に変更
J-9	P13	—	—	—	SJ60-P1に変更
J-9	P14	29	29	30	
J-9	P15	—	—	—	SJ60-P1に変更
J-9	P16	(42)	24	11	
J-9	P17	20	18	39	
K-7	P 1	26	24	19	
K-7	P 2	27	27	25	
K-7	P 3	29	23	32	
K-7	P 4	26	25	27	
K-7	P 5	18	16	18	
K-7	P 6	27	26	16	
K-7	P 7	29	28	15	
K-7	P 8	46	37	32	
K-7	P 9	37	30	25	
K-7	P10	47	40	33	
K-7	P11	47	39	24	
K-7	P12	34	23	26	
K-7	P13	35	35	45	
K-7	P14	28	23	18	
K-8	P 1	48	44	20	

第91表 ピット一覧表（8）

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備 考
K-8	P 2	21	(18)	8	
K-8	P 3	26	25	6	
L-6	P 1	41	25	39	
L-6	P 2	40	37	32	
L-6	P 3	23	20	17	
L-6	P 4	27	(24)	15	
L-6	P 5	26	22	14	
L-7	P 1	49	33	37	
L-7	P 2	41	35	34	
L-7	P 3	20	20	11	
L-7	P 4	17	16	27	
L-7	P 5	40	32	29	
L-7	P 6	33	30	32	
L-7	P 7	32	30	33	
L-7	P 8	24	20	11	
L-7	P 9	38	29	42	
L-7	P10	49	34	40	
L-7	P11	30	30	6	
L-7	P12	15	14	24	
L-7	P13	15	15	10	
L-7	P14	44	36	8	
L-7	P15	37	35	45	
L-7	P16	(20)	30	38	
L-7	P17	37	35	33	
L-7	P18	33	(25)	31	
M-4	P 1	39	(21)	17	
M-4	P 2	19	16	12	
M-4	P 3	23	20	4	
M-4	P 4	(11)	19	6	
M-4	P 5	(52)	43	58	
M-4	P 6	42	30	39	
M-4	P 7	25	(20)	34	
M-4	P 8	33	23	18	
M-4	P 9	32	31	65	
M-5	P 1	60	60	26	
M-5	P 2	50	46	58	
M-5	P 3	64	56	62	
M-5	P 4	(40)	37	35	
M-5	P 5	35	28	52	
M-5	P 6	(39)	33	35	
M-5	P 7	68	44	49	
M-5	P 8	44	44	48	
M-5	P 9	45	27	36	
M-5	P10	54	43	33	
M-5	P11	33	31	55	
M-5	P12	45	(36)	50	
M-5	P13	39	(37)	6	
M-5	P14	(38)	62	8	
M-5	P15	(51)	47	57	
M-5	P16	28	26	24	
M-5	P17	(22)	23	24	
M-5	P18	(58)	57	10	
M-5	P19	61	54	14	

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備 考
M-5	P20	54	52	31	
M-5	P21	25	20	38	
M-5	P22	56	44	16	
M-5	P23	58	49	47	
M-5	P24	(40)	42	36	
N-3	P 1	44	38	12	
N-4	P 1	57	53	65	
N-4	P 2	67	60	57	
N-4	P 3	38	38	46	
N-4	P 4	28	24	3	
N-4	P 5	69	58	39	
N-4	P 6	36	(30)	35	
N-4	P 7	(35)	27	39	
N-4	P 8	(24)	22	26	
N-4	P 9	42	(27)	24	
N-4	P10	34	28	8	
N-4	P11	28	26	27	
N-4	P12	38	29	8	
N-4	P13	36	28	4	
N-4	P14	40	31	8	
N-4	P15	45	42	9	
N-4	P16	43	34	17	
N-4	P17	35	34	24	
N-4	P18	45	43	37	
N-4	P19	35	31	19	
N-4	P20	51	42	61	
N-4	P21	50	42	26	
N-4	P22	-39	49	49	
N-4	P23	64	60	22	
N-4	P24	50	44	27	
O-2	P 1	(47)	72	44	
O-2	P 2	35	(28)	25	
O-2	P 3	33	30	14	
O-3	P 1	—	—	—	SJ23貯蔵穴に変更
O-3	P 2	(34)	(40)	12	
O-3	P 3	34	27	16	
O-3	P 4	30	30	13	
P-1	P 1	38	33	42	
P-1	P 2	24	22	31	
P-1	P 3	22	20	4	
P-1	P 4	33	29	11	
P-1	P 5	(23)	36	3	
P-2	P 1	—	—	—	SJ 2 カマドに変更
P-2	P 2	33	32	44	
P-2	P 3	—	—	—	SJ 2 貯蔵穴に変更
P-2	P 4	29	26	29	
P-2	P 5	22	17	7	
P-2	P 6	45	41	45	
P-2	P 7	17	17	8	
P-2	P 8	15	14	5	
P-2	P 9	24	23	10	
P-2	P10	36	30	23	
P-2	P11	29	28	51	

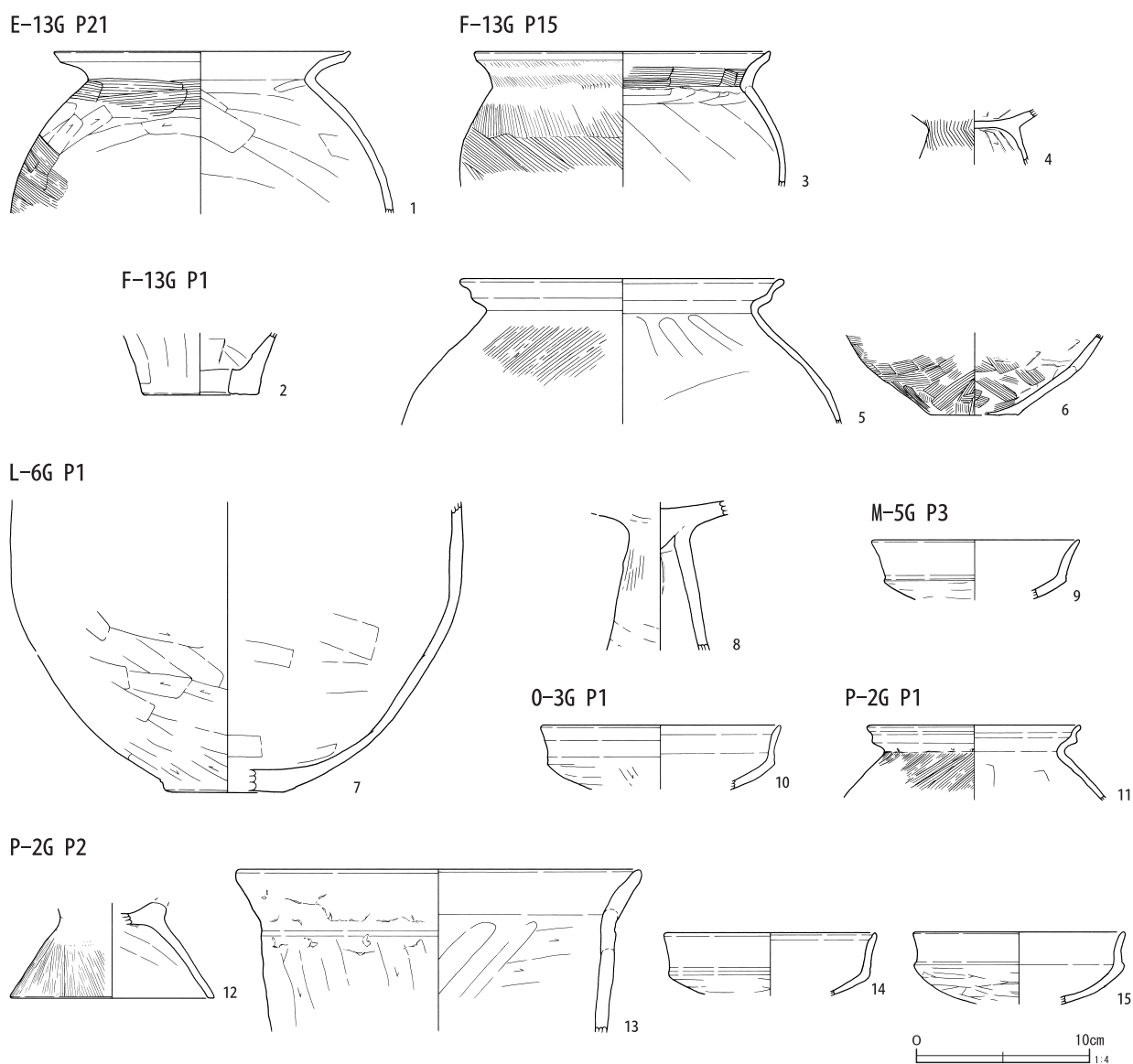
第256図にピットから出土した遺物を一括した。1の土師器甕は、調査区北側のE-13グリッドP21から出土した。口唇部を斜めに摘み出す特徴的な口縁部形態で、五領期に位置づけられる。

2の土師器甕は調査区北側のF-13グリッドP1から出土した。単孔式で、体部は直線的に立ち上がる。3~6は調査区北側のF-13グリッドP15（整理段階でE-13グリッドP48に変更）から出土した。3は前述の1の口縁部に類似した特徴の甕、4・5はS字状口縁台付甕、6は平底の甕である。五領期の一括として重要である。7の

甕、8の高坏は調査区中央部南寄りのL-6グリッドP1から出土した。7は胴部外面に煤が付着する。8は柱状脚の高坏で、ホゾ接合である。5世紀後半に位置づけられる。

9の坏は調査区南側のM-5グリッドP3から出土した。坏蓋模倣坏で、重複する第39号住居跡の遺物が混入したものであろう。時期は6世紀後半に位置づけられる。

10の土師器坏は調査区南西端のO-3グリッドP1（整理段階で第23号住居跡貯蔵穴に変更）から出土した。坏蓋模倣坏で、口縁部は外反して



第256図 ピット出土遺物

第92表 ピット出土遺物観察表（第256図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(17.0)	9.3	—	CEHIK	20	普通	にぶい暗褐	E13G P21 外面煤付着	
2	土師器	甗	—	3.5	(6.6)	CEHIK	25	普通	にぶい橙	F13G P1	
3	土師器	甕	(17.0)	7.7	—	AEHI	20	普通	橙	F13G P15	
4	土師器	台付甕	—	3.2	—	CEIK	90	普通	にぶい黄橙	F13G P15 S字甕	
5	土師器	台付甕	(18.8)	8.3	—	EHI	15	不良	暗灰黄	F13G P15 S字甕	
6	土師器	甕	—	4.7	(5.1)	EHI	40	普通	灰褐	F13G P15	
7	土師器	甕	—	16.7	7.2	BCEHI	40	普通	にぶい橙	L6G P1 内面黒斑 煤付着	
8	土師器	高坏	—	8.4	—	CEIK	50	普通	赤褐	L6G P1	
9	土師器	坏	(11.8)	3.4	—	EHI	15	普通	橙	M5G P3	
10	土師器	坏	(13.6)	3.7	—	EH	15	普通	橙	O3G P1	
11	土師器	台付甕	(12.2)	4.3	—	AEHIK	25	普通	赤褐	P2G P1 S字甕 No.1	
12	土師器	台付甕	—	5.4	(11.6)	ACHI	25	普通	にぶい橙	P2G P2	
13	土師器	甗	(23.1)	9.3	—	ACEHIK	20	良好	明赤褐	P2G P2	
14	土師器	坏	(12.0)	3.6	—	CEHI	20	普通	橙	P2G P2	
15	土師器	坏	(12.0)	4.1	—	CEHIK	20	普通	橙	P2G P2	

立ち上がる。第23号住居跡に伴う可能性もある。時期は6世紀後半に位置づけられる。

11のS字状口縁台付甕は調査区南西端のP-2グリッドP1（整理段階に第2号住居跡カマドに変更）から出土した。土器の時期は古墳時代前期の五領期に位置づけられる。

12～15は調査区南西端のP-2グリッドP2から出土した。12の台付甕の脚台部は外面に刷毛

目を施し、五領期に位置づけられる。13は大型甗、14・15は坏蓋模倣坏である。6世紀前半に位置づけられる。

これらは重複する住居跡等の遺構からの混入と考えられる土器片が多く、直接ピットに伴う遺物は少ない。このためピットの時期や性格について明確にすることは難しい。

6. グリッド出土遺物

調査区において住居跡の集中するD-15グリッドからM-4グリッドにかけて、多量の土器片を含む黒色土層が広がっていた。この黒色土層は試掘調査では、多数の竪穴住居跡が、複雑に重複し、遺構の範囲や重複関係等を明確にすることが難しいと報告されていた。

本調査では、重機で表土（耕作土）を除去した段階で黒色土層の表面が確認できたので、試掘調査のトレンチよりも10cmほど高い位置で調査に臨んだ。ジョレンや三角鎌で遺構確認を行うと、ところどころに竪穴住居跡のカマドに関わる焼土やカマド煙道部の被熱痕跡等を確認することができた。しかし、この黒色土の上面で竪穴住居跡の輪郭を明確に把握することは困難を極めた。

それは、遺構、とくに竪穴住居跡が複雑に重複していたこと、調査区が幅7mと狭い带状であったこと、黒色土と黒色土の切り合いのため、遺構の輪郭を見分けにくかったことなどが、大きな要因である。

しかし、この黒色土の下には、基盤（地山）となる黄褐色土（ロームの二次堆積層）があり、この黄褐色土の上面で遺構確認を行うことは、比較的容易であった。そこで、遺物を多量に包含するこの黒色土層を1m方眼の単位で掘削し、遺物の取り上げを行った。この際の小グリッドは、北西隅を①、南東隅を⑩とし、グリッド名+①で表記した（第8図小グリッド網図参照）。

ここで、1m方眼の単位で遺物を取り上げたの

は、基盤層まで掘り込まれた竪穴住居跡と、小グリッド出土遺物の帰属関係を少しでも明確にできないか考えたからである。なお、竪穴住居跡の遺構構築面は、黒色土の上面であり、ここでは単にグリッド出土遺物という名称で扱うが、あくまでも竪穴住居跡など遺構の上部堆積層であり、単純な遺物堆積（包含）層ではない。

整理作業において、グリッド出土遺物と重複する住居跡との接合・復元作業を可能な限り試みたが、遺構間の重複が著しく、直接、接合したもの以外では、帰属遺構を断定することは容易ではなかった。

復元作業の結果、図示できた遺物を第257～265図に掲載し、帰属の妥当な黒色土層下の遺構との

照合関係については第93表に示した。

以下、各グリッドから出土した遺物の概要について説明する。

1は北陸系の所謂「有孔高坏」である。坏部が直立気味に立って体部をなし、そこから口縁部が大きく外反する。底部に貫通孔をもたないが、円孔を体部に3箇所と口縁部に3箇所（2個のみ残存）千鳥状に配列していたようである。脚部は大きく開き、中位に3箇所の円孔を開けている。調査区北側のC-16グリッドから出土し、河川跡と重複していた。

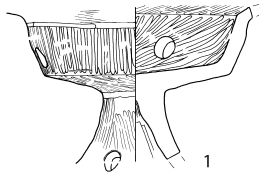
2は調査区北側のD-14グリッドから出土した須恵器の甕胴部片である。外面に平行叩き目後カキ目を施し、内面は同心円文当て具痕を残す。

第93表 グリッド出土遺物重複遺構一覧表（第257～265図）

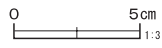
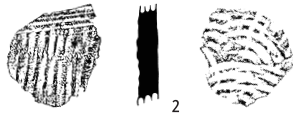
グリッド	遺構名	掲載遺物番号
C-16	河川跡	1
E-14	SJ35	7・9
F-12	SJ100	11・12・17・21
F-12	SJ97	13・14・15・18・20
F-12	SJ102	16
F-13	SJ28・103・110	24・25
F-13	SJ110	27
F-13	SJ103	28
G-11	SJ97	31
G-11	SJ96・101	36・48
G-11	SJ101	37・41・42・43・52
G-11	SJ96	40・49・53
G-11	SJ91	44
G-11	SJ94	47・50
G-12	SJ100	54・56・60・64・72・83
G-12	SJ97	55・58・61・65・66・67・69・71・74・76・77
G-12	SJ96	57・62・73・75
G-12	SJ99	59
G-12	SJ97・100	63・68・78・79・80・81・82
G-12	SJ97・88・105	84
H-9	SJ76・95	85
H-9	SJ76・82	86
H-10	SJ83	87・93・99・106・107
H-10	SJ88	88・90・91・105・110・111・112・113・117・122
H-10	SJ95	89・92・94・96・98・101・103・109
H-10	SJ88・105	97・104・114・120・121
H-10	SJ83・95	100・102・108
H-10	SJ89	115
H-10	SJ76・95	116・118
H-10	SJ88・104	119
H-11	SJ85	123・125・126・130・131
H-11	SJ85・89・94	124
H-11	SJ94	127
H-11	SJ89	128
I-8	SJ59	133・134
I-9	SJ82	135・140・145・153
I-9	SJ76・82	139・144
I-9	SJ60・61	141
I-9	SJ61	142・151・154
I-9	SJ61・68	143・146・149・152
I-9	SJ87	147
I-9	SJ62	148
I-9	SJ60	150

グリッド	遺構名	掲載遺物番号
I-9	SJ60・82	155
I-9	SJ59	156
I-10	SJ76・82・95	157
I-10	SJ87	158・170
I-10	SJ83	159・162
I-10	SJ77	160・173・174
I-10	SJ78・83	161・175
I-10	SJ78	163・166
I-10	SJ76・95	164・168
I-10	SJ78・83・95	165
I-10	SJ78・95	169・171・176
J-8	SJ47・69	178・188
J-8	SJ51	179・180・181・183・184・189・190
J-8	SJ56	182
J-8	SJ48	185
J-8	SJ57・107	186
J-8	SJ51・47	187
J-9	SJ60	191・192・194・195
J-9	SJ60・107	193
K-7	SJ69・70	196・198・200
K-7	SJ46	199
K-7	SJ58・80	201
K-8	SJ69	202・204
K-8	SJ69・70	203
L-6	SJ109	205
L-6	SJ43	206・209・213
L-6	SJ42	207・208・212
L-6	SJ42・45	210
L-6	SJ55	211
L-7	SJ65	214
M-4	SJ25	215
M-5	SJ39	216
M-5	SJ41・42	217・218・219
M-5	SJ42	220
M-6	SJ42	223
N-4	SJ8	224
O-2	SJ23	227
O-3	SJ19	228
O-3	SJ17	229
P-1	SJ15	230・231
P-1	SJ15・20	232
P-2	SJ17	233
P-2	SJ15	235・236
P-2	SJ16	237・238・239・240・241・242・244
P-2	SJ1・15	243

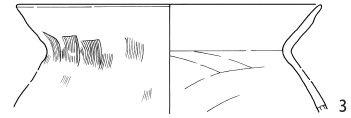
C-16G



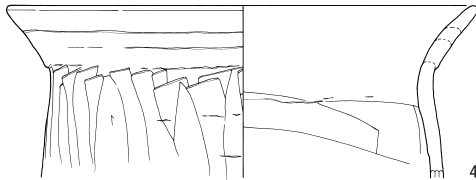
D-14G



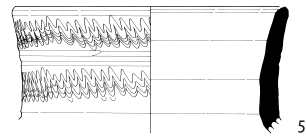
D-15G



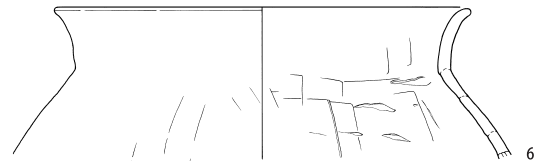
D-15G



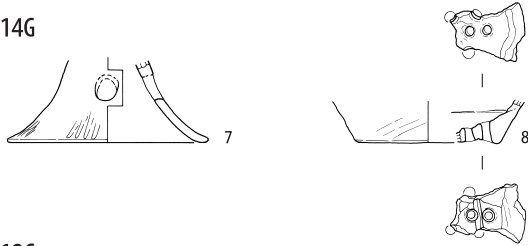
D-16G



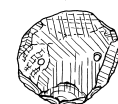
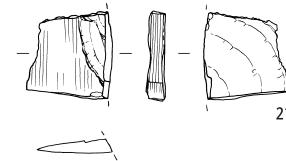
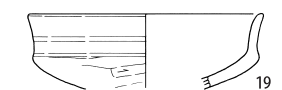
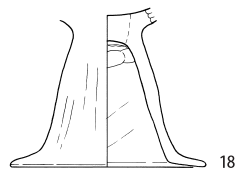
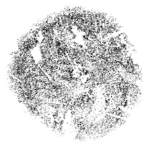
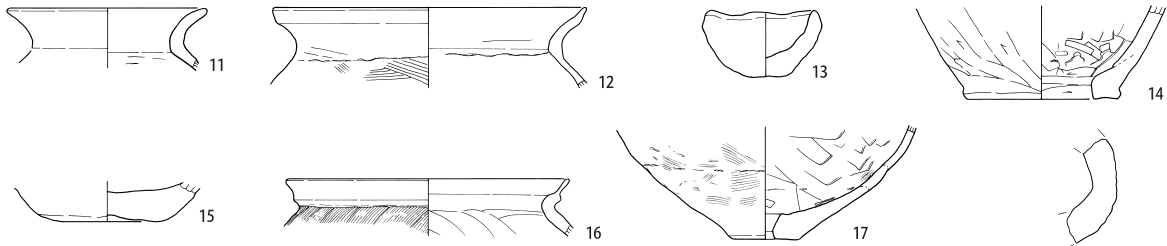
E-13G



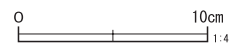
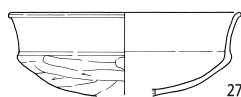
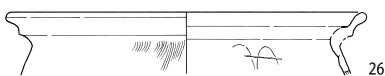
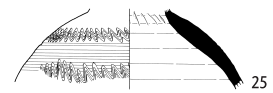
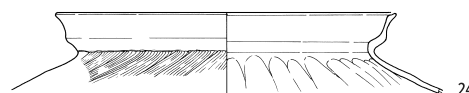
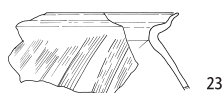
E-14G



F-12G



F-13G



第257図 グリッド出土遺物 (1)

3・4は調査区北側のD-15グリッドから出土した。3は単口縁の甕で、口唇部が薄く摘み出され尖る。五領期の所産である。4は鬼高期の長胴甕で、胴部外面に縦方向のヘラケズリを施す。頸部にヘラ状工具痕が連続的に残り、口縁部にも粘土紐痕が明瞭である。

5は調査区北側のD-16グリッドから出土した須恵器直口壺の口縁部片である。口縁部中位に2条の沈線を巡らし、上下に区画した中に櫛描波状文を施す。焼成が甘く、胎土に結晶片岩粒を多く含むことから藤岡産と推定される。時期は6世紀後半頃であろうか。重複遺構はない。

6は調査区北側のE-13グリッドから出土した鬼高期の胴張甕である。胴部外面にヘラケズリを施す。重複遺構はない。

7～10は調査区北側のE-14グリッドから出土したものを一括した。7は五領期の小型器台もしくは高坏と考えられる脚部の破片で、円孔を1個のみ残す。8は多孔式の小型甕の底部である。外面から棒状工具を用いて刺突している。9・10は須恵器坏蓋模倣坏である。口縁部が直立し、口唇部内面に段を作る。鬼高I式に位置づけられる。このうち9は第35号住居跡と重複する。

11～22は調査区中央部北寄りのF-12グリッドから出土したものを一括した。11は小型壺で、口縁部が大きく外反する。12は口唇部を上方に摘み出した千種系の甕と考えられ、胴部外面に刷毛目を施す。11・12は五領期の所産である。13は塊形の手捏ねである。14は単孔の甕で、底部はやや突出する。穿孔部端面にヘラケズリを施す。15は壺の底部である。上げ底気味で、木葉痕がかすかに残る。16はS字甕の口縁部で、通有のものに比べ器肉がやや厚い。17は小型甕と考えられる。底径の小さな突出した底部に円孔の開いた、所謂「有孔鉢」である。18は屈折脚の高坏である。脚部はホゾ接合で、裾部は短く開く。鬼高期の所産であろう。19は有段口縁坏で、口径12.2cmに復元され

る。有段部は木口状工具により弱い段部を作出する。20は須恵器坏身である。口径約11cmに復元される小型品で、蓋受部は短く、立ち上がりを欠損する。在地産と考えられ、7世紀前半に位置づけられる。

21は凝灰岩製の砥石で、使用面を僅かに残す。22は滑石製有孔円板である。研磨は全体にやや粗雑である。

23～30は調査区北側のF-13グリッドから出土したものを一括した。23・24・26はS字甕である。23・24は薄手の作りであるが、26は口唇部が肥厚し、丸く収められており、やや趣が異なる。五領期の所産である。

25は須恵器壺の肩部片である。外面にカキ目を施した後、櫛描波状文を施す。頸部内面には絞り目状の接合痕が明瞭に残る。撫肩の器形から北関東産須恵器の特徴の一つに挙げられる平底瓶の可能性もある。藤岡産と考えられる。

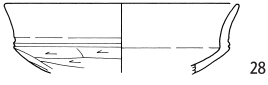
27・28は坏蓋模倣坏である。口縁部が若干開く。6世紀前半に位置づけられる。29は上げ底状の壺底部である。

30は大型の打製石斧で、基部を欠損する。砂岩製で、表裏両面とも中央部には大きく自然面が残される。両側縁には表裏両面からの丁寧な調整離離によって緩やかな抉りが作られており、いわゆる分銅形の打製石斧である。

31～53は調査区中央部北寄りのG-11グリッドから出土したものを一括した。31は体部の扁平な坏蓋模倣坏で、口唇部内面に沈線状の段を巡らす。32は須恵器坏身である。蓋受部は短く水平に延び、立ち上がりは強く外反する。酸化焰焼成に近い焼き上がりである。在地産で、6世紀後半に位置づけられる。

33～42は五領期の遺物である。33の鉢は、本来甕を作製しようとしたが、何らかの理由によって途中で、鉢に変更したものであろう。そのため口縁部は擬口縁の状態を残し、口唇部外面に連続す

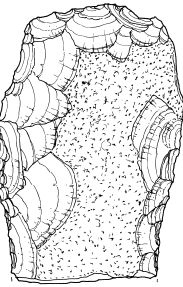
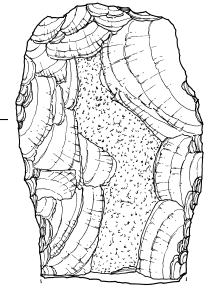
F-13G



28

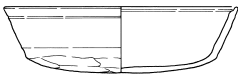


29



30

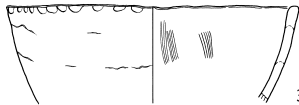
G-11G



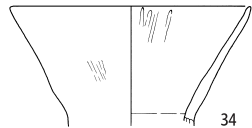
31



32



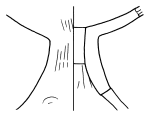
33



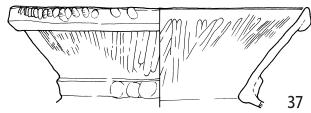
34



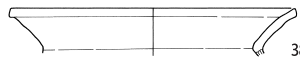
35



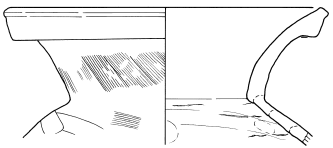
36



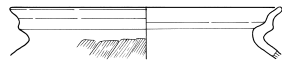
37



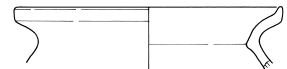
38



39



40



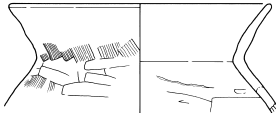
41



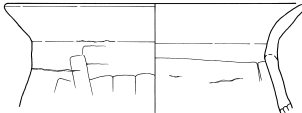
44



45



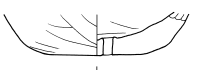
42



43



46



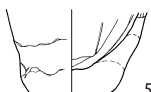
47



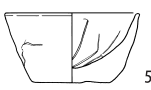
48



49



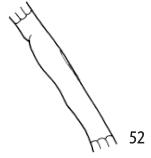
50



51



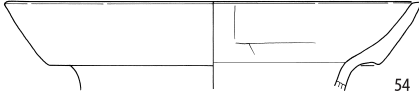
52



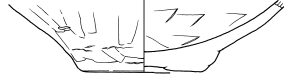
53



G-12G



54



55



第258図 グリッド出土遺物 (2)

る指頭圧痕が認められる。34は柑の口縁部で、口唇部は薄く尖る。35・36は小型器台である。35は器受部に貫通孔がなく、ホゾ接合である。36は脚部に3個の円孔を開ける。37は複合口縁壺の口縁部である。頸部に突帯を巡らし、その上に指頭による押圧を施す。口縁部は幅狭く折り返し、口唇端部にヘラ状工具による刻目を施す。38は単口縁の壺で、口唇部を面取りする。39は複合口縁壺の頸部から口縁部にかけての破片である。口縁部下端に粘土紐を貼付して作出する。40はS字甕の口縁部である。41・42は甕の口縁部で、41は口唇部を上方に摘み出す。42は「く」の字状に屈曲する単口縁の甕である。

43は鬼高期の長胴甕の口縁部で、外面に粘土紐痕を明瞭に残す。44は木葉痕を残す甕の底部である。45は外面に刷毛目を施す平底の甕で、五領期の所産であろう。46は鉢形の手捏ねである。47は多孔式の甕で、底部に木葉痕が残る。48は中実の土製支脚で、断面矩形に近い。49～51は手捏ねで、いずれも鉢形に近い器形である。52は外面に鋸歯文を線刻した壺の肩部の破片である。五領期の所産であろう。

53は須恵器甕の胴部破片で、外面に平行叩き目、内面に同心円文当て具痕を残す。

54～84は調査区中央部北寄りのG-12グリッドから出土したものを一括した。

54～58・60・64・68・70は五領期の遺物である。小グリッドの照合によれば第100号住居跡に帰属する可能性が高い。54は複合口縁壺の口縁部で、風化により器面が荒れている。55は底部の突出する壺である。56・60・64はS字甕の口縁部、68はS字甕の脚台部である。56は小型の台付甕であろう。68は端部を内面に折り返し、外面に鋸歯状の刷毛目を施す。57は口縁部がく字に屈曲する小型甕。58は北陸系の蓋である。69は台付甕の脚台部であろう。70は器台の脚部で、三方に円孔を開ける。

59・61～63・65～67・71・72・76～78は鬼高期の遺物である。小グリッドの照合によれば第97号住居跡に帰属する可能性が高い。59は鉢の口縁部で、全体の器形は不明である。61・62・65・66は手捏ねである。鉢形のものが多い。66は体部にヘラケズリを施し、口縁部は大きく外反する。63は平底の塊で、口縁部が短く内彎する。67は平底の坏で、口縁部は内屈するようである。体部外面に指頭圧痕を残す。71・72は坏蓋模倣坏である。72は口縁部の立ち上がりも短く、体部も浅い。

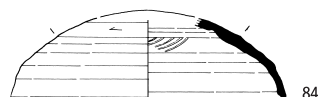
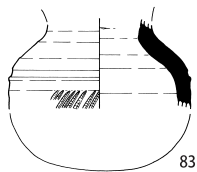
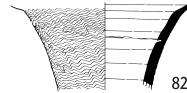
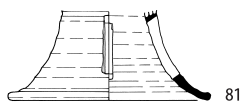
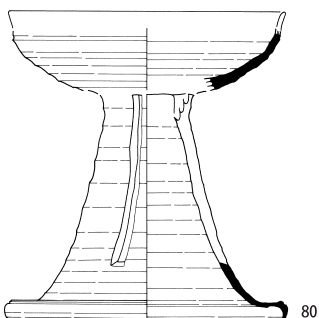
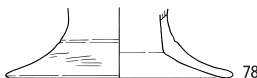
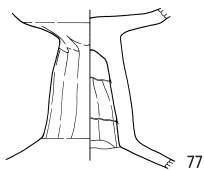
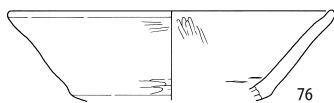
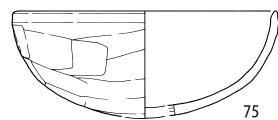
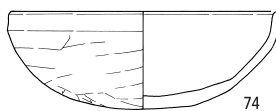
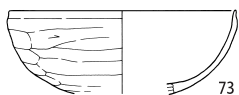
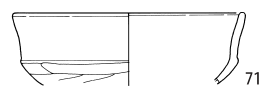
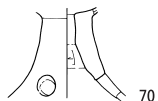
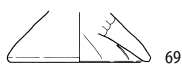
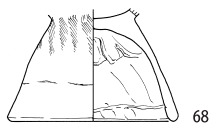
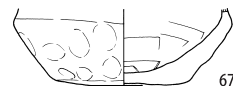
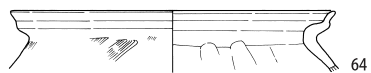
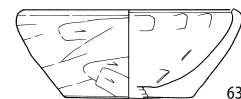
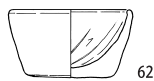
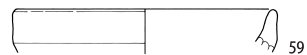
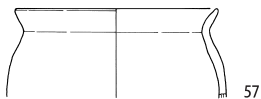
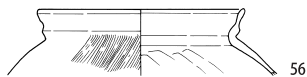
73～75は体部が半球形で、口縁部が内屈もしくは短く直立する北武蔵型坏である。73は口径12cmの小型品。74・75は口径14cm前後で、器高は5cm前後の深身である。7世紀中葉から後半に位置づけられる。今回の調査で検出された7世紀代の土器としては最新相を示すものである。

76～78は和泉期終末から鬼高期初頭の高坏である。76は坏部の破片。77は脚部内面に粘土紐の巻上痕を残す。78は裾部が短く開く。

79～84は須恵器を一括した。79～81は高坏、82・83は臚、84は蓋坏である。79は脚端部が僅かに開く。80は無蓋の長脚1段透しの高坏で、三方に長方形の透孔を開ける。脚端部は突線を巡らし下方に屈曲する。81は低脚の高坏である。脚部中位に沈線を巡らし、四方に2段の透孔を開ける。脚端部は裾広がりになる。82の臚は口頸部外面に櫛描波状文を密に施す。83は臚の胴部で、中位に沈線区画した中に櫛歯刺突文を施す。84は坏蓋で、口縁部と天井部の境に稜を巡らし、口唇部内面には内傾する面を作る。天井部内面には同心円文当て具痕が残る。須恵器は形態や胎土の特徴からいずれも在地産であると考えられる。時期的には6世紀後半を中心とするようである。ただし、81の高坏は7世紀まで下る可能性がある。

85・86は調査区中央部北寄りのH-9グリッドから出土した。85は口縁部の外傾する坏蓋模倣坏、86は口縁部が短く立ち上がる鉢である。

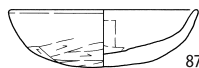
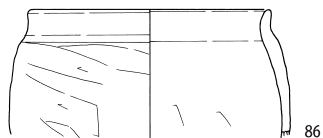
G-12G



H-9G



H-10G



第259図 グリッド出土遺物 (3)

87～122は調査区中央部北寄りのH-10グリッドから出土したものを一括した。出土位置と重複遺構の照合によれば鬼高期の遺物は、第88号住居跡に帰属する可能性が高い。

87～104は鬼高期の土師器坏・皿である。87は口径9.8cmの小型のもので、体部と口縁部の境はヘラケズリによって弱い稜を作出する。88・92～100は坏蓋模倣坏、89～91は坏身模倣坏、101～103は皿、104は有段口縁内屈口縁坏である。

105は須恵器短頸壺の頸部から肩部の破片である。肩部に最大径をもち、外面にカキ目を施す。在地産であろう。

106は複合口縁壺で、五領期の所産である。107は直口壺で、鬼高期の所産であろう。108は小型甕で頸部の括れは弱い。109～115は鬼高期の甕である。109～111は長胴甕で胴部の張りは弱い。112・113は広口の胴張甕である。114・115は長胴甕の突出する底部である。114は底部外面に木葉痕が残り、葉脈の切り合いが見られる。

116は須恵器坏蓋、117は須恵器甕である。116は坏蓋で、口縁部と体部の境に稜を作出する。117の甕は口縁部と頸部の境に沈線を巡らし、頸部に振幅の大きな櫛描波状文を巡らす。

118は「ハ」の字に開く口縁部の形態から甗と推定される。119・120は管状の土錘である。

121は安山岩製の砥石で、擦痕が残る。

122は滑石製の白玉で、比較的大型のものである。側面には整形痕が良く残る。

123～132は調査区中央部北寄りのH-11グリッドから出土したものを一括した。123～126・128～131は鬼高期の遺物で、重複遺構の照合から第85号住居跡に帰属する可能性が高い。この他に127の壺は五領期、132の削器は縄文時代の遺物である。

123は坏身模倣坏、124は坏蓋模倣坏である。125・126は高坏の脚部で、125は直径約7cmの円筒形で、かなり大型のものであろう。126は長脚高坏

で、裾部が大きく開く。127は頸部に断面三角形の突帯を巡らし、ヘラ状工具を用いて綾杉状に刺突を施した五領期の壺である。

128は塊状の手握ねである。129は球胴形の胴部から短く直線的に立ち上がる直口壺である。130は管状の土錘である。131は安山岩製の砥石で、刃砥ぎ状の擦痕が良く残る。

132は大型の削器である。ホルンフェルス製で、表面下部と右側縁に大きく自然面を残し、左上側を欠損する。また、欠損部分には節理面が観察される。刃部へは、最小限の加工が施されている。

133・134は調査区中央部のI-8グリッドから出土した。133は須恵器甕で、肩部から頸部にかけての破片である。肩部に2条の沈線を巡らし突線を作成し、その上部にヘラ状工具を用いて刻目を密に施す。東海産であろう。134は大型鉢である。両者とも重複関係から第59号住居跡に帰属する可能性が考えられる。

135～156は調査区中央部のI-9グリッドから出土した。135・136は有段口縁壺で、五領期に位置づけられる。135は口縁部幅の狭いものである。136は口縁部中位に粘土紐を貼付し断面三角形の段を作り出す、五領期でもやや新しい段階のものである。

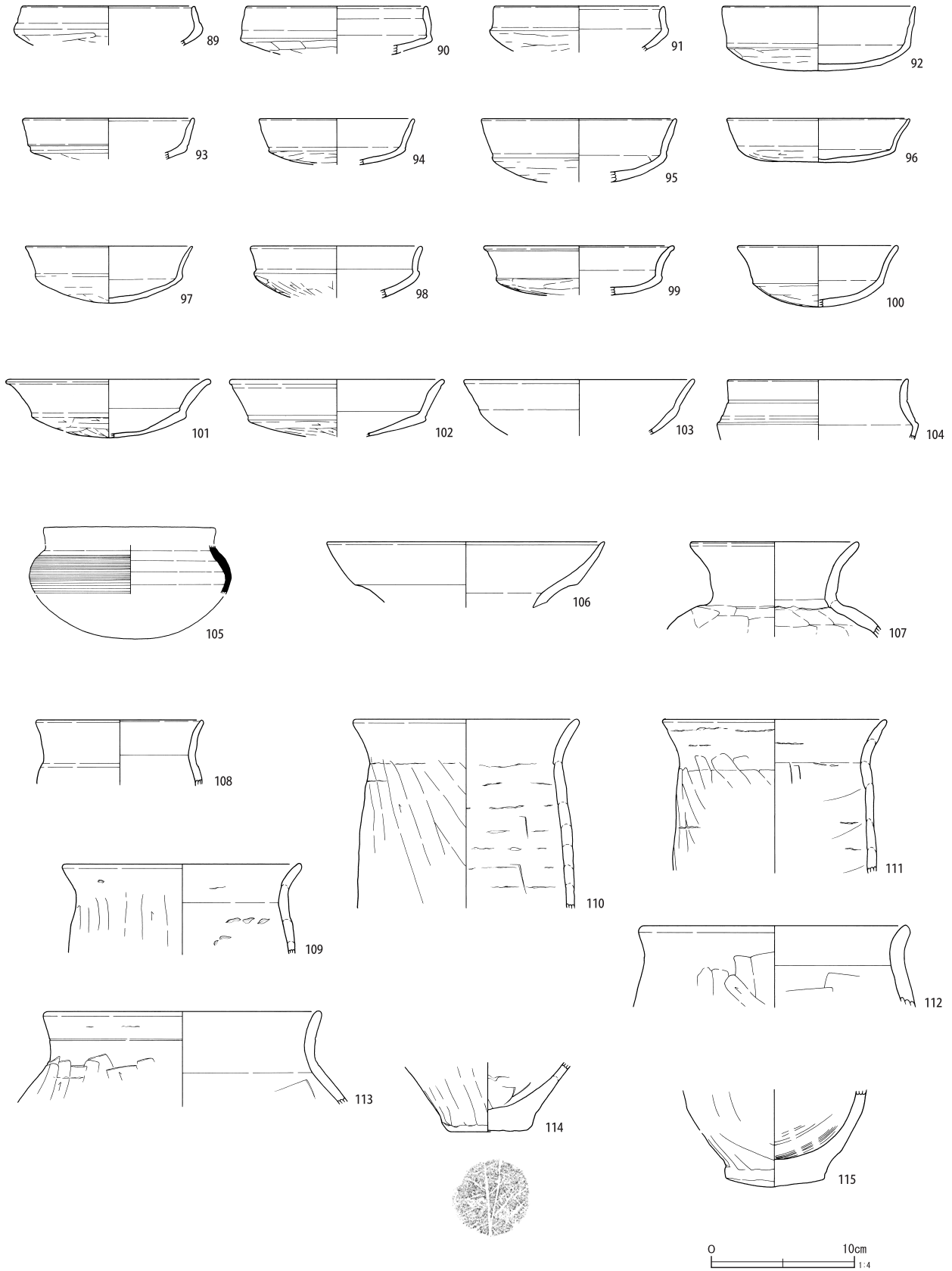
137・138は弥生時代終末から古墳時代初頭の土器である。137は頸部に櫛描波状文を施した樽式系の壺、138は胴部上半に縄文を施文した吉ヶ谷式系の壺と考えられる。

139は胴張形の小型甕、140は口縁部の外傾する頸部の括れの弱い鉢である。141は折り返し口縁の甕で五領期の所産と考えられる。142は口縁部に最大径をもつ長胴甕、143は胴部中位に最大径をもつ胴張形の甕である。

144は須恵器の甕の胴部片で、外面に平行叩き目を施した後カキ目を施す。内面は同心円文当て具痕を残す。

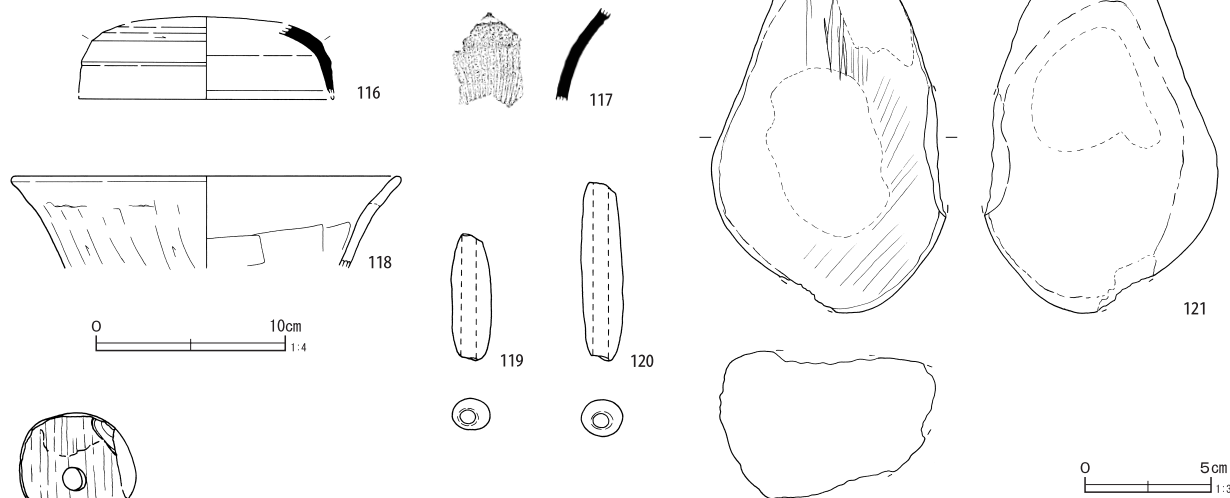
145は平底の塊としたもので、底面及び体部下

H-10G

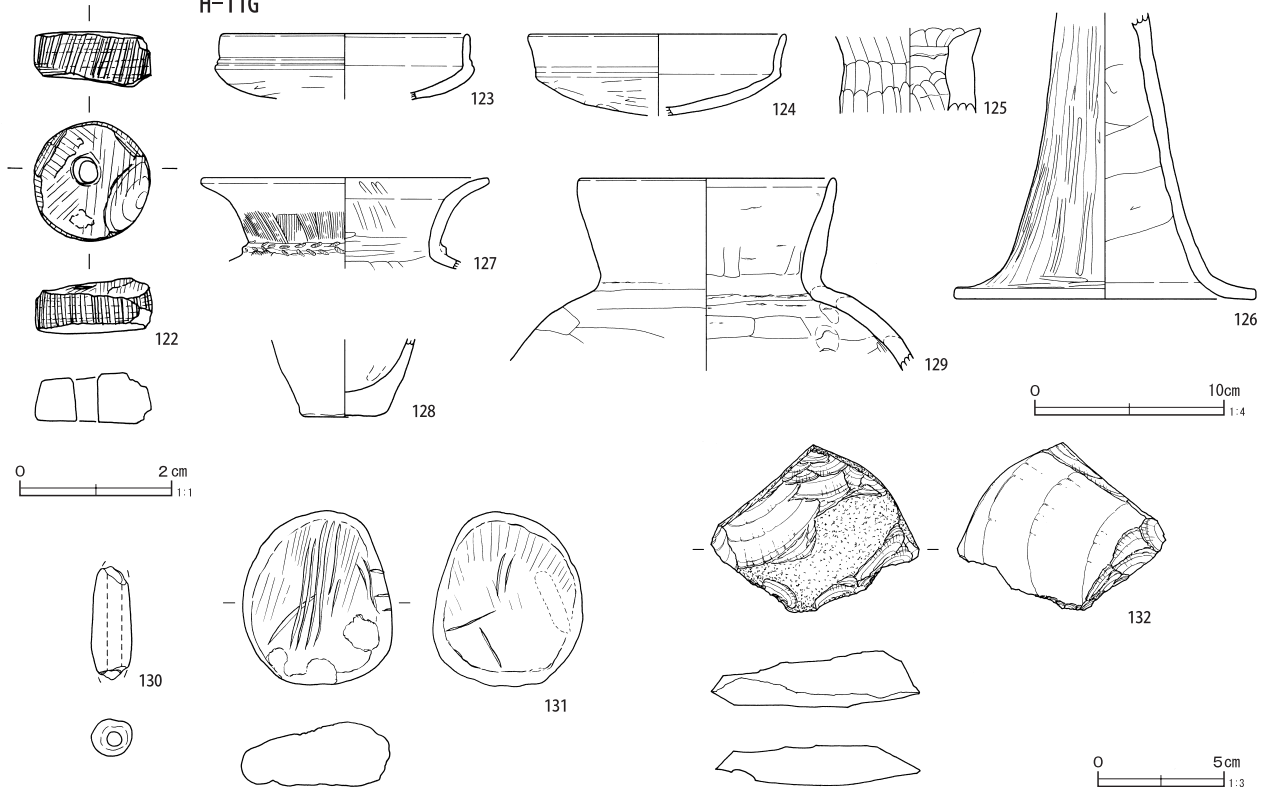


第260図 グリッド出土遺物（4）

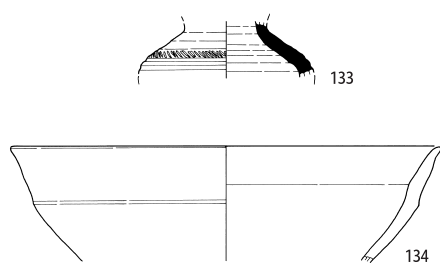
H-10G



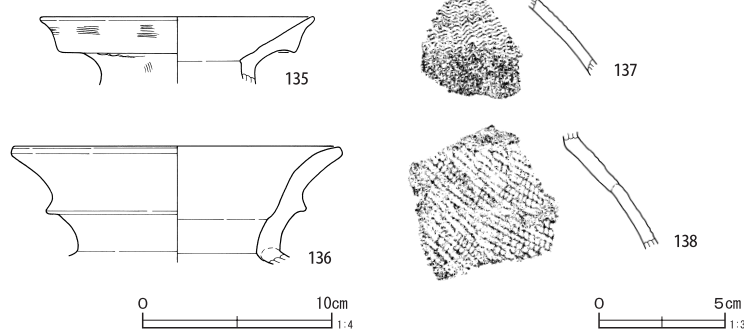
H-11G



I-8G

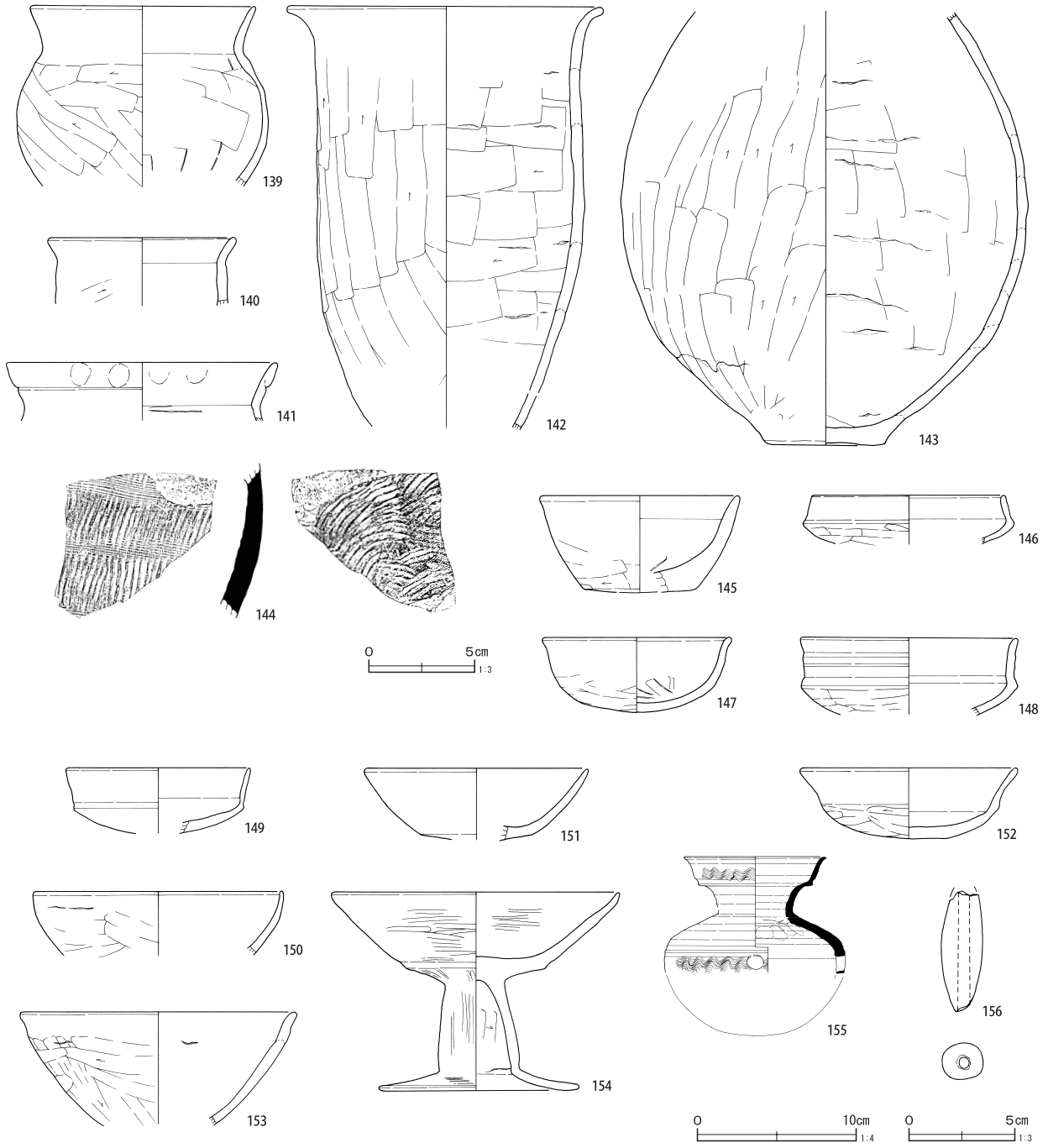


I-9G

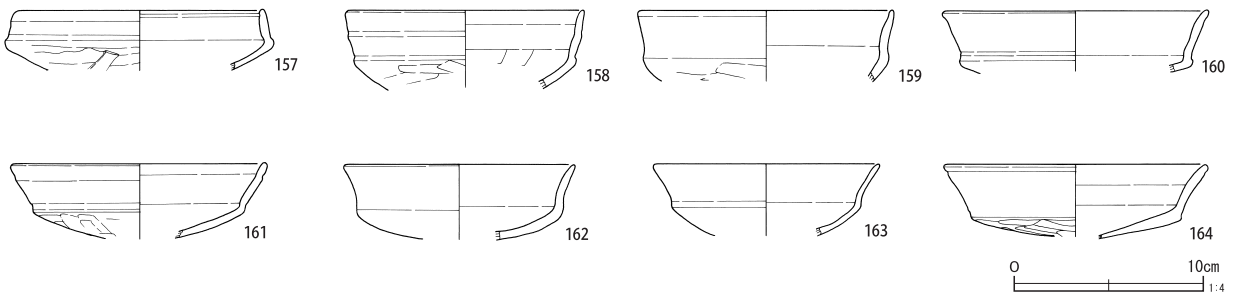


第261図 グリッド出土遺物 (5)

I-9G



I-10G



第262図 グリッド出土遺物 (6)

端にヘラケズリを施す。146は坏身模倣坏である。147は和泉期終末から鬼高期初頭の口縁部が短く外反する坏である。148は有段口縁坏である。149・152は坏蓋模倣坏で、前者は口縁部が開いて立ち上がるのに対し、後者は大きく外反して立ち上がる。150は半球形の坏であろう。151・154は和泉期終末から鬼高期初頭の高坏で、所謂「和泉型高坏」である。154は脚部がやや短く、裾部が大きく開く。153は鉢形の小型甕と考えられる。

155は須恵器甕である。口縁部と胴部に楕円状波状文を施す。TK23型式併行期に位置づけられる。胎土の特徴から陶邑産と考えられる。出土位置と重複遺構の照合から第60号住居跡に帰属する可能性が高い。

156は管状の土錘で、上端部を欠損する。

157～176は調査区中央部のI-10グリッドから出土したものを一括した。重複遺構が多く、帰属住居跡を特定することは難しい。

157～165は鬼高期の坏である。157が坏身模倣坏である以外は、坏蓋模倣坏である。157は口唇部が尖り内面に沈線を巡らしている。158・161は有段口縁坏で、段部を棒状工具による沈線によって作出している。159・160・162～164は単純口縁のものである。164・165は体部が扁平で、口縁部が大きく外反して開く。166は有段口縁の大型鉢、167は口縁部が短く外反する鉢、168は内斜口縁に近い口縁部の鉢である。169～171は甕を一括した。169はやや小型の甕、170は胴張甕、171は甕の底部である。

172は断面長方形を呈する鉄製棒状品である。173は須恵器壺の底部付近の破片で、丸底の底部で外面に擬格子叩き目を施し、内面は無文当て具痕を残す。小型の壺と推定される。174～176は管状の土錘である。

177の管状土錘は、調査区中央部のJ-7グリッドから出土した。重複遺構はない。

178～190は調査区中央部のJ-8グリッドか

ら出土した。178は坏蓋模倣坏である。179は和泉型高坏の坏部である。180は有段口縁鉢で、口縁部はS字状に屈曲する。体部にヘラミガキを丁寧に施す。重複関係の照合から、第51号住居跡に帰属する可能性が高い。181は和泉期終末から鬼高期初頭の体部の深い鉢である。口唇部は短く外反する特徴をもつ。

182は須恵器高坏の脚部、183は須恵器の壺口縁部、184は須恵器蓋坏の坏身である。182は長脚高坏で方形の透孔を3ないし4方向に開ける。脚端部を下方に短く折り曲げる。183は提瓶か横瓶等の瓶類の可能性もある。184は蓋受部が短く水平に延び、立ち上がりは端部内面に弱い段を作る。

185は口縁部が頸部から直立した後、緩やかに外反する甕である。鬼高期の所産である。186は有段口縁壺で、内外面にヘラミガキを施す。五領期の所産である。187は高坏形のミニチュアとした。坏部は口縁部を欠損しているため、全体の形状は不明であるが、内湾して立ち上がる。脚部は円柱部から裾広がりになる。

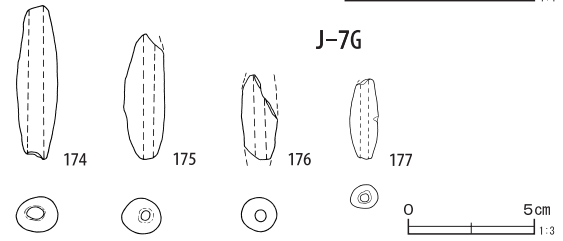
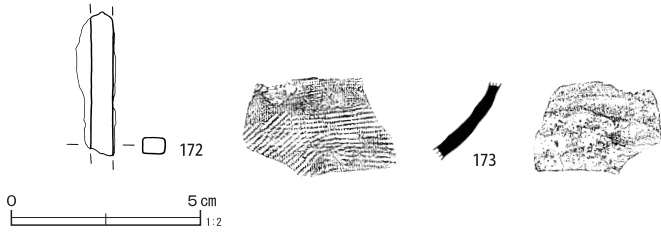
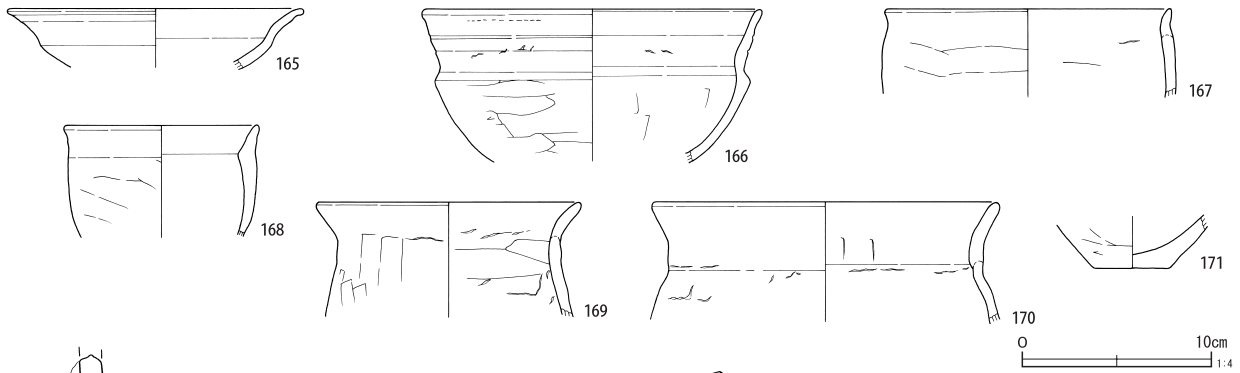
188は粘土塊を棒状に丸めた土製品で、図示した下端がやや尖る。断面円形である。

189は小型の削器で、黒色頁岩製である。薄手の剝片を使用したもので、右側縁にはほとんど調整が認められない。刃部は丸刃で、表裏から丁寧な加工が施されている。190は自然の礫石を利用した棒状の敲石で、端部には敲打痕が認められる。両側縁は粗く打ち欠かれて抉りを有しており、裏面右側の凹み部分とともに手に持ち易いように加工が施されたものと思われる。

191～195は調査区中央部のJ-9グリッドから出土したものを一括した。いずれも和泉期後半に位置づけられる。小グリッドの一致する第60号住居跡に本来帰属するものであろう。

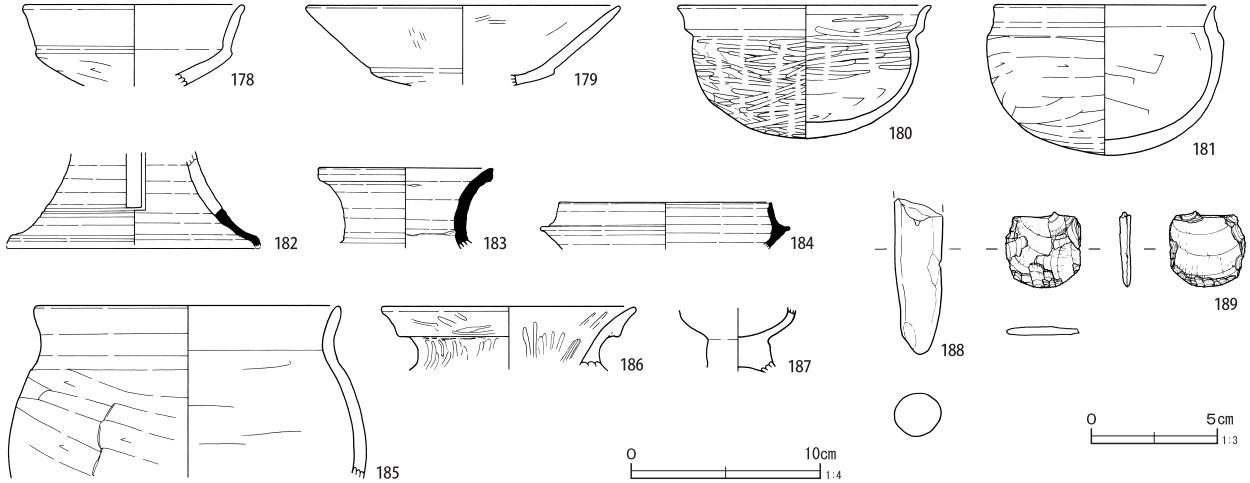
191・192は和泉期の高坏である。191は坏部の内外面にヘラミガキを施す。192は脚部の脚部内面に縦方向の指ナデを施す。193の球胴形の甕は口

I-10G

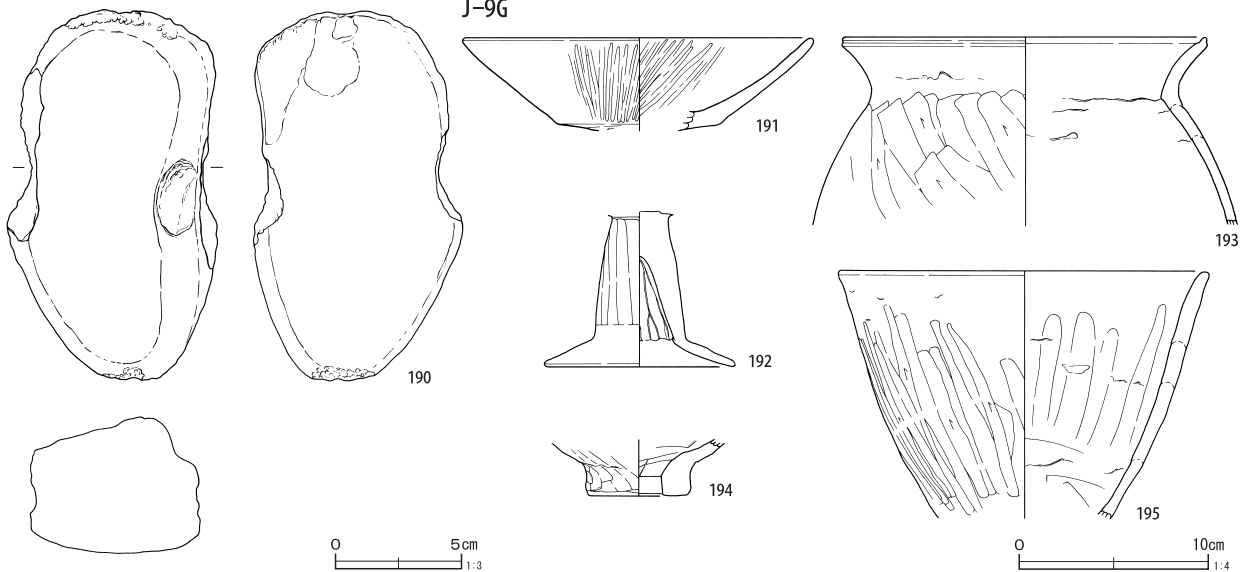


J-7G

J-8G



J-9G



第263図 グリッド出土遺物 (7)

唇部を上方に僅かに摘み上げ、端面に凹線を巡らす。194・195は甗である。194は底部の突出する単孔の甗。195は鉢形となる小型甗で、外面に縦方向のヘラケズリを施す。

196～201は調査区中央部のK-7グリッドから出土したものを一括した。

196・197は須恵器の蓋坏である。196は坏蓋で口縁部と体部の境に僅かな段を作り出す。口縁部がほぼ直立し、口唇部内面に段を作る。出土した小グリッドは第69号住居跡に重なり、住居跡からは他にも須恵器が出土していることから、本例も第69号住居跡に帰属する可能性が高い。197は坏身で蓋受部が短く水平に延びる。2点とも在地産と考えられる。

198は口縁部が長く外傾する坏蓋模倣坏で、口唇部を面取りする。199は小型甗で、口縁部は緩やかに外反する。胴部外面に縦方向のヘラケズリ、内面に木口ナデを施す。200・201は管状の土錘である。

202～204は調査区中央部のK-8グリッドから出土した鬼高期の遺物である。202は有段口縁の坏身模倣坏、203は単純口縁の坏蓋模倣坏、204は体部と口縁部の境に明瞭な段をもつ大型の鉢である。出土した小グリッドの照合から202・204は第69号住居跡に帰属する蓋然性が高い。

205～213は調査区中央部南寄りのL-6グリッドから出土した遺物を一括した。

205～208は坏蓋模倣坏である。205は口縁部が長く直立し、体部の深いもの。206は有段口縁の口縁部が長く直立し、体部内面にヘラミガキを施す。207は口縁部が短く、口唇部を摘み出すもの。208は口縁部の開くタイプで、弱い有段口縁である。体部にノッキング状のヘラケズリが残る。209は口縁部が大きく開いた皿状の坏部を乗せた低脚の高坏であろう。同一形態の高坏が、第43号住居跡からも出土している。210・211は甗の口縁部で、210は小型甗、211は広口の胴張甗である。

212は須恵器壺の口縁部で、内外面とも濃緑色の自然釉が厚くかかる。213は鉢形の手捏ねで、底部に木葉痕を残す。これらのうち209の高坏と213の手捏ねは出土した小グリッドが第43号住居跡に一致していることと、同一形態の高坏や手捏ねが他にも出土していることから、同住居跡に帰属する可能性が高い。

214の坏身模倣坏は、調査区中央部南寄りのL-7グリッドから出土した。体部の浅い器形である。小グリッドの重なる第65号住居跡でも同一形態の坏身模倣坏が出土しており、第65号住居跡に帰属する可能性が高い。

215は甗もしくは鉢と考えられるもので、調査区南側のM-4グリッドから出土した。器面の風化が著しく、調整は不明瞭である。小グリッドは第25号住居跡と重複する。

216～221は調査区南側のM-5グリッドから出土したものを一括した。

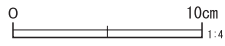
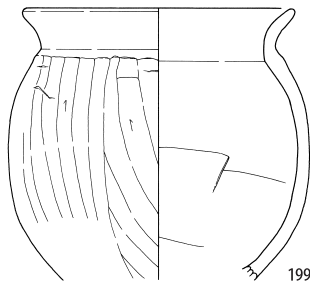
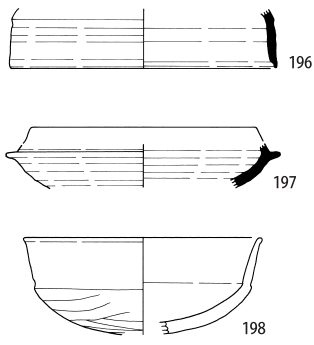
216～218は鬼高期後半の坏である。216は体部が浅くなった単純口縁の模倣坏。217・218は復元口径12cm前後の小型化した有段口縁坏で、重複関係の照合から、第41号住居跡に帰属するものと考えられる。

219は小型の削器で、黒色頁岩製である。裏面に大きく自然面を残すものである。刃部の加工は主に表面から行われ、上部以外のほぼ全周に施されている。220は大型の削器である。白色の頁岩製で、上部に自然面を残し、左側を欠損する。刃部の調整は粗く、最小限に留められている。なお、表面中央部には研磨痕が認められる。

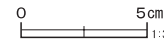
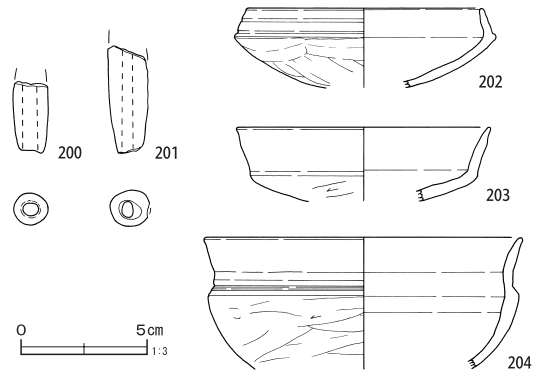
221は通有の大きさの滑石製白玉である。切断面はあまり平滑に仕上げられていない。

222・223は調査区南側のM-6グリッドから出土した。222は復元口径14cmを測る小型の鉢で、頸部に括れをもたない器形である。口縁部は緩やかに外反して開く。223は甗の底部である。底部外面にかすかに木葉痕を残す。

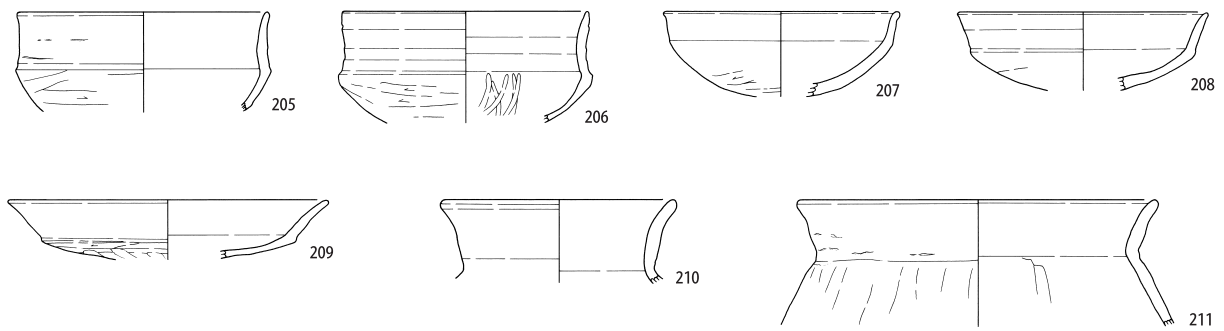
K-7G



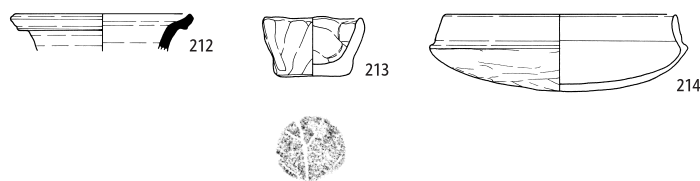
K-8G



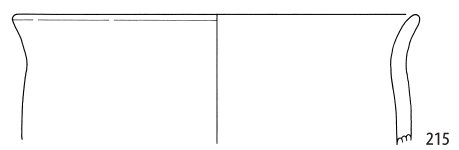
L-6G



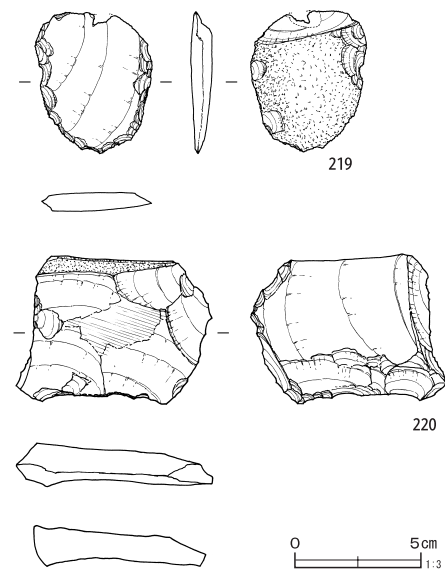
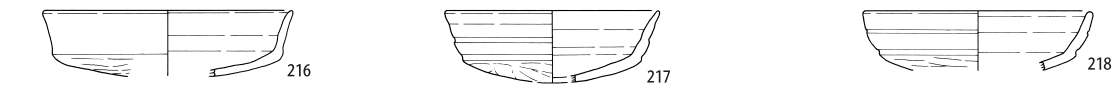
L-7G



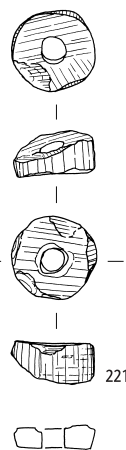
M-4G



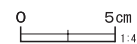
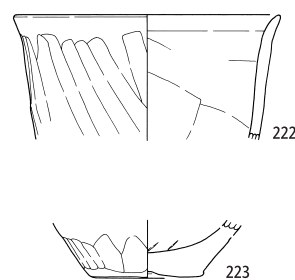
M-5G



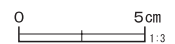
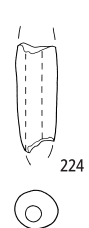
L-7G



M-6G

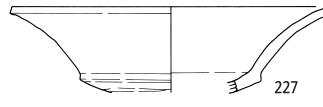
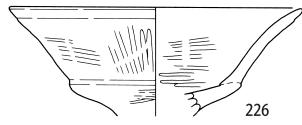
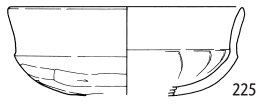


N-4G

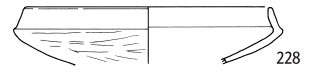


第264図 グリッド出土遺物 (8)

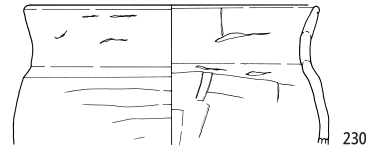
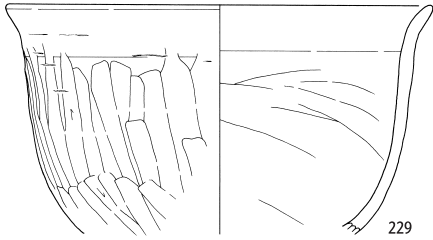
0-2G



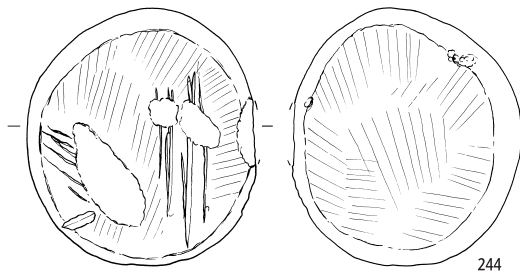
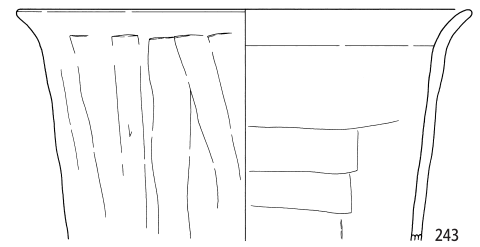
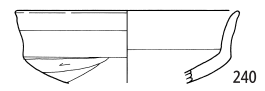
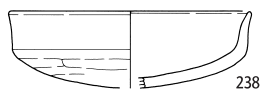
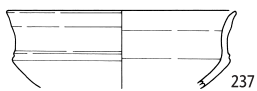
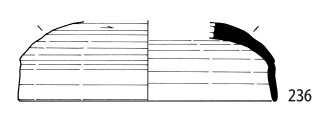
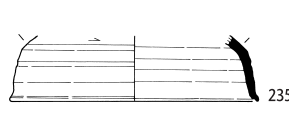
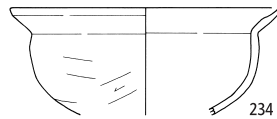
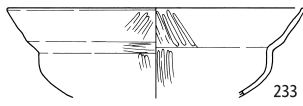
0-3G



P-1G



P-2G



第265図 グリッド出土遺物 (9)

224の管状の土鍾は、調査区南側のN-4グリッドから出土した。小グリッドの重なる第8号住居跡でも同様の土鍾が出土していることから、第8号住居跡に帰属する可能性が高い。

225~227は調査区南西端のO-2グリッドから出土したものを一括した。

225は口縁部が緩やかに屈曲して直立する模倣坏である。226・227は高坏の坏部。226は内外面にヘラミガキを丁寧に施す。227は口唇部を面取りする。

228・229は調査区南西端のO-3グリッドから出土した。228は復元口径14.6cmの坏身模倣坏である。立ち上がりは短く、体部が浅く扁平になっている。229は口径が20cmを超える大型鉢である。体部外面を縦方向のヘラケズリを施す。2点とも鬼高期後半に位置づけられる。

230~232は調査区南西端のP-1グリッドから出土した。230は頸部の括れの弱い小型甕と考えられる。231は単純口縁の模倣坏で、口縁部が大きく外反する。232は有段口縁の模倣坏である。段部をヨコナデと木口状工具の併用によって作出している。

233~244は調査区南西端のP-2グリッドから出土したものを一括した。

233・234は五領期の所産である。233は口縁部がS字状に屈曲する有段口縁鉢で、段部の上段が長

く延びる。内外面を丁寧にヘラミガキする精製土器である。234の鉢は口縁部が大きく外傾して開き、端部を僅かに摘み上げる。体部にはヘラケズリを施す。

235・236は口径13cmほどの須恵器坏蓋である。235は口唇部内面に沈線状の段を残す。236は口縁部が短く、口唇部を丸く収める。胎土・焼成・口縁部形態等の特徴から在地産と考えられる。時期的にはTK43型式併行期に位置づけられる。重複関係の照合では第15号住居跡に帰属する可能性が考えられる。

237~241は鬼高期後半の模倣坏である。口径12cm台の坏蓋模倣坏が主体である。237は外反口縁坏。238は口縁部が短く直立し、段部の作出はヨコナデとヘラケズリを併用し、稜を作出している。239~241は有段口縁坏で、239・240は有段部をヨコナデにより弱い稜を作出するもの、241は木口状工具を用いて段を作出している。

242・243は大型甕と考えられる。242は口縁部の開きの少ないタイプ。243は口縁部が緩やかに外反している。両者とも外面は縦方向のヘラケズリを施し、内面に横方向のヘラナデを丁寧に施す。

244は安山岩製の砥石である。扁平な円礫で、表面に刀子等の刃砥ぎをしたと考えられる擦痕を残し、裏面は平滑である。重複関係の照合では第16号住居跡に帰属する可能性が考えられる。

第94表 グリッド出土遺物観察表 (第257~265図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	有孔高坏	—	8.0	—	A E H I	80	普通	橙	C16G トレンチ 北陸系	85-1
2	須恵器	甕	—	4.0	—	I K	5	良好	灰	D14G	
3	土師器	甕	(16.0)	5.6	—	B E H I K	20	普通	明赤褐	D15G-42・44	
4	土師器	甕	(24.4)	9.0	—	A C E H I K	25	普通	橙	D15G トレンチ	
5	須恵器	壺	(14.3)	6.6	—	A B C E I	30	不良	暗灰黄	D16G トレンチ 藤岡産	85-2
6	土師器	甕	(21.6)	7.8	—	C E H I	20	普通	にぶい橙	E13G-70	
7	土師器	器台	—	4.3	(10.0)	A C E H I K	70	良好	にぶい橙	E14G-34・35	
8	土師器	甕	—	2.2	(7.4)	C E H I K	5	良好	にぶい褐	E14G-88 多孔式	
9	土師器	坏	(11.9)	4.2	—	C E I	30	普通	橙	E14G-5	
10	土師器	坏	(11.9)	4.6	—	C E H I	40	普通	橙	E14G トレンチ	
11	土師器	小型壺	(10.1)	3.2	—	C E H I	90	普通	にぶい橙	F12G-88	
12	土師器	甕	(16.2)	4.1	—	A C E H I K	15	普通	赤褐	F12G-87	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版	
13	土師器	手捏ね	(5.5)	3.4	—	A E H I K	40	普通	明褐	F12G-76		
14	土師器	甗	—	4.8	(7.9)	A E H I	20	普通	にぶい橙	F12G-66		
15	土師器	壺	—	2.0	7.2	A C H I K	80	普通	赤褐	F12G-93		
16	土師器	台付甗	(14.8)	3.0	—	C E H I	30	普通	橙	F12G-37	S字甗	
17	土師器	甗	—	5.9	3.6	B C E H I K	40	普通	明赤褐	F12G-97		
18	土師器	高坏	—	8.1	(10.4)	A E H I K	80	良好	橙	F12G-82		
19	土師器	坏	(12.2)	3.9	—	A C H I K	15	普通	橙	F12G-70		
20	須恵器	坏身	—	3.2	—	I K	20	良好	灰	F12G-92		
21	石製品	砥石	長さ3.4cm 幅0.8cm 厚さ3.4cm 重さ9.24g					凝灰岩			F12G-88	92-4
22	石製品	有孔円板	長さ2.5cm 幅2.8cm 厚さ0.6cm 重さ6.06g					滑石			F12G-80	89-2
23	土師器	台付甗	(18.0)	4.5	—	B C E H I K	10	普通	にぶい橙	F13G-13	S字甗	
24	土師器	台付甗	(17.8)	4.3	—	E F H	20	普通	褐灰	F13G	S字甗	
25	須恵器	壺	—	4.2	—	G I K	30	不良	灰白	F13G	トレンチ 藤岡産	
26	土師器	台付甗	(18.5)	3.2	—	C E H	15	良好	黒褐	F13G-41	S字甗	
27	土師器	坏	(12.0)	4.4	—	A C H I K	20	普通	橙	F13G-27		
28	土師器	坏	(12.2)	3.7	—	A H I	30	不良	橙	F13G-52		
29	土師器	壺	—	2.1	6.4	D E H I	80	良好	明赤褐	F13G-3		
30	石製品	打製石斧	長さ11.2cm 幅7.4cm 厚さ3.3cm 重さ333.22g					砂岩			F13G-89	93-10
31	土師器	坏	12.2	4.5	—	C E H K	50	普通	橙	G11G-10		
32	須恵器	坏身	(12.6)	4.2	—	H I L	40	不良	にぶい黄橙	G11G-11・17・76・82		
33	土師器	鉢	(15.2)	5.0	—	C D E H	30	普通	明赤褐	G11G-87		
34	土師器	埴	(12.6)	6.3	—	C E H I K	20	普通	橙	G11G-54		
35	土師器	器台	7.2	1.7	—	C E H	100	普通	にぶい橙	G11G-54		
36	土師器	器台	—	5.5	—	C E H I K	70	普通	橙	G11G-48		
37	土師器	壺	(15.6)	5.2	—	C H I K	30	普通	橙	G11G-66・67		
38	土師器	壺	(15.0)	2.5	—	A C H I K	20	普通	にぶい橙	G11G-82		
39	土師器	壺	16.4	7.2	—	A C D E H I	95	普通	橙	G11G-87	85-4	
40	土師器	台付甗	(14.2)	2.7	—	C E H I	20	普通	にぶい橙	G11G-87・88	S字甗	
41	土師器	甗	(14.0)	3.3	—	A C E H I K	15	普通	赤褐	G11G-57		
42	土師器	甗	(14.0)	5.8	—	A H I K	20	良好	明赤褐	G11G-37		
43	土師器	甗	(15.8)	5.9	—	A E H I K	25	良好	にぶい橙	G11G-56		
44	土師器	甗	—	2.4	(6.0)	E H	50	普通	橙	G11G-72	内面にぶい黄褐	
45	土師器	甗	—	1.8	4.0	A C E H I	80	普通	にぶい赤褐	G11G-92		
46	土師器	手捏ね	—	3.9	4.6	A B C E H I K	60	普通	にぶい橙	G11G-81		
47	土師器	甗	—	2.2	(5.2)	B C E H I K	50	普通	明赤褐	G11G-95		
48	土製品	支脚	—	7.6	—	E H	40	普通	明赤褐	G11G-57		
49	土師器	手捏ね	—	2.1	2.2	A H I K	70	普通	にぶい赤褐	G11G-70		
50	土師器	手捏ね	—	4.5	4.4	A C E H I K	60	普通	明赤褐	G11G-96		
51	土師器	手捏ね	(7.0)	3.6	4.2	B C E H I K	70	普通	橙	G11G-54		
52	土師器	壺	—	4.5	—	K	5	普通	橙	G11G-37		
53	須恵器	甗	—	5.3	—	I K	5	良好	灰	G11G-79		
54	土師器	壺	(21.8)	4.6	—	C E H I	5	普通	橙	G12G-8		
55	土師器	壺	—	3.8	6.4	A B E H I K	70	良好	橙	G12G-15・25		
56	土師器	台付甗	(10.8)	3.4	—	C E H	15	普通	灰白	G12G-16	S字甗	
57	土師器	小型甗	(14.6)	4.7	—	B C E H I K	15	普通	橙	G12G-51		
58	土師器	蓋	(3.8)	3.2	—	C D E H	60	普通	明褐	G12G-15		
59	土師器	鉢	(13.8)	2.3	—	A C I K	5	普通	明褐	G12G-33		
60	土師器	台付甗	(13.6)	2.3	—	A C H I K	25	普通	灰黄褐	G12G-7	S字甗	
61	土師器	手捏ね	—	3.8	4.0	B C E H I K	70	普通	明赤褐	G12G-25		
62	土師器	手捏ね	(6.3)	3.5	4.5	A B E H I K	70	普通	灰褐	G12G-17	85-5	
63	土師器	埴	(11.2)	4.6	(6.6)	A C D E H I	30	普通	明赤褐	G12G-15・17		

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版	
64	土師器	台付甕	(17.1)	3.1	—	A C H I K	10	普通	にぶい赤褐	G12G-26 S字甕	85-6	
65	土師器	手捏ね	—	3.9	(5.8)	A C E H I K	15	普通	明赤褐	G12G-15		
66	土師器	手捏ね	9.0	4.3	—	A B C D E H I	85	良好	橙	G12G-3		
67	土師器	坏	—	4.0	7.1	A C E H I K	70	普通	にぶい橙	G12G-23		
68	土師器	台付甕	—	5.7	8.6	B C E H I	95	普通	浅黄橙	G12G-16 S字甕		
69	土師器	台付甕	—	2.6	(7.4)	A C E H I K L	25	普通	橙	G12G-13		
70	土師器	器台	—	4.7	—	B C H I K	70	普通	橙	G12G-19		
71	土師器	坏	(11.6)	3.8	—	A C H I	20	普通	橙	G12G-13		
72	土師器	坏	(14.6)	3.2	—	A C D H I	20	普通	橙	G12G-16		
73	土師器	坏	(12.0)	4.3	—	A H I K	20	普通	黄橙	G12G-51		
74	土師器	坏	14.2	5.1	—	A C H I	85	普通	橙	G12G-25		
75	土師器	坏	(13.8)	5.6	—	C E H I K	50	普通	橙	G12G-51		85-7
76	土師器	高坏	(17.6)	4.7	—	A C H I K	20	普通	明赤褐	G12G-23		
77	土師器	高坏	—	8.5	—	A C H I	70	普通	明赤褐	G12G-11		
78	土師器	高坏	—	3.6	11.5	A H I K	25	普通	橙	G12G-6		
79	須恵器	高坏	—	2.5	(14.8)	I K	5	普通	灰	G12G-16		
80	須恵器	高坏	—	15.3	(14.5)	D E	50	良好	青灰	G12G-6・14・17・21・27		
81	須恵器	高坏	—	4.7	(10.6)	I K	20	良好	灰白	G12G-12・16		
82	須恵器	臬	—	4.6	—	E G I	75	良好	灰	G12G-11・14・27	85-8	
83	須恵器	臬	—	4.8	—	E I K	10	良好	灰	G12G-8		
84	須恵器	蓋	14.3	4.1	—	I K	20	良好	灰白	G12G-5・12・34 H10G-58		
85	土師器	坏	(13.4)	4.3	—	A E H I K	20	普通	橙	H9G-90		
86	土師器	鉢	(12.6)	6.8	—	A C E H I K	15	普通	にぶい褐	H9G-99	86-1	
87	土師器	坏	(9.8)	3.0	—	A B C E H I	55	普通	明赤褐	H10G-77		
88	土師器	坏	(12.8)	3.3	—	A E H I K	25	普通	橙	H10G-36		
89	土師器	坏	(12.0)	2.7	—	A C H I	25	普通	橙	H10G-93		
90	土師器	坏	(12.3)	3.3	—	C E H I K	20	普通	灰褐	H10G-28・38		
91	土師器	坏	(11.8)	3.2	—	A H I K	20	普通	にぶい橙	H10G-27		
92	土師器	坏	(13.6)	4.4	—	H K	50	普通	橙	H10G-72		86-2
93	土師器	坏	(11.8)	2.8	—	A C H I K	10	普通	橙	H10G-96		
94	土師器	坏	(10.6)	2.2	—	A C E H I K	25	普通	橙	H10G-93		
95	土師器	坏	(13.4)	4.4	—	A H I K	30	普通	橙	H10G		
96	土師器	坏	12.6	3.0	—	A B C E H I K	50	普通	橙	H10G-93	86-3	
97	土師器	坏	(11.5)	4.0	—	A H I	40	普通	橙	H10G-47		
98	土師器	坏	(11.8)	3.6	—	A H I K	20	普通	橙	H10G-73		
99	土師器	坏	(13.2)	3.4	—	A C D H I	20	普通	明赤褐	H10G-85		
100	土師器	坏	(11.0)	4.2	—	A E H I	25	不良	橙	H10G-95		
101	土師器	皿	(14.0)	4.0	—	A C D E H K	25	普通	橙	H10G-73		
102	土師器	皿	(14.8)	3.9	—	A C H I K	20	普通	にぶい黄橙	H10G-84		
103	土師器	皿	(16.0)	3.8	—	A C D H I	15	普通	橙	H10G-82		
104	土師器	坏	(12.4)	4.2	—	A C H I K	10	普通	明褐	H10G-46		
105	須恵器	短頸壺	—	3.3	—	I K	5	普通	灰	H10G-36		
106	土師器	壺	(19.4)	4.5	—	A C D H	15	普通	暗灰黄	H10G-75		
107	土師器	直口壺	(11.6)	6.6	—	A C H I K	40	普通	橙	H10G-35・75		
108	土師器	小型甕	(11.4)	4.5	—	A H I K	20	普通	橙	H10G-84		
109	土師器	甕	(16.4)	6.3	—	A B C E H I	20	普通	明赤褐	H10G-82		
110	土師器	甕	(15.4)	13.1	—	A B C E H I K	30	不良	橙	H10G-49 胴部外面焼土塊附着		
111	土師器	甕	(15.3)	10.7	—	B C E H I K	20	普通	橙	H10G-49		
112	土師器	甕	(18.4)	5.7	—	A H I K	10	普通	にぶい褐	H10G-37		
113	土師器	甕	(18.8)	6.6	—	A C E H I K	40	普通	橙	H10G-27 口縁~胴部内面黒斑		
114	土師器	甕	—	4.8	5.4	A E H I K	70	普通	明赤褐	H10G-57 底部木葉痕		

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版	
115	土師器	甕	—	6.7	7.4	BEH	60	普通	橙	H10G-9・18		
116	須恵器	坏蓋	(13.4)	3.6	—	EIK	20	良好	灰	H10G-81 群馬産か		
117	須恵器	甗	—	3.6	—	IK	5	良好	灰白	H10G-38 内面自然釉付着		
118	土師器	甗	(20.2)	4.9	—	A E H I K	25	普通	にぶい褐	H10G-92		
119	土製品	土錘	長さ4.8cm 最大径1.5cm 孔径0.6cm 重さ9.30g			EHI	100	普通	明赤褐	H10G-45		
120	土製品	土錘	長さ6.9cm 最大径1.6cm 孔径0.6cm 重さ14.58g			EHI	100	普通	明黄褐	H10G-57		
121	石製品	砥石	長さ14.2cm 幅9.3cm 厚さ6.1cm 重さ518.03g 安山岩								H10G-46	92-5
122	石製品	白玉	長さ1.6cm 幅1.6cm 厚さ0.7cm 重さ2.62g 滑石								H10G-28	88-13
123	土師器	坏	(12.8)	3.4	—	EHIK	25	普通	橙	H11G-6		
124	土師器	坏	(13.4)	4.3	—	A E H I K	40	良好	橙	H11G-21		
125	土師器	高坏	—	4.5	—	A H I K	80	良好	橙	H11G-15		
126	土師器	高坏	—	15.0	16.0	A C E H I K	70	良好	明赤褐	H11G-6	86-4	
127	土師器	壺	(15.2)	4.7	—	A E H K	10	良好	明赤褐	H11G-12		
128	土師器	手捏ね	—	4.0	4.5	A B C E H I K	80	普通	橙	H11G-11		
129	土師器	直口壺	(13.4)	10.1	—	A E H I K	90	普通	明赤褐	H11G トレンチ(東)		
130	土製品	土錘	長さ4.5cm 最大径1.6cm 孔径0.6cm 重さ8.72g			A E H I K	90	普通	にぶい赤褐	H11G-25		
131	石製品	砥石	長さ6.9cm 幅5.9cm 厚さ2.7cm 重さ68.35g 安山岩								H11G-32	92-6
132	石製品	削器	長さ6.6cm 幅8.2cm 厚さ2.3cm 重さ105.91g ホルンフェルス								H11G	93-11
133	須恵器	甗	—	2.9	—	IK	10	良好	灰白	I 8 G-99 東海産		
134	土師器	鉢	(22.6)	6.0	—	A E H I	10	普通	橙	I 8 G-98		
135	土師器	壺	14.2	3.4	—	A B C H I K	20	普通	明赤褐	I 9 G-48		
136	土師器	壺	(17.0)	6.1	—	A C H I K	60	普通	橙	I 9 G-66		
137	土師器	壺	—	3.3	—	E H I K	5	普通	にぶい黄橙	I 9 G-75		
138	土師器	壺	—	4.3	—	A C E H I K	5	普通	明赤褐	I 9 G-75		
139	土師器	小型甕	(14.0)	11.3	—	A B C E H I K	20	普通	にぶい橙	I 9 G-29 胴部外面黒斑		
140	土師器	鉢	(11.6)	4.3	—	A C H I K	20	普通	明赤褐	I 9 G-48		
141	土師器	甕	(17.0)	3.7	—	A C E H I	5	普通	にぶい褐	I 9 G-85		
142	土師器	甕	19.6	26.4	—	B C E H I K	60	普通	にぶい橙	I 9 G-58	86-5	
143	土師器	甕	—	27.2	7.5	C E H	30	普通	橙	I 9 G-76・77		
144	須恵器	甕	—	7.3	—	H I K	5	良好	灰	I 9 G-19		
145	土師器	壺	(12.2)	6.0	(7.0)	C E H	10	普通	明赤褐	I 9 G-26		
146	土師器	坏	(12.0)	3.0	—	A C I K	20	普通	黒褐	I 9 G-78		
147	土師器	坏	(11.7)	4.6	—	A C E H I K	80	普通	橙	I 9 G-40	86-6	
148	土師器	坏	(13.4)	4.8	—	A C D E	15	普通	明赤褐	I 9 G-44		
149	土師器	坏	(11.4)	4.0	—	A H I	30	普通	橙	I 9 G-97		
150	土師器	坏	(15.6)	4.0	—	A C D H I	20	普通	にぶい褐	I 9 G-94		
151	土師器	高坏	(14.0)	4.4	—	A C E H I	10	普通	橙	I 9 G-76		
152	土師器	坏	(13.5)	4.4	—	B C E G H I K	60	普通	橙	I 9 G-77	86-7	
153	土師器	甗	(17.2)	7.0	—	A B C E H	20	普通	明赤褐	I 9 G-47		
154	土師器	高坏	18.0	12.4	12.5	C E H I	60	良好	橙	I 9 G-76	87-1	
155	須恵器	甗	(9.0)	7.3	—	H I K	20	良好	灰	I 9 G-29 J 9 G-4	87-2・3	
156	土製品	土錘	長さ5.6cm 最大径1.9cm 孔径0.5cm 重さ16.97g			C E I	90	普通	にぶい褐	I 9 G-61		
157	土師器	坏	(13.0)	3.1	—	A C H I K	15	普通	明赤褐	I 10G-21		
158	土師器	坏	(12.4)	4.1	—	A C E	15	普通	にぶい赤褐	I 10G-51		
159	土師器	坏	(13.4)	3.7	—	A B C D E H I	15	普通	明赤褐	I 10G-6		
160	土師器	坏	(13.0)	3.2	—	A H I K	25	普通	橙	I 10G-51		
161	土師器	坏	(13.1)	3.9	—	A C H I K	20	普通	にぶい黄橙	I 10G-5		

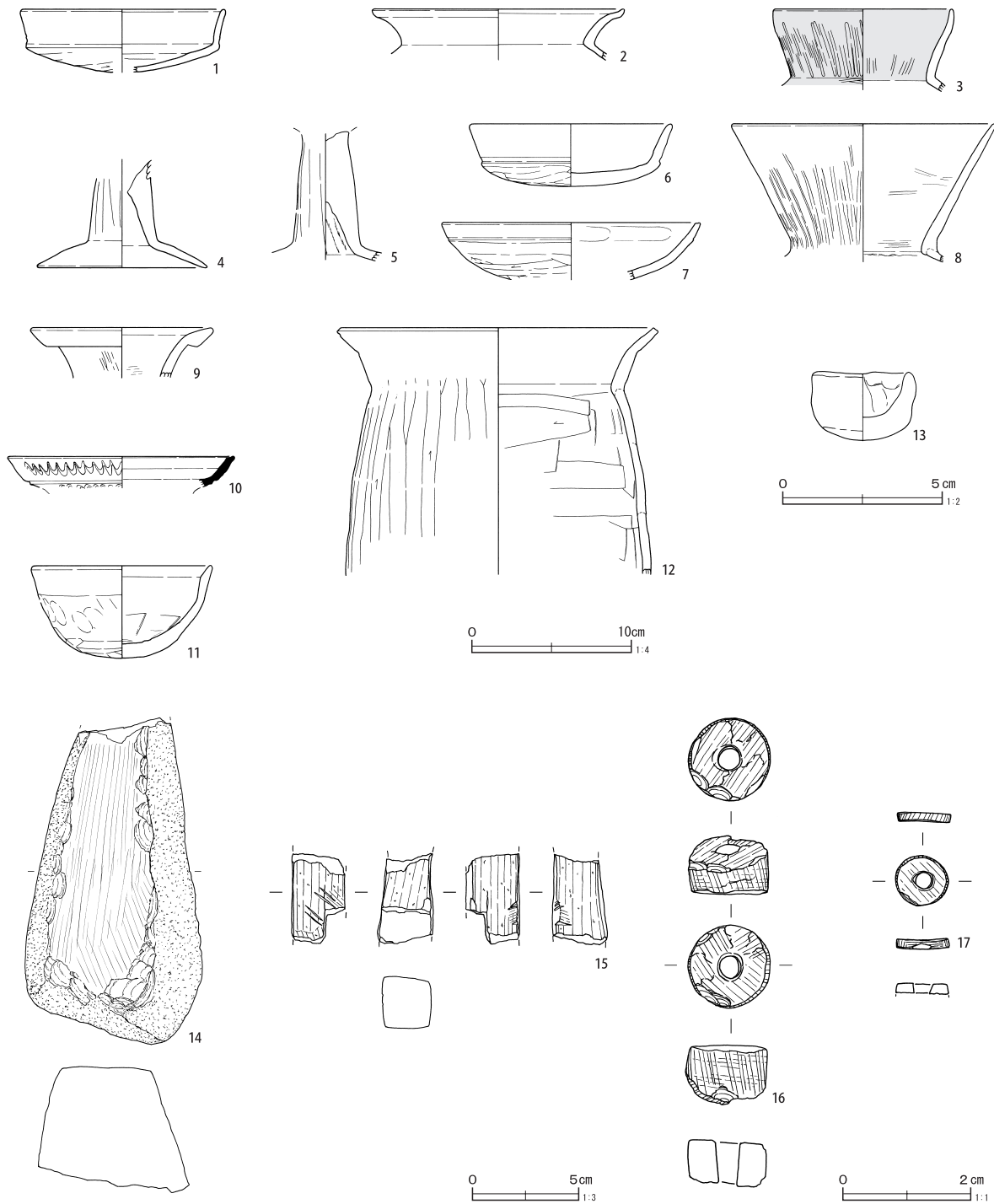
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
162	土師器	坏	(12.0)	3.9	—	A H I	20	普通	橙	I 10 G-6	
163	土師器	坏	(12.0)	3.8	—	H I K	10	不良	橙	I 10 G-23	
164	土師器	坏	(13.8)	3.8	—	A C H I K	35	普通	にぶい黄橙	I 10 G-2	
165	土師器	坏	(13.2)	3.1	—	A C E H I K	10	普通	明赤褐	I 10 G-4	
166	土師器	鉢	(17.7)	8.0	—	C E H I	10	普通	にぶい褐	I 10 G-33	
167	土師器	鉢	(15.0)	4.6	—	A C E	20	普通	橙	I 10 G-94	
168	土師器	鉢	(10.1)	5.9	—	A B C E H I	20	普通	明赤褐	I 10 G-2	
169	土師器	甕	(13.8)	6.0	—	C E H I	20	普通	にぶい黄橙	I 10 G-13	
170	土師器	甕	(18.0)	6.3	—	A C E H I K	20	普通	橙	I 10 G-32	
171	土師器	甕	—	2.8	4.0	B E H I	50	普通	にぶい橙	I 10 G-13	
172	鉄製品	棒状品	長さ3.7cm 幅0.6cm 厚さ0.5cm							I 10 G-21	
173	須恵器	壺	—	2.9	—	I K	5	良好	灰	I 10 G-51	
174	土製品	土錘	長さ6.0cm 最大径1.6cm 孔径0.5~0.7cm 重さ11.94g			C E H	100	普通	灰褐	I 10 G-51	
175	土製品	土錘	長さ4.9cm 最大径1.6cm 孔径0.3~0.4cm 重さ9.72g			C E H	95	普通	にぶい赤褐	I 10 G-5	
176	土製品	土錘	長さ3.3cm 最大径1.4cm 孔径0.4cm 重さ4.89g			C E H	40	普通	にぶい赤褐	I 10 G-13	
177	土製品	土錘	長さ4.7cm 最大径1.6cm 孔径0.5cm 重さ8.54g			H I K	100	普通	にぶい橙	J 7 G-82	
178	土師器	坏	(11.5)	4.2	—	A E H I K	20	普通	明赤褐	J 8 G-92	
179	土師器	高坏	(16.3)	4.2	—	C E H I	30	普通	橙	J 8 G-83	
180	土師器	鉢	13.3	7.0	—	A E H I K	70	良好	にぶい橙	J 8 G-75	87-4
181	土師器	鉢	11.6	7.8	—	A H K	80	普通	にぶい橙	J 8 G-75	外面黒斑 87-5
182	須恵器	高坏	—	4.9	—	G I	20	良好	黄灰	J 8 G-39	外面自然釉付着
183	須恵器	壺	(9.2)	4.2	—	I K	25	良好	灰	J 8 G-73	内面自然釉付着
184	須恵器	坏身	(11.1)	2.5	—	I K	10	不良	灰黄褐	J 8 G-34	
185	土師器	甕	(16.0)	9.0	—	A C I K	15	普通	明赤褐	J 8 G-96	
186	土師器	壺	(13.2)	3.3	—	A C H I K	5	良好	にぶい赤褐	J 8 G-38	
187	土師器	ミニチュア	—	3.3	—	A C D E H K	60	普通	にぶい橙	J 8 G-82	
188	土製品	棒状品	残存長さ6.2cm 径1.9×1.7cm			B C E H I	—	普通	明赤褐	J 8 G-92	
189	石製品	削器	長さ3.0cm 幅3.0cm 厚さ0.5cm 重さ5.48g			黒色頁岩				J 8 G-62	93-12
190	石製品	敲石	長さ14.6cm 幅8.3cm 厚さ5.6cm 重さ913.54g			礫石				J 8 G-74	93-13
191	土師器	高坏	(18.4)	4.9	—	C D E H	20	普通	赤褐	J 9 G-14	
192	土師器	高坏	—	8.1	(9.9)	A H I K	70	普通	明赤褐	J 9 G-13	
193	土師器	甕	(19.0)	9.9	—	A B C E H	20	普通	橙	J 9 G-2	
194	土師器	甕	—	3.0	(5.2)	A C E H I K	25	普通	明赤褐	J 9 G-4	
195	土師器	甕	(19.4)	13.0	—	C E H	30	普通	明赤褐	J 9 G P 5	
196	須恵器	坏蓋	(13.9)	3.1	—	I K L	5	良好	灰白	K 7 G-29	群馬産
197	須恵器	坏身	—	2.3	—	E K L	5	普通	灰白	K 7 G-1	
198	土師器	坏	(12.5)	5.0	—	A H I	20	普通	橙	K 7 G-50	
199	土師器	小型甕	(13.9)	14.2	—	A C E H I K	25	普通	明赤褐	K 7 G-78	
200	土製品	土錘	長さ2.8cm 最大径1.3cm 孔径0.5~0.6cm 重さ4.20g			C E H	50	普通	にぶい橙	K 7 G-29	
201	土製品	土錘	長さ4.2cm 最大径1.5cm 孔径0.4~0.6cm 重さ9.13g			C E I	60	普通	灰赤	K 7 G-61	
202	土師器	坏	(12.4)	4.1	—	A E H I K	25	良好	にぶい橙	K 8 G-12	外面煤付着
203	土師器	坏	(13.3)	3.8	—	H I K	30	良好	橙	K 8 G-31	
204	土師器	鉢	(16.6)	7.8	—	H I K	20	良好	橙	K 8 G-13	
205	土師器	坏	(13.0)	5.2	—	A H I K	20	普通	にぶい橙	L 6 G-16	
206	土師器	坏	(12.8)	5.8	—	A C H I K	20	普通	橙	L 6 G-44	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版	
207	土師器	坏	(12.1)	4.4	—	CEHI	30	普通	にぶい赤褐	L 6 G-92		
208	土師器	坏	(13.0)	4.1	—	AHIK	30	普通	橙	L 6 G-92		
209	土師器	高坏	(16.8)	3.1	—	BEHIK	20	普通	橙	L 6 G-44		
210	土師器	甕	(12.0)	4.3	—	ACHIK	30	普通	明赤褐	L 6 G-93		
211	土師器	甕	(19.6)	6.6	—	ABEHIK	20	普通	橙	L 6 G-18		
212	須恵器	壺	(9.2)	1.9	—	I	20	良好	黄灰	L 6 G-83 内外面自然釉付着		
213	土師器	手捏ね	5.0	3.0	3.7	AHIK	100	普通	にぶい黄褐	L 6 G-47 底部木葉痕	87-6・7	
214	土師器	坏	12.2	4.0	—	ACHI	80	普通	橙	L 7 G-11	87-8	
215	土師器	甗	(21.0)	6.8	—	ACEHI	20	普通	橙	M 4 G-80		
216	土師器	坏	(13.2)	3.4	—	EHIK	20	普通	橙	M 5 G-65		
217	土師器	坏	(11.2)	3.7	—	BCEHIK	25	普通	橙	M 5 G-8		
218	土師器	坏	(12.0)	3.1	—	CEHI	15	良好	橙	M 5 G-8		
219	石製品	削器	長さ5.5cm 幅4.5cm 厚さ0.9cm 重さ26.73g 黒色頁岩								M 5 G-8	93-14
220	石製品	削器	長さ5.9cm 幅7.8cm 厚さ1.7cm 重さ75.98g 頁岩								M 5 G-39	93-15
221	石製品	白玉	長さ1.1cm 幅1.1cm 厚さ0.6cm 重さ0.80g 滑石								M 5 G P55	88-14
222	土師器	鉢	(14.0)	6.6	—	CEHI	30	普通	橙	M 6 G 一括		
223	土師器	甕	—	3.0	6.0	CEH	80	普通	橙	M 6 G-3		
224	土製品	土錘	長さ4.3cm 最大径1.9cm 孔径0.7cm 重さ9.10g			CEHIK	50	普通	にぶい橙	N 4 G-16		
225	土師器	坏	(12.2)	4.6	—	ACHIK	20	普通	明赤褐	O 2 G-89		
226	土師器	高坏	15.4	5.7	—	AHIK	70	普通	にぶい赤褐	O 2 G-99		
227	土師器	高坏	(16.8)	4.5	—	ABCEHIK	25	普通	橙	O 2 G-90		
228	土師器	坏	(14.6)	2.9	—	ACHIK	15	普通	にぶい赤褐	O 3 G-43		
229	土師器	鉢	(22.2)	12.0	—	ACDEHI	25	普通	赤褐	O 3 G-91		
230	土師器	甕	(12.8)	7.3	—	ACHIK	15	普通	明赤褐	P 1 G-70		
231	土師器	坏	(12.8)	4.2	—	AHEIK	20	普通	橙	P 1 G-79		
232	土師器	坏	(14.0)	3.3	—	AHEIK	30	普通	にぶい赤褐	P 1 G-80		
233	土師器	鉢	(15.6)	4.7	—	AHIK	15	普通	橙	P 2 G-10		
234	土師器	鉢	14.2	5.6	—	ACGI	20	普通	明赤褐	P 2 G		
235	須恵器	坏蓋	(13.0)	3.4	—	IK	10	良好	灰	P 2 G-82 群馬産		
236	須恵器	坏蓋	(13.4)	4.1	—	AIK	20	普通	灰白	P 2 G-83 群馬産		
237	土師器	坏	(12.0)	4.0	—	EHI	20	普通	橙	P 2 G-45		
238	土師器	坏	(12.6)	4.0	—	EHI	20	普通	にぶい黄橙	P 2 G-47		
239	土師器	坏	(12.6)	3.7	—	EHIK	20	普通	浅黄橙	P 2 G-54		
240	土師器	坏	(11.6)	3.7	—	ACHK	20	普通	橙	P 2 G-44		
241	土師器	坏	(15.4)	3.7	—	CEI	20	普通	橙	P 2 G-45 底部外面黒斑		
242	土師器	甗	(19.4)	15.4	—	ACGHL	20	普通	にぶい橙	P 2 G-56		
243	土師器	甗	(23.6)	12.1	—	CEHIK	30	普通	橙	P 2 G-61		
244	石製品	砥石	長さ10.2cm 幅9.1cm 厚さ4.0cm 重さ178.25g 安山岩								P 2 G-63	92-7

7. その他の遺物

表土掘削時に採取された遺物や調査・整理段階において欠番となった住居跡等の遺構から出土し、本来の帰属遺構が不明となってしまったものを、その他の遺物として報告する。

1 から13は古墳時代前期から後期の土器を一括した。1 は欠番となった第92号住居跡から出土した須恵器坏蓋模倣坏である。体部が浅く、口縁部が外反しながら開く。口径12.6cmに復元される。



第266図 その他の遺物

2～5は欠番となった第98号住居跡から出土した。2は口縁部が「く」の字状に立ち上がる甕の口縁部である。3は内外面を赤彩した埴の口縁部である。4・5は柱状脚の高坏で、5の脚部内面には顕著な絞り目を残す。

6は須恵器坏蓋模倣坏である。体部が浅く、口縁部が外傾して立ち上がる。底部の造りが厚い。表採。7は浅身の坏で、口径16.1cmに復元される。表採。8は直口壺の口縁部である。表採。9は折り返し口縁の壺である。表採。10は須恵器甗の口縁部である。口縁部及び頸部外面に櫛描波状文を施文する。胎土に片岩を含むことから、藤岡産須恵器と推定される。時期はTK47型式併行期か。

11・12はトレンチからの出土で、位置を特定できない。11は深身の坏である。12は長胴甕で、胴部の張りは弱い。13は手捏ねである。口径2.9cm、

器高2.1cmで、塊状の器形である。表採。

14・15は砥石である。14は欠番となった第93号住居跡から出土した大型の砥石である。表面を使用し、側面は自然面を残す。上面及び裏面を欠損する。長さ16.3cm、幅8.3cm、厚さ7.3cm、重さ1034.40g。凝灰岩製。15は欠番となった第92号住居跡から出土した仕上げ砥である。上下面を欠損する。表裏両側面を使用し、裏面左側縁部と左側面に深い溝状の刃砥ぎ痕が残る。長さ4.2cm、幅2.6cm、厚さ2.5cm、重さ37.65g。凝灰岩製。

16・17は白玉である。16は遺構確認面における表採である。整形はやや粗雑である。長さ1.3cm、幅1.3cm、厚さ0.9cm、重さ1.88g。滑石製。17は表採である。裏面が薄く剥がれているが、整形は丁寧である。長さ0.8cm、幅0.9cm、厚さ0.2cm、重さ0.11g。滑石製。

第95表 その他の遺物観察表 (第266図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.6)	3.9	—	A C E H I K	25	良好	橙	SJ92 (欠番)	
2	土師器	甕	(15.6)	3.2	—	C E H I	15	普通	橙	SJ98 (欠番)	
3	土師器	埴	(11.0)	5.0	—	A E H I K	20	普通	明赤褐	SJ98 (欠番)	内外面赤彩
4	土師器	高坏	—	6.7	(10.6)	A D E H I K	40	良好	橙	SJ98 (欠番)	
5	土師器	高坏	—	7.9	—	C E H I	90	不良	橙	SJ98 (欠番)	
6	土師器	坏	(12.4)	3.9	—	C E H I	50	普通	橙	表採	
7	土師器	坏	(16.1)	3.4	—	C E H I	10	普通	橙	表採	
8	土師器	直口壺	(16.4)	8.6	—	C E H I	20	普通	橙	表採	
9	土師器	壺	(11.0)	3.1	—	C E H I	20	普通	にぶい黄橙	表採	
10	須恵器	甗	(14.0)	1.9	—	B G	20	不良	灰	表採 藤岡産	
11	土師器	坏	(11.2)	5.7	—	C E H I K	80	普通	橙	トレンチ	
12	土師器	甕	(19.6)	15.4	—	A B C D E H K	20	普通	にぶい橙	トレンチ	
13	土師器	手捏ね	2.9	2.1	—	C E I	95	普通	にぶい黄橙	表採	87-9
14	石製品	砥石	長さ16.3cm	幅8.3cm	厚さ7.3cm	重さ1034.40g	凝灰岩			SJ93 (欠番) No. 6	92-8
15	石製品	砥石	長さ4.2cm	幅2.6cm	厚さ2.5cm	重さ37.65g	凝灰岩			SJ92 (欠番)	92-9
16	石製品	白玉	長さ1.3cm	幅1.3cm	厚さ0.9cm	重さ1.88g	滑石			表採	88-15
17	石製品	白玉	長さ0.8cm	幅0.9cm	厚さ0.2cm	重さ0.11g	滑石			表採	88-16

V 調査のまとめ

1. 調査の成果

川越田遺跡第3・4次調査は女堀川に沿うように延びる線的な調査区であったが、複雑に重複する100軒を超える古墳時代の住居跡が検出され、女堀川低地における古墳時代集落の実態が解明されたことが大きな成果として挙げられる。検出された古墳時代の遺構と遺物は、これまで断続的に実施されてきた調査の内容を大きく変更するものではなかったが、集落の範囲が南側に大きく広がっていることが判明した意義は大きい。つまり、現在女堀川を隔てて対峙した位置にある今井川越田遺跡とは、本来一体となって展開した、大規模集落として把握すべき点が如実となったのである。さらには周辺の後張遺跡や梅沢遺跡との比較により、遺跡群としての動態を復元するための基礎データが蓄積されたと言える。

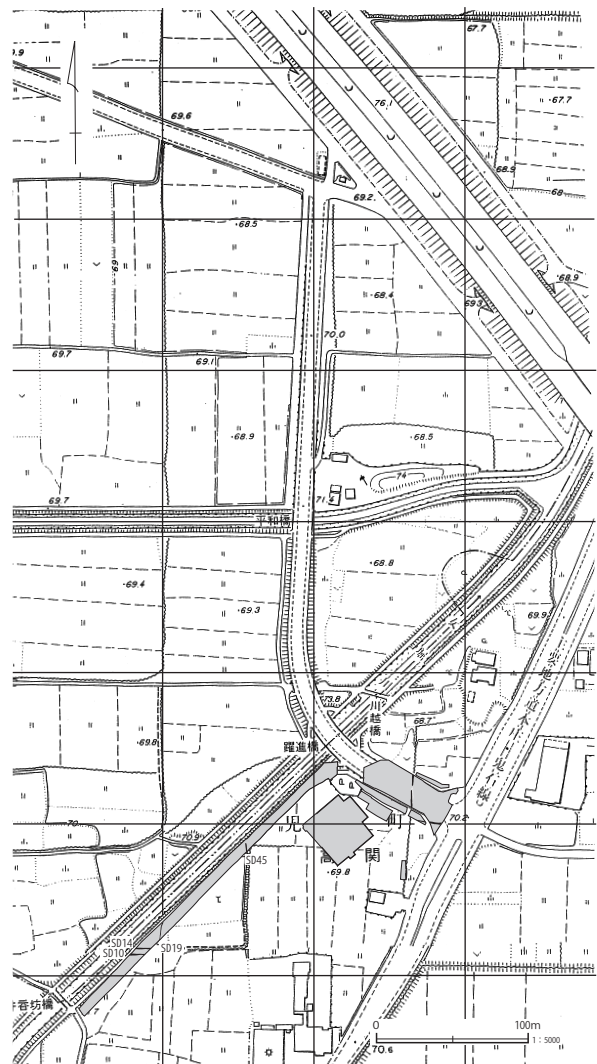
自明なことではあるが、当遺跡は女堀川の形成した自然堤防上に立地するため、河川との不断の関わりの中で遺跡が形成されている。現水田面下には河川の氾濫に起因すると考えられる堆積土によって覆われた、重層的な遺構確認面が形成され、発掘調査の結果、二面の遺構面が検出された。上層は古代から中・近世の遺構確認面、下層は古墳時代の遺構確認面に該当する。

上層遺構確認面からは、古代から中・近世の溝跡46条、河川跡1条が検出された。県営圃場整備施行以前には、遺跡周辺の水田面には整然とした一町方格の地割が連なる条里型地割が広範囲に残り、「児玉条里」「今井条里」と呼ばれていた。本遺跡周辺では女堀川の旧流路の存在により、既に地割がかなり崩れていると指摘されていたが、第267図に示すように表層地割の坪線に概ね一致する溝跡やそれを意識した溝跡が検出されている。また、今回の調査では畝跡と推定される小規模な溝跡も確認されており、古代以降における土

地利用の変遷を知る貴重な資料を提供できた。

下層遺構確認面では、調査区のほぼ全域に古墳時代前期から後期の住居跡が密集し、住居跡103軒、溝跡13条、土壇11基、ピット547基が検出され、女堀川中流域における古墳時代の拠点的集落のひとつであることが明らかになった。

以下において、調査の中心をなす古墳時代の川越田遺跡の様相について、出土土器の特徴を整理し、集落の構成と時期的な変遷過程を跡づけ、女堀川中流域における本遺跡の位置づけについて素描したい。



第267図 条里型地割復元図

2. 古墳時代前期の土器様相

今回の第3・4次調査では、古墳時代前期の住居跡が19軒検出された。この内、12軒から時期を検討できる土器が出土している。本項では、それらの資料について、これまでの調査成果と合わせて位置づけを試みることにしたい。

今回の調査において、第51号住居跡から約220点、第100号住居跡から約60点のまとまった資料が出土した。器種もすべて揃っていることから、両住居跡の資料を軸に型式論的な異同について検討した。その結果、甕・壺の胴部が球形から長胴化すること、高坏・器台の脚部が「ハ」の字状に開くものから柱状のものへ変化すること、という大きな二つの型式論的变化が想定された。それにより、第51号住居跡の資料は二分され、合わせて今回調査の土器群も古、新の二つの段階に分けることが可能である（第268図）。

I期（古） 第51号住居跡（古）、第100号住居跡資料を中心に第38・44・52・53・71号住居跡、第1次調査（A地点）第24・25号住居跡、第7号溝跡が該当する。

甕類は台付と平底がある。法量的には大中小が認められる。両者とも単口縁で長めの口縁部が大きく外反する。頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部が胴部最大径に対して小さいことから、括れが強い感がある。胴部は中位に最大径がある若干長めの球形胴である。外面の調整は斜めもしくは横位の刷毛目为中心で、整った印象を受けるものである。第51号住居跡の188は端部が直立し、新潟地域の千種甕の影響が考えられる。胴部の調整として叩き目の施されるもの（SJ51-178・179）が複数認められることが、かねてから本遺跡の特徴とされてきた。これらは、第1次調査第7号溝跡の資料も含め本段階に帰属するものと考えられる。S字状口縁台付甕は単口縁のものと同様で認められる。基本的に模倣品であり、模倣の巧拙が認められる。口縁部はやや長めで、胴部の形

態と頸部の様相は単口縁の甕と同様である。やはり、胴部の調整は整った印象を受ける。

壺類の段階分けは全形の知れるものがなく困難だが、胴部の形態と頸部の括れの様相が甕と同様のものと仮定し、振り分けた。第51号住居跡からは胴部上半にパレス文様、櫛描文の施されるものが出土している。確実とは言い難いが、胴部の形態から70を本段階のものとし、67・72は新段階のものとした。これらについては検討の余地があるだろう。第100号住居跡の超大型壺（21）も同様に本段階に帰属するものとした。

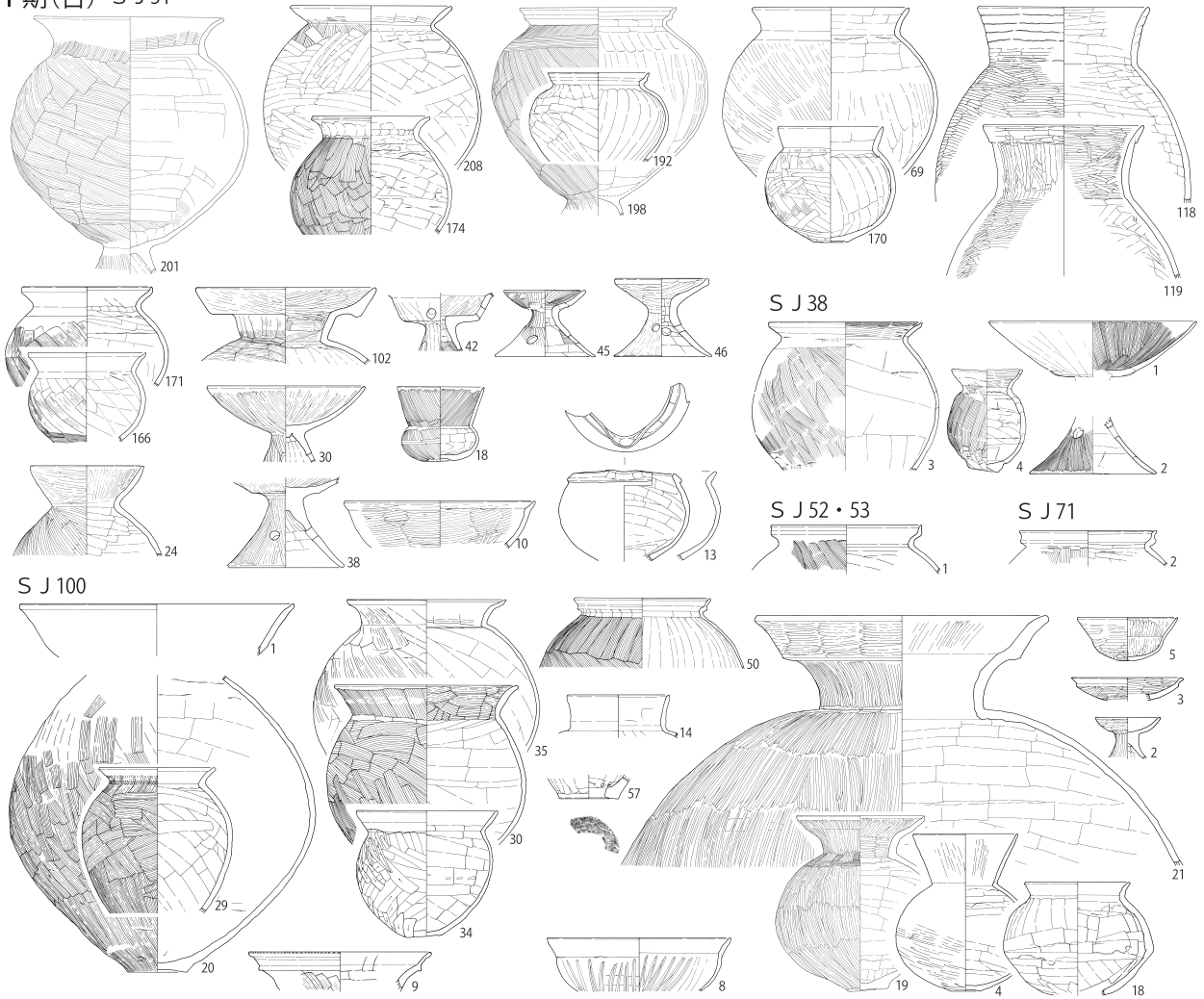
高坏・器台は坏部が大きく、脚部は「ハ」の字状に開くものである。埴・鉢類は体部の径、高さともに大きめである。また、樽式系統のもの（SJ51-118・119）が残存するのも特徴的で、同様の様相は雷電下遺跡第25号住居跡出土資料（駒宮他1979）でも認められている。

I期（新） 第51号住居跡（新）の資料を中心に第26・35・94・101・102号住居跡、第1次調査第6号住居跡が該当する。

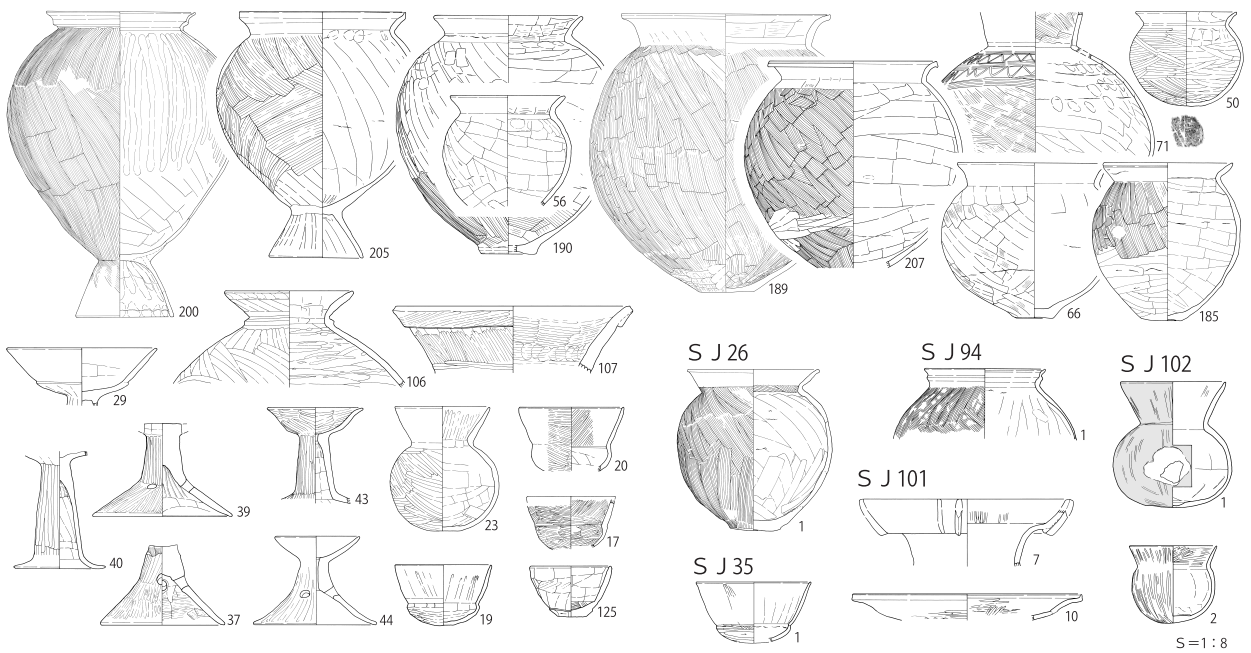
壺・甕類は胴部が前段階のものに比べて長胴化する。胴部の径に対して口径が大きくなり、頸部の括れが弱く感じられるようになる。刷毛目は縦方向のものが中心になり、やや乱れている。ナデ調整のものや、ヘラケズリのものが多くなる傾向が認められる。高坏・器台は径に対して器高の割合が高くなり、坏部が小さく、脚部が柱状のものが多く見受けられるようになる。埴・鉢類は体部が小さく、ヘラケズリ調整のものも目立つ。

以上、本遺跡の出土資料を型式論的な視点から二分し、各々の段階の特徴について述べてきた。層位論的には、重複するものが第52・53号住居跡出土資料に限られ、それらを二分することが困難であったため、切り合い関係からは検証できなかった。ただし、第51号住居跡では一部に逆転が見られるものの、相対的には古・新の資料が上下

I 期(古) S J 51



I 期(新) S J 51



S=1:8

第268図 古墳時代前期の土器

関係として把握できた。詳細は別に譲るが、限定的ではあるものの本項における型式論的な資料操作を保障するものと考えられる。

本遺跡出土資料と同様の時期の児玉地域の資料については、かつてやはり二分されるものとして検討したことがある(福田1997)。本項での検討もそれをなぞるような結果となった。隣接する後張遺跡の位置づけ(立石1983)との異同の詳細については別に譲るが、前稿同様にほぼそのⅠ・Ⅱ期に対応するものと考えたい。

3. 古墳時代中・後期の土器様相

川越田遺跡は、古墳時代前期後半代に集落が形成され、中期初頭に後張遺跡にその中心が移動し、一旦廃絶した後、空白期間をおいて中期後半に再び居住域が形成される。後期には住居跡数の多寡はあるが、ほぼ継続的に集落が形成されている。そして、女堀川低地内部の他の遺跡と同様に律令期集落が成立する7世紀中頃を境に、集落として終焉を迎えることが、今回の調査で明らかとなった。ここでは標準的資料を摘出し、古墳時代中期後半から古墳時代後期末までの土器変遷の概略を示しておきたい(第269・270図)。

Ⅱ期(古墳時代中期後半)

Ⅱ期は、第21・40・60号住居跡を指標とする。従来の和泉Ⅱ式に比定される。高坏が器種組成に占める割合はまだ高いが、半球形碗や平底鉢等の供膳器が定量で伴う段階である。第40号住居跡の高坏に見られる中膨らみの柱状脚が特徴的で、第60号住居跡からは有段脚高坏が出土している。甕は「く」の字状に口縁部が屈曲するものが主体を占める。第40号住居跡の大型鉢は頸部の括れが弱く、下膨れの器形である。底部を欠損しているため判然としないが、大型甕の可能性もある。本来は有段口縁壺、鉢、小型壺、甕等の器種が伴う。

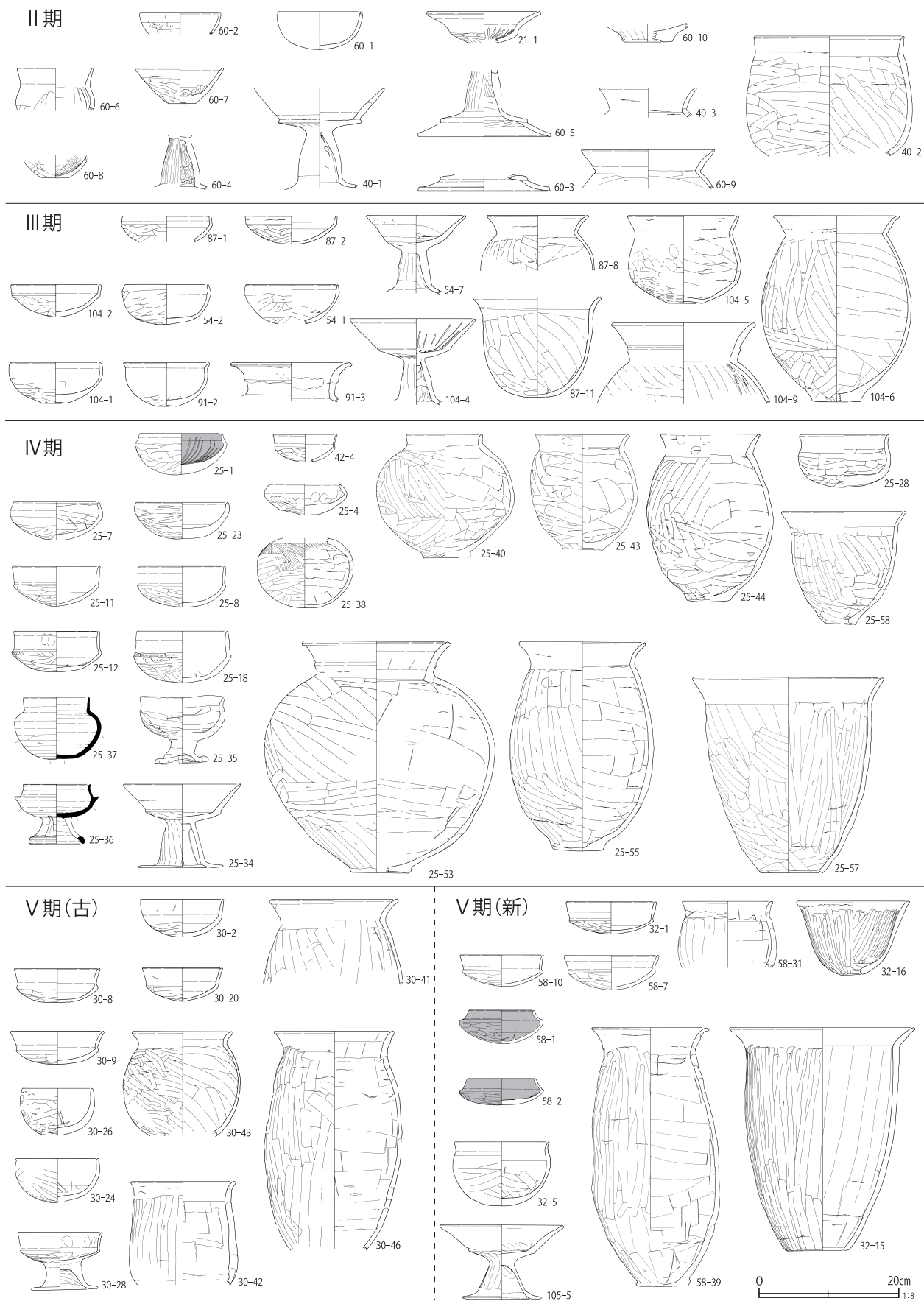
Ⅲ期～Ⅴ期(古墳時代後期前半)

Ⅲ期は、第54・87・91・97・104号住居跡を指標

県内の資料については、大宮台地の前原・山崎山、妻沼低地の北島・古宮、都幾川低地の反町、荒川低地の鍛冶谷・新田口、元宿等の各遺跡でも検討を行ってきた。県内では出現期古墳が登場する大きな節目となる時期である。本遺跡出土資料と、これまで検討してきた各遺跡の関係について明らかにすることは、地域社会における古墳導入の社会的背景に迫ることになると考えられる。後日の検討課題としたい。

とする。典型的な模倣坏が出現する以前の段階で、口縁部が短く直立ないし内屈する坏、内斜口縁の坏、半球形坏などバラエティーが見られる。碗は深身の半球形、口縁部の外反する和泉型碗がある。高坏は和泉型高坏が主体であるが、前時期に比べると脚部は柱状部の膨らみは弱く、裾部が直線的に開く。坏部は浅くなり、下端に段をもつものは少ない。該期まで複合口縁壺が残るようであるが、主体は口縁部中位に小さな段を作り出す有段口縁壺である。甕は長胴化しているが、胴の張りはまだ大きい。甕は大型甕が第97号住居跡から出土している。

Ⅳ期は、第25・28・42号住居跡が該当し、典型的な須恵器坏蓋模倣坏の出現を指標とする。口縁部が長く直立する坏蓋模倣坏が主体で、客体的に半球形坏、内屈口縁坏が伴う。注目される点として第42号住居跡の坏蓋模倣坏の中に口径9cmの小型坏(4)が含まれており、特別な器として用いられたのであろう(宍河内2004)。高坏は依然として和泉型高坏が多く、例外的に碗を乗せたような形態の高坏がある。壺は有段口縁壺、短頸壺、小型壺がある。甕は長胴甕、広口の胴張甕、小型甕など多様である。甕は砲弾形の大型甕と小型甕がセットをなしているほか、第28号住居跡からは把手付甕(11)出土している。第25号住居跡では



第269図 古墳時代中・後期の土器 (1)

猿投窯産と推定されるTK47型式併行期の有蓋高坏と、群馬産の短頸壺が相伴している。

V期は、口縁部が外反気味に開く坏蓋模倣坏が主体となる段階で、古・新の二つに細分される。

古段階は第30・70・89号住居跡を指標とする。該期から模倣坏に短脚の脚部を付けた鬼高型高坏が出現し、以後和泉型高坏と相伴する。また、口径15cm前後の大型模倣坏も特徴的である。

新段階は第32・58・105号住居跡を指標とする。第58号住居跡では黒色処理を施した小振りの坏身模倣坏が出土している。須恵器の坏身を忠実に模倣したもので、受部を明瞭に作り出し、立ち上がりは強く外反する。有段口縁壺は該期以降急激に減少する。長胴甕は胴部中位に最大径をもつものや、下膨らみのものが多く、底部が突出する。甗は砲弾形の大型甗や鉢形の小型甗がある。

VI期～IX期（古墳時代後期後半）

VI期は、第31・46・47号住居跡を指標とする。坏は口縁部が大きく開く坏蓋模倣坏を主体とするが、黒色処理した大振りの有段口縁坏、坏身模倣坏が定量で伴い多様化する。須恵器は第46号住居跡からTK10型式併行期の末野産と推定される坏蓋（5）が見られる。

VII期は、第43・65・67・83号住居跡を指標とする。坏の様相は前時期から漸移的な変化を示すが、特徴的な器種として群馬県地方に出土例の多い長脚高坏をはじめ、短脚高坏、台付鉢等が見られる。長胴甕は、寸胴形で底部の突出しないスリムな器形が出現する。須恵器はTK10～TK43型式併行期の蓋坏、長脚1段透し高坏、短頸壺、甗等がある。前時期と同様、藤岡産を中心とした群馬産須恵器が安定的に供給される。

VIII期は、第82号住居跡を指標とするが、資料的には少ない。坏は無彩の坏蓋模倣坏、黒色処理を施した有段口縁坏、坏身模倣坏の3種を中心に構成される。該期の中で鬼高型高坏（17）は消滅するものと考えられる。須恵器は群馬産のTK209型

式併行期の坏身（16）がある。

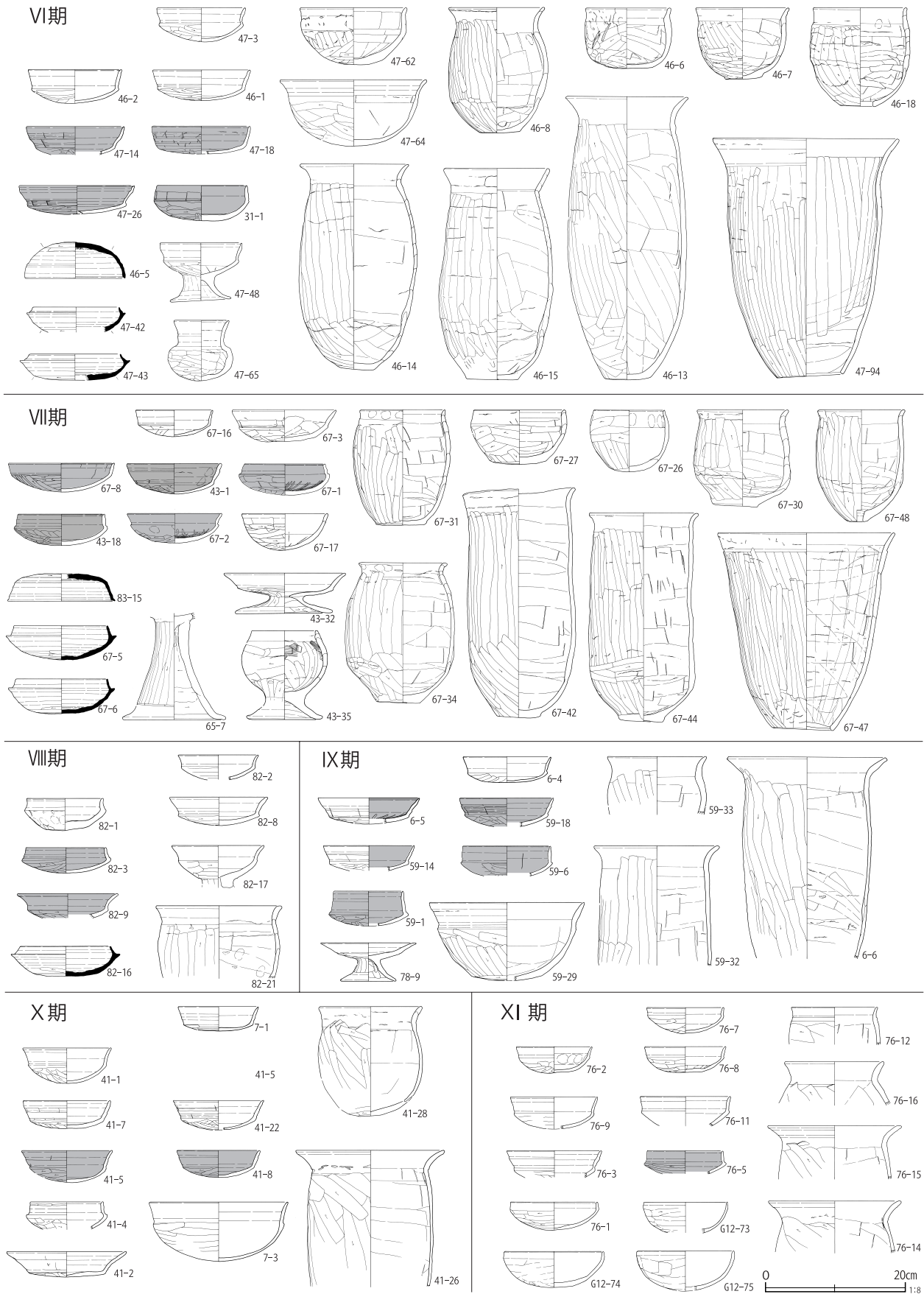
IX期は、第6・59・69・78号住居跡を指標とする。坏は、口縁部の外反する坏蓋模倣坏、有段口縁坏、坏身模倣坏、内屈有段口縁坏がある。口径12～13cm台の坏蓋模倣坏を主体に、客体的に有段口縁坏が含まれ、坏身模倣坏はさらに少ない。高坏は、口縁部の大きく開く皿を乗せた低脚高坏が出現する。長胴甕は口縁部が短く立ち上がり、胴部は寸胴形で、長胴化が極限に達する。甗は、大型甗が第69号住居跡（28）から出土している。

X期・XI期（古墳時代後期末）

X期は、第7・41号住居跡を指標とする。坏は小型化が漸移的に進み、口径11～12cm台の坏蓋模倣坏と有段口縁坏が主体をなし、口縁部の直立する坏身模倣坏や口縁部が大きく開き体部の浅い皿を少量伴う。甕は長胴甕、胴張甕、小型甕がある。長胴甕は口縁部に最大径をもち、斜め方向への折れが強くなる。胴部は上位にやや張りをもち、外面の縦ヘラケズリが頸部付近で斜めヘラケズリを施したものが見られ、以後の長胴甕の特徴が現出する。大型鉢も定量で存在する。

XI期は、第76号住居跡とG12グリッド出土土器を指標とする。口径10～11cm台に小型化した坏蓋模倣坏を主体に、有段口縁坏、坏身模倣坏が客体的に伴い、該期の中で坏身模倣坏は消滅する。当該期の大きな特徴は、律令的土器様式を代表する新器種として内屈口縁形態の北武蔵型坏が出現しているが、量的にはまだ少ない。

以上のように、本遺跡から出土した古墳時代中期から後期の土器をII～XI期に分けて考えた。各時期の年代については、当該地域の土器を検討した諸氏の編年と年代比定を参考にすれば、II期が5世紀中葉、III期が5世紀後葉、IV期が5世紀末葉から6世紀初頭、V期が6世紀前葉、VI期が6世紀中葉から後葉、VII期が6世紀後葉、VIII期とIX期が6世紀末葉から7世紀初頭、X期とXI期が7世紀前葉から中葉に概ね位置づけられる。



第270図 古墳時代後期の土器（2）

4. 集落構成と変遷

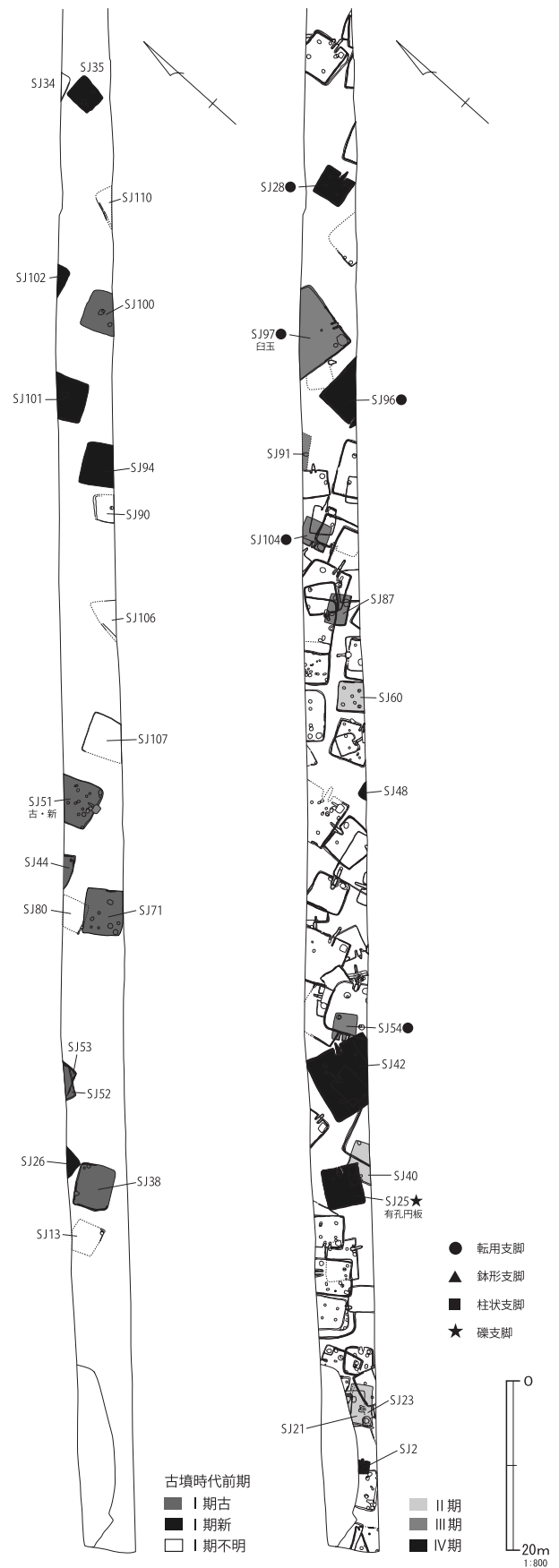
ここでは、前項の出土土器による時期区分に従って集落を構成する住居跡の様相について概観する。後張遺跡や今井川越田遺跡等の動向を視野にいれながら、住居跡のカマドの方向性や支脚の有無、臼玉をはじめとする出土遺物の分布状況を加味しながら、住居跡群の動態を跡づけたい（末木2011）。ただし、出土遺物が少なく帰属時期の不明確な住居跡が多いことや、重複が著しいため前後の時期の遺物が混入しているものがほとんどであることから、必ずしも時期区分と重複関係の整合性が図られていない面もある。また、厳密な意味において同時存在の住居跡群を抽出したものでないことを、予め断わっておく（第271・272図）。

I期集落 集落が形成され始めた、古墳時代前期後半から終末の4世紀後半を中心とする時期である。出土遺物や遺構の切り合い関係から19軒が検出された。調査区内に散漫な分布を示し、出土土器の様相から古・新二段階に細分される。

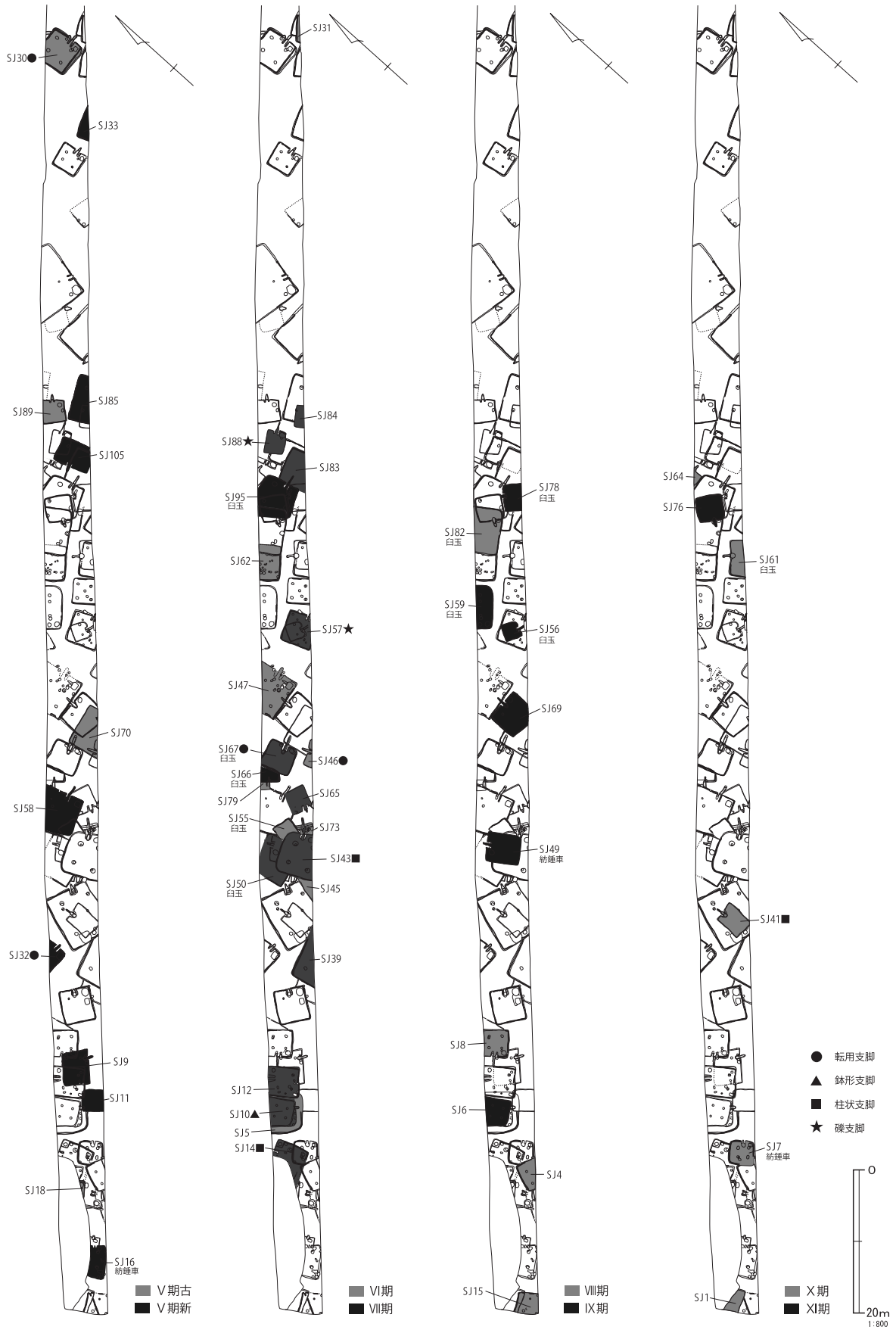
古段階は第38・44・51～53・71・100号住居跡の7軒、新段階は第26・35・94・101・102号住居跡の5軒が該当する。これ以外の7軒は細別時期不明である。

古段階では、北側の第100号住居跡を中心とする一群（現状では単独）と、中央部の第51号住居跡を中心とする一群に大きく分けられる。同様に新段階でも住居跡数の多寡は認められるが、南・北二群に大きく分かれて展開する。ただし、埋土中に200個体を超える大量の土器が廃棄されていた第51号住居跡は、住居廃絶後の新段階になっても継続的に廃棄行為が行われたことが出土土器の様相から窺われる。

住居跡の規模は一辺5m前後の大型と、3m前後の小型に分けられ、地床炉を床面中央部に設けた方形プランが基本形となる。古段階の第71号住居跡では南隅部の床面に小礫が敷き詰められ、住居内における特別な空間として機能していた可能



第271図 川越田遺跡集落変遷図（1）



第272図 川越田遺跡集落変遷図(2)

性が考えられる。時期的には新しくなるが同様の石敷き施設が、本庄市九反田遺跡Ⅲ次調査第1号住居跡（松本2004）、今井川越田遺跡第124号住居跡（瀧瀬1997）でも検出されている。

出土土器の特徴は、在地化した畿内系の小型精製土器群、叩き甕、東海西部系のパレス壺、S字状口縁台付甕、北陸東部系の千種甕等の外来系土器を主体に、弥生後期の系譜を引く樽式系土器等が出土している。

女堀川中流域における古墳時代前期の集落群の動態については、前期中頃に川越田遺跡、浅見境北遺跡、日延遺跡など、複数の小規模集落が低地内に出現し、その後、後半から終末段階では川越田遺跡と一体となる大規模集落の後張遺跡が中核となって、低地内の本格的な開発を主導したと想定されている（宍河内1999）。

Ⅱ期集落 古墳時代中期後半の5世紀中葉を中心とする時期に位置づけられ、Ⅰ期との間には空白期がある。前期末から中期前半にかけて拠点集落に成長した後張遺跡を取り巻くように、当該期に本遺跡を含め周辺には梅沢遺跡、今井川越田遺跡等の小規模集落が出現し、有機的な関連をもつ一つの遺跡群を形成する。

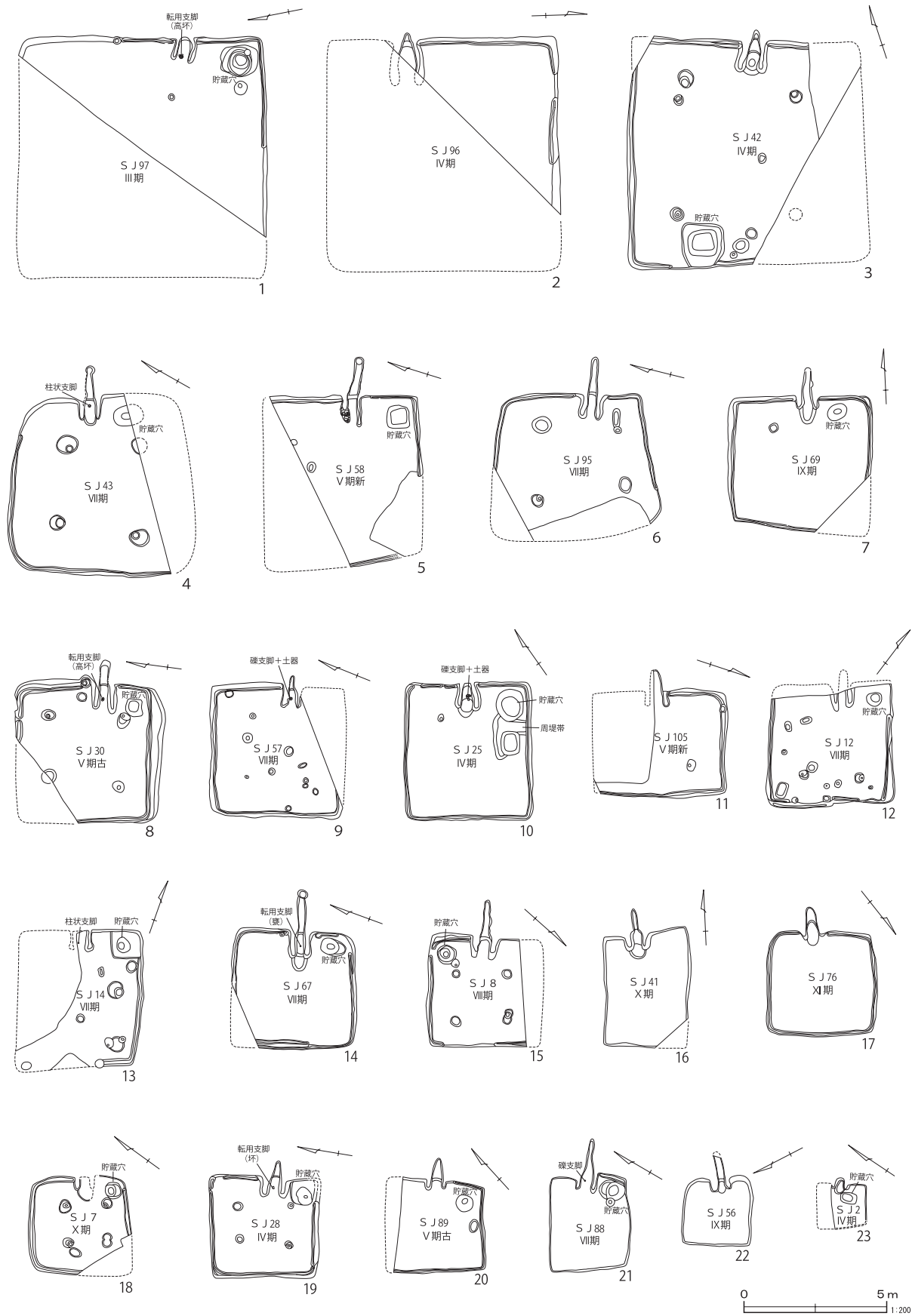
Ⅱ期集落は、第21・23・40・60号住居跡の4軒が該当する。概して小型の住居跡が多く、中央部の第60号住居跡と南側の第21・23・40号住居跡に大きく二分される。このうち第21号住居跡はカマドを設置していたことが確認されている。燃焼部と煙道部を備えた定型的なカマドで、所謂初期カマドではない。この他の住居跡については調査区の制約によりカマドの有無は判然としないが、周辺の後張遺跡や東牧西分遺跡等よりもカマドの導入が一段階遅れたものと考えられる。

なお、当該期には居住域の北端を画する第1号溝跡が開削されたものと推定される。おそらく、用水路としての第1号溝跡の開削を契機に、後張遺跡周辺に集落域が拡大したのであろう。

Ⅲ期集落 古墳時代後期初頭の5世紀後葉を中心とする時期に位置づけられる。第54・87・91・97・104号住居跡の5軒が該当する。一辺8.5mを超す超大型住居跡の第97号住居跡を中心に、第87・91・104号住居跡からなる4軒の北群と、やや離れた中央部の小型住居跡である第54号住居跡から構成される。超大型住居は、該期と次期にだけ見られるもので、集落内部における階層分化や、集落の中心的な役割を果たした集団の存在等に関して数多くの問題を提起する。

当該期にはカマドが急速に普及し、長胴甕・大型甕の出現など土器組成にも急激な変化が見える。カマドは煙道部が壁外にほとんど延びないタイプが主体で、その方向も北東・東・南西と多様性を示す。支脚は高坏を逆さに置いた転用支脚が大半を占める。貯蔵穴の位置はカマド右脇が全時期を通じて基本であるが、該期のみカマド左脇に貯蔵穴をもつ住居跡が2軒（第54・104号住居跡）確認されており、カマド定着期の多様性を物語る。特徴的な遺物として滑石製白玉が大型住居跡の第97号住居跡から出土している。

Ⅳ期集落 時期的には5世紀末葉から6世紀初頭を中心とする。Ⅳ期集落は第2・25・28・42・48・96号住居跡の6軒からなり、集落規模は一機に拡大する。一辺8mを超す超大型住居跡の第42・96号住居跡を中心に、南北に二極化した分布を示す。北側の超大型住居跡の第96号住居跡は前時期の第97号住居跡と近接し、主軸方向を同じにする。しかし、カマドの方向は正反対を示し、超大型住居跡の性格を考える上で重要である。一方、南西端には一辺2m未満の第2号住居跡が存在しており、住居跡規模の格差が大きい。住居構造では、唯一第42号住居跡がカマド対面に貯蔵穴を設けていた。また、第25号住居跡では貯蔵穴脇に土手状の周堤帯を構築しており、注目される。カマドの方向に関しては画一性が見られず、多様である。カマド支脚には、坏・高坏等の転用支脚（第28・



第273图 古墳時代後期住居跡集成図

96号住居跡)と礎の上に土器を被せて高さを調節した支脚(第25号住居跡)が見られる。第25号住居跡では有孔円板のほかに、カマドや貯蔵穴周辺に多量の土器類が当時のままの状態に残されていた。意図的な配列を示す坏、大型砥石の出土など、住居内における空間分割の問題を考える上で良好な資料を提供した。

V期集落 6世紀前葉を中心とする時期に位置づけられる。これまでは住居跡群が一定の距離において偏在していたのに対し、当該期から複数の住居跡群が狭い範囲に集中度を高めることにより、集落規模を増大させる。当該期は東側に展開する後張遺跡の縮小期にあたり、両遺跡の消長が表裏一体の関係にあることが読み取れる。また、一時断絶していた今井川越田遺跡でも再び住居跡群が出現し、これ以降、本遺跡と同一歩調の集落変遷を辿るようになる。出土土器の様相から古・新段階に細分した。古段階は第18・30・70・89号住居跡の4軒である。新段階は第9・11・16・32・33・58・85・105号住居跡の8軒である。

前時期までは3軒の超大型住居跡が傑出した規模を誇っていたが、当該期以降は一辺6m前後が大型住居跡の規範となり、全体に住居規模が縮小する。南東壁カマドの第9号住居跡、西壁カマドの第105号住居跡など方向は依然として多様である。支脚は転用支脚が継続して見られるほか、第58号住居跡ではカマド袖部の芯材として長胴甕が用いられていた。遺物では、滑石製紡錘車が南西端の第16号住居跡から出土している。

VI期集落 6世紀中葉から後葉を中心とする時期に位置づけられる。VI期集落は、第5・31・45~47・55・62・66・73・79号住居跡の10軒に増加しているが、分布範囲は中央部から南側に狭まり、密集度が増大する。この傾向は次期以降も踏襲され、自然堤防頂部の狭隘な空間を居住適地として建て替えが繰り返される。反面、北側の第1号溝跡周辺には住居跡が作られなくなり、未検出ではある

が掘立柱建物跡や平地式住居跡等が存在したのであろうか。なお、該期は後張遺跡の終焉期にあつている。

カマドの方向は基本的に北壁及び東壁を指向する。ただし、南西壁カマド等の例外もある。支脚は第46号住居跡で鉢の転用が見られる。遺物は、第55・66号住居跡から滑石製白玉が出土した。他にはこの時期から土錘(第47・66号住居跡)の出土が散見されるようになる。また、藤岡産に代表される群馬産須恵器の出土量も該期から増加し、安定的な供給ルートが確保されたことを示す。

VII期集落 6世紀後葉を中心とする時期である。該期以降、北側への住居跡の進出はなくなり、居住域が中央部から南側に限定される。集落の最盛期で、第10・12・14・39・43・50・57・65~67・83・84・88・95号住居跡の14軒がある。同一の土器様相を示しているが、住居跡が近接し、切り合い関係をもつものがあることから短期間に頻繁な建て替えが行われたものと想定される。

該期以降、白玉を出土する住居跡が中央部に継続して見られるようになり、住居跡同志の結合を示す事例として注目される。カマド儀礼や住居の廃絶に伴う儀礼などを共有する血縁集団の存在を暗示している可能性がある。支脚には、土製専用支脚の鉢形支脚(第10号住居跡)・柱状支脚(第14・43号住居跡)、礎支脚(第57・88号住居跡)、転用支脚(第67号住居跡)等、多様化が窺われる。

VIII期集落 6世紀末葉を中心とする時期である。第4・8・15・82号住居跡の4軒が該当し、集落規模がやや縮小する。住居規模は第82号住居跡が一辺6mを超すが、それ以外は一辺4m前後で小型化が顕著となる。第8号住居跡は例外的にカマドの左脇に貯蔵穴を設置する。土錘は第4・8号住居跡の2軒から、白玉は中央部の第82号住居跡から出土している。

IX期集落 6世紀末葉から7世紀初頭を中心とする時期に位置づけられ、第6・49・56・59・69・

78号住居跡の6軒がある。再び住居跡数が増加する。中央群(第56・59・78号住居跡)への滑石製白玉の集中が顕著であり、何らかの住居跡群の紐帯を反映しているのであろうか。また、第49号住居跡からは側面に放射状の線刻を施した滑石製紡錘車、砥石等が出土した。土錘は2軒(第59・69号住居跡)から出土している。

X期集落 集落が大きく衰退した段階で、古墳時代後期末の7世紀前葉を中心に位置づけられる。おそらく、この時期には集落の中心が今井川越田遺跡に移動したものと考えられる。

第1・7・41・61・64号住居跡の5軒が該当し、中央部から南側にかけて散漫に分布する。このうち第41号住居跡は長方形平面で、カマドを短辺側にもち土製柱状支脚を設置していた。第61号住居跡からは滑石製白玉と土錘が、第7号住居跡からは側面に鋸歯文を線刻した滑石製紡錘車が出土し

5. 今後の課題

今回の調査は、川越田遺跡全体から見れば、ごく限られた調査面積ではあったが、女堀川沖積低地の開発に逸速く取り組んだ古墳時代前期集落跡の実態を解明するためのまとまった資料を得ることができた。同様に、周辺遺跡と密接な関連をもちながら展開した古墳時代中期から後期末にわたる長期継続型集落の実態に迫り、女堀川沖積低地における地域開発史を復元・追究する上で絶好の資料を提供したと言えよう。

しかし、限られた整理期間の中で、発掘調査で得られた膨大な情報をまとめ上げ、調査成果を客観的に記述することは難しく、十分行き届いたものであるかどうかについては、甚だ心許ない。

振り返ってみると、住居跡の切り合い状況や埋土の観察によって、住居跡が比較的短期間に建て替えが行われたと推定されるにもかかわらず、既存の土器編年の枠組みでは、同時存在の住居跡群の把握が極めて困難で、遺構の重複関係との整合

しており、注目される。土錘は、第61号住居跡から4点がまとまって出土した。

XI期集落 住居跡は中央部の第76号住居跡1軒のみで、本期をもって集落は終焉を告げる。年代的には7世紀中葉前後に位置づけられる。G-12グリッドから出土した北武蔵型坏(第259図73~76)が最新相を示す。隣接する今井川越田遺跡では該期の住居跡が14軒検出されており、本遺跡は周縁的なあり方を示している。

以上、I期からXI期にわたって集落の変遷を概観した。なお、集落変遷図に掲載できなかった住居跡のうち、遺構の重複関係から古墳時代後期と判断される住居跡は、第3・19・20・24・68・72・77・81・99・109号住居跡の10軒である。また、出土遺物がなく、重複関係からも時期を特定できなかった時期不明の住居跡は、第17・27・29・36・37・75・103・108号住居跡の8軒である。

性が十分に果たせなかったことが大きな課題として残された。

こうした反芻運動にも似た遺構の重複現象の要因として、頻繁な河川の氾濫による被害を避けるため、自然堤防頂部の狭隘な空間を居住適地として繰り返し利用した結果、遺構密集区が形成されたと考えることは容易い。しかし、そうした自然発生的な要因だけでなく、長期継続型集落の出現背景に想定されている社会的要因についても考慮する必要があるだろう。つまり、古墳時代前期以降における低地部の大規模開発によって極相までに達した灌漑系統(鈴木1998)を維持・管理していくために、継続的な集落形成が社会的にも強く要請されたのであろう。

伝統的な長期継続型集落成立の歴史的背景を地域史の脈絡の中に位置づけるためには、生産の場、墓域の問題、隣接する遺跡群との関連性の解明など、今後に残された課題は多い。

引用・参考文献

- 有山径世 2008『川越田遺跡Ⅲ』本庄市埋蔵文化財調査報告書第9集 本庄市教育委員会
- 磯崎 一 1995『今井川越田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第177集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 岩瀬 譲 1998『地神／塔頭』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第193集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 岩田明広 1998『今井条里遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第192集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 大熊季広・櫻井和哉2000『共和小学校校庭遺跡—C地点の調査—』児玉町遺跡調査会報告書第8集 児玉町遺跡調査会
- 大谷 徹 2007『夏目／夏目西／弥藤次』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第346集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 恋河内昭彦 1993『川越田遺跡Ⅱ（B・C地点の調査）』児玉町文化財調査報告書第5集 児玉町教育委員会
- 恋河内昭彦 1995『飯玉東Ⅱ・高縄田・樋越・梅沢Ⅱ・東牧西分・鶴蒔・毛無し屋敷・石橋』児玉町文化財調査報告書第17集 児玉町教育委員会
- 恋河内昭彦 1996『辻堂遺跡Ⅰ』児玉町文化財調査報告書第19集 児玉町教育委員会
- 恋河内昭彦 1997『城の内・日延・東田・浅見境北遺跡』児玉町文化財調査報告書第23集 児玉町教育委員会
- 恋河内昭彦 1999『日延Ⅱ・児玉条里遺跡』児玉町文化財調査報告書第31集 児玉町教育委員会
- 恋河内昭彦 2004『女池遺跡Ⅱ（A地点の調査）』児玉町文化財調査報告書第16集 児玉町教育委員会
- 恋河内昭彦 2005『後張遺跡Ⅲ—C地点の調査—』児玉町文化財調査報告書第20集 児玉町教育委員会
- 恋河内昭彦 2008『塚畠遺跡Ⅱ—F地点の調査—』本庄市遺跡調査会報告書第22集 本庄市遺跡調査会
- 恋河内昭彦 2008『塚畠遺跡Ⅲ—E地点の調査—』本庄市遺跡調査会報告書第23集 本庄市遺跡調査会
- 恋河内昭彦・松本 完 2008『七色塚遺跡Ⅱ—B1地点—・北堀新田前遺跡—A1地点—』本庄市埋蔵文化財調査報告書第7集 本庄市教育委員会
- 駒宮史朗他 1979『雷電下・飯玉東』埼玉県遺跡発掘調査報告書第22集 埼玉県教育委員会
- 末木啓介 2011「集落における集合原理の一視点—埼玉県古墳時代後期のカマド支脚利用—」土曜考古学研究会例会発表要旨
- 鈴木徳雄 1996「古代北武蔵の開発と集落—埼玉県北部の灌漑方式の変化を中心に—」『月刊文化財』11月号 No.398
- 鈴木徳雄 1998「古代北武蔵における灌漑と土地利用」『治水・利水遺跡を考える』第7回東日本埋蔵文化財研究会
- 瀧瀬芳之 1997『今井川越田遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第191集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 立石盛詞 1983『後張—本文編Ⅱ—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第26集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 徳山寿樹 1995『堀向・藤塚A・柿島・内手B・C・児玉条里遺跡』児玉町文化財調査報告書第18集 児玉町教育委員会
- 徳山寿樹・大熊季広1999『金佐奈遺跡B地点Ⅱ—B地点の調査—』児玉町文化財調査報告書第33集 児玉町教育委員会
- 富田和夫他 1985『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第46集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 富田和夫 2009「移民の携えた土器—北武蔵・上野由来の「関東系土器」をめぐって—」『古代社会と地域間交流—土器からみた関東と東北の様相—』国士舘大学考古学会編 六一書房
- 中沢良一他 2000『上野遺跡（A・B地点）』美里町遺跡発掘調査報告書第11集 美里町教育委員会
- 中沢良一他 1999『鍛冶屋峯遺跡・川向遺跡・森後遺跡』美里町遺跡発掘調査報告書第10集 美里町教育委員会
- 長滝歳康・中沢良一他 2007『北谷戸遺跡・下道堀遺跡・上耕地遺跡』美里町遺跡発掘調査報告書第18集 美里町教育委員会
- 中村倉司1999「埼玉県における5世紀代の土器—和泉式土器の行方—」『東国土器研究』第5号 東国土器研究会
- 伴瀬宗一 1996『今井川越田遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第178集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 坂野和信・富田和夫 1996「飛鳥時代の関東と畿内—北関東における7世紀の土器様相—」『東アジアにおける古代国家成立期の諸問題』
- 福田 聖 1997『中堀遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第190集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 藤野一之2009「北関東型須恵器の成立と展開」『群馬・金山丘陵窯跡群Ⅱ』駒澤大学考古学研究室
- 増田一裕 1989『四方田・後張遺跡群発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第14集 本庄市教育委員会
- 松本 完 2004『九反田（Ⅲ次調査）・観音塚（Ⅲ次調査）』本庄市埋蔵文化財調査報告第28集 本庄市教育委員会
- 丸山陽一・中沢良一 1998『猪俣北古墳群・引地遺跡・滝ノ沢遺跡』美里町遺跡発掘調査報告書第9集 美里町教育委員会